御崎遺跡

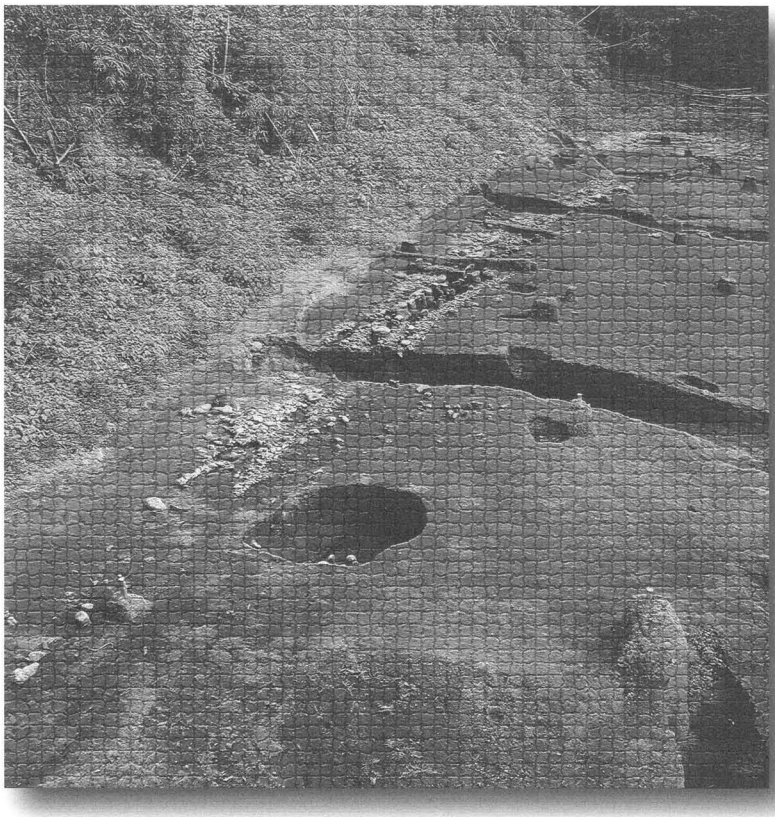
尾原ダム建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

2009年3月

国土交通省中国地方整備局
奥出雲町教育委員会

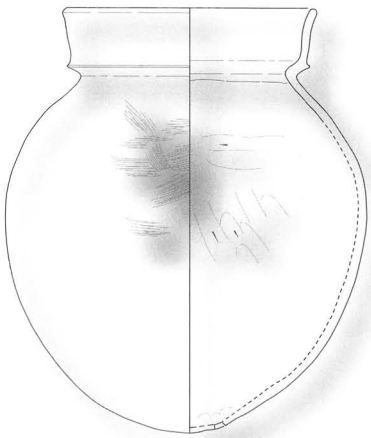
御崎遺跡

尾原ダム建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ



2009年3月

国土交通省中国地方整備局
奥出雲町教育委員会



序

斐伊川・神戸川総合開発工事事務所では、斐伊川・神戸川の抜本的な治水対策（3点セットと呼ばれる治水対策）の1つである、斐伊川上流部の尾原ダムと神戸川上流部の志津見ダムの建設事業を進めています。

尾原ダム建設事業の実施に際しては、島根県教育委員会、奥出雲町教育委員会をはじめ関係各位のご協力をいただき、埋蔵文化財の保護にも十分に留意すべく必要な調査の実施、記録保存につとめるものとし、平成11年から計画的に発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成19年度から着手した「御崎遺跡」の調査結果をまとめたものです。

本報告書が郷土の歴史教育や地域社会の諸活動のために広く活用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査並びに報告書のとりまとめに関係された皆様に深く感謝申し上げます。

平成21年3月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所　長　　中　川　　哲　志

序

奥出雲町教育委員会は、国土交通省　中国地方整備局　斐伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受け、平成11年度から尾原ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を行っております。本書は、平成19・20年度に実施した御崎遺跡の発掘調査記録であります。

ダム建設地が位置するここ斐伊川の上流は、かつて「肥乃河上」と称され、神話の舞台の地として広く知られ、古くからの遺跡がその数を増しつつあります。

今回の調査で、本書に記録した御崎遺跡は、河上部と河下部に分かれており河上部からは、池状遺構、溝状遺構、掘立柱建物跡2基、河下部からは、弥生時代の竪穴住居跡1基等が発見されました。

これらの成果は、今後の当地方の歴史解明と歴史学習に活用され、文化遺産の保護に役立つものと期待しております。

終わりに、本調査にあたり国土交通省　中国地方整備局　斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、島根県文化財課をはじめ、関係の皆様方の格別のご理解、ご協力を賜りましたことに厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

奥出雲町教育委員会
教育長　**若　槻　愼　二**

例　　言

1．本書は、奥出雲町教育委員会が、国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて 2007（平成 19）年度と 2008（平成 20）年度に実施した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．本書で扱う遺跡は次の通りである。

島根県仁多郡奥出雲町三成 777－1 他 …… 御崎遺跡

3．調査組織は次の通りである

調 査 主 体　　奥出雲町教育委員会

調査主体者　　奥出雲町教育委員会　　教育長　若槻愼二

◇2007（平成 19）年度　　現 地 調 査

事　務　局　　川本健二（教育課長）、石井　堅（教育課長補佐）、森山　昇（生涯学習第 2 係長）、平田昭憲（社会教育主事）

調　査　員　　野津　旭

調査補助員　　杉原清一、藤原友子、家熊　猛、井上賢治、福田市子

（以上、奥出雲町埋蔵文化財調査室）

◇2008（平成 20）年度　　現地調査及び報告書作成

事　務　局　　川本健二（教育課長）、石井　堅（教育課長補佐）、森山　昇（生涯学習係長）、平田昭憲（社会教育主事）

調　査　員　　野津　旭

調査補助員　　福田市子、舟木千晴　（以上、奥出雲町埋蔵文化財調査室）

4．発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達等）については、奥出雲町教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。担当者は次の通りである。

社団法人中国建設弘済会島根県支部

【2007（平成 19）年度】

［現場担当］　　佐野靖郎、板倉次郎、佐野木信義（技術員）

［事務担当］　　栗原久美子、簾　俊治（事務員）

【2008（平成 20）年度】

［現場担当］　　室谷公平、祝部祥子、持田明典（技術員）

［事務担当］　　栗原久美子（事務員）

5．発掘作業については、以下の方々に参加していただいた。

福間新子、石田安夫、山本雅臣、長谷川　登、長谷川トミコ、藤原廣義、藤原幸子、松田フユ子、内田住江、菅田利江、陶山優子、三島要吉、森合茂男、恩田愛吉、山田忠一、山根知雄、藤原厚子

6．発掘調査及び報告書作成にあたって、下記の方々・諸機関有益な御指導・助言と御協力をいただいた。記して謝意を表する。

◇調 査 指 導　（順不同、敬称略、所属・役職名は平成20年時）

島根県教育庁文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター、池淵俊一（島根県教育庁文化財課）、蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）、中村唯史（島根県立三瓶自然館）、東山信治（島根県埋蔵文化財調査センター）

◇調 査 協 力　（順不同、敬称略）

伊藤徳広、内田律雄、西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、渡部裕美（山口市教育委員会）、（株）内田工務店、（株）トーワエンジニアリング

7．挿図中の北は測量法による平面直角第Ⅲ座標系X軸方向を指し、座標系XY座標は世界測地系（第3図に括弧書きで日本測地系数値を入れている）による。レベル高は海抜高を示す。

8．航空写真と、3D レーザースキャナー計測及び図化業務は、（株）トーワエンジニアリングが行った。第35・36・39～43図は（株）トーワエンジニアリングの測量図に一部、加筆・修正したものを用いている。P54の3D画像(1)、P62の3D画像(2)はその3Dレーザー測量による3次元モデル画像である。

自然科学分析は下記に依頼及び委託し、その結果・報告書については第6章に掲載した。

・年代測定：(株)地球科学研究所

・土壌分析：増永二之、佐藤邦明（島根大学生物資源科学部）

9．第2図は、国土地理院発行のS＝1/25000地形図、「湯村」と「下横田」を合成して使用した。

10．本書に掲載した遺構、遺物の実測、トレース、整理作業等は主に調査員が行ない、井上、藤原厚、松田、菅田の協力を得た。遺物実測、トレースの一部を（株）トーワエンジニアリングに委託した。遺構写真は現場担当調査員が、遺物写真は野津が撮影した。

11．本書の編集、執筆は福田・舟木の協力を得ながら野津がおこなった。

12．本書掲載の出土遺物及び、図面、写真などの資料は奥出雲町教育委員会で保管している。

本 文 目 次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　位置と地形 …… 3
　第２節　周辺の遺跡 …… 3

第３章　調査の概要 …… 8
　第１節　調査区の配置 …… 8
　第２節　遺跡の層序 …… 8
　第３節　調査の概要 …… 8

第４章　Ⅰ区の調査 …… 11
　第１節　１層出土遺物 …… 11
　第２節　２層の遺構・遺物 …… 12
　第３節　３層の遺構・遺物 …… 27
　第４節　４層以下の遺構・遺物 …… 46

第５章　Ⅱ区の調査 …… 78
　第１節　遺構 …… 78
　第２節　包含層出土遺物 …… 89

第６章　自然科学分析 …… 107
　第１節　御崎遺跡埋蔵文化財調査に伴う土壌分析結果報告書 …… 107
　第２節　放射性炭素年代測定結果報告書 …… 109

第７章　まとめ …… 114

挿図目次

第1図　御崎遺跡位置図 …… 2
第2図　周辺の遺跡 …… 4
第3図　御崎遺跡区割図 …… 9
第4図　トレンチ2・トレンチ8土層図 …… 10
第5図　Ⅰ区1層出土遺物 …… 11
第6図　Ⅰ区1層下面遺構配置図 …… 13
第7図　SK02・SK03遺構・SK01・SK05 遺構・遺物実測図 …… 14
第8図　SK04・SX12・SK26遺構実測図 …… 15
第9図　Ⅰ区2層遺構配置図 …… 17
第10図　SB07実測図 …… 18
第11図　SK15・SK17・SK18遺構 ・出土遺物実測図 …… 20
第12図　SX40・SX41・SX46・SX47・SX48・SX49 ・SX51・SX55・SK14・SK16・SK23実測図 …… 21
第13図　SX38・SX39・SX42・SX43・SX44 実測図 …… 22
第14図　Ⅰ区包含層遺物出土状況 …… 24
第15図　Ⅰ区2層出土遺物 …… 25
第16図　Ⅰ区2層出土遺物(2) …… 26
第17図　Ⅰ区3層遺構配置図 …… 28
第18図　SB01実測図 …… 30
第19図　SB02実測図 …… 31
第20図　SB03実測図 …… 32
第21図　SB04実測図 …… 33
第22図　SB05実測図 …… 34
第23図　SB06実測図 …… 35
第24図　SX08・SX15・SX20・SX27遺構 ・SX07遺構・遺物実測図 …… 37
第25図　SX28・SX29・SX32・SX33・SX36実測図 …… 38
第26図　SK06・SK07・SK08・SK09・SK10 ・SK13実測図 …… 40
第27図　SK11・SK12実測図 …… 42
第28図　土器群1実測図 …… 43
第29図　SB01・SB05出土遺物実測図 …… 45
第30図　Ⅰ区3層出土遺物実測図(1) …… 47
第31図　Ⅰ区3層出土遺物実測図(2) …… 48
第32図　Ⅰ区3層(3)・土器群1 出土遺物実測図 …… 49
第33図　Ⅰ区3層出土遺物実測図(4) …… 50
第34図　Ⅰ区3層中～下層遺構配置図 …… 51
第35図　SG01・河原石実測図 …… 52
第36図　SG01実測図 …… 53
第37図　SG01出土遺物実測図 …… 54
第38図　Ⅰ区4層遺構配置図 …… 55
第39図　SD01遺構挿図図割 …… 56
第40図　SD01 石・遺物出土状況(1) …… 57
第41図　SD01 石・遺物出土状況(2) …… 58
第42図　SD01 石・遺物出土状況(3) …… 59
第43図　SD01 石・遺物出土状況(4) …… 60
第44図　SD01実測図 …… 61
第45図　SD02実測図 …… 64
第46図　SD02遺物出土状況 …… 65
第47図　SD06実測図・遺物出土状況(1) …… 66
第48図　SD06遺物出土状況(2) …… 67
第49図　SD01出土遺物実測図(1) …… 68
第50図　SD01出土遺物実測図(2) …… 69
第51図　SD01出土遺物実測図(3) …… 70
第52図　SD01出土遺物実測図(4) …… 71
第53図　SD01出土遺物実測図(5) …… 72
第54図　SD02出土遺物実測図(1) …… 73
第55図　SD02出土遺物実測図(2) …… 74
第56図　SD06出土遺物実測図 …… 75
第57図　ハイカ層・排土中出土遺物実測図 …… 76
第58図　Ⅱ区2層遺構配置図 …… 79
第59図　SK21実測図 …… 80
第60図　SK21出土遺物実測図 …… 80
第61図　SX53実測図 …… 81
第62図　SK20実測図 …… 82
第63図　SX52実測図 …… 83
第64図　SK19実測図 …… 83
第65図　SK22実測図 …… 80
第66図　SD03実測図 …… 83
第67図　SI01実測図 …… 85
第68図　KD01実測図 …… 86
第69図　SK25実測図 …… 86
第70図　SX57実測図 …… 86
第71図　SX59実測図 …… 86
第72図　SK24実測図 …… 87
第73図　SK24出土遺物実測図 …… 88
第74図　SD07遺構・遺物実測図 …… 90
第75図　排滓場跡実測図 …… 91
第76図　排滓場跡出土遺物実測図(1) …… 92
第77図　排滓場跡出土遺物実測図(2) …… 93
第78図　Ⅱ-2区3層下面遺構配置図 …… 94
第79図　SR01実測図 …… 95
第80図　Ⅱ-2区3層出土遺物分布図・断面図 …… 96
第81図　Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(1) …… 98
第82図　Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(2) …… 99
第83図　Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(3) …… 100
第84図　Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(4) …… 101

第85図　Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(5)……　102
第86図　Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(6)……　103
第87図　Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(7)……　104
第88図　Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(8)……　105
第89図　自然科学分析サンプル採取遺構図　……　113

表　目　次

表1　周辺の遺跡……　5
表2　SB・SI・SG・SD計測表　……　117
表3　遺構観察表(SK)　……　118
表4　遺構観察表(SX)　……　119
表5　遺物観察表　……　121

図版目次

全景写真　御崎遺跡調査終了時(真上から)　……　116
図版1　御崎遺跡全景(北西から)　上:調査前　下:調査後
図版2　T2断面写真　T8断面写真
図版3　SK01　SK02　SK03
図版4　SK04・SX12集石状況　SK04・SX12完掘状況　SK05完掘状況　SK26検出状況
図版5　SK14完掘状況　SK15完掘状況　SK16半裁状況　SK17完掘状況　SK18完掘状況
SK18完掘状況　SX38半裁状況　SX39半裁状況　SX40完掘状況
図版6　SB07完掘状況　SX41完掘状況　SX42完掘状況　SX43半裁状況
SX44完掘状況　SX46完掘状況　SX47完掘状況
図版7　SX48完掘状況　SX49完掘状況　SX51完掘状況
図版8　SB01完掘状況　SB02完掘状況
図版9　SB03　SB04完掘状況
図版10　SB05完掘状況　SB06完掘状況
図版11　SX07半裁状況　SX28半裁状況　SX15完掘状況　SX29半裁状況　SX20完掘状況
SX32完掘状況　SX27半裁状況　SX33半裁状況　SX36完掘状況
図版12　SK06石出土状況　SK07石出土状況　SK08完掘状況　SK09半裁状況　SK10完掘状況
図版13　SK13半裁状況　SK11石出土状況　SK12石出土状況　土器群1検出状況
図版14　SG01完掘状況(北側から)　SG01出土遺物　SG01完掘状況
図版15　SD01検出状況　SD01出土遺物　SD01完掘状況
図版16　SD02検出状況　SD02遺物出土状況　SD02完掘状況
図版17　SD06検出状況　SD06遺物出土状況　SD06完掘状況
図版18　SK21・SK22　SX53　SX20
図版19　SK19半裁状況　SD03検出状況　SX52完掘状況

図版 20　SI01 完掘状況　KD01 完掘状況　SD07 完掘状況　SD07 遺物出土状況
図版 21　SK24 遺物出土状況　排滓場跡検出状況　椀形滓出土状況
図版 22　SX57 半裁状況　SX58(SI01 柱穴)環掘状況　SX59 環掘状況
図版 23　調査指導　体験学習　作業風景
図版 24　Ⅱ-1 区完掘状況　Ⅱ-2 区完掘状況
図版 25　Ⅰ区 1 層出土遺物　SK01 出土遺物　SK05 出土遺物
図版 26　SK15・SK17・SK18 出土遺物　Ⅰ区 2 層出土遺物(1)
図版 27　Ⅰ区 2 層出土遺物(2)
図版 28　SX07 出土遺物　SB01 出土遺物　SB05 出土遺物
図版 29　Ⅰ区 3 層出土遺物(1)
図版 30　Ⅰ区 3 層出土遺物(2)
図版 31　Ⅰ区 3 層出土遺物(3)　SG01 出土遺物
図版 32　SD01 出土遺物(1)
図版 33　SD01 出土遺物(2)
図版 34　SD01 出土遺物(3)
図版 35　SD01 出土遺物(4)
図版 36　SD02 出土遺物(1)
図版 37　SD02 出土遺物(2)
図版 38　SD06 出土遺物(1)
図版 39　SD06 出土遺物(2)
図版 40　ハイカ層出土遺物　排土中出土遺物
図版 41　SK21 出土遺物　SK24 出土遺物
図版 42　SD07 出土遺物　排滓場跡出土遺物
図版 43　Ⅱ区黒色土出土遺物(1)
図版 44　Ⅱ区黒色土出土遺物(2)
図版 45　Ⅱ区黒色土出土遺物(3)
図版 46　Ⅱ区黒色土出土遺物(4)
図版 47　Ⅱ区黒色土出土遺物(5)
図版 48　Ⅱ区黒色土出土遺物(6)
図版 49　Ⅱ区黒色土出土遺物(7)
図版 50　Ⅱ区黒色土出土遺物(8)
図版 51　Ⅱ区黒色土出土遺物(9)

挿絵目次

3D 画像(1) …… 54
3D 画像(2) …… 62

第１章　調査に至る経緯と経過

御崎遺跡は、先年の島根県埋蔵文化財調査センターの範囲確定調査により、散布地として約3300㎡が調査対象とされた地で、斐伊川が三成の街を抜け、大きく西へ曲り蛇行を繰り返す最初の右岸で、矢谷集落の南端に位置する。

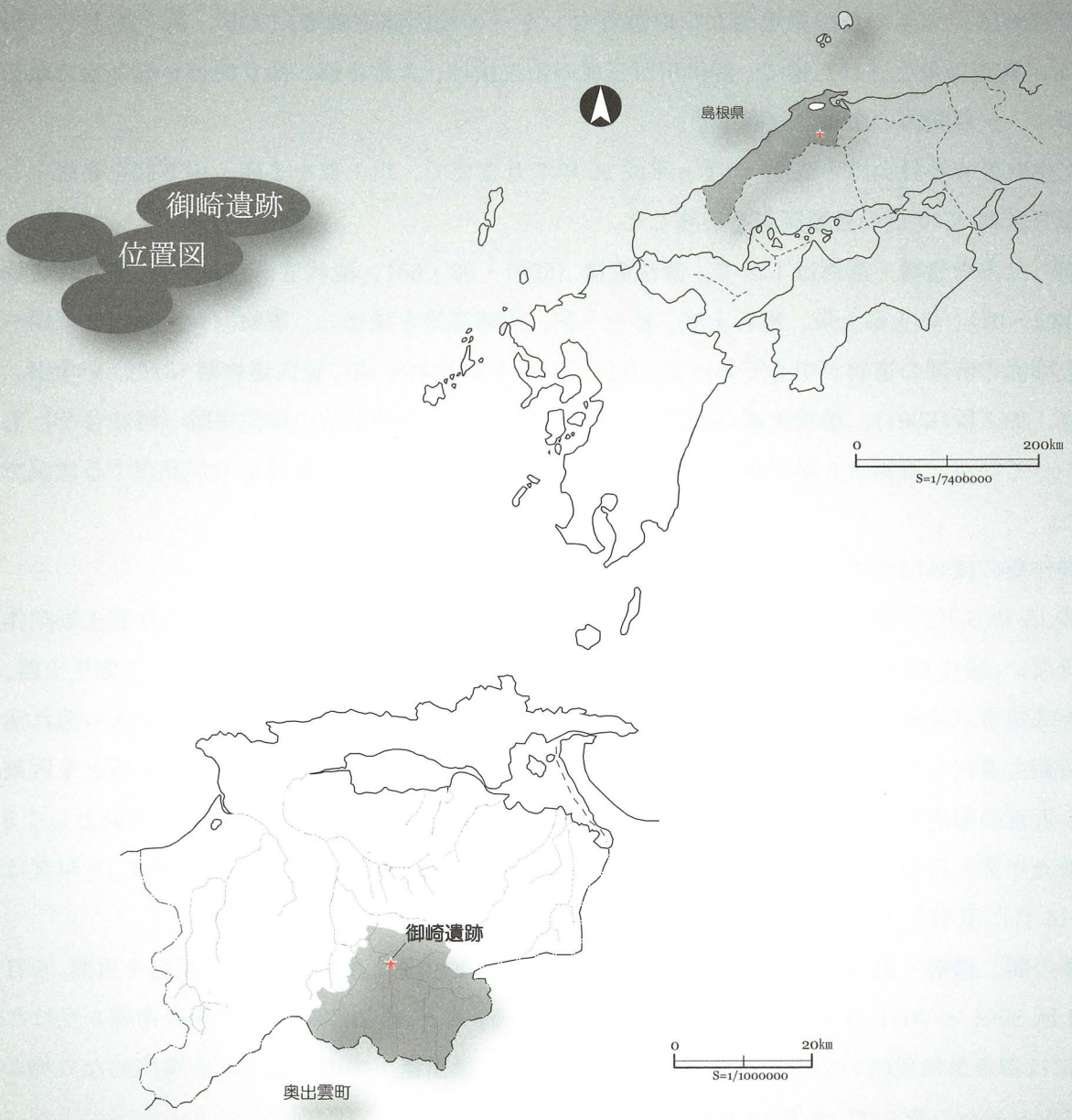
奥出雲町教育委員会は平成19年度と平成20年7月までで、川上部をⅠ区、川下部をⅡ区とし当該調査区域3300㎡の発掘調査を実施した。

検出した主な遺構・遺物はⅠ区で、溝状遺構（SD01・02・06）、池状遺構（SG01）、掘立柱建物跡（SB01～07）、粘土貼土坑、集石土坑、ピット群、流路跡等を検出し、遺物は弥生時代終末期～古式土師器の時期の遺物が中心であった。Ⅱ区では弥生時代終末期の竪穴建物跡（SI01）を検出。その他、加工段（KD01）、溝状遺構（SD07）、土坑、旧河原跡、精練鍛冶の排滓場跡（再結合滓）も見つかっている。遺物は3層黒色土に縄文時代後期中葉～中・近世陶磁器までが混在する状況であった。

現場作業の流れは次のようである。

平成19年5月には空中撮影を行なった。そして、5月14日よりⅠ区を重機により表土掘削作業を行ない、同月21日より人力掘削による本格的な調査を開始した。掘下げ後間もなく弥生土器、古式土師器等が確認され遺構の存在を思わせたが、何れも遺物包含層はレベル上位からの流れ込みで時期も混在しており、遺構の時期を特定するのが非常に困難であった。6月に入るとⅠ区東側より近世の遺構等が相継いで見つかった。8月には仁多中学校3年生3人が、職場体験として5日間調査作業を行なった。11月に入るとⅠ区と併行してⅡ区の調査を開始した。平成19年度は12月14日に現場を一旦終え、次年度に900㎡分調査を行なうこととした。

冬季の間、遺構・遺物の記録・成果を把握、集計し、次年度は4月8日から現場を再開。5月にはⅠ区SD01とSG01の3Dレーザー測量図化を行なう。6月19日には現地で調査指導を受けた。25日には調査最終段階の空中撮影を行ない、7月にはⅡ区黒色土中の再結合滓を専門的な立場から見てもらった。そして、7月17日に作業を終了した。



第1図 御崎遺跡位置図

第２章　位置と環境

第１節　位置と地形

御崎遺跡は島根県仁多郡奥出雲町三成に所在し、世界測地系 X＝-87950m、Y=75900m（日本測地系で X=-88289m、Y=76130m）地点が遺跡のほぼ中心にあたる。そしてこれは北緯 35°12′04″、東経 133°00′10″に相当する。

本遺跡は、斐伊川が三成の街を抜けると大きく西へ曲り、交互に狭隘な谷地形の両岸を削りながら強く折曲した流れとなっているところで蛇行を繰返す最初の右岸、矢谷集落南端の水田（Ⅰ区）と畑地（Ⅱ区）に所在する。遺跡は川からの比高 3～10m程にあり、標高は 221～228mである。水田の中央部は近年の圃場整備により、上下二段に大きく改変されているが、遺跡東部分は圃場整備が為されておらず、棚田となっていた。なお、棚田に接する山は矢谷古城山城跡である。

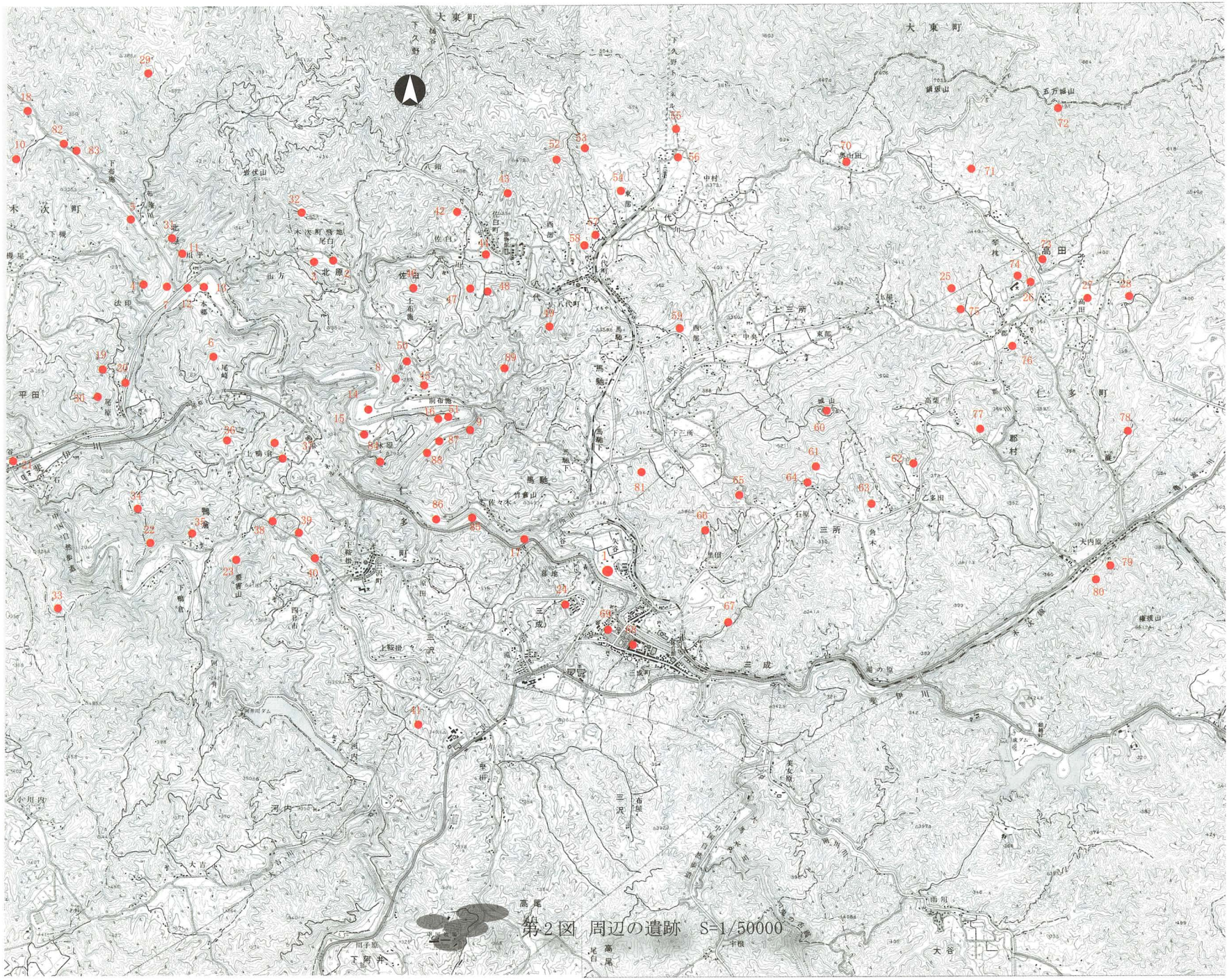
第２節　周辺の遺跡

奥出雲町**御崎遺跡**（1）は船通山に源を発する斐伊川本流の右岸に位置する。斐伊川は出雲地方のほぼ中央を北流し、下流部では山陰地域最大級の沖積平野を形成し、宍道湖へ至る。この流れの中・上流域の遺跡の様相は、近年の尾原ダム建設に伴う発掘調査によって新たな資料が増加し、多くの事が明らかになってきている。以下、周辺の遺跡について概観する。

【旧石器時代】　雲南市、奥出雲町周辺でこれまで確認されていなかったが、近年、**原田遺跡**（14）で後期旧石器時代の遺物・遺構が数多く発見され一躍注目を集めている。4 千点もの石器と 60 基の礫群、1 基の土坑等が確認されている。

【縄文時代】　元々、斐伊川中・上流域は縄文時代の遺跡が多く分布する地域である。この地域で最も古い縄文土器は、原田遺跡や**川平Ⅰ遺跡**（4）、**寺宇根遺跡**（85）から出土した早期の押型文土器である。前期の土器は**北原本郷遺跡**（13）、川平Ⅰ遺跡、寺宇根遺跡で、中期の土器は、**平田遺跡**（21）や**垣ノ内遺跡**（5）で出土している。川平Ⅰ遺跡では縄文時代早期以降の土坑も検出されている。縄文時代後期には、平田遺跡、**下鴨倉遺跡**（22）、**暮地遺跡**（17）、**林原遺跡**（16）などで多数の土器や土坑、土器埋設遺構、土偶が見つかっているほか、寺宇根遺跡では 8 の字状の配石遺構や県内でも希少な装身具である双脚状石製品が見つかっている。晩期の遺跡も多く、**家の後Ⅱ遺跡**（12）、原田遺跡等で配石土坑・竪穴建物・土器埋設遺構の他、線刻礫や石棒といった呪具や勾玉が出土している。土器埋設遺構は、これまで埋甕と呼称してきた暮地遺跡などで知られていたが、尾原ダム建設に伴う発掘調査によって検出数が増加し、斐伊川中流域で特徴的な遺構となりつつある。

【弥生時代】　縄文時代の遺跡と比べると数そのものが少ないが、平田遺跡では、終末期の竪穴建物跡から 4 基の鍛冶炉が検出され、鉄器工房であろうとされている。垣ノ内遺跡では中期後葉



第2図 周辺の遺跡 S=1/50000

表1　周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	**御崎遺跡**		35	光善寺古墳	古墳	69	三成鍛冶屋小路遺跡	製鉄遺跡
2	尾白Ⅰ遺跡	散布地	36	芝原遺跡	製鉄遺跡	70	奥山田遺跡	散布地
3	尾白Ⅱ遺跡	炭窯跡	37	穴観古墳群	古墳	71	琴枕岩屋古墳	古墳
4	川平Ⅰ遺跡	住居跡・散布地	38	比久尼原横穴群	横穴	72	鍋坂山城跡	城跡
5	垣ノ内遺跡	集落跡	39	どけや古墳	古墳	73	宮の前遺跡	散布地
6	槙ヶ垰遺跡	製鉄遺跡	40	布広城跡	城跡	74	鴨木遺跡	散布地
7	家の後Ⅰ遺跡	散布地	41	八頭塚横穴群	横穴	75	カネツキ免鈩跡	製鉄遺跡
8	殿ヶ迫横穴墓群	横穴	42	佐白・原鈩跡	製鉄遺跡	76	仁多郡衙跡	郡衙跡
9	時仏山横穴墓	横穴	43	金子松鈩跡	製鉄遺跡	77	コフケ横穴	横穴
10	下布施横穴墓群	横穴	44	中山遺跡	散布地	78	金床横穴	横穴
11	宮ノ脇遺跡	散布地	45	円満寺遺跡	寺院跡・散布地	79	伝和泉式部墓	古墳
12	家の後Ⅱ遺跡	散布地	46	佐白城跡	城跡	80	大内原土居館跡	館跡
13	北原本郷遺跡	散布地	47	上布施横穴群	横穴	81	須坂遺跡	古墳・横穴・建物跡
14	原田遺跡	集落跡・古墳	48	上布施遺跡	散布地	82	ゴマボリ鈩跡	製鉄遺跡
15	前田遺跡	散布地	49	すげた横穴群	横穴	83	寺田Ⅰ遺跡	製鉄遺跡
16	林原遺跡	散布地	50	水手城跡	城跡	84	小廻上遺跡	城跡
17	暮地遺跡	散布地・住居跡	51	林原古墳	古墳	85	寺宇根遺跡	墓地・住居跡
18	枯木ヶ谷鈩遺跡	製鉄遺跡	52	三出平古墳	古墳	86	樋屋遺跡	散布地
19	上垣ノ内たたら跡	製鉄遺跡	53	穴観音古墳	古墳	87	家ノ脇Ⅰ遺跡	散布地
20	家の上遺跡	祭祀遺跡・製鉄遺跡	54	門屋遺跡	散布地	88	家ノ脇Ⅱ遺跡	散布地
21	平田遺跡	散布地・製鉄遺跡	55	庄田鈩跡	製鉄遺跡	89	亀ヶ谷遺跡	散布地
22	下鴨倉遺跡	散布地	56	堂の前古墳	古墳			
23	三沢城跡（鴨倉城跡）	城跡	57	長福寺遺跡	散布地			
24	丸子山古墳群	古墳	58	金原鈩跡	製鉄遺跡			
25	カネツキ免遺跡	散布地	59	下鴨倉大峠鈩跡	製鉄遺跡			
26	常楽寺古墳	古墳	60	須我非山城跡	城跡			
27	高田廃寺	寺院跡	61	石原遺跡	住居跡			
28	岩屋古墳	古墳	62	善勝寺跡	寺院跡			
29	下布施滝の上鈩跡	製鉄遺跡	63	聞善寺跡	寺院跡			
30	石壷遺跡	散布地	64	善勝寺跡	寺院跡			
31	下布施山城跡	城跡	65	村尾政吉宅向横穴	横穴			
32	尾白横穴群	横穴	66	石原城跡	城跡			
33	戈の原遺跡	散布地	67	里田遺跡	散布地			
34	松木山城跡	城跡	68	郡屋敷古墳	古墳			

～古墳時代前期の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が合計16棟確認され、加飾性の強い「塩町系」の土器群が検出された。また、北原本郷遺跡では中期前葉～古墳時代初頭の竪穴建物跡が見つかっており、集落構造を復元しうる資料が増加している。暮地遺跡では中期後葉の竪穴建物跡が2棟検出され、うち1棟は焼失建物であった。

【古墳時代】　周辺の斐伊川中流域には古墳時代や中期の古墳は明確ではないが、後期には横穴式石室をもつ古墳が見られるようになる。原田古墳は、墳形や規模は不明であるが、横穴式石室から双龍環頭大刀、馬具一式、翡翠製勾玉などの玉類や鉄器、多数の須恵器が出土し、畿内との密接な関係が窺われる。このほか横穴式石室をもつ円墳、**穴観1号墳**（37）や前方後方墳で横穴式石室をもつ**穴観2号墳**（37）がある。この地域の横穴墓は平面縦長長方形で、断面が丸みのある三角形のものが多い。**下布施横穴墓群**（10）では装飾大刀を副葬した横穴墓が確認されている。**殿ヶ迫横穴墓群**（8）、**時仏山横穴墓**（9）も発掘調査され、前者では被葬者の骨折した脚部に副木をした痕跡を確認しえた横穴墓があり、後者では被葬者が伏臥伸展位で埋葬された状態で見つかっている。集落遺跡としては古墳時代前期初頭の垣ノ内遺跡や平田遺跡が挙げられる。垣ノ内遺跡では後期から再び集落が営まれ、9世紀まで継続する。**家ノ脇Ⅱ遺跡**（88）では後期の集石と土器溜りが確認されており、水辺の祭祀跡もしくは土器廃棄場所と考えられる。

【奈良・平安時代】　**寺田Ⅰ遺跡**（83）、原田遺跡では鍛冶遺構が、**槙ヶ垰遺跡**（6）では平安時代の製鉄関連遺物が確認されている。寺田Ⅰ遺跡では鋳造関係の遺物も出土しており、遺構や遺物のあり方から官営的な工房の可能性があるとされる。また、**亀ヶ谷遺跡**（89）では平安時代後期の製鉄炉跡が検出されている。**家の上遺跡**（20）、**円満寺遺跡**（45）では土馬や手捏土器が見つかっており、これらは水に関わる祭祀跡と考えられる。

【中・近世】　集落遺跡としては、家の後Ⅱ遺跡や**宮ノ脇遺跡**（11）から中世の掘立柱建物跡が確認された。また**前田遺跡**（15）では室町時代の貿易陶磁がまとまって出土し、集落の性格を考える上で注目される。寺院跡である円満寺遺跡からは青白磁梅瓶や青磁が出土している。この周辺は三沢氏が勢力をもっていた地域で、居城である**三沢城**（23）はよく知られている。独立丘陵に近い形態の鴨倉山（要害山）に位置する山城である。**水ノ手城跡**（50）、**下布施氏館跡**（31）では発掘調査で大堀切や郭、通路状遺構が確認された。中世前半の製鉄遺跡は**上垣内たたら跡**（19）、**枯木ヶ谷鈩遺跡**（18）、等で、本床状遺構のみの製鉄炉地下構造が確認されている。原田遺跡では中世の板屋型羽口をもつ精錬鍛冶炉が検出されている。近世になると奥出雲町では絲原家、卜蔵家、櫻井家など有力鉄山氏のもと、大規模な高殿たたらが営まれ、鉄生産は飛躍的に増大する。原田遺跡では製鉄に関連したと考えられる掘立柱建物跡が確認されている。**尾白Ⅱ遺跡**（3）では近世以降の炭窯が確認されており、この中には、鈩で使用される大炭を生産した可能性のあるものも見られる。北原本郷遺跡では斐伊川の舟番所の可能性が指摘される建物跡も検出されている。

《参考文献》

仁多町教育委員会　『伊賀武社境内横穴墓』2001

島根県教育委員会　『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』2003

島根県教育委員会　『尾白Ⅰ遺跡・尾白Ⅱ遺跡・家ノ脇Ⅱ遺跡3区・川平Ⅰ遺跡　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』2003

島根県教育委員会　『家の後Ⅰ遺跡・垣ノ内遺跡　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』2003

島根県教育委員会　『家ノ脇Ⅱ遺跡・原田遺跡1区・前田遺跡4区　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4』2004

島根県教育委員会　『北原本郷遺跡1　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7』2005

島根県教育委員会　『原田遺跡(2)　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8』2006

島根県教育委員会　『原田遺跡(4)　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12』2008

仁多町教育委員会　『殿ヶ迫横穴墓群　西尾社遺跡　亀ヶ谷遺跡　シベ石遺跡　時仏遺跡　時仏山横穴墓　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』2001

仁多町教育委員会　『暮地遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』2004

木次町教育委員会　『平田遺跡　木次町文化財調査報告書　第4章』2004

奥出雲町教育委員会　『円満寺遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』2006

奥出雲町教育委員会　『樋屋遺跡　水ノ手城跡土井平地区　小廻上遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』2006

奥出雲町教育委員会　『寺宇根遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』2008

第３章　調査の概要

第１節　調査区の配置(第３図)

御崎遺跡は斐伊川が三成街を抜け大きく西に曲がり蛇行を繰り返す最初の右岸標高約 221～228mに立地する。尾原ダム建設に伴う河川改修工事に係る場所で、調査対象面積は 3300 ㎡である。

調査にあたっては地形を勘案し 5m間隔で、Ⅰ区では山側から川側へ１・２・3…、川上から川下へ A・B・C…、Ⅱ区では山側から川側へ１・２・3…、川上から川下へ a・b・c…という基準点を設定した。１辺 5mのグリッドは、Ⅰ区では北東側の交点、Ⅱ区では南東側の交点の名称で呼称（例えば 3C）することとした。

第２節　遺跡の層序(第４図)

基本層序はⅠ区は表土・耕作土→黒色土(遺物包含層)→真砂砂質土→(ハイカ層＝部分的に)→川砂(礫)層となる。第４図に御崎遺跡Ⅰ区の T2、Ⅱ-2 区の T8 を掲載している。本報告書の層位はⅠ区は、T2 の１層＝1 層、２層＝2 層、3-3、4-4 層＝3 層、4-1、4-3＝4 層としている。

Ⅱ区は表土・耕作土→黒色土→川砂(礫)層となる。T8 の 13 層が黒色土(遺物包含層)、11 層上面に SI01 他の遺構群が存在した。また黒色土中で再結合滓塊を確認した。Ⅱ区は報告書上、この黒色土遺物包含層を３層、11 層を２層とする。

第３節　調査の概要

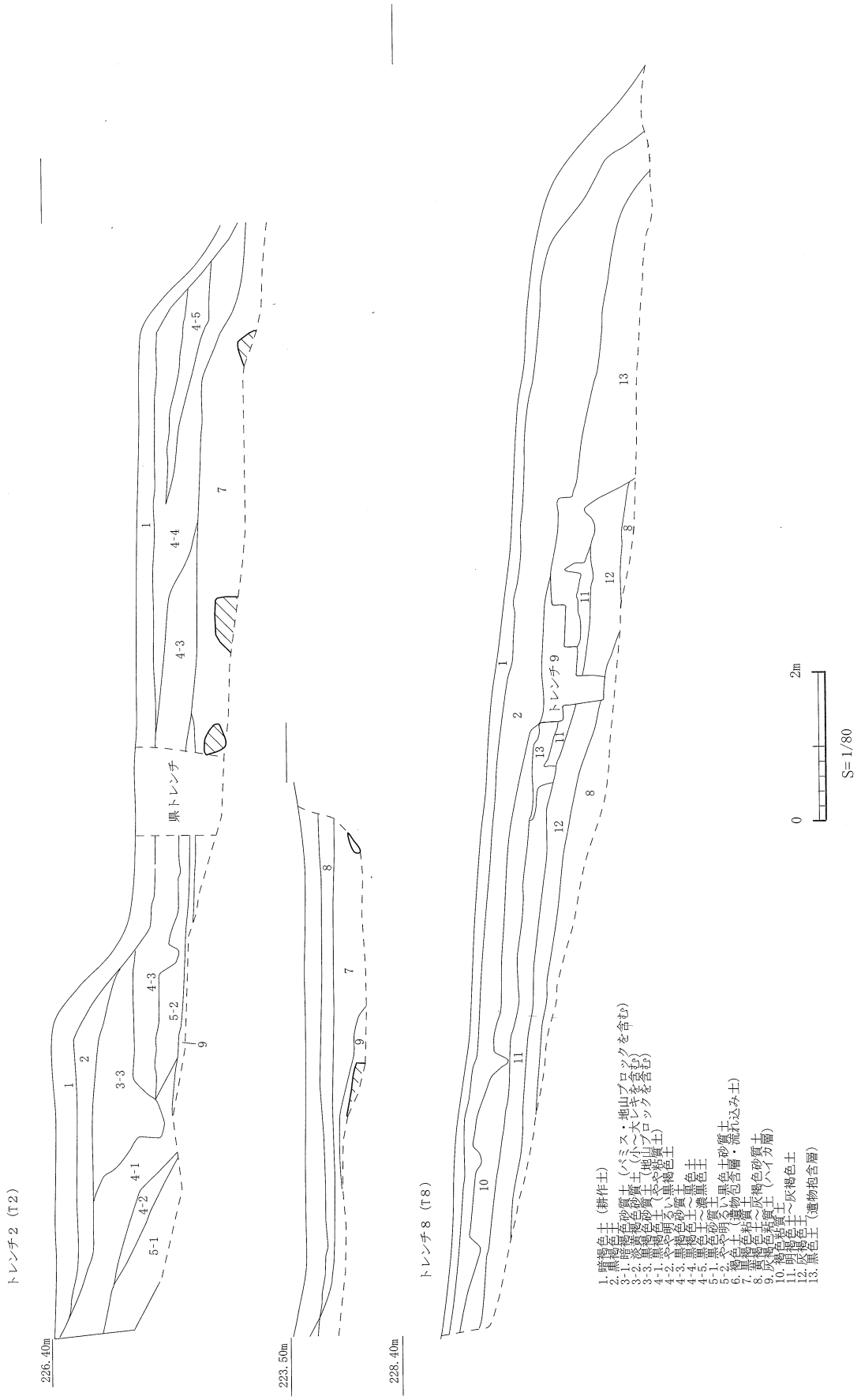
調査前の状況は、Ⅰ区は水田、Ⅱ区は畑地であった。発掘調査は、表土と水田・畑客土を重機掘削した後グリッドを設定し、１層上面から人力による掘り下げを行った。

検出した主な遺構・遺物はⅠ区２・３層で溝状遺構（SD01 他)、池状遺構（SG01)、掘立柱建物跡（SB01～07)、粘土貼土坑、集石土坑、ピット群、流路跡を検出し、遺物は弥生時代終末期～古式土師器の時期の遺物が中心で、弥生時代中期土器、古墳時代後期の遺物も出土している。ただ、両層とも新旧遺物が混在しており、縄文後晩期土器や中・近世陶磁器も混じる。また、部分的に川砂上層中にハイカ層が認められ僅かながら面的な拡がりを確認した。

Ⅱ区では弥生時代終末期の竪穴住居跡（SI01）を検出。その他、加工段、溝状遺構、土坑、旧河原跡、精練鍛冶の排滓場（再結合滓）も見つかっている。遺物は黒色土層に縄文時代後期中葉～中世陶磁器までが混在していた。遺物量的には弥生時代終末期～古式土師器の頃にピークがあり、次いで縄文時代後晩期、そして中世という割合である。

Ⅰ・Ⅱ区とも断割り Tr を入れ下層に遺構・遺物は認められない為、Ⅰ区では４層まで、Ⅱ区では黒色土層までとした。

第3図 御崎遺跡区割り図 S=1/1000



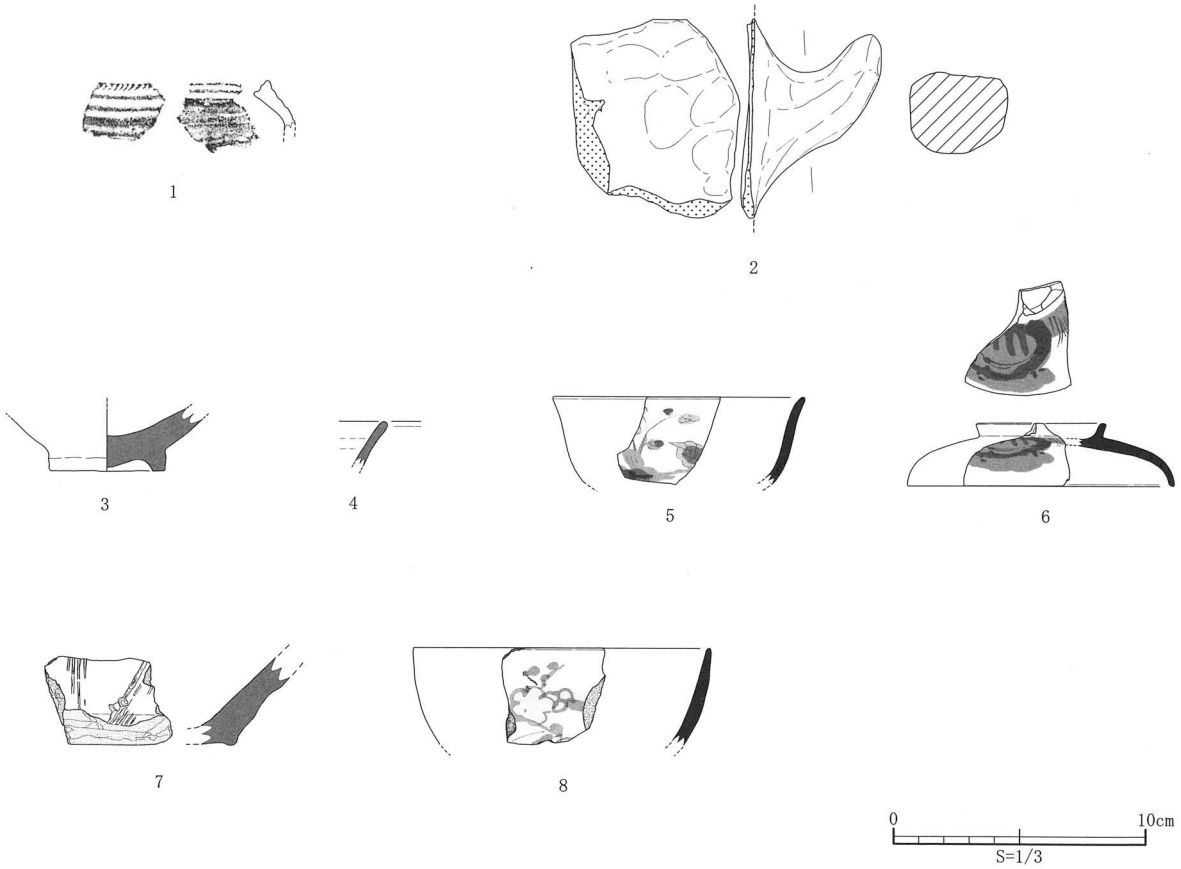
第4図　トレンチ2・トレンチ8土層図　S=1/80

第４章　Ⅰ区の調査

第１節　１層出土遺物

１層とした遺物は重機掘削した土中に僅かに含まれたもの、または取り残した表面に散在していたもので、弥生土器～近世の陶磁器を含む（第５図）。

１は口縁端部に面を作り、２条の凹線を廻らせ外面には刻みと凹線を施す。Ⅳ-2 様式の高坏若しくは台付き鉢と見られる。加飾性が高く塩町式の影響が見受けられる。２は土師器、甑の把手で、内外面ともナデ調整。指頭圧痕が顕著である。３は唐津の皿で 17 世紀以前のものである。[※1] オリーブ色の釉薬がかかる。４は李朝の皿。５・６・８はいずれも九州産の磁器で青花文がきれいにコバルトブルーに発色している。近世以降のもの。７は備前の擂鉢で室町時代前～中期の品である。



第５図　Ⅰ区1層出土遺物　S=1/3

第2節　2層の遺構・遺物

ここで遺構として取上げるものは、1層下面で検出された遺構群(第6図)と2層中から検出した遺構群(第9図)である。後者はトレンチ土層観察の際には分層しておらず土層認識のエラーであるかもしれないが、掘下げる過程で検出した遺構群である。また、後世の水田耕作における杭跡と考えられるものについては取上げていない。

(1) 遺構

SK01(第7図)

3Eグリッドに所在し、平面形は長径0.86m、短径0.84mとほぼ正円で、深さ0.4mを測る。断面形は枡形で縁には3～9㎝ほどの粘土張りをしてあった。土坑内には埋土とともに僅かながら炭と川石が集積された状態で見つかっている。

SK01 出土遺物(第7図)

何れの遺物も埋土中からの出土である。1は土師器の頸部で屈曲し、外傾する単純口縁の甕である。2は地元産の陶器で碗若しくは壷型の器と思われる。回転糸切りの底部には墨書が認められる。“川”であろうか。3は高台のつく香炉と思われる。2・3は19世紀の所産と考えられる。

SK02(第7図)

川側の6Jに位置し、平面形は隅丸五角形状で、長径1.10m、短径1.06m、深さ0.36mを測る。壁で20㎝ほど、底面で8㎝ほど粘土張りが為されている。埋土は黄褐色砂質土で遺物は無く時期は不明である。

SK03(第7図)

6Kに位置し、粘土張り部分の平面形は不整形で、長径1.31m、短径1.00m、深さ0.40mを測り、その内側平面形は隅丸方形をなし、上場で径0.52mである。埋土はSK01・SK02同様、黄褐色砂質土で川石が集積した状態であった。粘土張り部分は北側で厚く40～56㎝、南側で25㎝ほどで、底面では8～14㎝であった。遺物は無く時期は不明である。

SK05(第7図)

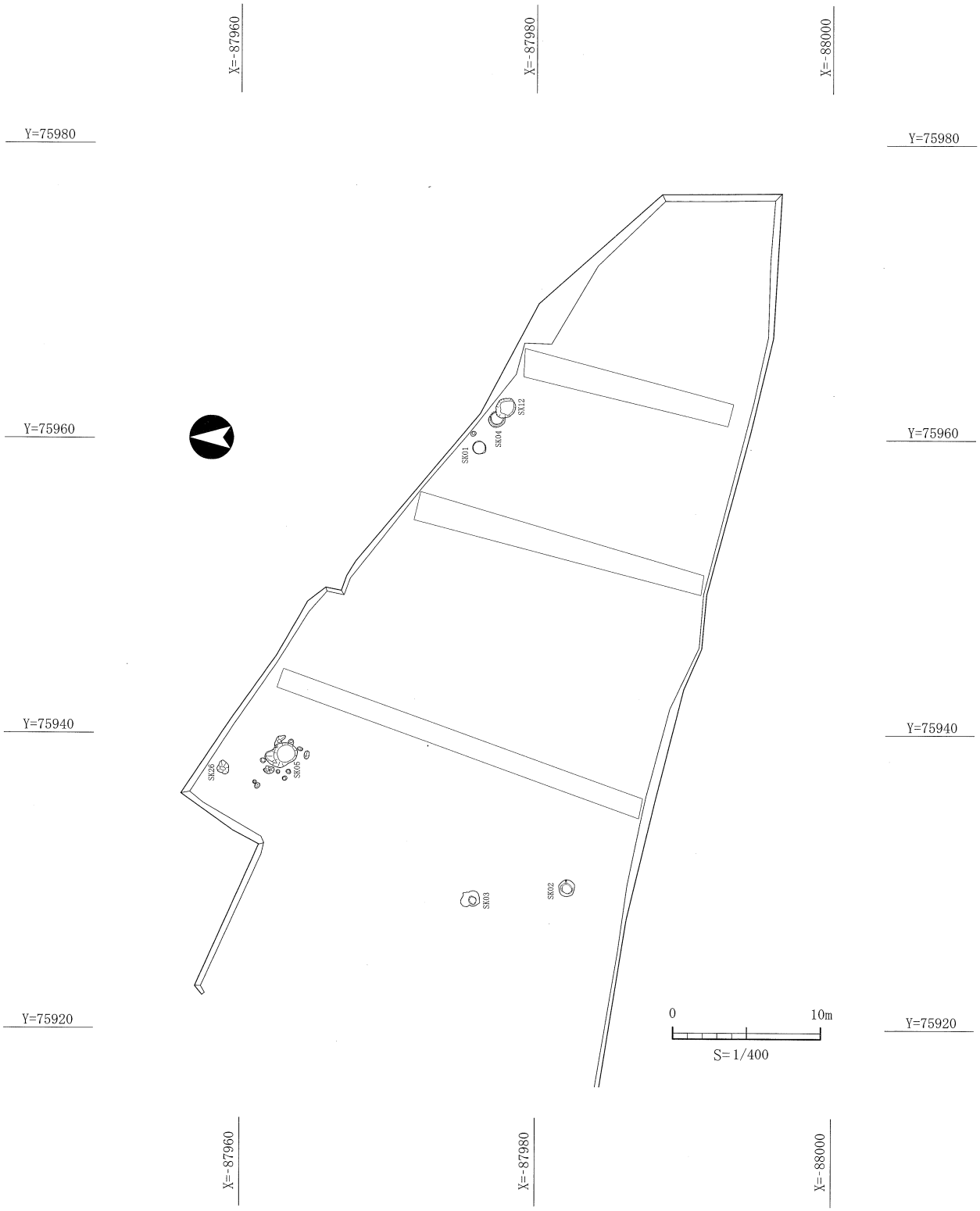
2Jに位置し、平面形は不整形を呈し、長径2.24m、短径1.60m、深さ0.74mを測る。底面はほぼ正円形をしており、直径0.80mである。2・3層に20㎝以下の中程度の川石を含む。遺物は2・3層中から陶磁器・スラグが出土している。遺物の年代から近世と考えられる。

SK05 出土遺物(第7図)

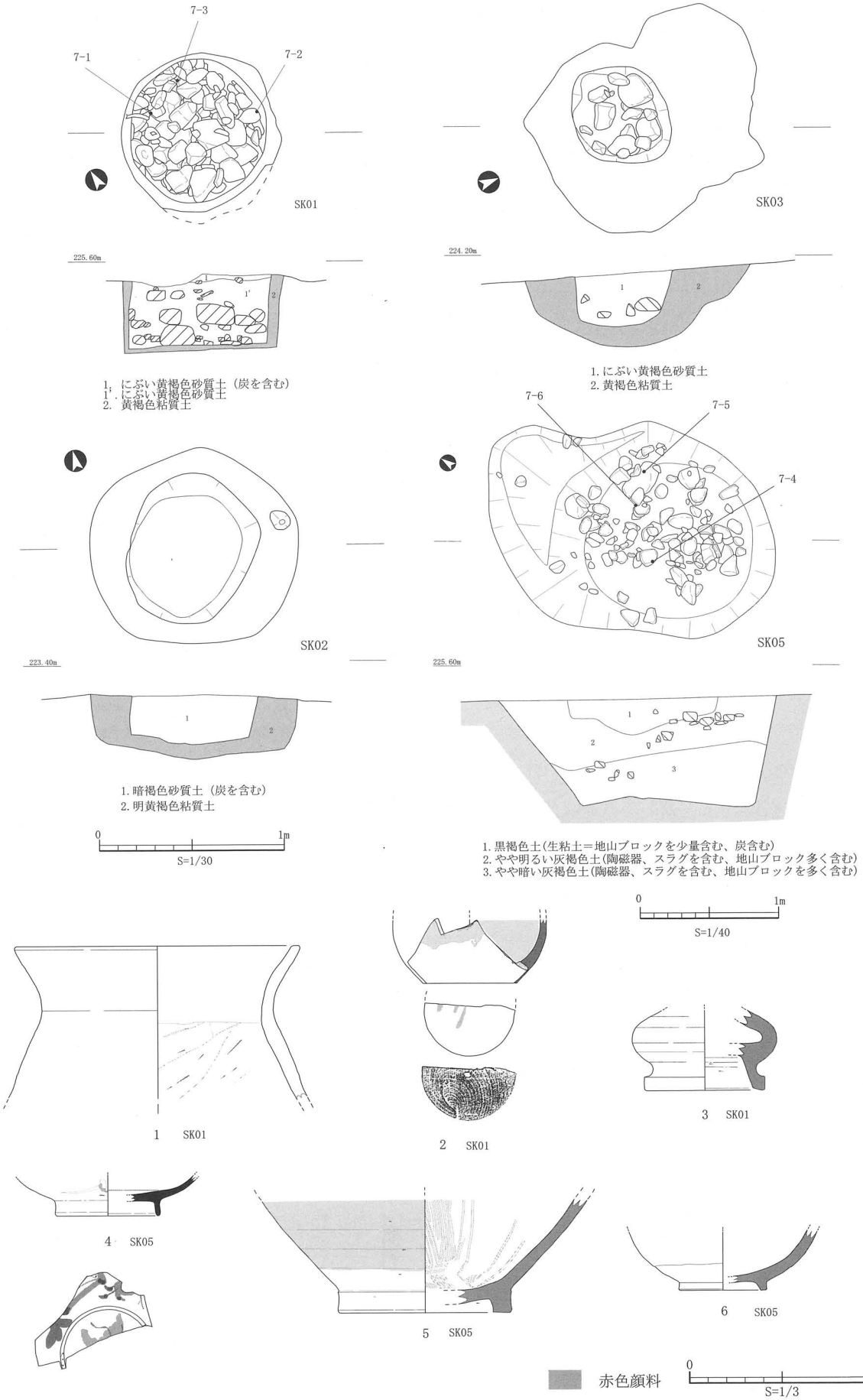
4は青花文を施す磁器である。5は陶器製擂鉢で江戸以降の大衆品である。6は布志名焼の所謂“ぼてぼて茶碗”で19世紀の品である。

SK04・SX12(第8図)

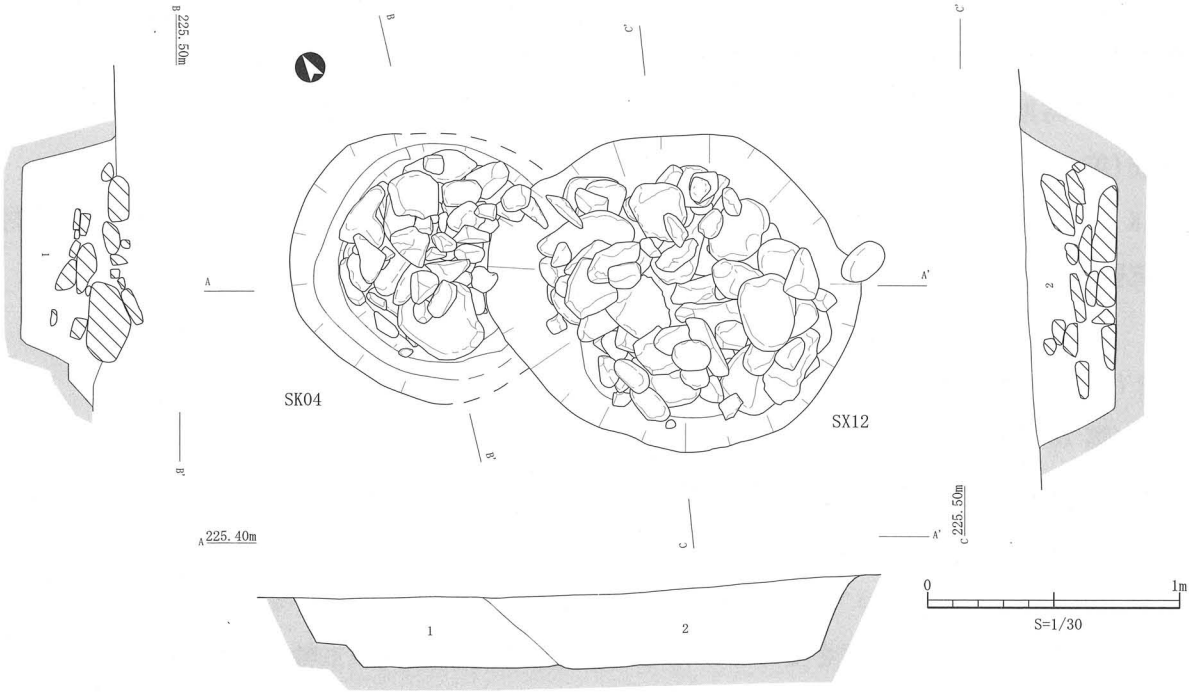
3EのSK01の南東隣りに位置し、切合う形で検出した。平面形はどちらもほぼ正円形をなすもので、SK04は径1.10m、深さ0.30mで壁中腹で僅かに平坦面をつくるものである。SX12は長径



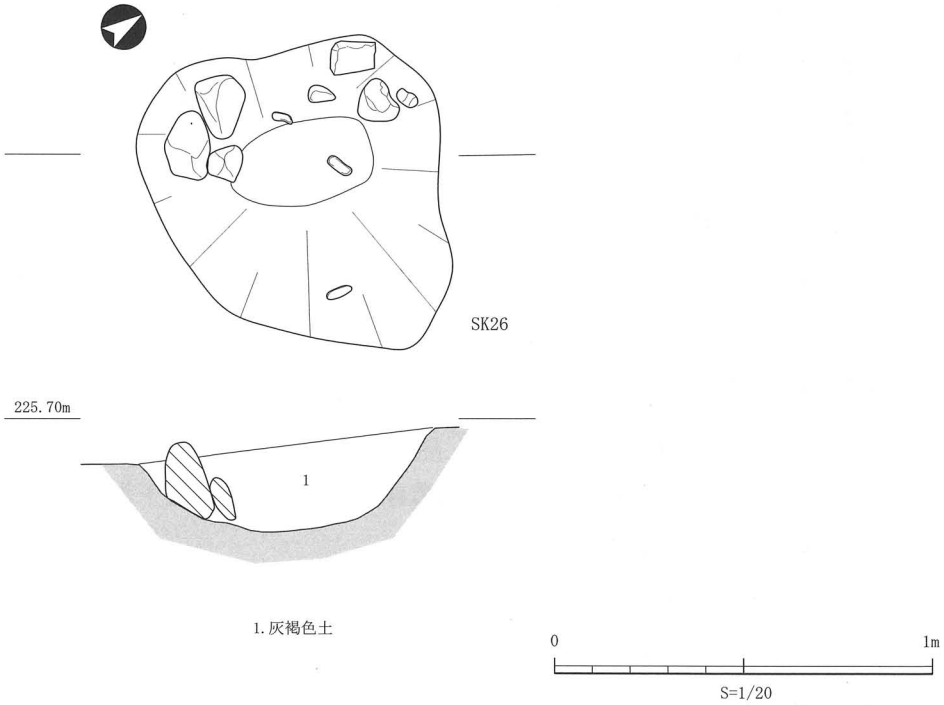
第6図　Ⅰ区1層下面遺構配置図　S=1/400



第7図 SK02・SK03遺構・SK01・SK05遺構・遺物実測図
S=1/30(SK01.02.03)・S=1/40(SK05)・S=1/3(遺物)



1. 黒褐色砂質土
2. 暗褐色砂質土



1. 灰褐色土

第8図　SK04・SX12・SK26遺構実測図　S=1/30 1/20

1.48m、短径 1.26m、深さ 0.30mを測り、断面形は漏斗状にやや窄まり、底面は平底を呈する形状である。切合いは後者が前者に勝っている。どちらも川石を集積した状態で検出しているが遺物は無く時期は不明である。

SK26(第 8 図)

1K に位置し、平面形不整な三角形状を呈し、長径 0.84m、短径 0.79m、深さ 0.22mを測る。土坑壁・床面と埋土中に川石が含まれていた。遺物は無く時期は不明である。

以下は 2 層中から検出した遺構である。

SB07(第 10 図)

2R・2S・3R・3S・3T に位置する 2 間×4 間の側柱建物で、平面規模は梁間 4.12m、桁行 8.11m、床面積 32.96 ㎡である。柱間隔は妻側 2.05m、平側は不均等であった。柱穴は平面円形で、直径 40～50 ㎝とほぼ揃っている印象を受ける。検出面からの深さは 15～40 ㎝でばらつきがあるが、浅い東側は後世の削平を受けているものと見られる。建物の主軸方向はE－36° －S をとる。柱穴埋土はいずれの柱穴とも単層で、柱跡や抜き取りの痕跡は確認できていない。
出土遺物は無かった。

SK15(第 11 図)

3R・4R に跨るように位置し、平面形は略長方形をなす。東西方向の角が僅かに突出する。規模は長径 1.46m、短径 0.92m、深さ 0.24mを測る。埋土は茶褐色砂質土で若干の炭と 1 ㎝以下の砂粒を含む。遺物は埋土中に磁器、複合口縁片、カワラケ等が出土している。土坑は中世以降と考えられる。

SK15 出土遺物(第 11 図)

11-1 は磁器皿である。その他複合口縁片、カワラケ等出土しているが、図化できるものはなかった。

SK17(第 11 図)

2R に位置し、平面形は不整形で長径 1.79m、短径 1.07m、深さ 0.32mを測る。土坑中央部で二段掘り状となる。埋土中に焼石(角礫を含む)と炭が若干混じる。

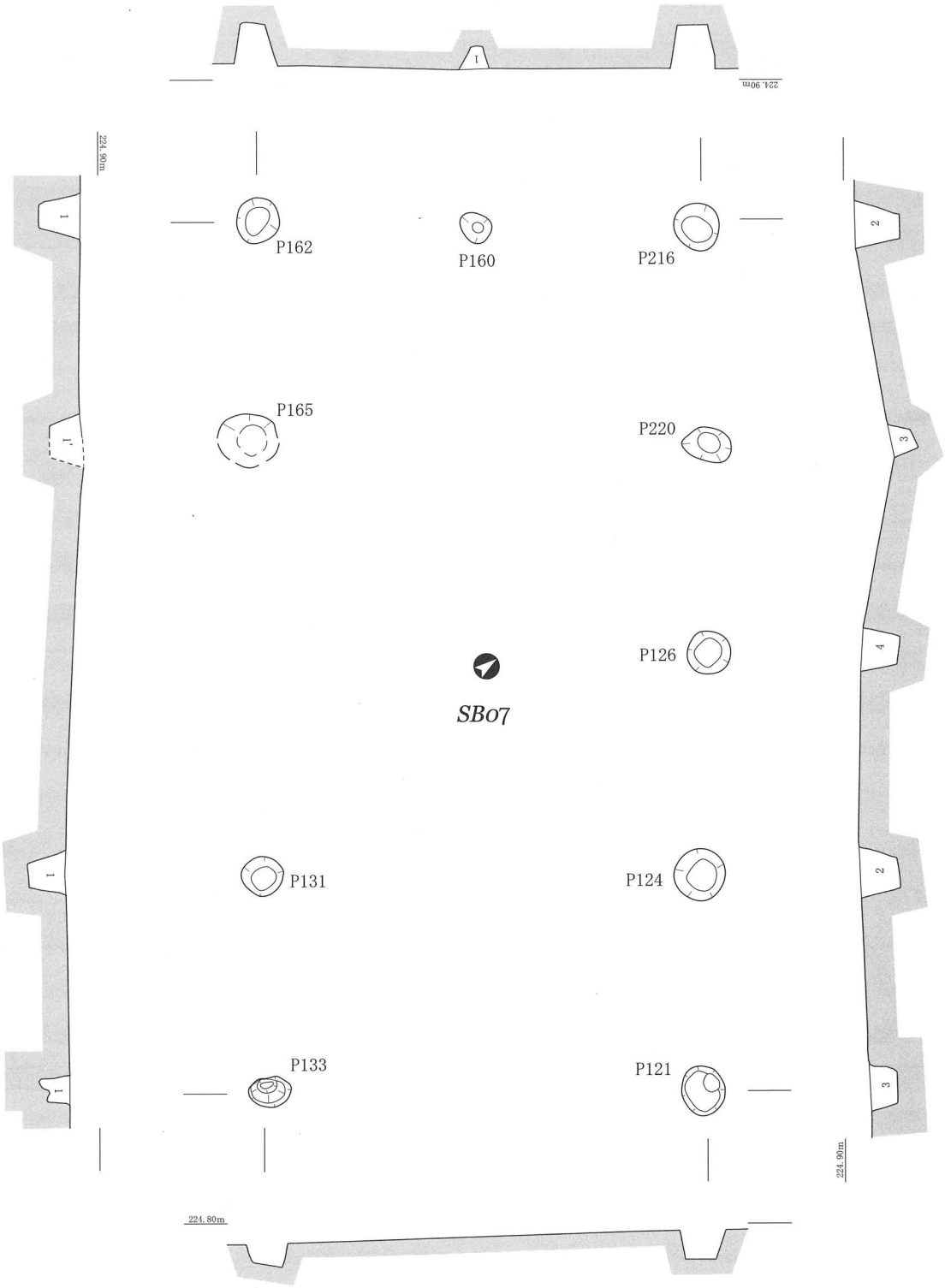
SK17 出土遺物(第 11 図)

図示した 11-2 は内外面ナデ、黒褐色を呈す弥生土器の注口部分である。この他図示しなかったが江戸以降の擂鉢片も出土している。

SK18(第 11 図)

3T に位置し、平面形は不整な方形をなし南西側で僅かに突出する。長径 1.66m、短径 0.80m、深さ 14 ㎝を測り、中央部分でさらに落ち込みがある二段掘り状になっている。埋土には炭を多く含み、流れ込みと思われる縄文土器片が混入していた。底面近くで土壌分析用サンプルをとっている。詳細は第 6 章に譲る。

第9図　Ⅰ区2層遺構配置図　S=1/300



1. 褐色砂質土
1'. 褐色砂質土 (1cm 以下の白色の砂粒を含む)
2. 黒褐色砂質土
3. 黒褐色砂質土・暗褐色粘質土
4. 暗褐色砂質土

0 2m
S=1/60

第10図 SB07実測図 S=1/60

SK18 出土遺物(第 11 図)

-1 は縄文土器で内面はナデ、外面の沈線区画内に擬似縄文を施す深鉢である。後期中葉と考えられる。

SX40・SX41(第 12 図)

どちらも 3R に位置し、SX40 は平面形不整楕円形をなし、長径 0.84m、短径 0.42m、深さ 0.42m、SX41 は平面形不整形で、長径 0.80m、短径 0.54m、深さ 0.30mを測る。どちらも断面形は漏斗形で部分的に二段掘り状となる。別遺構として調査したが、本来は同一のプランであったのかもしれない。SX40 には検出表面から 15 cmほどのレベルで 20 cmほどの川石を検出している。土師器細片も混入していた。SX41 には遺物は無かった。SX40・SX41 は立地、埋土等を見ても同時期が当てられよう。古墳時代初頭以降と考えられる。

SX46(第 12 図)

3S で SX47 の東に位置し、平面形は卵形で長径 0.54m、短径 0.35m、深さ 0.25mを測る。埋土は SX47 同様暗褐色砂質土で、埋土中にスラグ小塊が含まれていた。

SX47(第 12 図)

3T で SX46 の西側に隣接し、平面形は南側に突出部がみられる長円形で、その南側に僅かな平坦面をもつ。長径 0.52m、短径 0.29m、深さ 0.25mを測る。埋土は単層で暗褐色砂質土で、遺物はなかった。

SX48(第 12 図)

4S に位置し平面形は角張った長円形で、長径 0.70m、短径 0.34m、深さ 0.21mを測る。埋土中から平石を検出している。表面から 10 cmの位置であったが、元々は表面にあった可能性もある。遺物は無く時期は不詳である。

SX49(第 12 図)

4T に位置し、平面形は不整な落花生形をなす細長い形状で、長径 1.10m、短径 0.30m、深さ 0.30mを測る。SX 内二箇所に小ピット状の落込みが認められるが、後世の水田耕作によるものであろうか。埋土は暗褐色砂質土で若干炭を含む。遺物は無かった。

SX51(第 12 図)

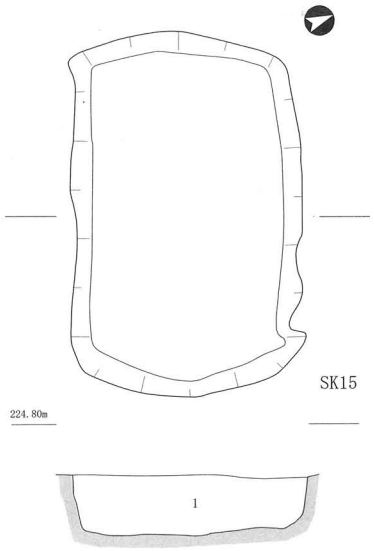
2V に位置し、平面形は落花生形で長径 0.80m、短径 0.55m、深さ 0.35mを測り、断面は二段掘り状をなしていた。遺物は無く、時期不詳である。

SX55(第 12 図)

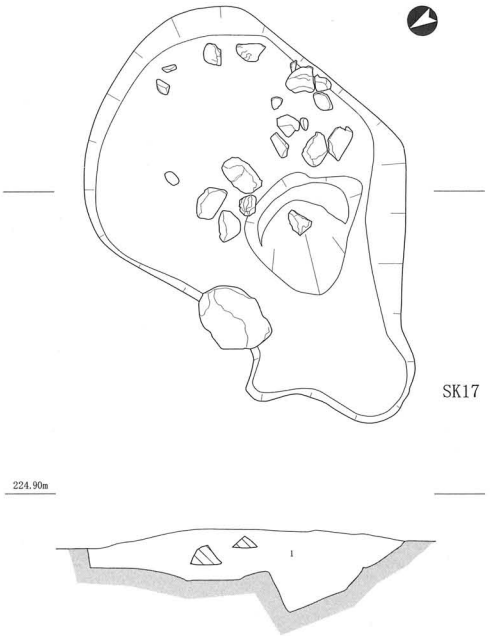
2T に位置し、SK23 同様他の遺構より若干低めの検出である。平面形は不整形で、長径 0.56m、短径 0.36m、深さ 0.18mを測る。埋土は黒色土で 1 mm程度の白色砂粒を僅かに含む。遺物は時期不明の細片が 1 点出土している。

SK14(第 12 図)

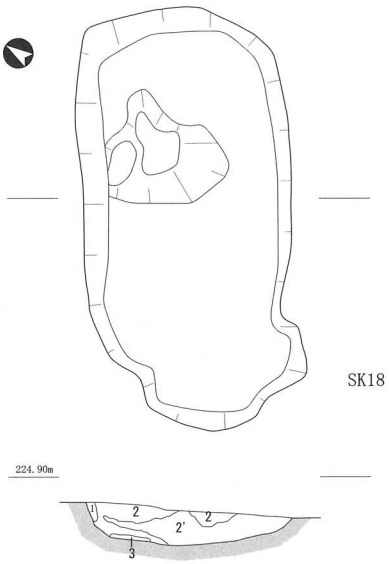
3Q に位置し、平面形不整形をなし、長径 1.20m、短径 0.68m、深さ 0.40mを測る。断面は中



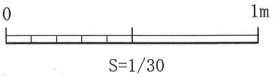
1. 茶褐色砂質土（少量の炭と1cm以下の砂粒を少量含む）

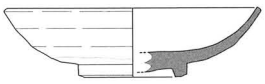


1. 茶褐色土（焼け石、炭を少量含む）



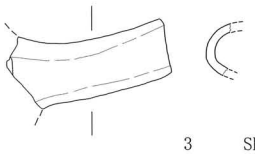
1. 橙色粘質土
2. 暗赤褐色粘質土（炭を含む）
2. 暗赤褐色粘質土（炭を多く含む）
3. 黒色土・炭



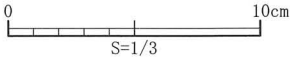


1　SK15

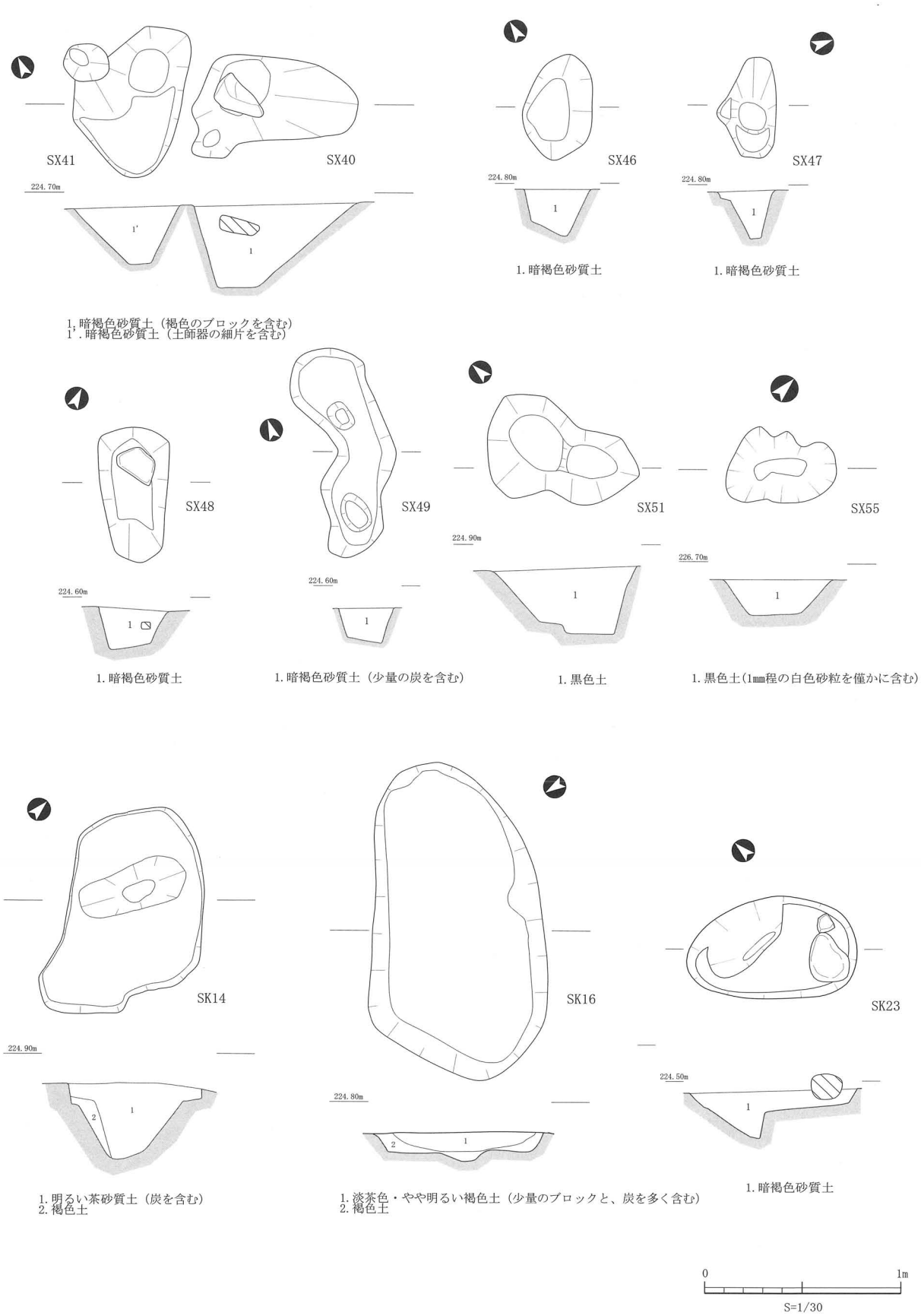
2　SK18



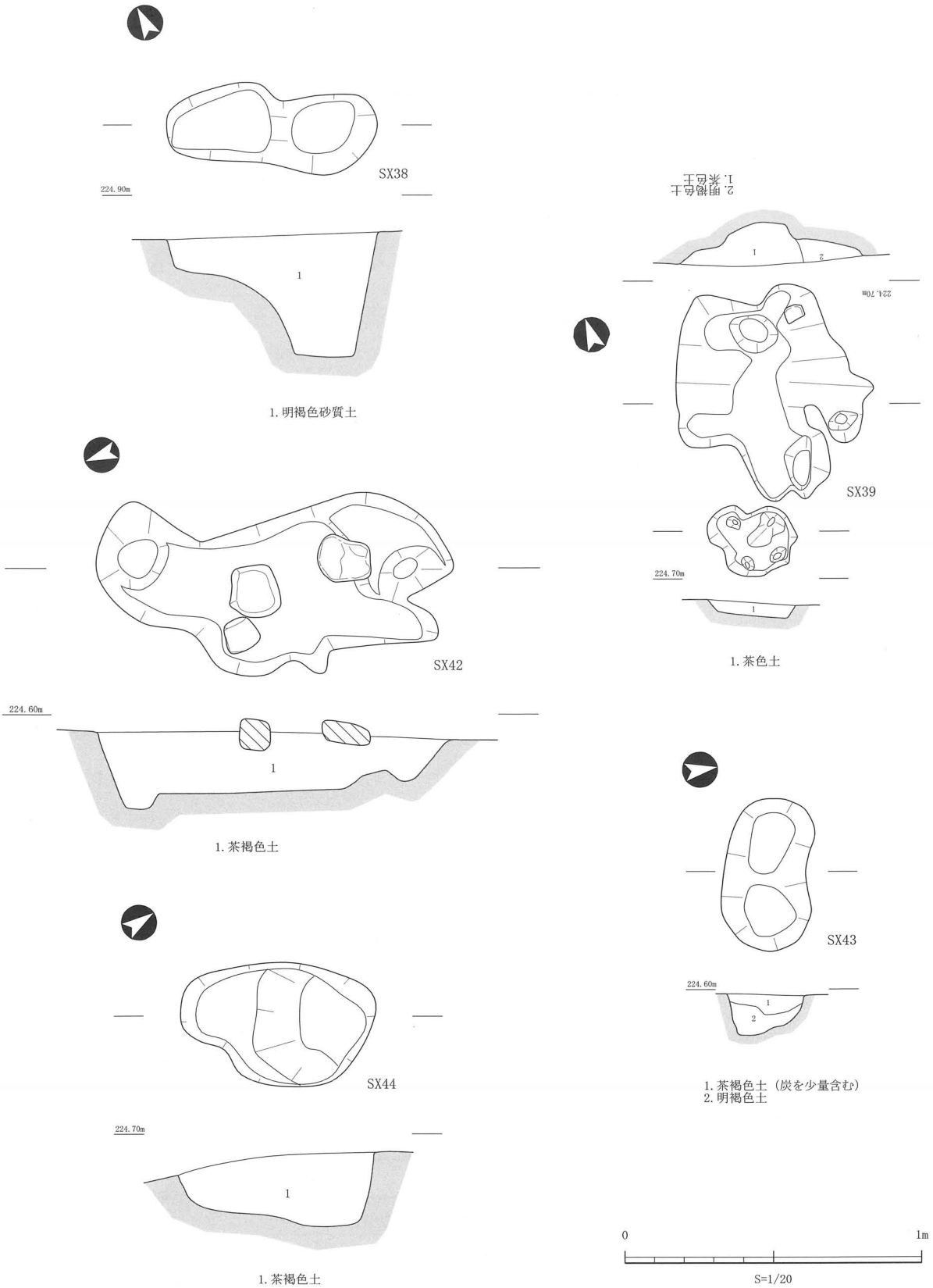
3　SK17



第11図 SK15・SK17・SK18遺構・出土遺物実測図　S=1/3 S=1/30



第12図 SX40・SX41・SX46・SX47・SX48・SX49・SX51・SX55
SK14・SK16・SK23実測図 S=1/30



第13図 SX38・SX39・SX42・SX43・SX44実測図　S=1/20

央部分で二段掘り状となる。埋土には僅かに炭を含む。埋土中から複合口縁片を検出している。遺構は弥生時代末期以降と考えられる。

SK16(第 12 図)

4Q で SX44 の西側に位置し、平面形長円形で、長径 1.64m、短径 0.88m、深さ 0.32mを測る。検出表面からは非常に浅く中央部で僅かに凹む。図化できる遺物は無かったが、弥生後半甕片、磁器が出土している。

SK23(第 12 図)

3U に位置し、他の 2 層中検出遺構より若干下からの検出であったが、ここで扱う。平面形は楕円形で、長径 0.86m、短径 0.54m、深さ 0.25mを測り、断面形は北側で二段掘り状をなす。土坑内に 20 ㎝以下の川石 2 個を含む。当時表面からの落込みかもしれない。底面近くで土壌分析のサンプルをとっている。

SX38(第 13 図)

3Q に位置し、平面形は落花生形をなし、断面は緩やかな二段掘り状を呈す。規模は長径 0.70m、短径 0.26m、深さ 0.42mを測る。埋土は明褐色砂質土層である。遺物は無く時期不詳である。

SX39(第 13 図)

掘込みは二つあるが、両方を SX39 とする。4Q に位置し、平面形はいずれも不整形。北側で長径 0.98m、短径 0.62m、深さ 0.14mを測る。土坑内に 20 ㎝以下の小ピットが認められる。いずれにも遺物は無かった。

SX42(第 13 図)

4R・4S に跨るように位置し、平面形は不整形で長径 1.18m、短径 0.51m、深さ 0.20mを測る。検出表面で 20 ㎝ほどの整った平石が 3 個置かれていた。長軸端はさらに深い落込みがある。埋土は茶褐色土で、遺物は無かった。

SX43(第 13 図)

3R に位置し、平面形は落花生形で長径 0.52m、短径 0.28m、深さ 0.14mを測る。1 層に若干炭が混じる。遺物はなく時期不詳である。

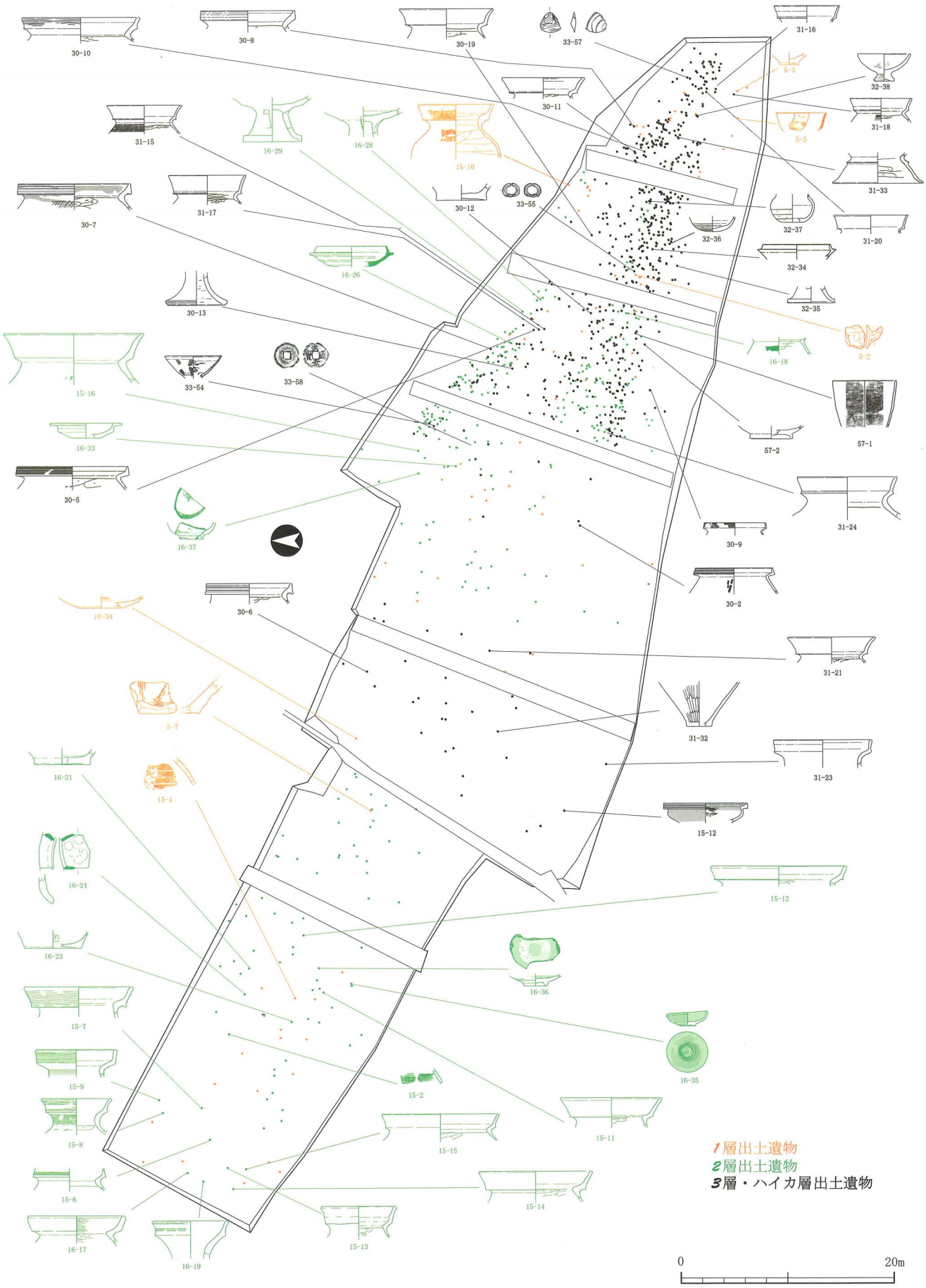
SX44(第 13 図)

4Q の SK16 の東、SX39 の西に位置する。平面形は不整形で長径 0.64m、短径 0.42m、深さ 0.25mを測る。断面形は南北方向に緩やかに二段掘り状となるものである。遺物は無く時期不詳である。

(2) 2 層出土遺物(第 15・16 図)

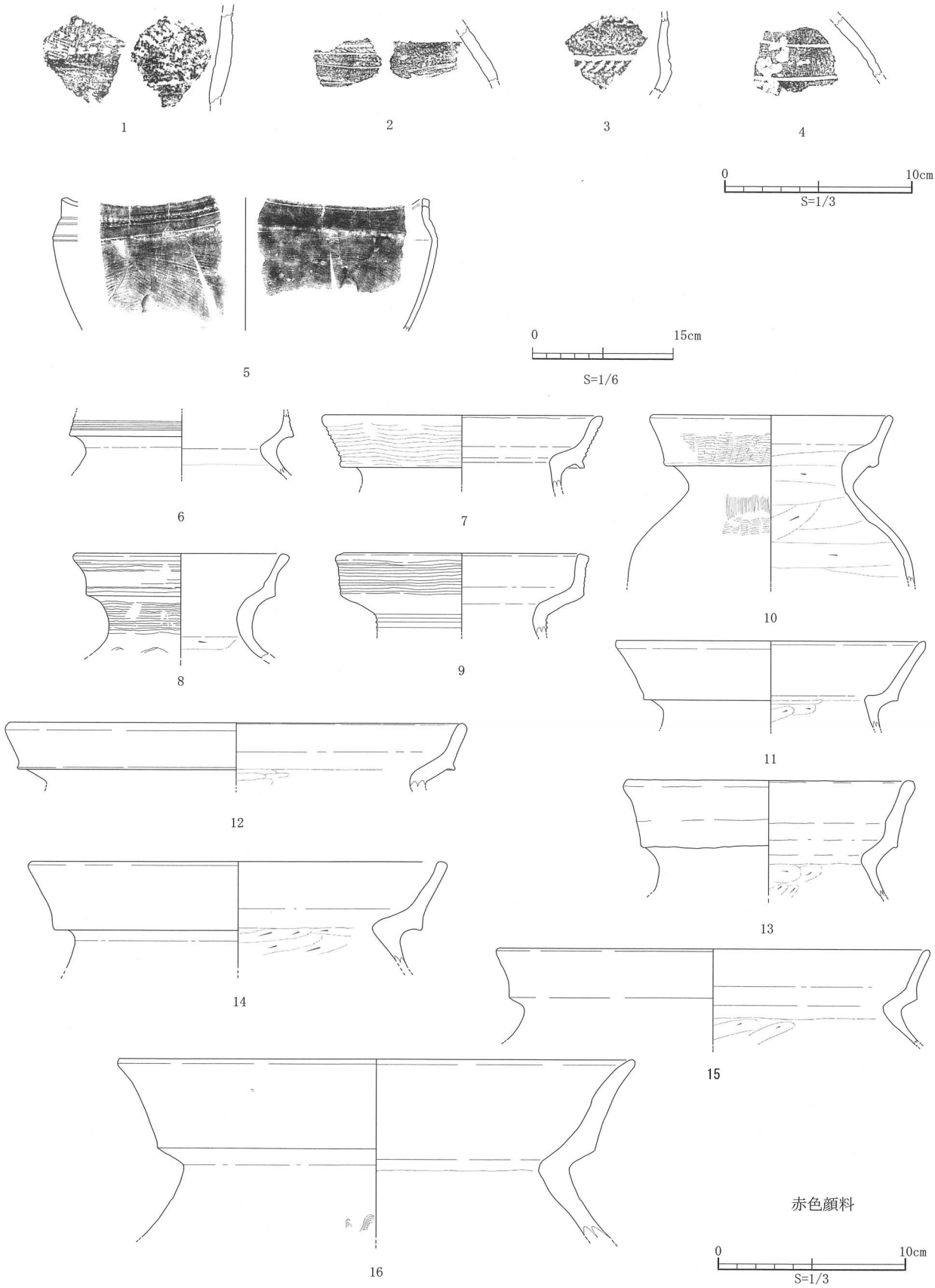
1～5 は縄文土器である。

1 は粗製深鉢片で、外面に半裁竹管文が見られる。2・4 は細めの沈線間に擬似縄文を施す注口若しくは壷形の土器である。3 は粗製深鉢胴部片で外面に沈線と刻みを有する。5 は口径 38.0 ㎝

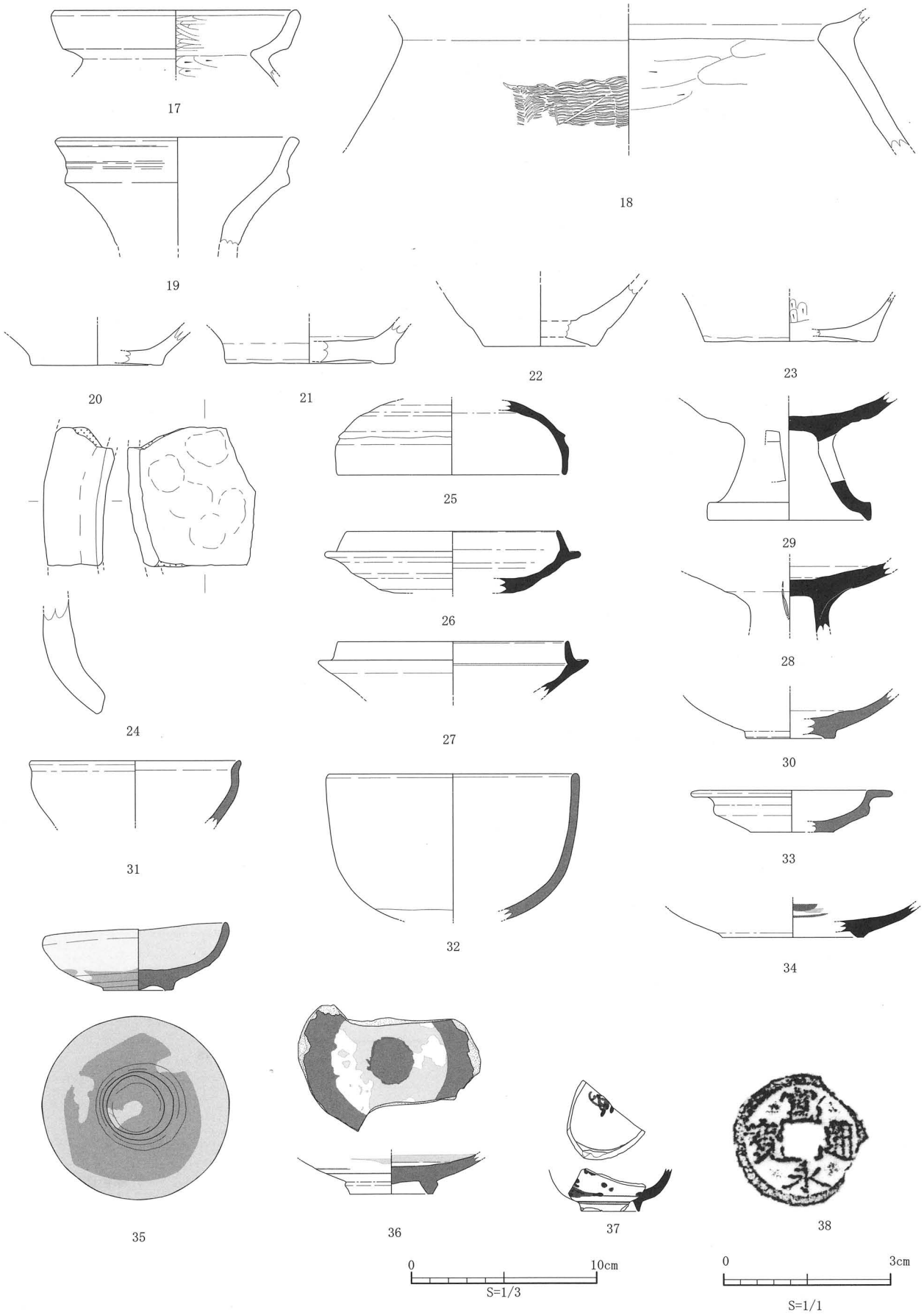


第14図　Ⅰ区包含層遺物出土状況　S=1/500

S=1/500



第15図　Ⅰ区2層出土遺物(1)　S=1/3 S=1/6



第16図　Ⅰ区2層出土遺物(2)　S=1/3 S=1/1

を測る精製の鉢で、内外面を磨く。口縁端部内面には沈線と擬似縄文を施し、外面には二組の沈線帯があり、上の沈線間には巻貝殻頂刺突が、下の沈線間には擬似縄文が見られる。1 は晩期黒土ＢＩ、2～5 は後期中葉以降の凹線文系土器である。

6～19 は弥生時代後半から古墳時代前半の土器である。

6～9 は擬凹線が複合口縁部分に施される甕または壷で、8・9 は頸部にも擬凹線が廻り、9 の外面には赤色顔料が塗布される。11～19 は複合口縁部分に擬凹線が見られないもの。いずれも内面頸部以下は削り、頸部以上はナデる。17 の内面の口縁から頸部までは磨き痕が顕著である。複合口縁部分の屈曲もかなり退化傾向にある。19 は器台若しくは壷の口縁部であろう。

20～23 は底部で、20・21 は平底、22・23 は上げ底である。積極的根拠はないが、胎土・色調等より、上記の 6～19 の遺物の時期の範疇であろう。

24 は土師器、竈の焚き口部分である。

25～29 は須恵器である。

25 は坏蓋で天井部は削る。内面口縁近くの段は消滅している。26・27 は坏身。立ち上がりは 26 はやや内傾気味、27 は反り気味である。28・29 は高坏で、いずれも 2 方向に透かしを有するが、台形状の透かしのもの(28)と線刻状のもの(29)がある。これらは出雲 4～5 期である。

30～37 は陶磁器である。30 は唐津の皿、31 は天目茶碗、32 は地元産の“ぼてぼて茶碗”。33 も布志名の皿で 19 世紀の品。34～37 は九州系のもので、34 は 17 世紀前半の古伊万里皿。35・36 は唐津の皿。37 は碗である。

38 は寛永通宝である。字体から古寛永の 1 期の品で 17 世紀中頃の年代が与えられる。

第 3 節　3 層の遺構・遺物

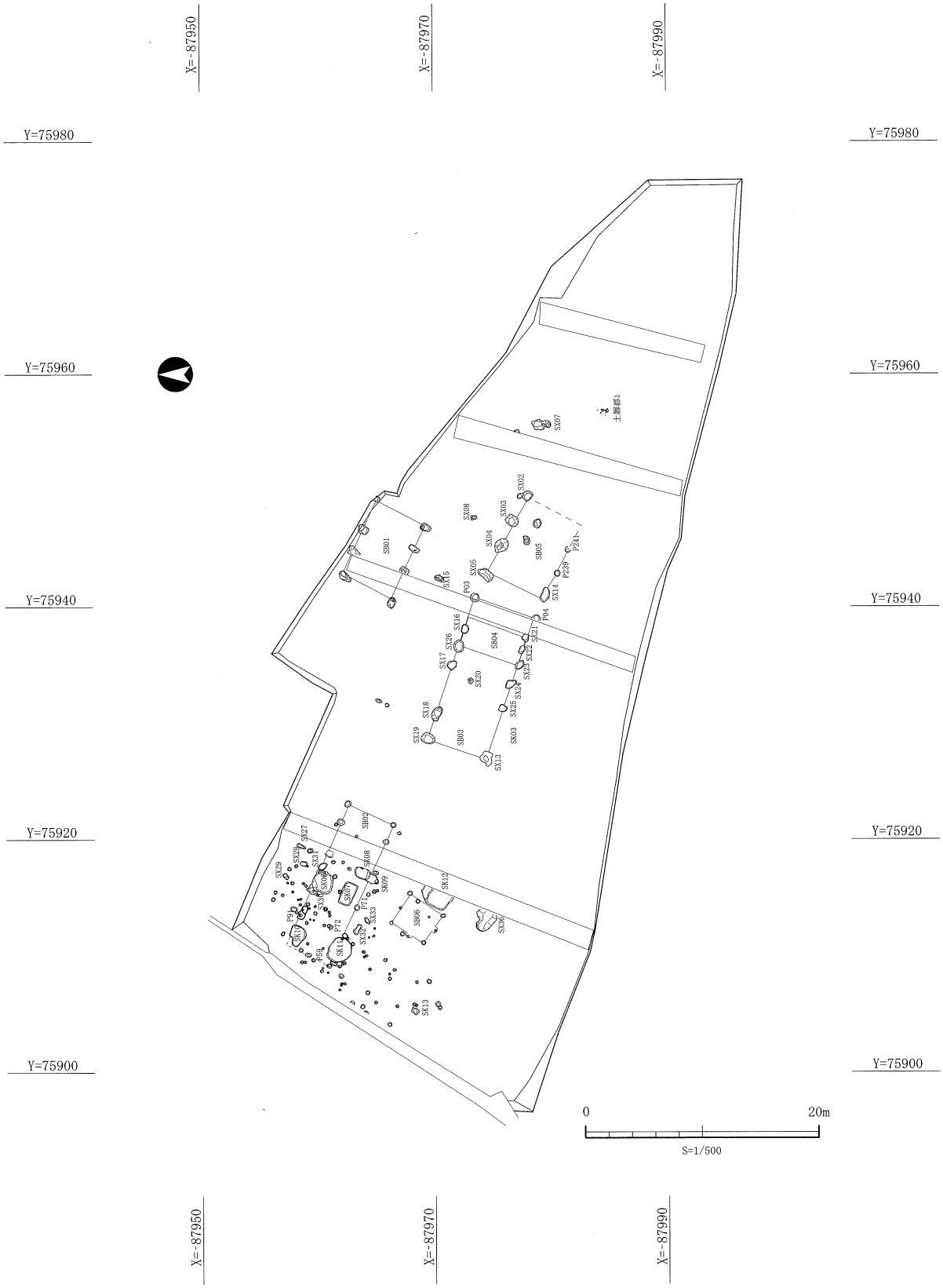
(1) 遺構(第 17・34 図)

3 層上面にも多くの土坑、ピット状の落込みが確認されたが、建物と確認できたものは僅かであった。列をなすものはあるが、ピット内埋土や規模から水田耕作の杭跡であろうと考えられるものについては取上げなかった。また、SB の各柱穴名は、検出時の名称をそのまま用いている。

さらにトレンチによる土層観察では分層できず遺構面と認識していなかったが、3 層中～下層で SG01 を検出している。

SB01(第 18 図)

1H・2H・1I・2I・2J に跨るように位置し、P04 の北半分は調査区外となっている 1 間×3 間の側柱建物で、平面規模は梁間 4.78m、桁行 6.94m、床面積 34.43 ㎡である。柱間隔は妻側 4.78 m、平側は不均等であった。柱穴は平面楕円形のものが多く、山川方向の断面形状(最深部が山よりで、川側は緩やかに傾斜する)は柱の建て方を示しているといえよう。検出面からの深さはもともとが傾斜地に建てていることもあり、15～50 ㎝でばらつきがあるが、両平側ではほぼ揃う。P04



第17図 3層遺構配置図　S=1/500

は北半分が調査区外ということもあり最深部に到達していないと考えられる。建物の主軸方向はE－22°－Sをとる。P01には柱が残っており、埋土中に弥生土器の底部が含まれていた。P05・P06では柱の位置が特定できる土層が確認できた。P08の土層は柱の抜取痕の可能性がある。

SB01 出土遺物(第29図)

SB01の各ピットから出土した遺物はスラグ、土師器片、弥生土器片であった。このうち図化ししたのが、P01出土の29-6で弥生土器の底部である。上げ底の底部は底径5.4㎝で、外面はハケメ、内面は削る。7は同じくP01の柱根である。樹種はクリと思われる。底面は加工痕が顕著であったが、側面は樹皮が残ったままであった。

SB02(第19図)

3M～3P・4M～4Pに跨って位置する1間×6間の側柱建物である。平面規模は梁間4.34m、桁行13.32m、床面積55.42㎡である。柱間隔は妻側4.34m、平側は不均等であった。柱穴は平面形ほぼ円形のものが多く、径25～30㎝のものが多い。検出面からの深さは直線上はほぼ揃う。P91は断面形が二段掘り状となる。建物の主軸方向はE－23°－Sをとる。柱の位置を特定、または抜取痕が判るような土層は見られなかった。SB02は同一面にあるSK06(年代測定している)に切られているのでSK06より時期は古い。戦国時代以前と考えられる。出土遺物は無かった。

SB03(第20図)

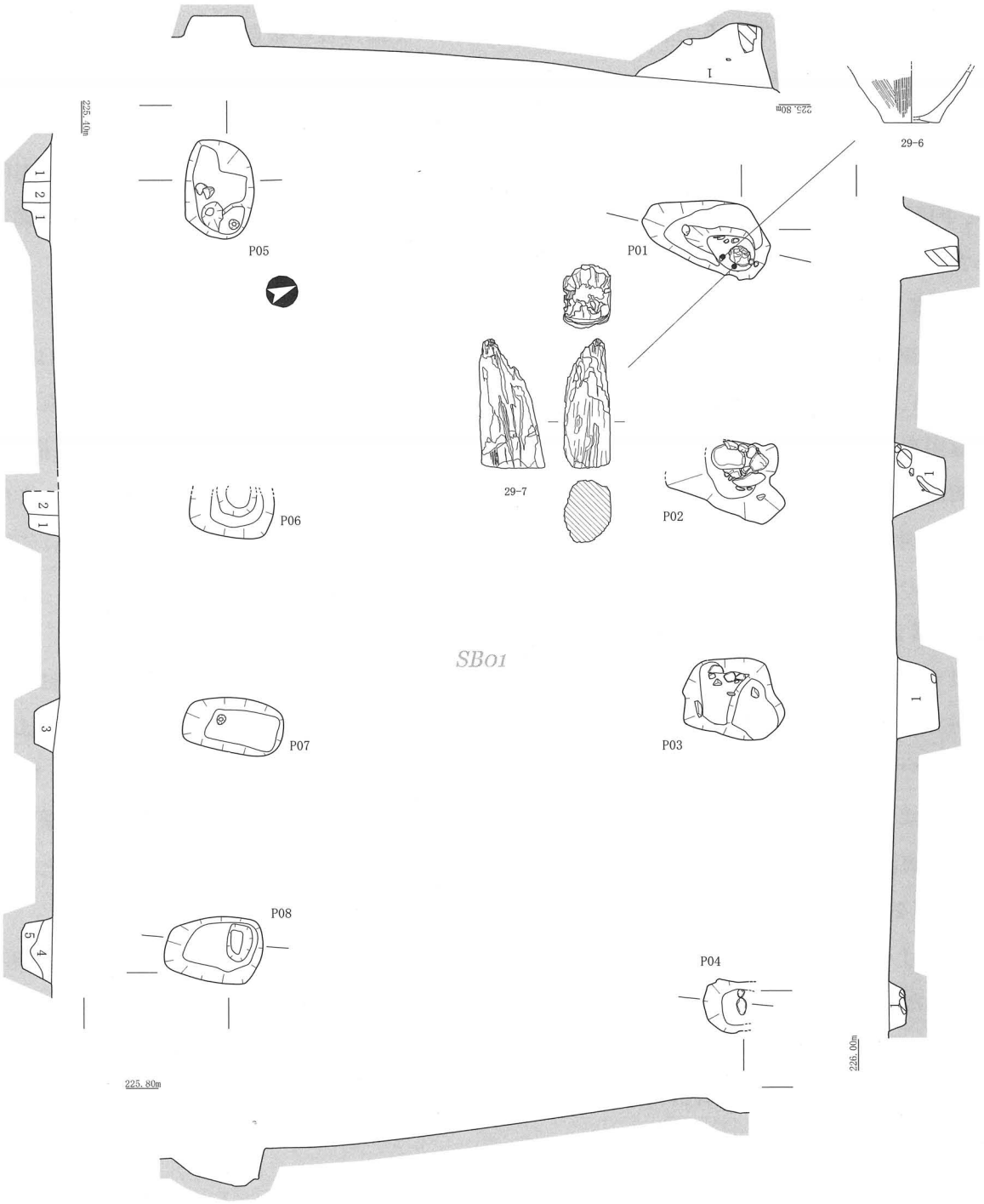
4I～4l・5I～5lに跨って位置する1間×5間の側柱建物である。平面規模は梁間5.51m、桁行12.83m、床面積70.26㎡である。柱間隔は妻側5.51m、平側は不均等であった。柱穴は平面形は様々で径65～120㎝とばらつきがある。検出面からの深さにもばらつきが見られる。建物の主軸方向はE－19°－Sをとる。SX13は柱の位置を特定できるような土層が認められる。また、SX17の浅い底面には礎石とみられる平石が据えてあった。P3の埋土から古式土師器片が出土している。

SB04(第21図)

5I・5J・4Jに跨る1間×1間の側柱建物で、平面規模は2.46m×5.51mで、床面積は13.86㎡であった。柱穴は平面形楕円形で径は65㎝から1.1mとばらつきがある。検出面からの深さはほぼ揃う。建物の主軸方向はN－18°－E(E－16°－S)である。SX21には角礫が土坑内に埋土とともに入っていた。他の柱穴に柱の位置を特定、または抜取痕が認められるものはなかった。また出土遺物も無かった。

SB05(第22図)

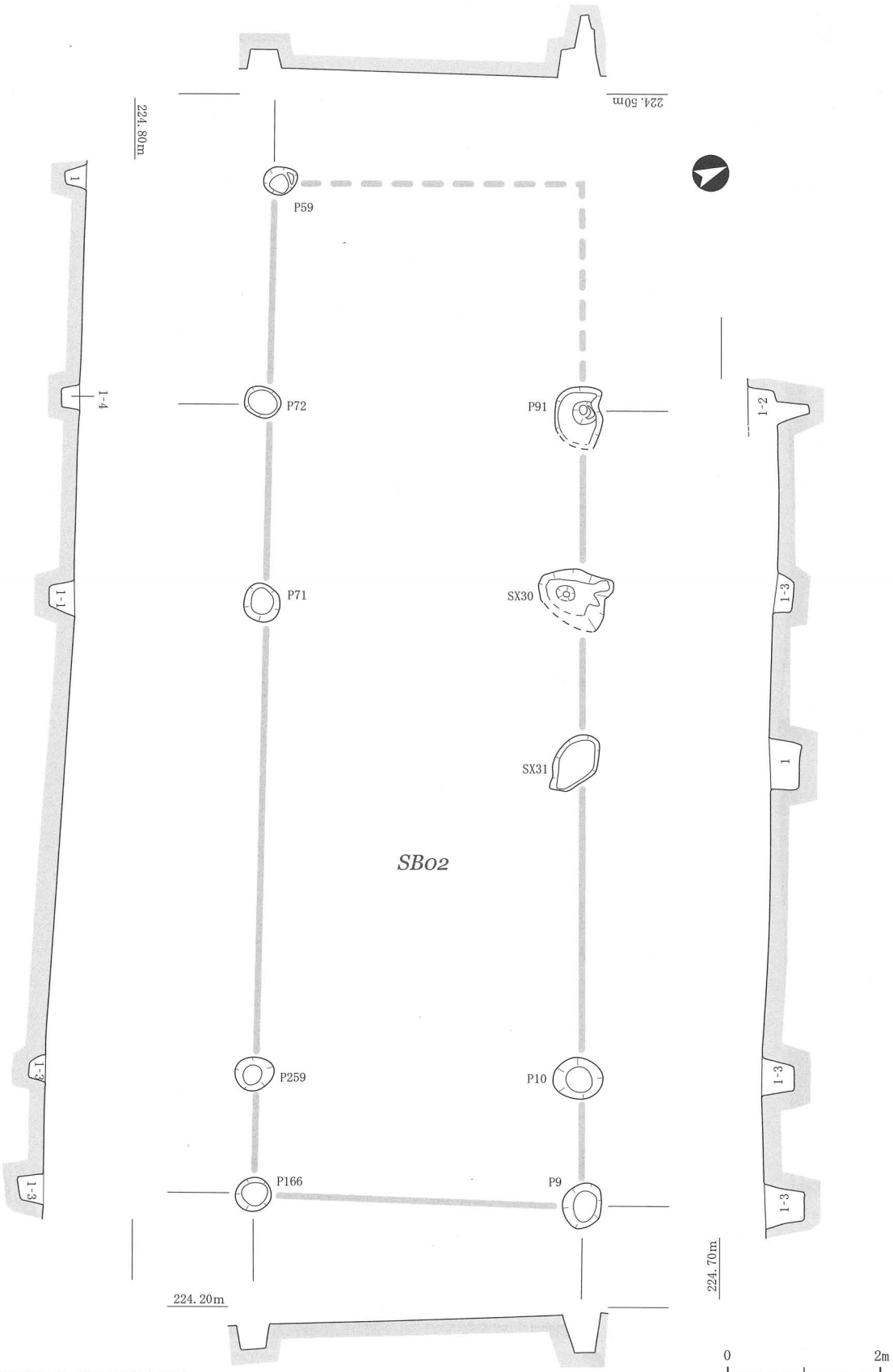
4G～4I・5H・5Iに跨る1間×3間の側柱建物で、平面規模は梁間5.50m、桁行7.55m、床面積39.38㎡である。柱間隔は妻側は5.50m、平側は2.34mであった。柱穴は平面形は様々であるがP239とP241はほぼ円形で径55㎝を測る。その他の柱穴は大きく、形状もばらつきがあり、径85㎝～1.3mである。検出面からの深さにもばらつきがある。建物の主軸方向はE－27°－Sをとる。柱穴埋土からは、柱の位置、抜取痕等が認められるものはなく、遺物もなかった。柱穴内から古式土師器、陶器片、スラグが出土している。



0 2m
S=1/60

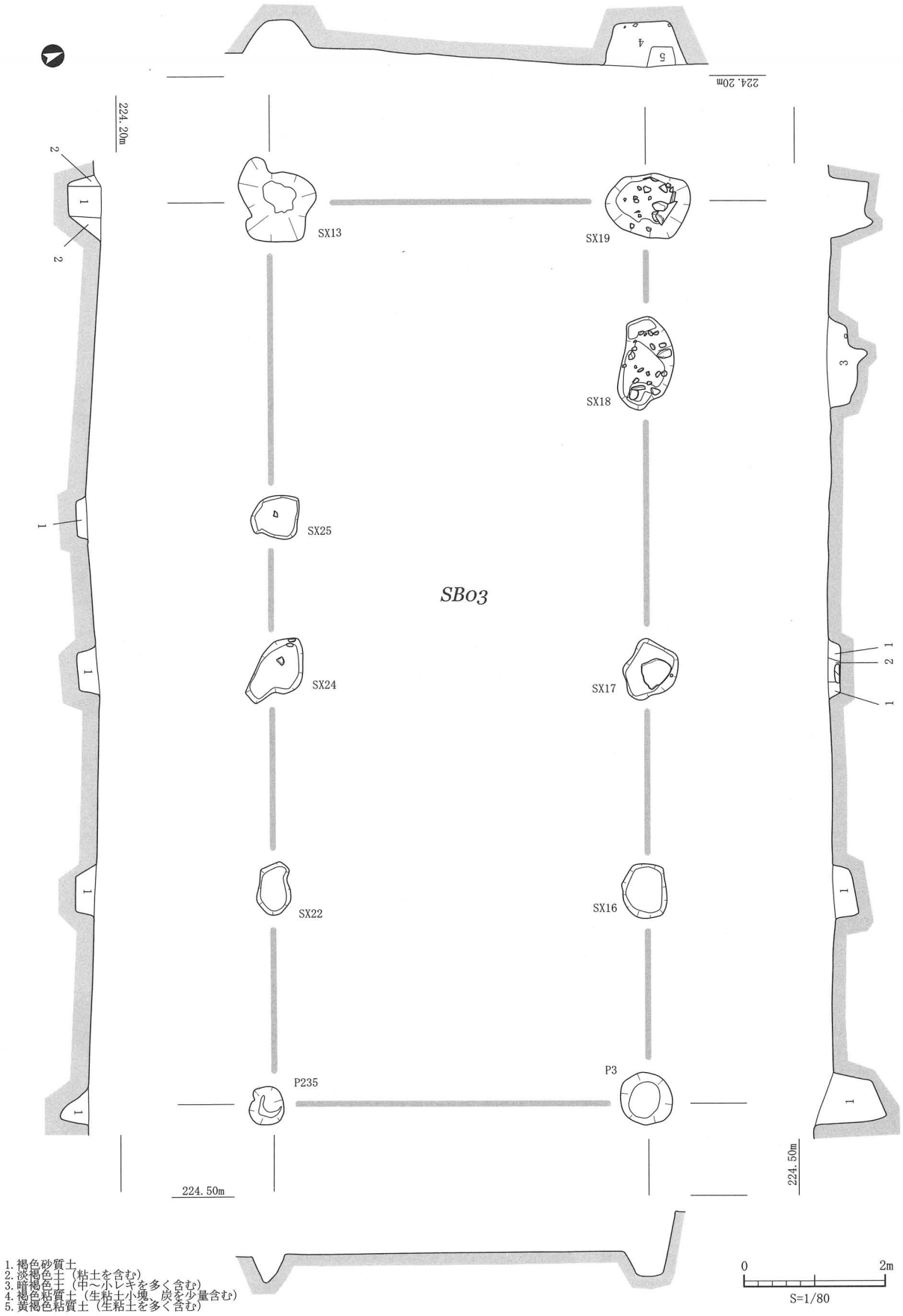
1. 褐色土（中～小レキ、荒い砂粒を含む）
2. 暗褐色（柱根部分）
3. 茶褐色土（小レキ含む）
4. にぶい褐色土（小レキ、粘土を少量含む）
5. 灰褐色土

第18図 SB01実測図　S=1/60

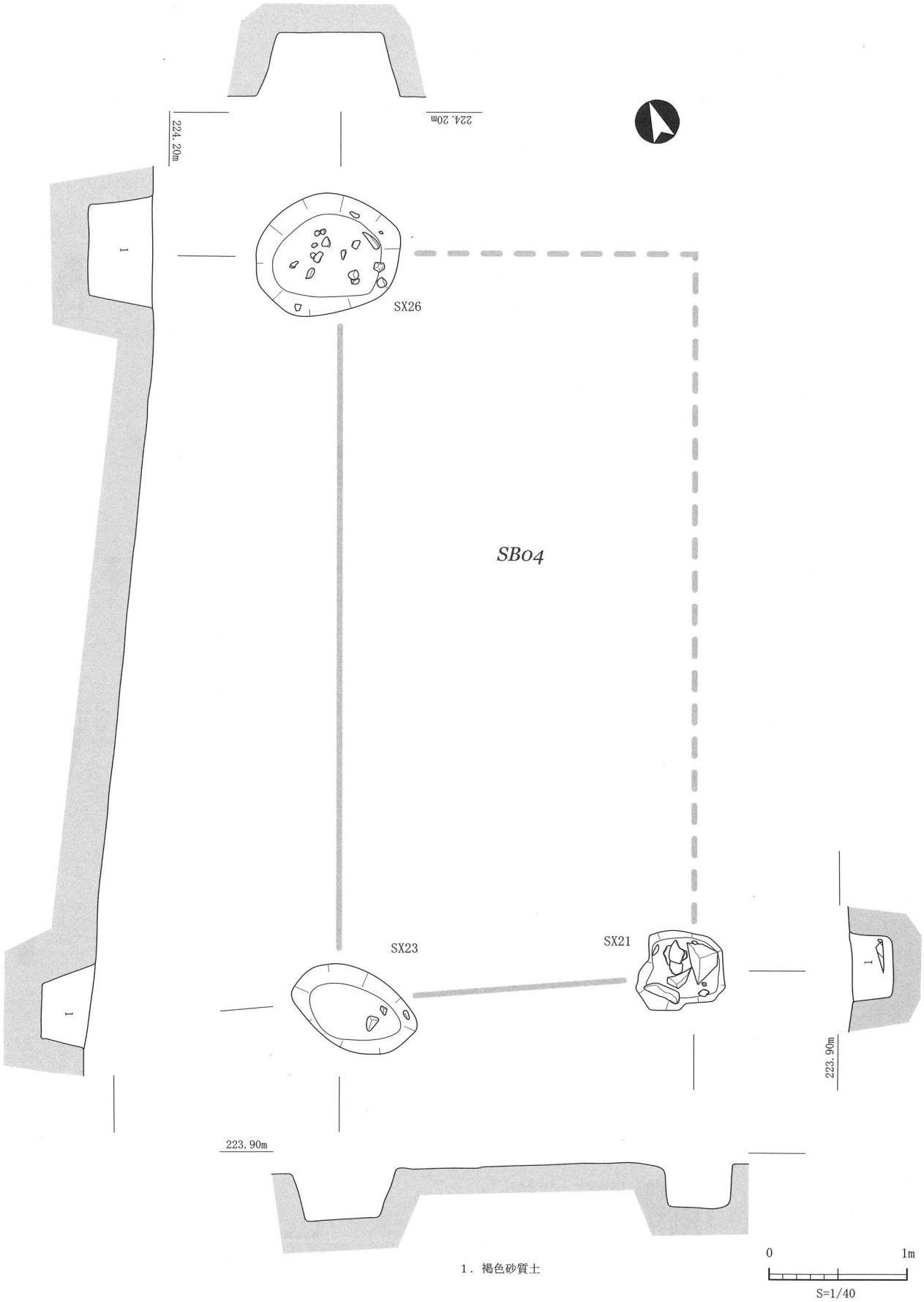


1.明褐色砂質土（1cm以下の砂粒を含む）
1-1.明褐色砂質土（少量の炭と地山ブロックを含む）
1-2.明褐色砂質土（地山ブロックを含む）
1-3.明褐色粘質土
1-4.明褐色粘質土（少量の炭を含む）

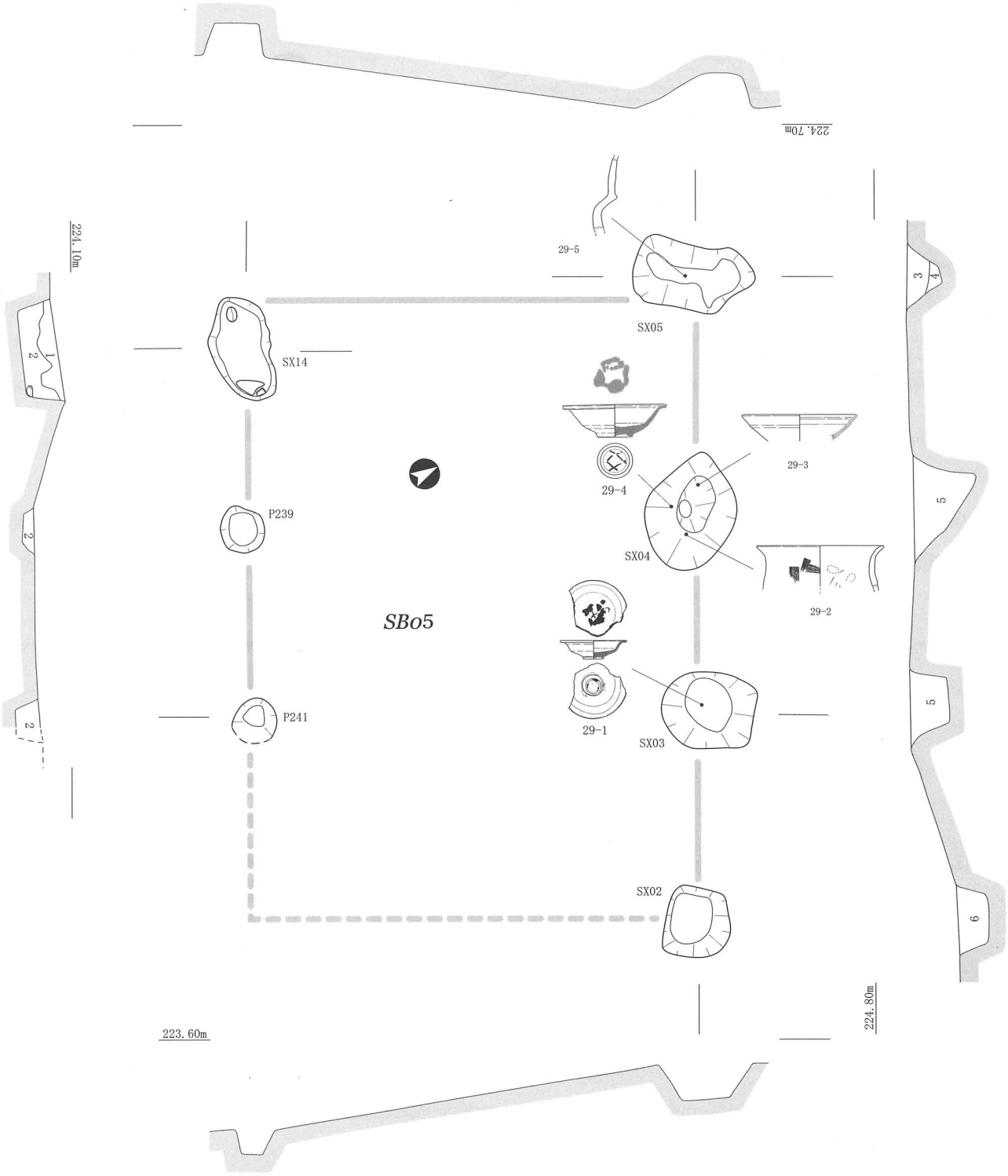
第19図 SB02実測図　S=1/80



第20図 SB03実測図　S=1/80



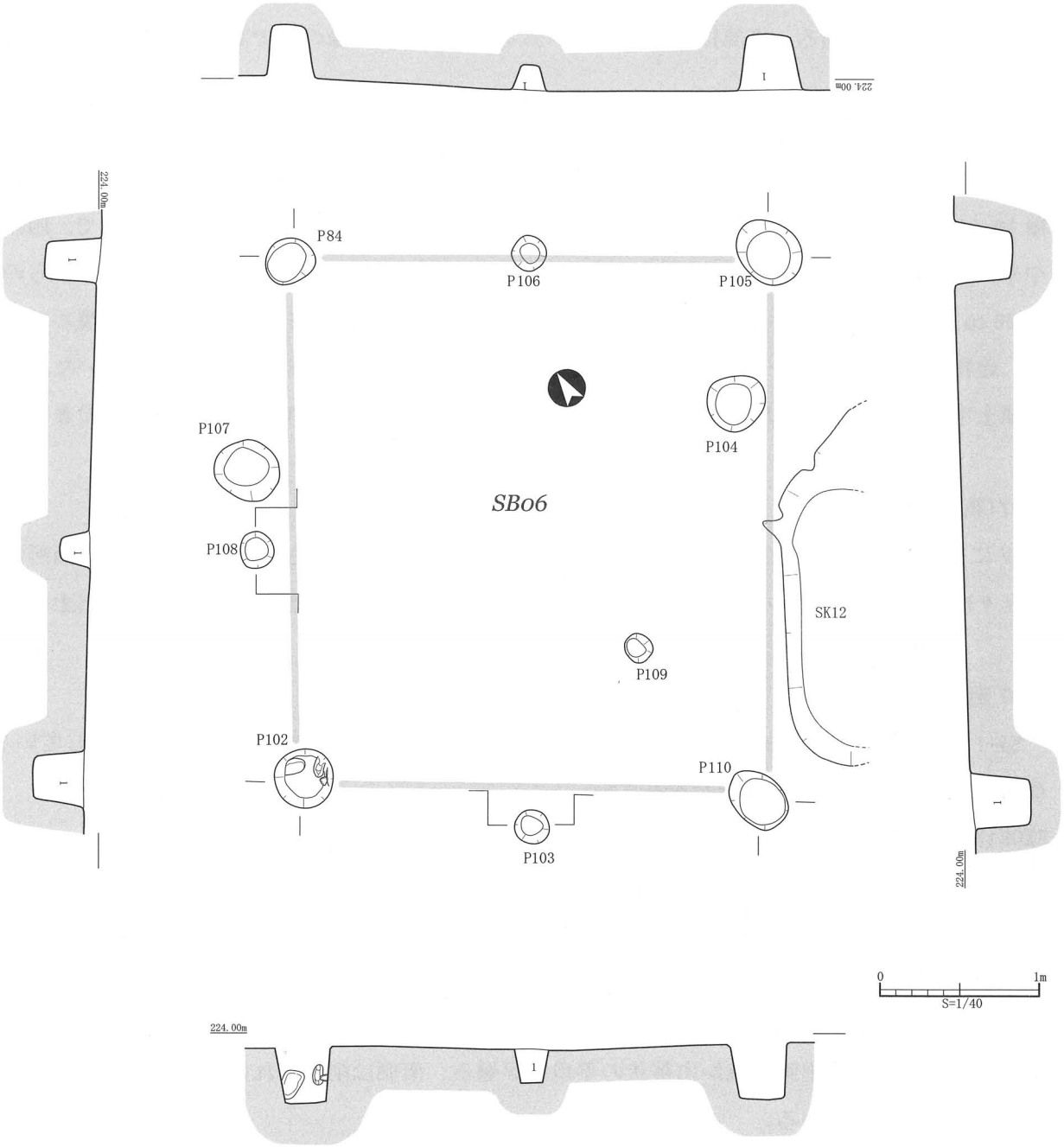
第21図 SB04実測図　S=1/40



1. 暗褐色粘質土（地山ブロックを含む）
2. 暗褐色粘質土
3. 黒褐色粘質土（粘土と炭を含む）
4. 褐色砂質土
5. 黒褐色砂質土
6. 褐色砂質土（細かい炭を多く含む）

0　2m
S=1/70

第22図 SB05実測図　S=1/70



第23図 SB06実測図　S=1/40

SB05 出土遺物(第 29 図)

29-1 は唐津の皿で、口径 13.8 cm、器高 4.2 cm、底径 3.9 cmを測る。内面には重ね焼きの痕跡が顕著に残る。2 は口径 17.7 cmの単純口縁の土師器甕で外面はハケ目、内面は頸部以下は削る。3 は唐津製の皿で 17 世紀までの品である。4 は 1 と同じような唐津の皿。口径 13.2 cm、器高 4.2 cm、底径 4.4 cmを測る。底部に墨書の痕跡がある。5 は複合口縁の壷である。古墳時代初頭に位置づけられる。

SB06(第 23 図)

4N・5N・40・50 に跨る 2 間×2 間の側柱建物で、平面規模は、梁間 3.00m、桁行 3.45m、床面積 10.05 ㎡である。柱間隔は妻側は 1.50m、平側は不均等であった。柱穴は平面円形で、四隅がやや大きく 30～40 cm、P106 は直線上にあるが、P108、P103 はやや外側に位置する。これらの径は 20 cmである。検出面からの深さは四隅の柱穴が 35 cm、その他の柱穴が 16～20 cmと浅めであった。建物の主軸方向は E－33° －S をとる。P102 内には埋土とともに川石が含まれていた。P110 の埋土中から古式土師器片が出土している。柱穴土層は何れも単層で抜取痕等は確認できなかった。

SX07(第 24 図)

4F に位置し、平面形は不整形で、長径 1.62m、短径 0.90m、深さ 0.37mを測る。断面形からは元々は二つの土坑であった可能性がみてとれる。埋土中から古式土師器、陶器等が出土している。

SX07 出土遺物(第 24 図)

24-1 は擬凹線のはいらない段階の複合口縁甕で、複合口縁部分の稜は横方向に突出している。草田 6・7 期。2 は高坏の脚部であろうか。

SX08(第 24 図)

3H に位置し、平面不整形をなす、長径 0.56m、短径 0.30m、深さ 0.13mを測る。斜面に掘り込まれたもので検出時は非常に浅いものであった。遺物は無く時期不詳である。

SX15(第 24 図)

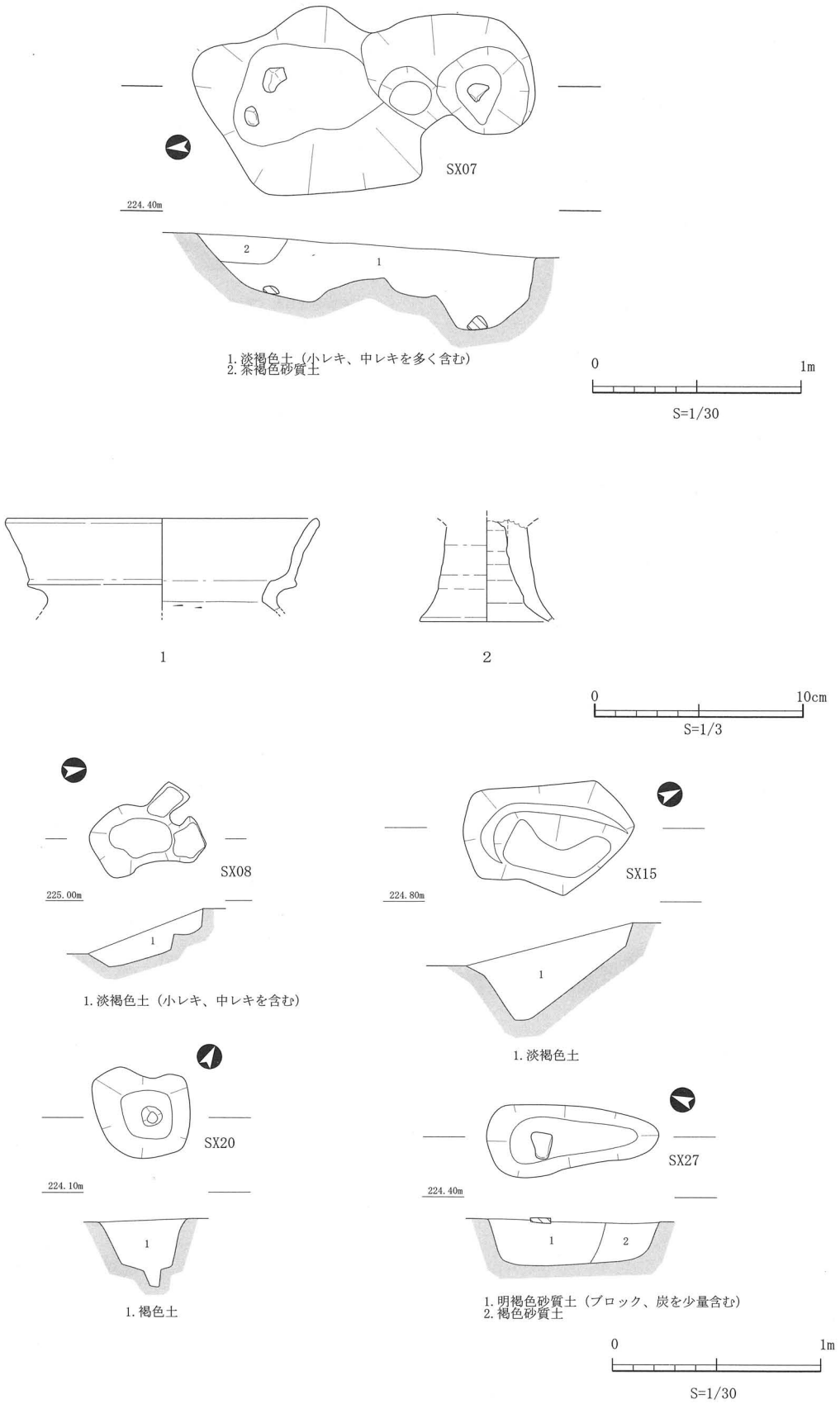
3I の SX08 同様斜面に位置し、平面不整五角形である。長径 0.82 cm、短径 0.51 cm、深さ 0.32 cmを測る。西側断面中腹に僅かに帯状の平坦面が廻る。南側は削平されたものと思われる。遺物は無く、時期不詳である。

SX20(第 24 図)

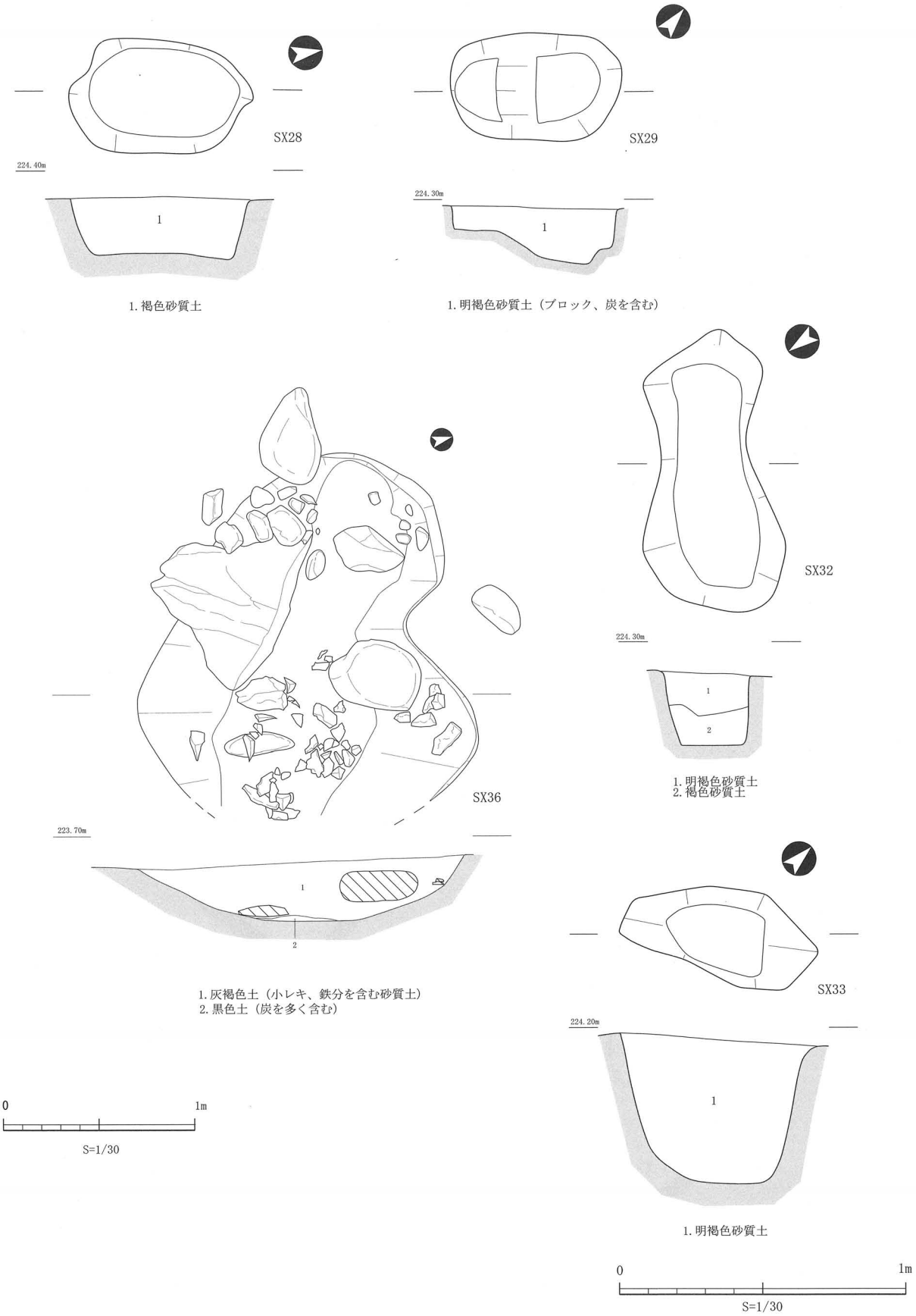
4J に位置し、平面形は方形の崩れたような不整形で、長径 0.44m、短径 0.39m、深さ 0.32m を測る。底面中央に 10 cmほどの小ピットが確認できた。杭跡かと思われるが、土層による確認はできなかった。遺物は無く、時期不詳である。

SX27(第 24 図)

2N に位置し、平面形はアメーバ形で、長径 0.82m、短径 0.34m、深さ 0.21mを測る。検出表



第24図 SX08・SX15・SX20・SX27遺構・SX07遺構 遺物実測図 S=1/3 S=1/30



第25図 SX28・SX29・SX32・SX33・SX36実測図　S=1/30

面で15㎝程の平石を検出した。埋土には地山ブロック、炭を包含している。遺物は無かった。

SX28(第25図)

3Nに位置し、平面レモン形のような不整円形で南北両端がやや突出する。規模は長径0.63m、短径0.39m、深さ0.20mを測る。埋土は褐色砂質土で遺物は出土していない。

SX29(第25図)

20に位置し、平面楕円形で長径0.59m、短径0.36m、深さ0.18mを測る。断面形は南西側に平坦面をもち、北東側が最深部となる。明褐色の埋土中には地山ブロック、炭を含む。遺物は無かった。

SX32(第25図)

40に位置し、平面瓢箪形をなし、長径0.98m、短径0.31m、深さ0.26mを測る。埋土は砂質土で遺物はなく時期不詳である。柱穴の可能性も否定できない。

SX33(第25図)

40でSX32の南東に位置し、平面形は角のある楕円形状で、長径0.68m、短径0.33m、深さ0.50mを測り、平面形と比して深い土坑の印象を受ける。埋土は明褐色砂質土で、遺物は含まれていなかった。下層を貫いた可能性もある。

SX36(第25図)

6Nに位置する調査区内でも川側によった遺構で、平面形は瓢箪形で長径2.10m以上、短径1.20m、深さ0.31mを測り、断面形はレンズ状である。埋土中に50㎝を超すような川石や床面に10㎝ほどの角礫、炭が集中する箇所が確認できた。土坑南側の 1m程の角礫は元々その位置にある自然のものであろう。埋土中に遺物はなかった。

SK06(第26図)

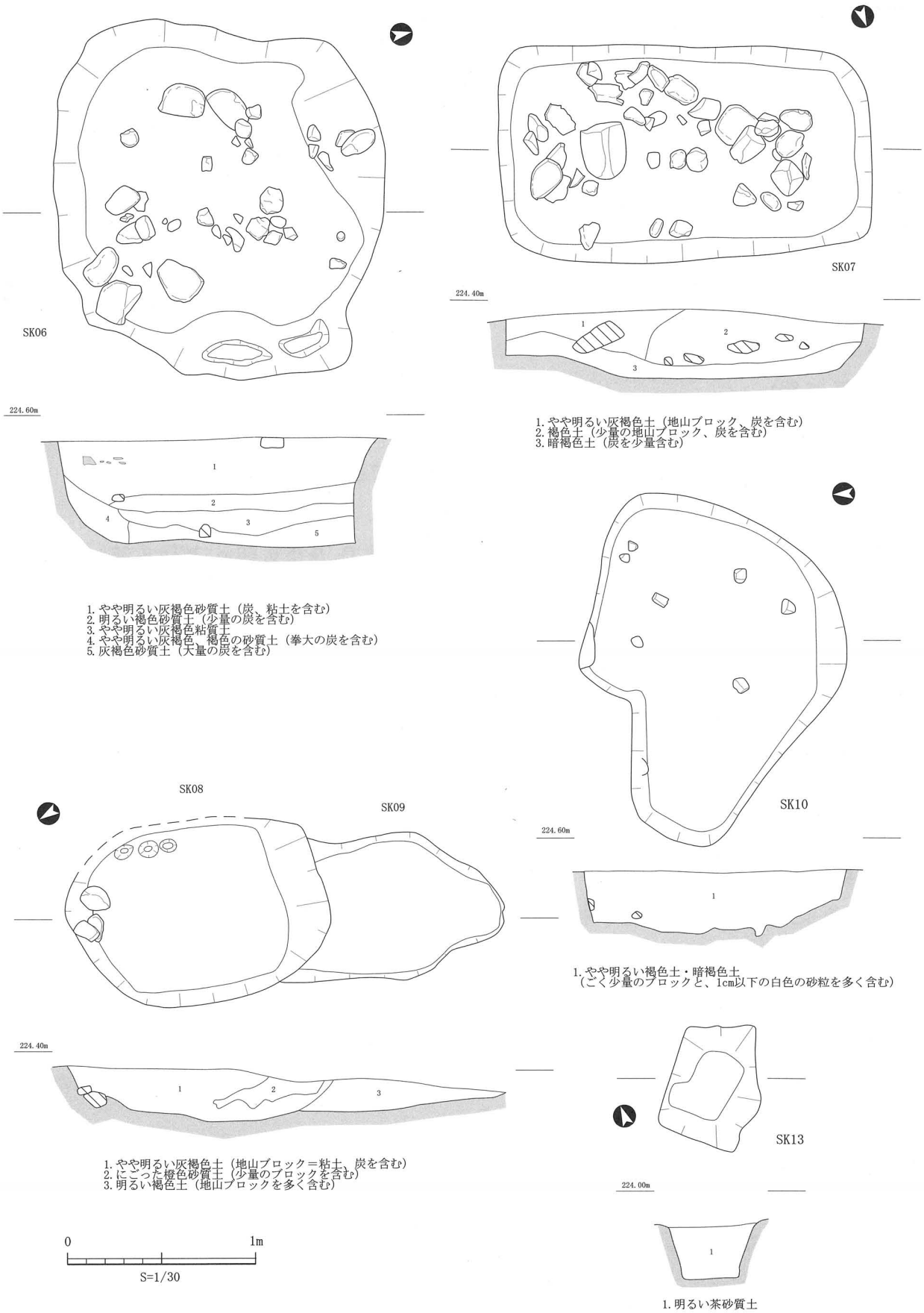
3N・30 に位置し、平面形はやや不整な隅丸方形状である。東側に僅かに突出した部分があり、窪む部分が二箇所ある。規模は長径1.80m、短径1.74m、深さ0.54mを測る。1層表面と層中に30㎝以下の川石が確認され、その中には焼石も含まれていた。また、床面5層には大量の炭を包含していた。5層の炭をC14年代測定している。詳細は第6章第2節に譲るが、示された年代は中世末であった。出土遺物は埋土中から須恵器片、磁器片が出土しているが図化し得なかった。

SK07(第26図)

3N・4N・30・40に跨るように位置する平面形隅丸長方形で、長径1.97m、短径1.16m、深さ0.37mを測る。埋土に川石、地山ブロック、炭を含む。3層の炭をC14年代測定他結果、SK06と同様の年代を示している。出土遺物は流込みの1点複合口縁片があった。

SK08(第26図)

3N・4Nを跨ぐ位置にあり、SK09と切合う状態で検出した。平面形は不整な長方形状をなし、長径1.40m、短径0.98m、深さ0.27mを測る。床面北東側に15～20㎝の川石が3個あった。埋土中には橙色の地山ブロックと炭が含まれていた。出土遺物は無かった。



第26図 SK06・SK07・SK08・SK09・SK10・SK13実測図　S=1/30

SK09(第 26 図)

4N で SK08 に切られる状態で検出した。平面形は不整形をなし、長径 1.10m以上、短径 0.78m、深さ 0.16mを測る浅めの土坑で、埋土は明るい褐色土であった。埋土中から磁器片、スラグを検出している。

SK10(第 26 図)

30・3P を跨ぐ位置に所在し、平面形は不整形で、長径 1.80m、短径 1.40m、深さ 0.31mを測る。埋土は砂粒を多く含む褐色土で、埋土中に 10 cm以下の川石を 7 個含んでいた。遺物はなく、時期不詳である。

SK13(第 26 図)

5P に位置し、平面形不整五角形で、長径が 0.67m、短径 0.50m、深さ 0.28mを測る。埋土は明るい茶砂質土で、遺物は含まれていなかった。

SK11(第 27 図)

30・40・3P・4P に跨るように位置し、不整な卵形状をなし、長径 2.24m、短径 1.84m、深さ 0.14mを測る浅い土坑である。砂粒を多く含む褐色土の埋土で、土坑中央部表面に大きいもので 40 cm以下の川石で、平面を上に意識的に集積した部分を確認した。遺物は石と埋土の間から須恵器甕片、陶磁器片を検出している。平面的に SK11 の中央集石部は SB02 のプラン上に位置し、土坑断面からは確認できなかったが、柱穴が存在してもおかしくない箇所である。

SK12(第 27 図)

5N に位置し、南東側はトレンチにより消失している。平面形は方形をなすものだろうか。長径 2.60m、短径 1.60m以上、深さ 0.42mを測る。トレンチ側に 40 cmの角礫以下数個の川石が集中する部分がある。埋土は灰色の砂質土で、土中から土師器の糸切底片が出土している。

土器群 1(第 28 図)

4E・5E を跨いで位置し、堀込み等は認められなかったが、土器片の集中する箇所が確認されたため遺構として処理した。ほとんどの破片が甑 32-49 と接合し、もともと遠くない位置、若しくはその場で使用していたことも考えられる。

土器群 1 出土遺物(第 32 図 49)

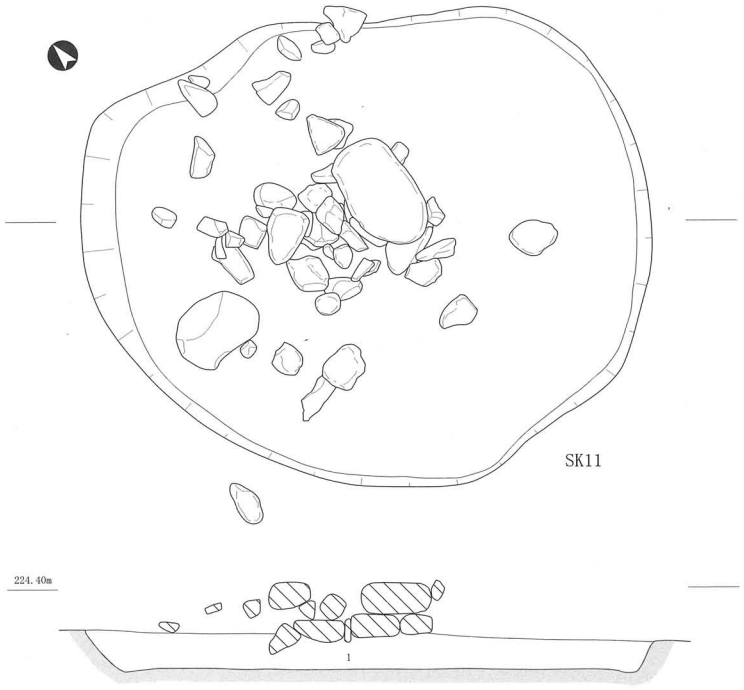
32-49 は土師器甑の把手以下底部までの破片で、残存部分は僅かであるが反転復元により図化している。底径は 10.5 cmで残存破片では底部直上の孔は確認できなかった。内面はナデ、外面はナデとハケメ(特に把手部分が集中的)調整である。

以上が 3 層上面遺構である。

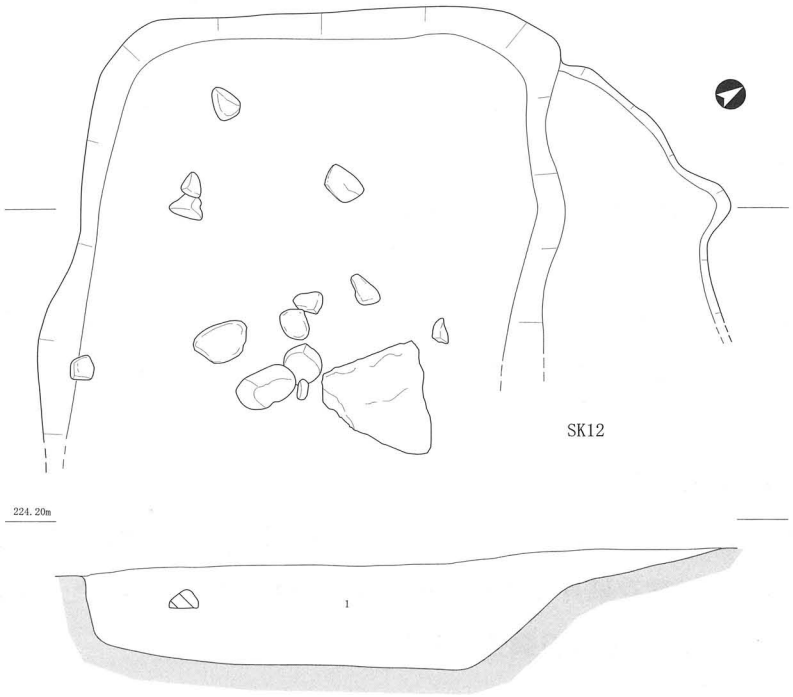
次いで 3 層中～下層で検出したのが SG01 である。

SG01(第 35・36 図)

結果的に 3 層中～下層から検出した遺構で、31・41・3M・4M を跨いで位置し、第 36 図朱描きが掘り方で、平面形南北に長い不整長円形状をなし、長径 7.45m、短径 6.37m、深さ 1.40m、



1.やや明るい褐色土・暗褐色土（ごく少量のブロックと、
1cm以下の砂粒を多く含む）



1.灰褐色砂質土

0　1m

S=1/30

第27図 SK11・SK12実測図 S=1/30

第28図 土器群1実測図　S=1/10

平面積 38.6 ㎡を測る。そこに黒褐色土を埋込み川石で石垣状に石を積んだ状態で検出した。図35にあるように周辺にはかつての河原跡があり、掘下げていくうちにそこに到達してしまい、人工的な集石部分と自然のものとの違いを確認しづらかった。人工的な部分は図で網掛けしてある箇所である。もともと自然の産物を利用してできていた遺構なのかもしれない。円形に囲まれた石垣状の構造を復元できることから、池状の遺構、または水溜という性格も考えられる。掘り方直上の土で年代測定をした結果、14世紀中頃の数値を得た。出土土器からは中世後半まで遺構が機能していたとも考えられる。

SG01 出土遺物(第37図)

遺物は、石垣部分と1層の狭間からのもの、埋土中のものがあるが、厳密な区分はできなかった。流れ込みであろう37-1は弥生末～古墳初の甕の肩部である。口縁部欠損のため詳細は不明である。外面にノの字の連続刺突を行なうが、風化による摩滅が著しく工具は不明である。2 も流れ込みによるものと考えられる土師器甑の把手である。当地では上方へくの字に曲るものが多く、短く屈曲しないものは珍しい。3は16世紀前半の中国製の磁器[※2]で、高台径は5.7㎝であった。内外面には青花文を染付けるものである。4は土師質土器で外面口縁部に2条の細い沈線を行ない、その間にやや角張る渦巻文をスタンプするもので、非常に細やかな緻密な作りである。中世の香炉か火鉢であろう。類似品はいろいろな遺跡で見つかっているが、近隣の事例では当教育委員会が行なった円満寺遺跡からも出土している。5 は外面の腰部、内面の口縁部まで緑色の釉薬が施釉される陶器で底部には重ね焼き時の粘土が付着している。

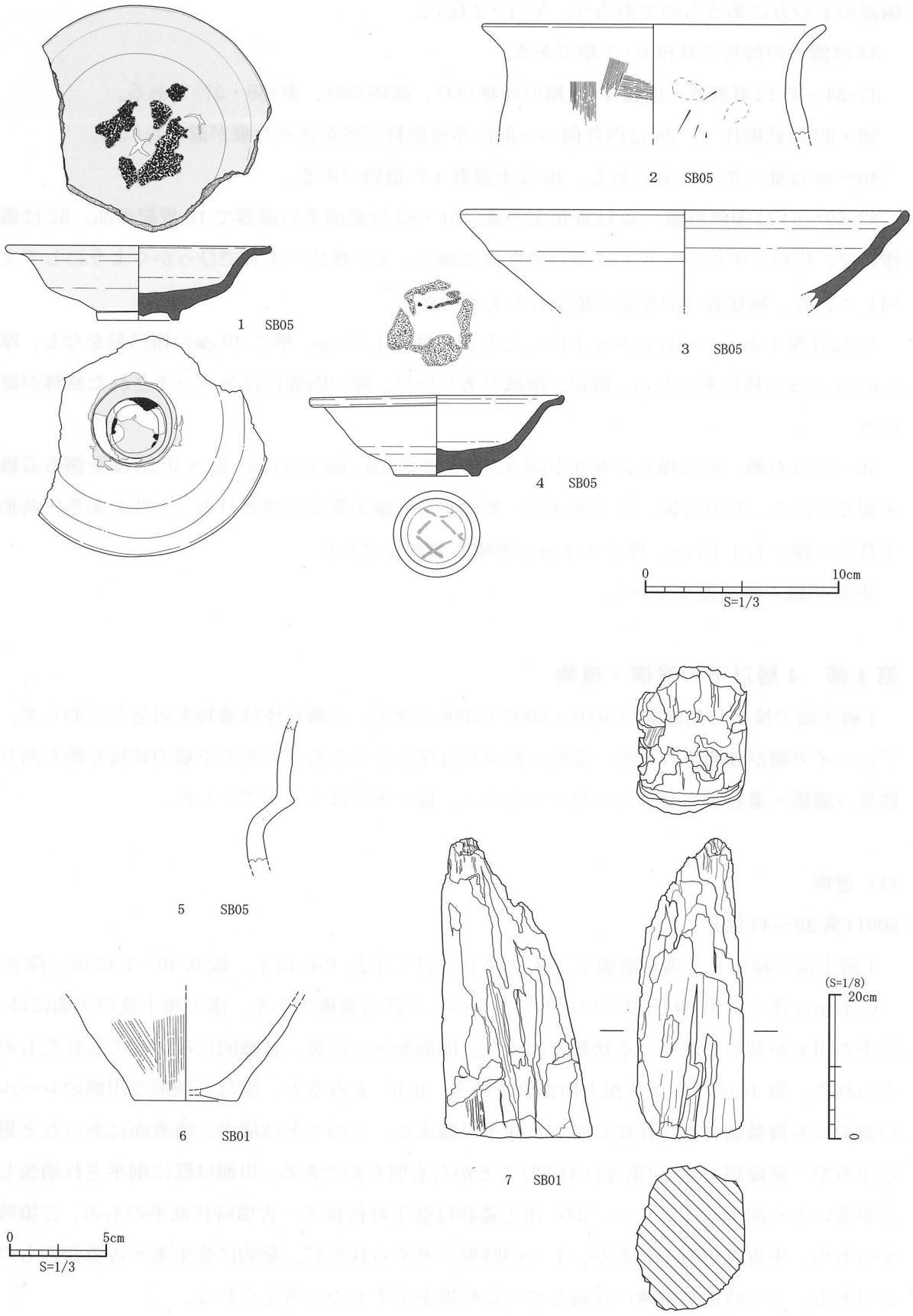
(2) 3層出土遺物(第30・31・32・33図)

30-1～3はⅣ-2様式のもの。1・2は甕で、1は端部に2条の凹線を施し内面頚部以下ハケメ痕が残る。3 は高坏。口縁部はくの字に屈曲し、外面は凹線が摩滅しているのか浅いが、端部と張り出し部分に刻目を施し、赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。4 は漏斗状の器形で端部で強く外に曲がる高坏である。内外面とも赤色顔料塗布の痕跡がある。Ⅴ-1様式。5～10は複合口縁の甕で凹線、擬凹線が廻るものである。7 は大型の甕で内外面とも赤色顔料を塗布している。11は複合口縁部分に擬凹線が廻らないものであるが、作りは厚手でずんぐりした印象を受ける。12は大型甕の底部であろう。13は中期後半の高坏脚端であろうか。14は外面に2条の凹線が施されている。時期・器種不明。これら時期を示したもの以外はⅤ様式の範疇である。

31-15～25 は甕・壷類である。御崎遺跡出土遺物で最も多い遺物はこの時期のものである。甕は器壁の厚みは様々であるが、口縁部分の外への曲りや複合口縁部分の稜の横方向への突出具合は草田5～7期に収まるものである。22は甕の頚部、23は大型壷の口縁で短く直立する器形を有す。

27は高坏の坏脚の接合部分であろうか。台付き壷の脚部の可能性もある。

28～32は底部である。しっかりとした平底であり、胴部が丸く球体状にはならない、最大径が



第29図 SB05・SB01出土遺物実測図 S=1/3 S=1/8

胴部の上の方にあるものであろう。V-1・2様式。

33は器台の脚部で草田6・7期である。

32-34～37は須恵器。出雲4～5期の坏身(34)、高坏(35)、壷(36・37)である。

38・39は低脚坏で、38は内外面の一部に赤色顔料が塗布された痕が認められる。

40～49は甑の把手部分である。49は土器群1の遺物である。

33-50～54は陶磁器類。50は青花文の皿、51・53は肥前系の磁器で18世紀の品。52は備前の擂鉢で、時期は中世である。54は白磁櫛描文碗で、先が櫛状の工具でひっかくようにして文様を刻している。福建省の同安窯で焼かれたものである。[※3]

55は耳環である。切れ込みを上にしたときの縦が1.95㎝、横2.40㎝の楕円形をなし、厚さも0.6×0.5㎝の楕円形である。破損・摩滅が著しいが、環の内側には金メッキされた痕跡が認められる。

56・57は石器。56は僅かに基部が凹み、長さ2.55㎝、幅1.50㎝、厚さ0.25㎝を測る石鏃で、未製品である。安山岩製。57もサイズ・形状から石鏃未製品と思われる。丸味のある三角形をなす長さ・幅とも1.65㎝、厚さ0.4㎝の黒曜石製剥片である。

58は明銭の洪武通宝である。

第4節　4層以下の遺構・遺物

4層上面で検出した遺構がSD01・SD02・SD06である。4層自体は遺物を包含しておらず、その下にハイカ層が確認されたが、面的な拡がりは僅かにあるもののその下層の砂層を断ち割りした結果、遺構・遺物とも認められなかったので、掘り下げはここまでとした。

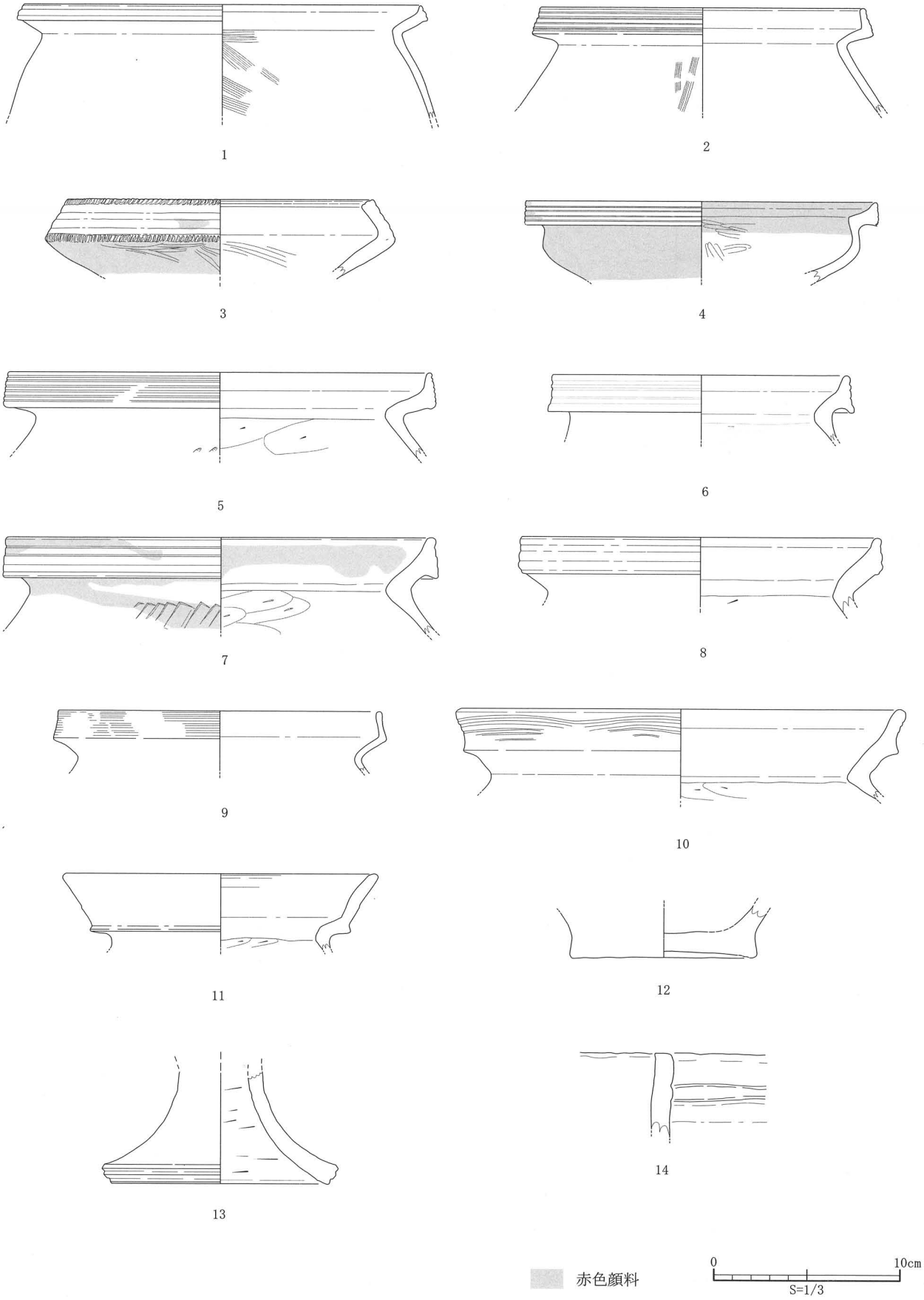
(1) 遺構

SD01(第39～44図)

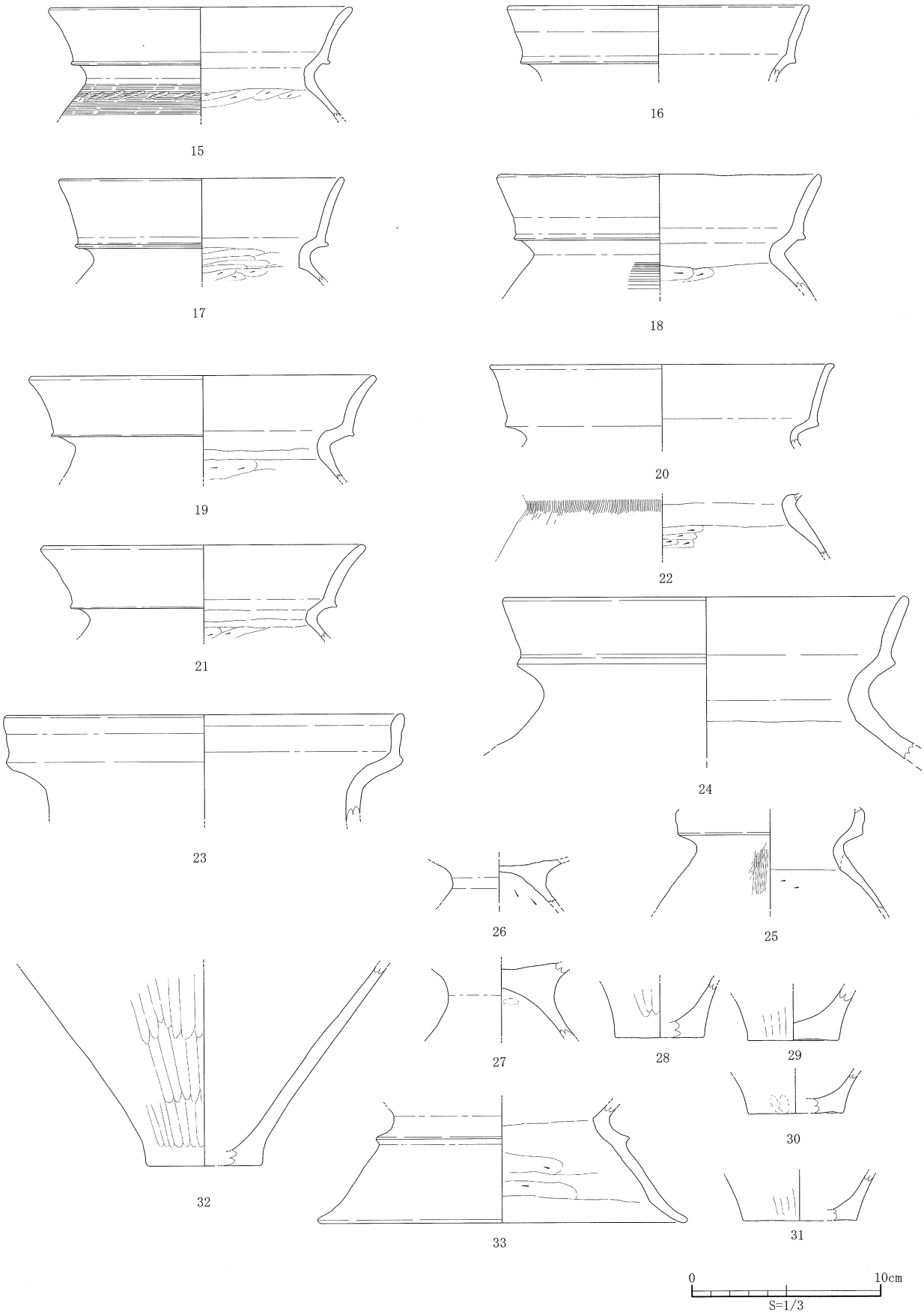
4層上面で検出した溝状遺構で、1K～5Cにかけて全長45m以上、幅0.40～1.62m、深さ0.10～0.32mを測る。第39図の下から上へとレベルが降る遺構である。溝の埋土及び表面には30㎝以下の川石が詰められている状態であった。機能を失った後、意識的に埋め立てられたものと考えられる。第44図は完堀状況と断面図である。B-B′をみると、溝は元地形で川側のレベルの低い部分にも複数切合って存在していた様子が窺える。このことは溝内、溝表面にあったと思われる川石が二筋確認できる(第40・41図)ことからも明らかである。川側は既に削平され消失した部分が多いため図示していない。SD01出土遺物は弥生時代後半～古墳時代前半のもの、古墳時代後半のもの、中近世のものがあり、3つの時期が考えられるが、量的に弥生末～古墳初のものが中心である。この時期が遺構の存続していた時期を示すものと考えられる。

SD01出土遺物(第49～53図)

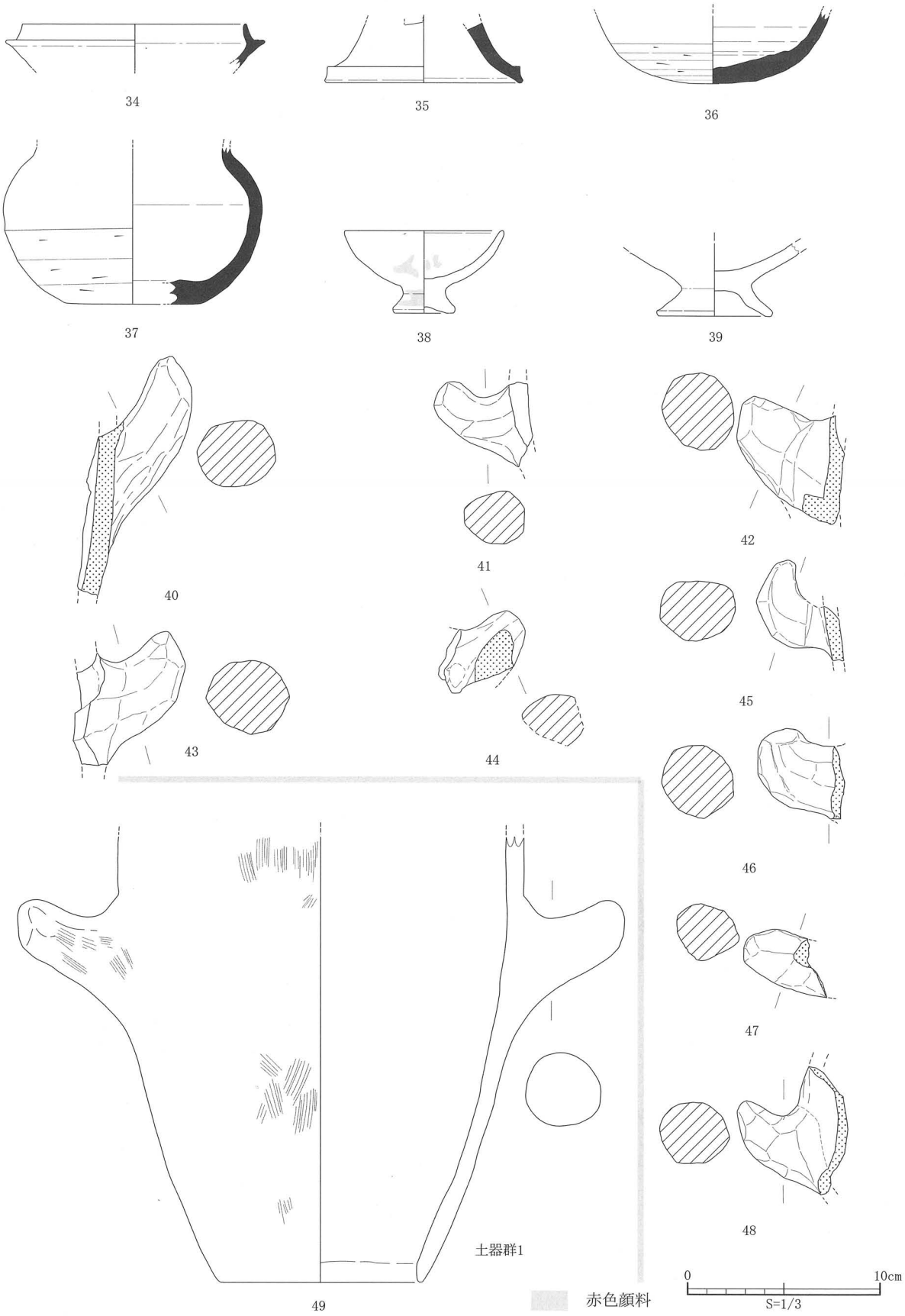
49-1は縄文粗製土器の底部で、底径5.3㎝でやや上げ底である。内外面ナデ調整を行なう。49-2



第30図 1区3層出土遺物(1) S=1/3

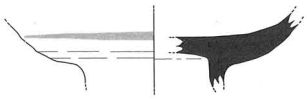


第31図　Ⅰ区3層出土遺物実測図(2)　S=1/3



第32図Ⅰ区３層土器群1出土遺物実測図(3)　S=1/3

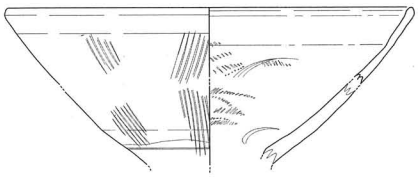
50



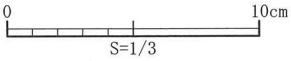
51

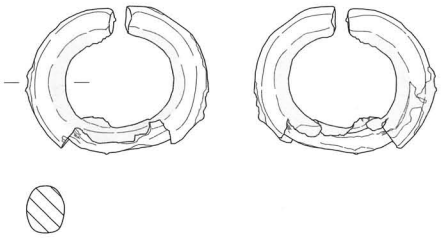
52

53

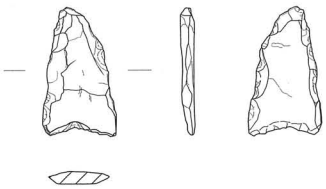


54



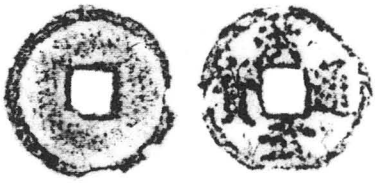


55

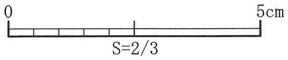


56

57

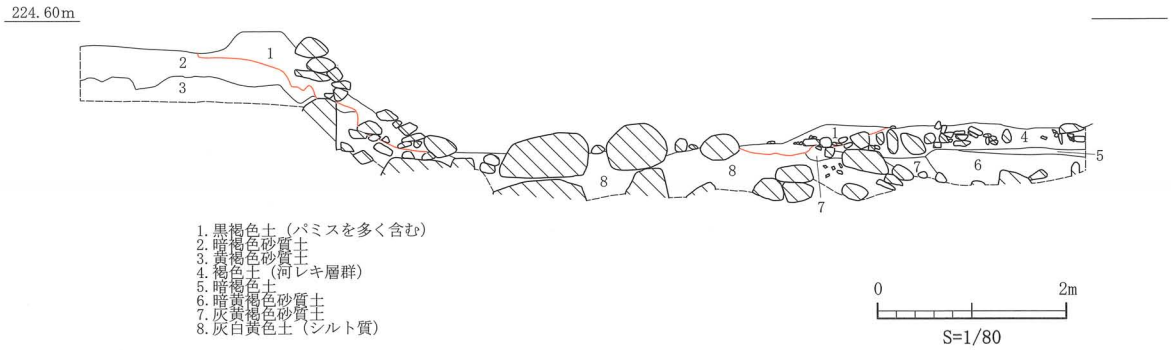


58



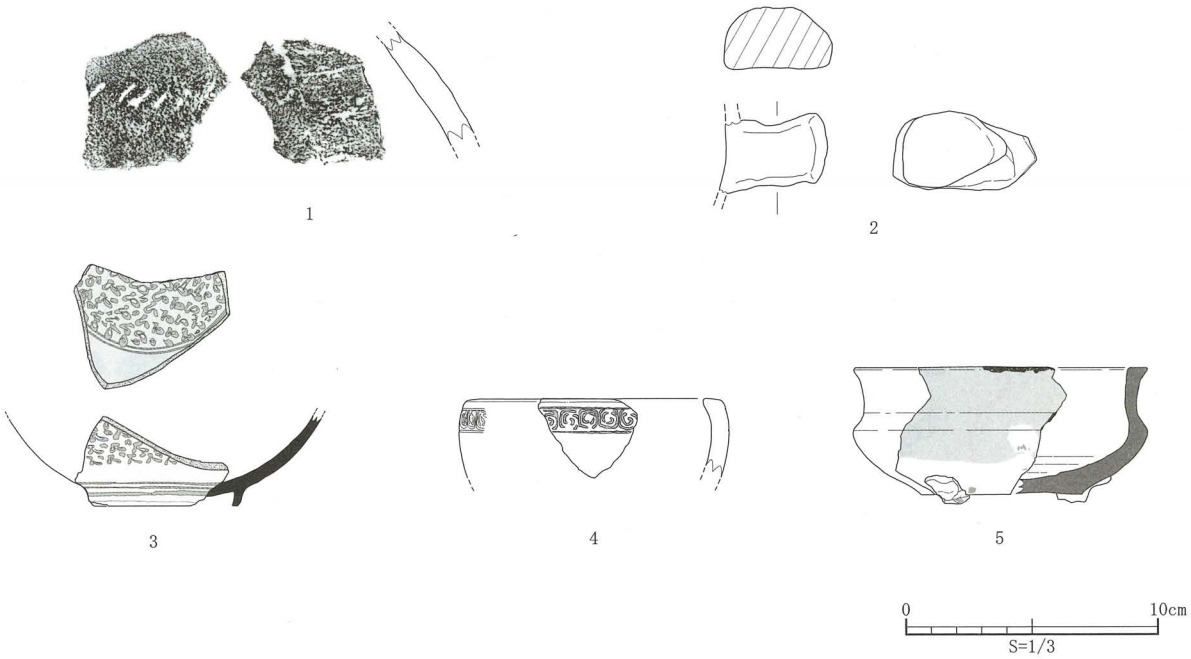
第33図　Ⅰ区3層出土遺物実測図(4)　S=1/3 S=1/1 S=2/3

第34図　Ⅰ区3層中層～下層遺構配置図　S=1/600

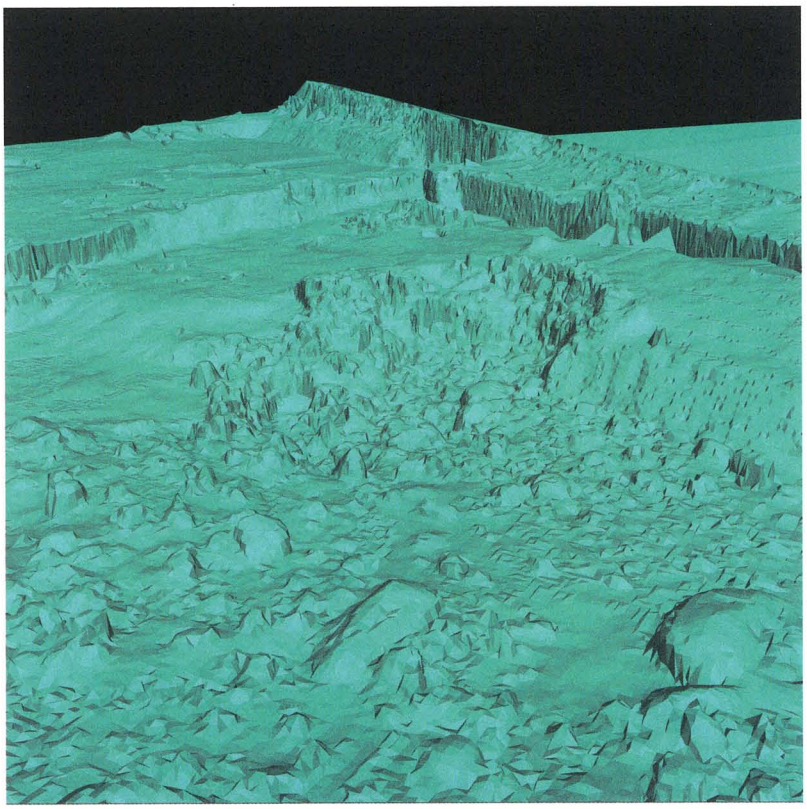


第35図 SG01・川原石実測図 平面図 S=1/150　断面図 S=1/80

第36図 SG01実測図　S=1/60

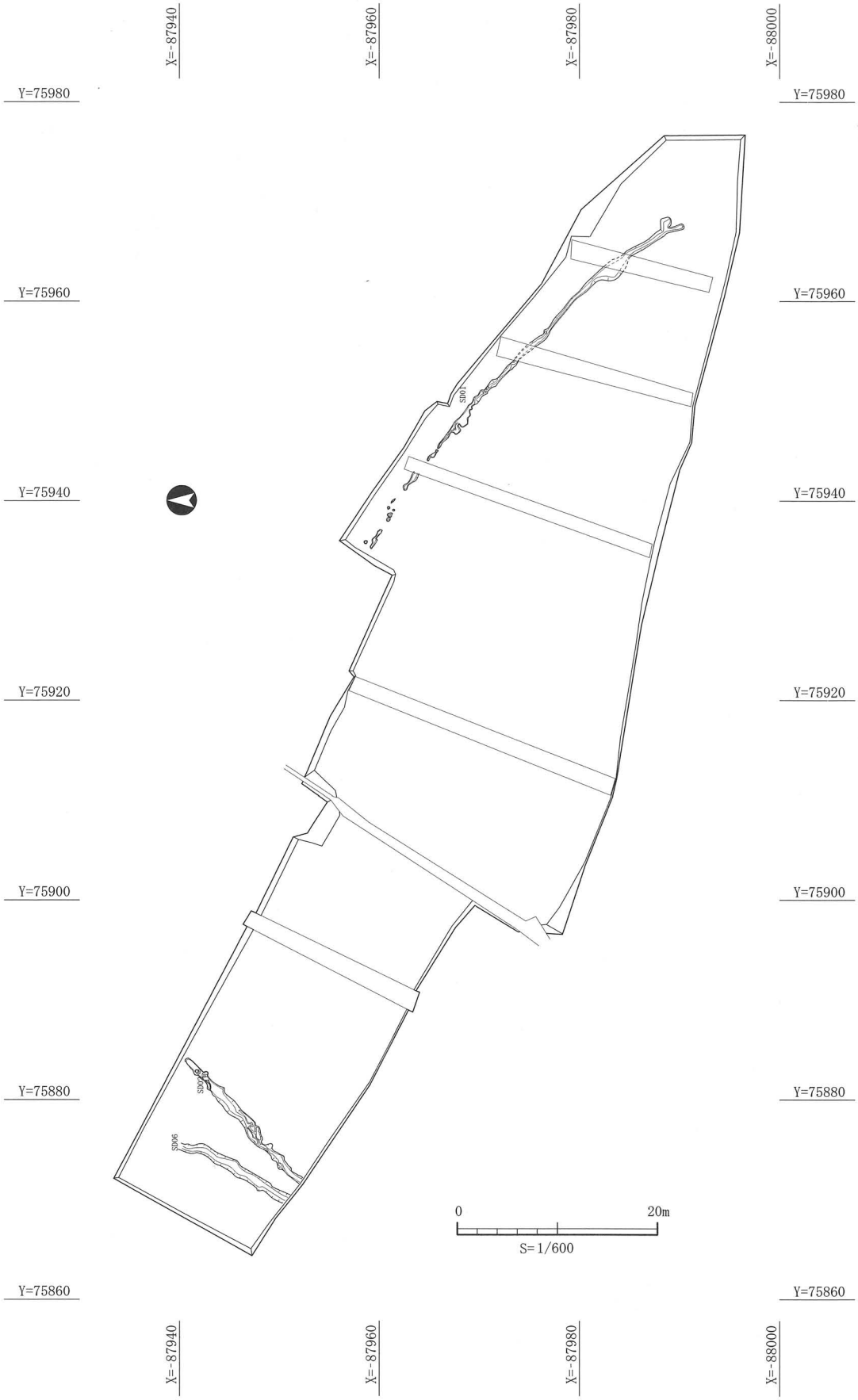


第37図 SG01出土遺物実測図　S=1/3

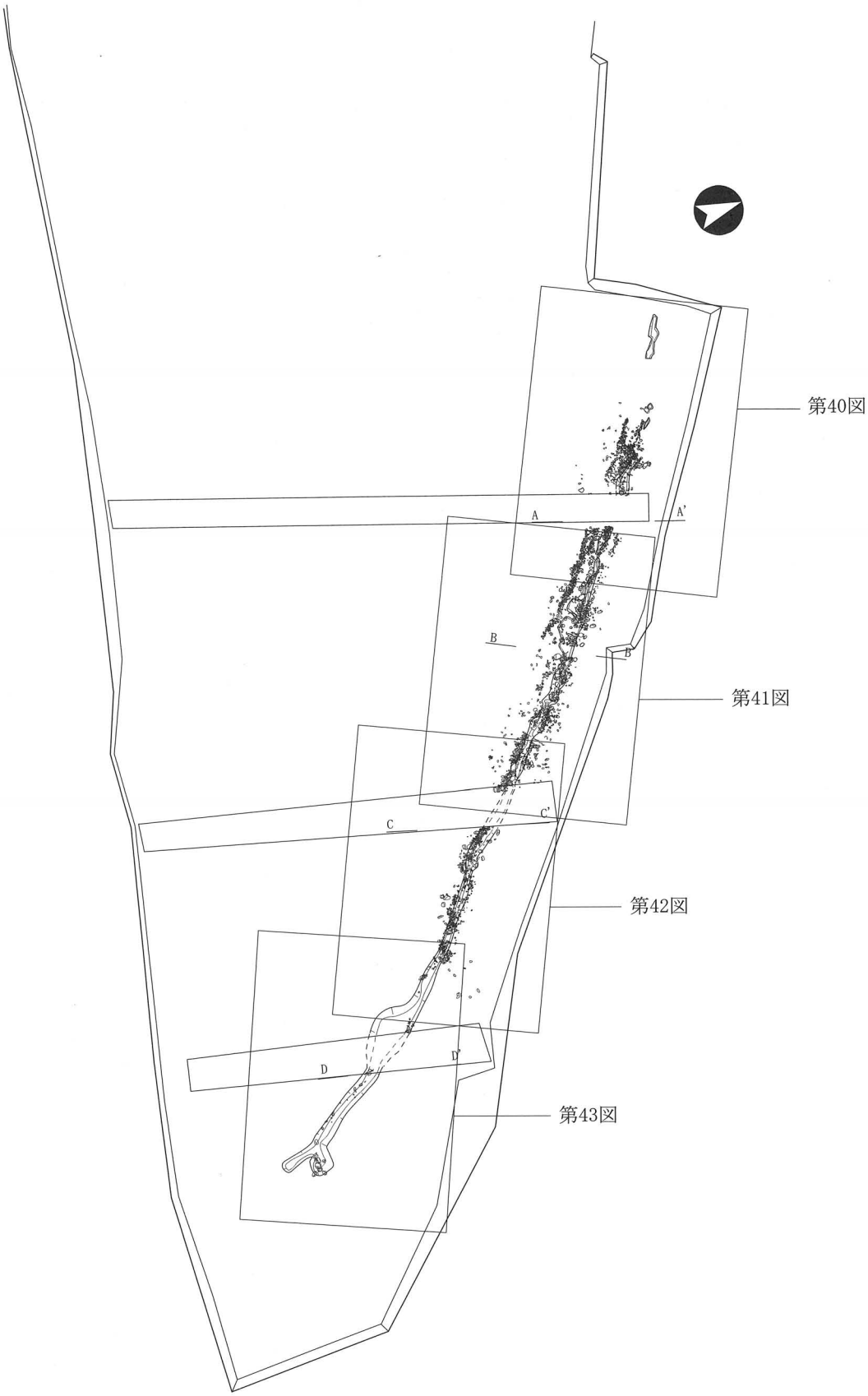


SG01 完掘状況（東南東より）

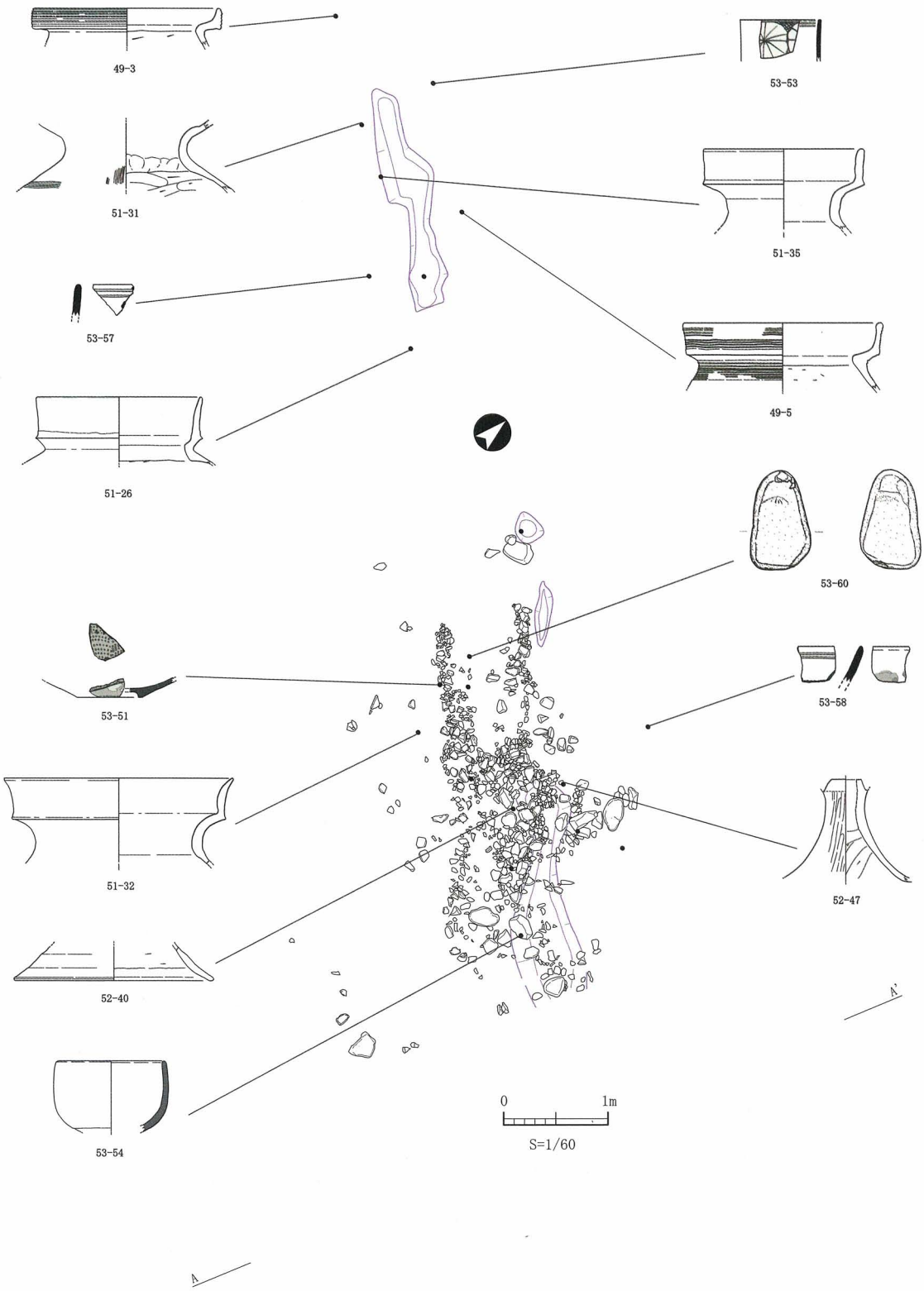
3D 画像 (1)



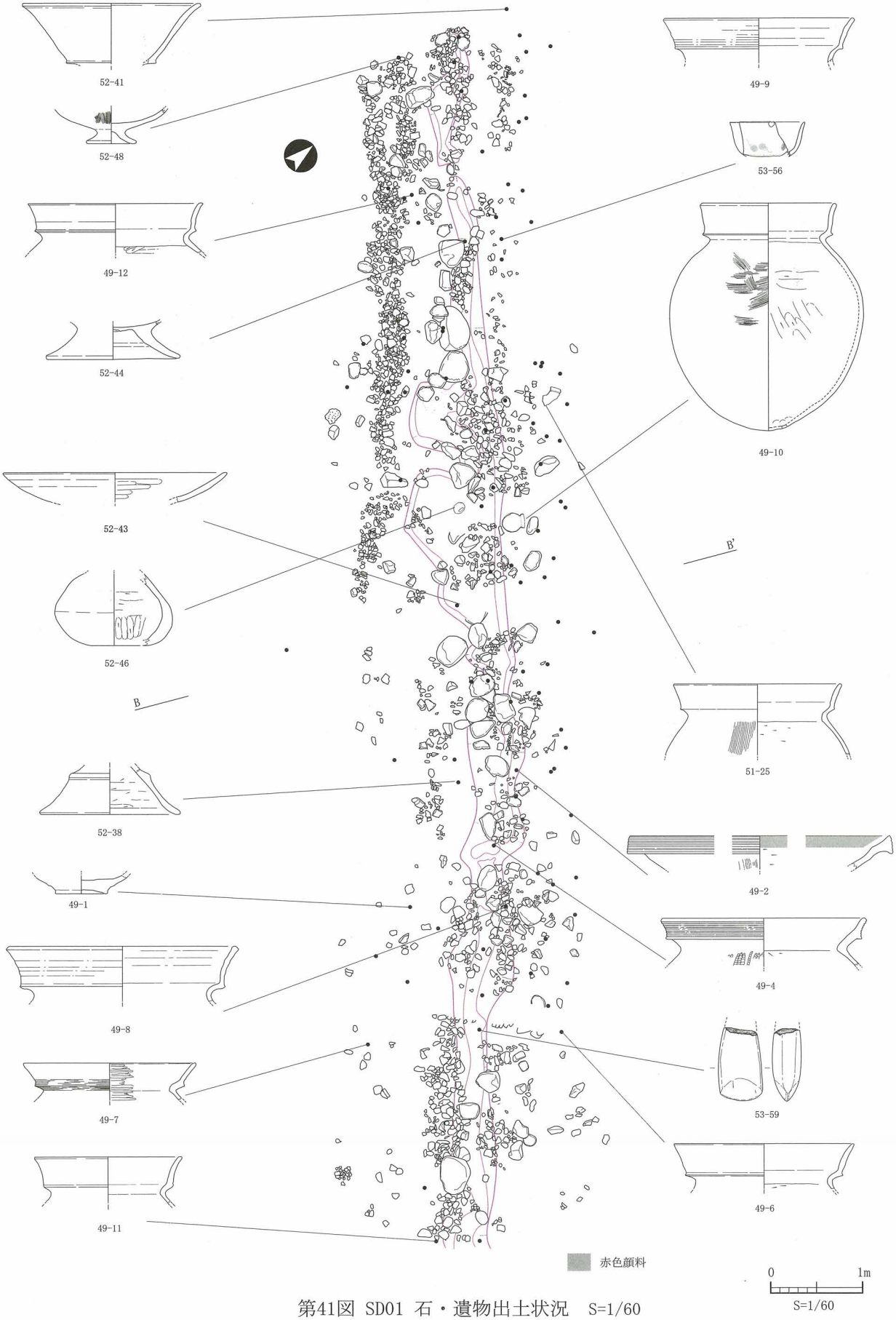
第38図　Ⅰ区4層遺構配置図　S=1/600



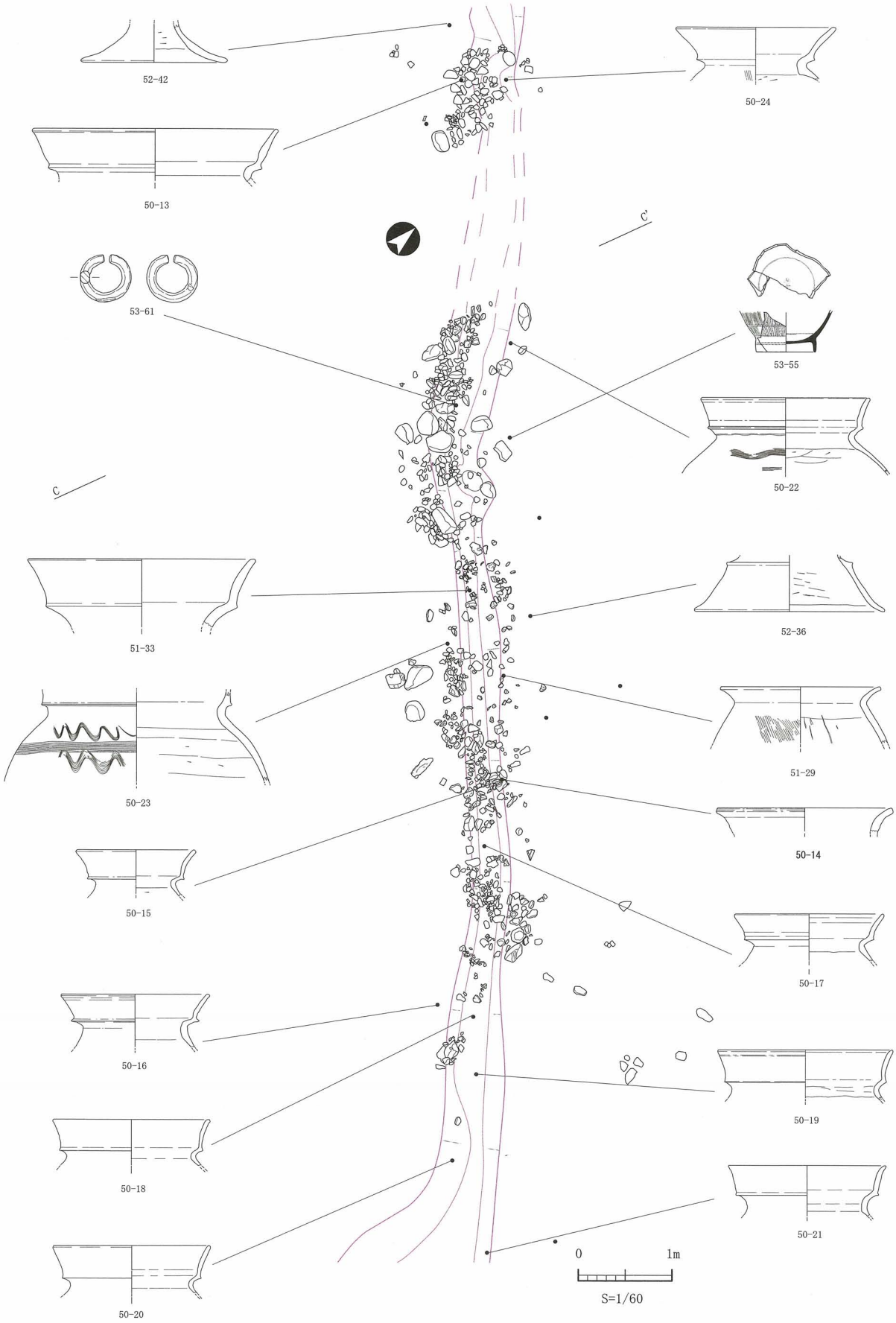
第39図 SD01遺構挿図図割



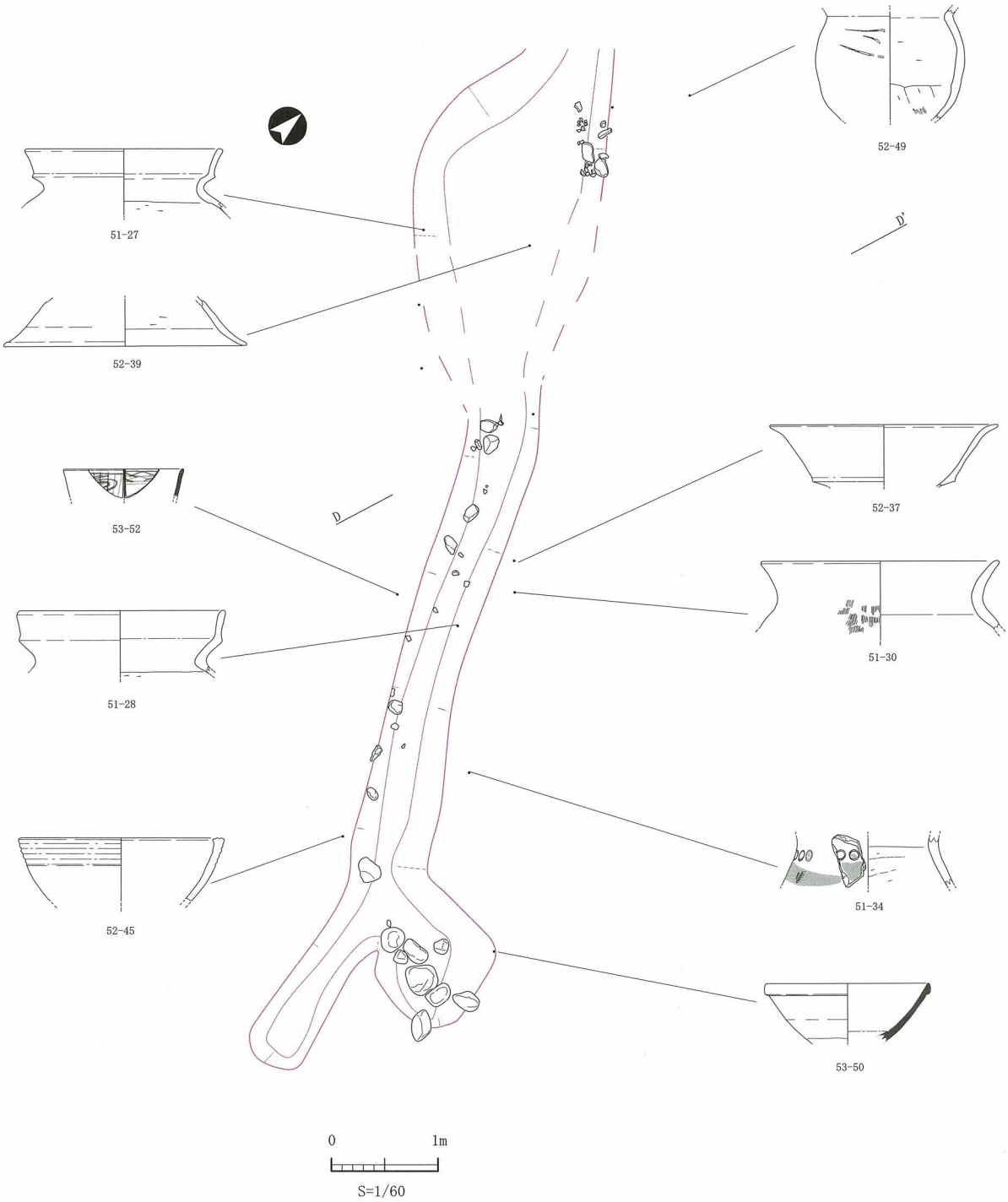
第40図 SD01石・遺物出土状況　S=1/60



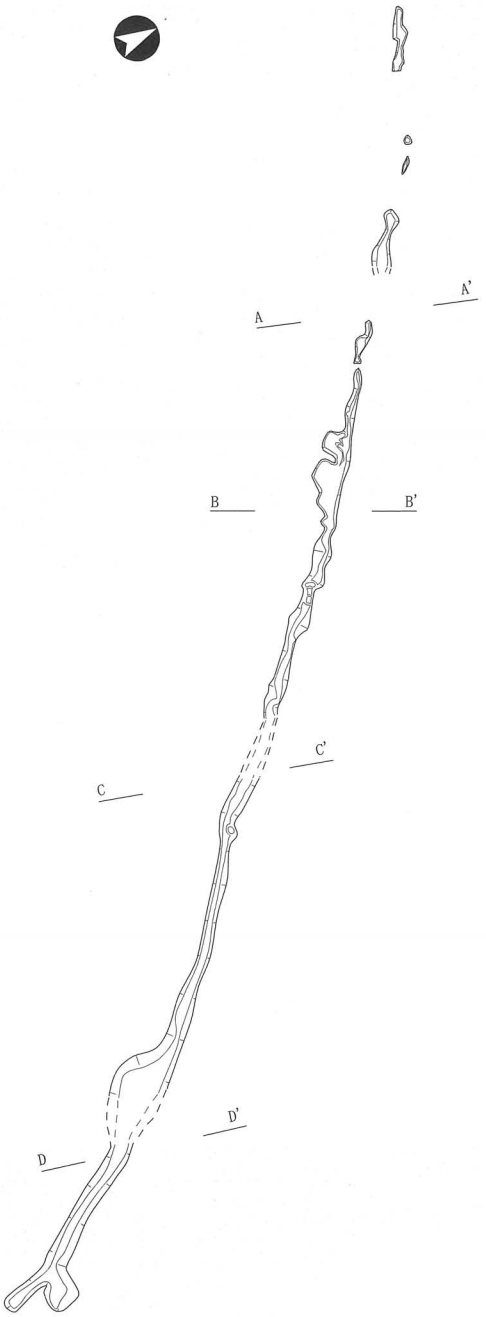
第41図 SD01 石・遺物出土状況 S=1/60

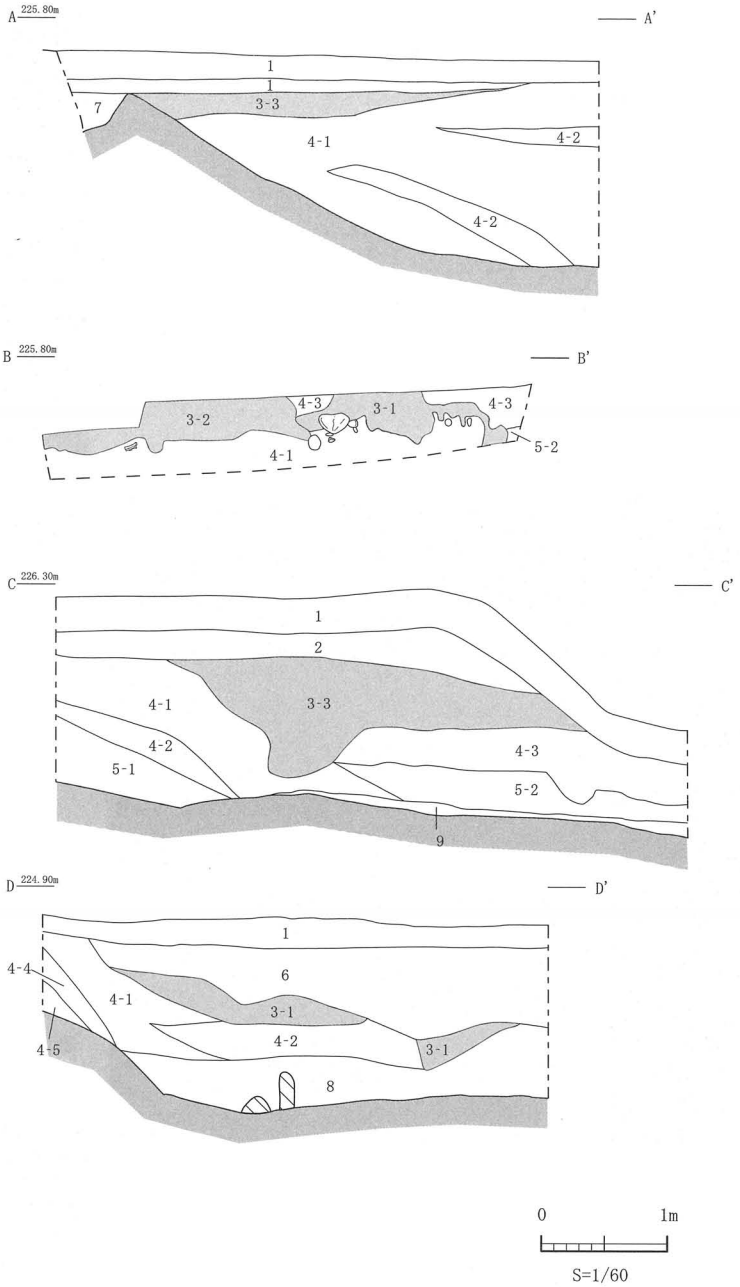


第42図 SD01 石・遺物出土状況　S=1/60



第43図 SD01石・遺物出土状況　S=1/60



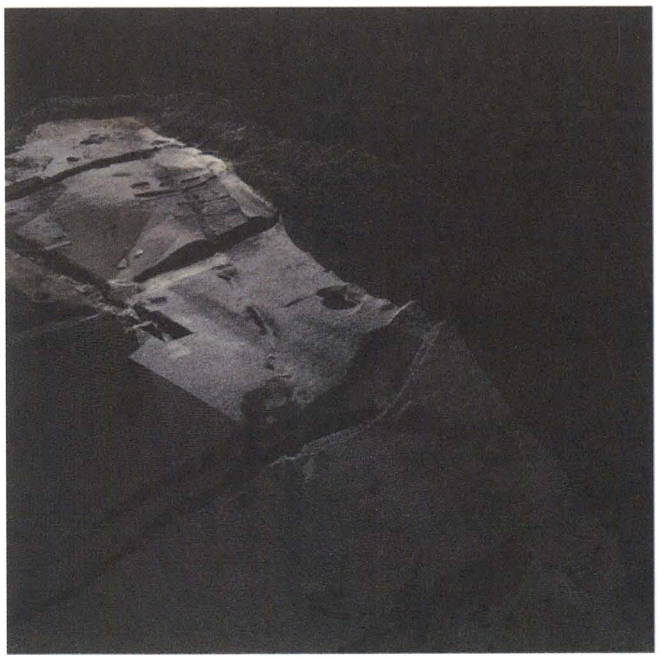


1. 暗褐色土（耕作土）
2. 黒褐色土（耕作土）
3-1. 暗褐色砂質土（パミス・地山ブロックを含む）
3-2. 淡黄褐色砂質土（小～大レキを含む）
3-3. 黒褐色砂質土（地山ブロックを含む）
4-1. 黒褐色土（やや粘質土）
4-2. やや明るい黒褐色土
4-3. 黒褐色砂質土
4-4. 黒褐色土～黒色土
4-5. 黒色土～濃黒色土
5-1. 黒色砂質土
5-2. やや明るい黒色土砂質土
6. 褐色土（遺物包含層・流れ込み土）
7. 黒褐色粘質土（SB01-P2）
8. 黄褐色土～灰褐色砂質土
9. 灰褐色粘質土（ハイカ層）

第44図 SD01実測図 平面図 S=1/250 断面図 S=1/60

*3D*画像(2)

SD01完掘状況(西から)



SD01完掘状況(南東から)

SD01完掘状況(南東から)

～52-49 は弥生時代後半～古墳時代前半の遺物である。2～5 は複合口縁部に擬凹線が廻るものである。2は口径は不明であるが、口縁直下で弱くアクセントがつき、やや深めになる高坏の坏部で内面のアクセントまでの箇所に赤色顔料を塗布している。V-1 様式か。3～5 は何れも甕でV-1・2 様式のものである。7 はかなり外に開く器形で複合口縁の突出部付近に細かい条痕が入る。49-6・8～52-49 は草田 5～7 期を中心とする土器である。詳細は遺物観察表をみていただきたい。

53-50～58 は陶磁器である。50 中国製白磁の碗で口径 15.6 cmである。平安末の時期が当てられる。51 は地元産の擂鉢。52・53・58 は九州系の磁器。54 は布志名焼きのぼてぼて茶碗である。55 は広東省の 19 世紀の碗で、56 は現代の品、57 は 18 世紀の陶胎染付碗である。

59・60 は石器。59 は磨製石斧で砂岩製である。表面の一部に磨痕が確認される。基部が欠損している。60 は砂岩製の石錘で、打欠きタイプのものだが打欠き自体は僅かである。

61 は耳環で装着部を上にすると、縦が 1.7 cm、幅 1.8 cmと横に膨らむ楕円形をなす。出土時にすでに錆化が著しい状態であった。

SD02(第 45・46 図)

4 層上面で検出した遺構で、2V・3V・3W・4W・5W に位置し、調査区の南北両壁にもその痕跡を確認している。規模は長さ 16.5m以上、幅 0.70～1.43m、検出面からの深さが 0.45mであった。北(山)側から南(川)側へと降る遺構で、埋土は褐色砂質土に真砂が混じるものでその中には 30 cm以下の川石を含む。SD として調査を行ったが、性格的には自然流路跡の可能性も否定できない。出土遺物は弥生土器、石器、土師器、須恵器等である。

SD02 出土遺物(第 54・55 図)

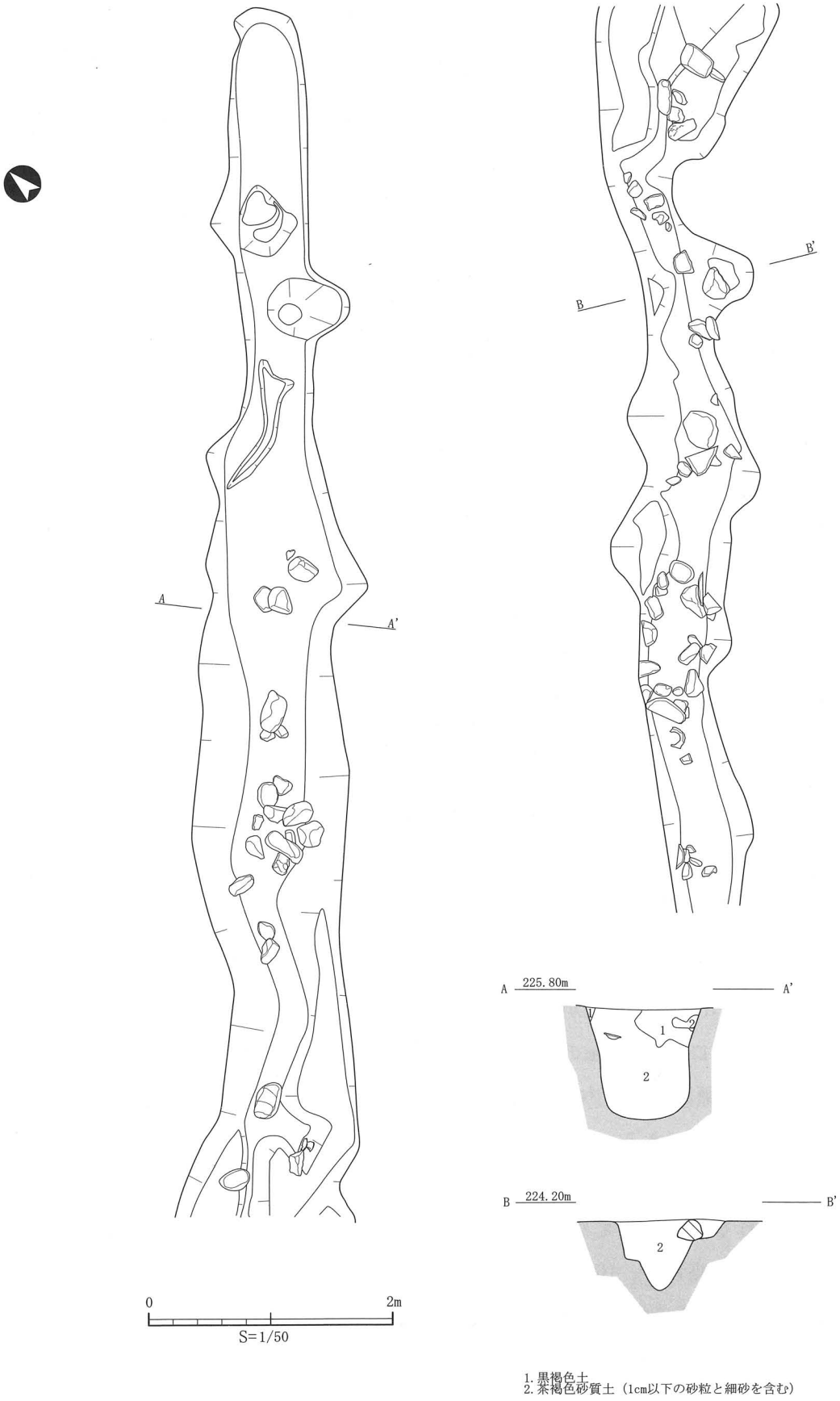
54-1 は弥生の壷で口径 18.4 cmを測る。頸部で括れ、短く直立、外傾し、強く屈曲し内傾する器形で、備後系のⅣ様式の影響が窺える。2・3 は弥生の甕片で擬凹線が廻る。2 は口径 17.2 cm、3 は 24.8 cmで、3 は擬凹線を一部ナデ消している。4 は非常に小型で口径 14.7 cm、擬凹線は廻らない。草田 6 期か。5 は複合口縁が退化してきたもの。6 は単純口縁の甕で口径 18.2 cmである。7 は口縁部が外反する口径 25.1 cmの鉢形の土器である。8 は口径 13.9 cmの直口壷で、草田 6 期。9 は口径 13.3 cmの土師器坏で、内面には放射状に暗文が入る律令的期の品である。10 は土師器の低脚坏。弥生甕の底部である。

55-12～18 は須恵器である。12～14 は坏身で、口径 10.8 cmを測る。12 は坏内面に川の字状にヘラ記号が見られる。12 はかえりが短く、13・14 はやや長い。15 は坏蓋で口径 13.6 cm、器高 3.5 cmを測る。16・17 は高坏で、16 は 2 方透かしで、一方が三角、もう一方が線刻のみであった。18 は口径 14.0 cmを測る甕である。須恵器は何れも出雲 4・5 期のものである。

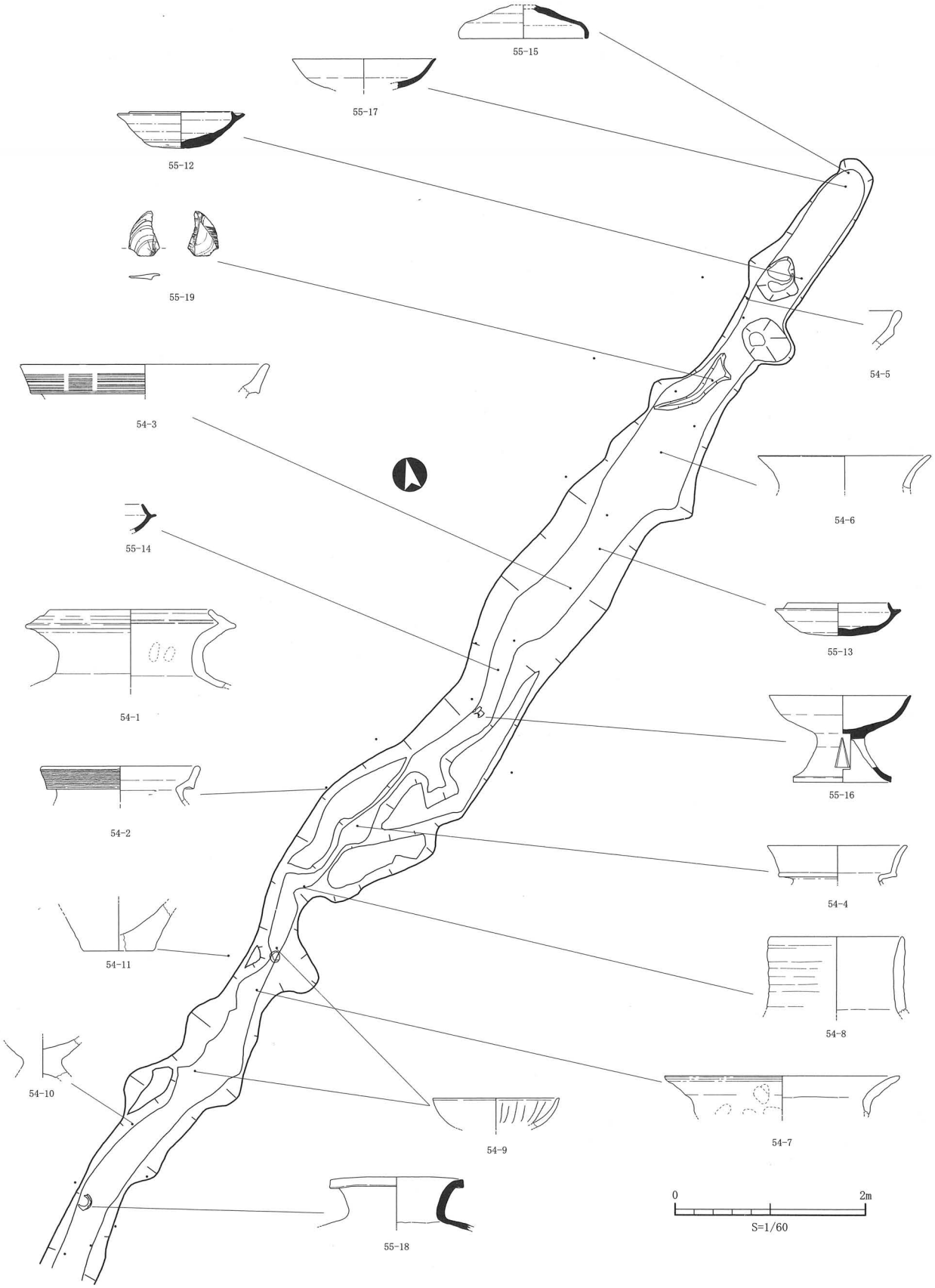
19 は黒曜石の剥片である。

SD06(第 47・48 図)

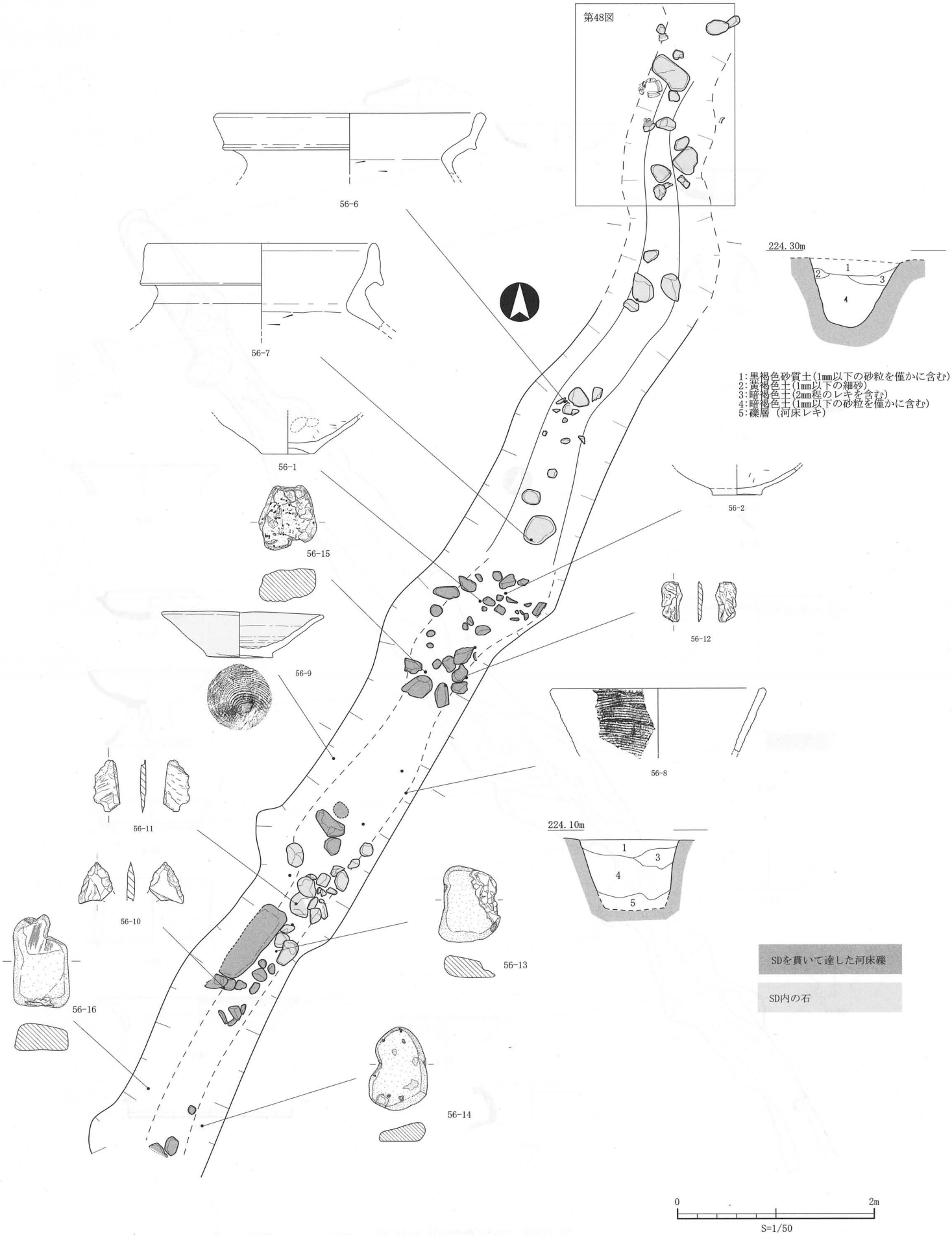
4 層上面で検出した遺構で、2W・3W・2X・3X・4X に位置し、SD02 の北西に所在する。長さ 17.5 m以上、幅 0.90～1.20m、深さ 0.70mを測る。SD02 同様、調査区を縦断し、調査区の北壁から



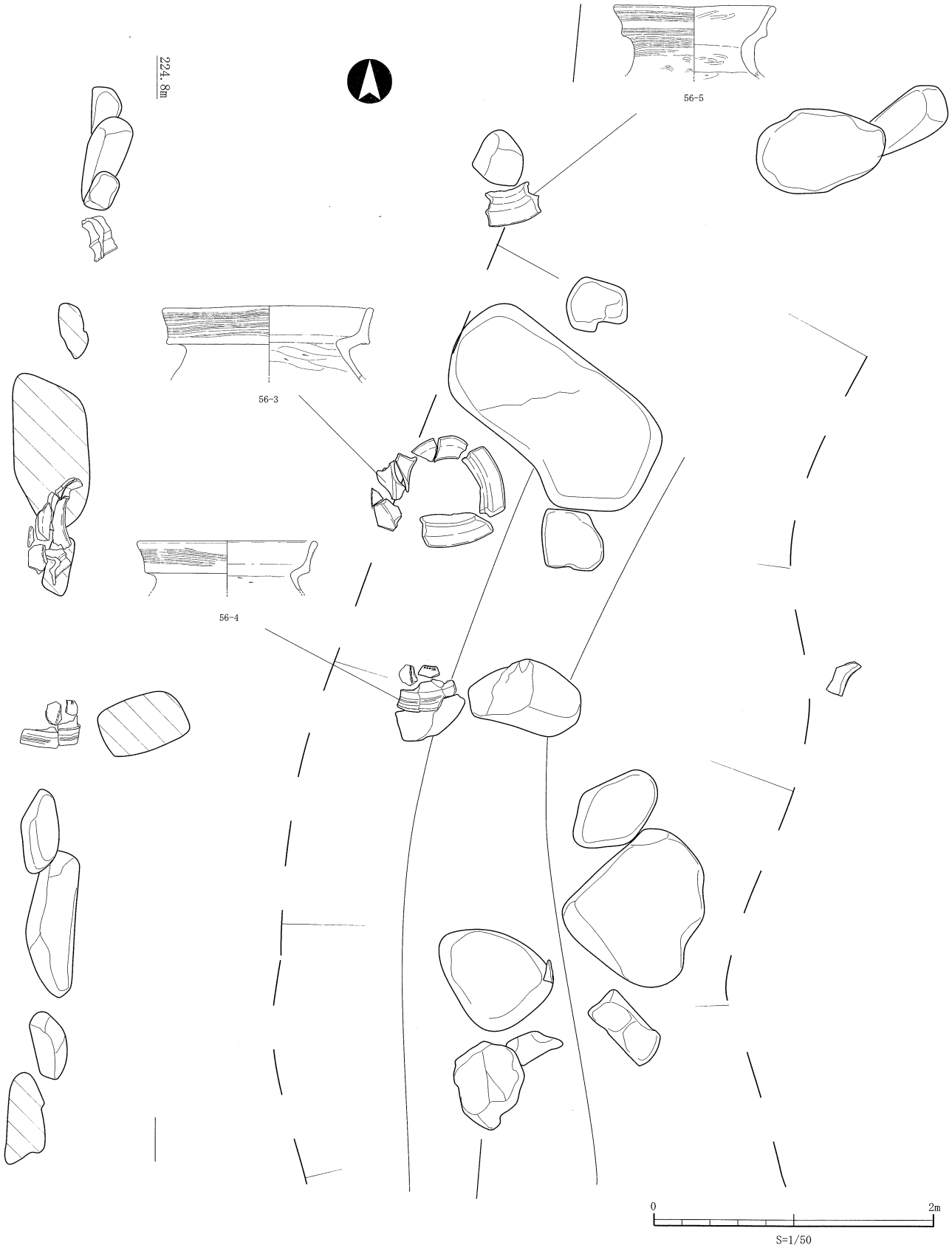
第45図　SD02実測図　S=1/50



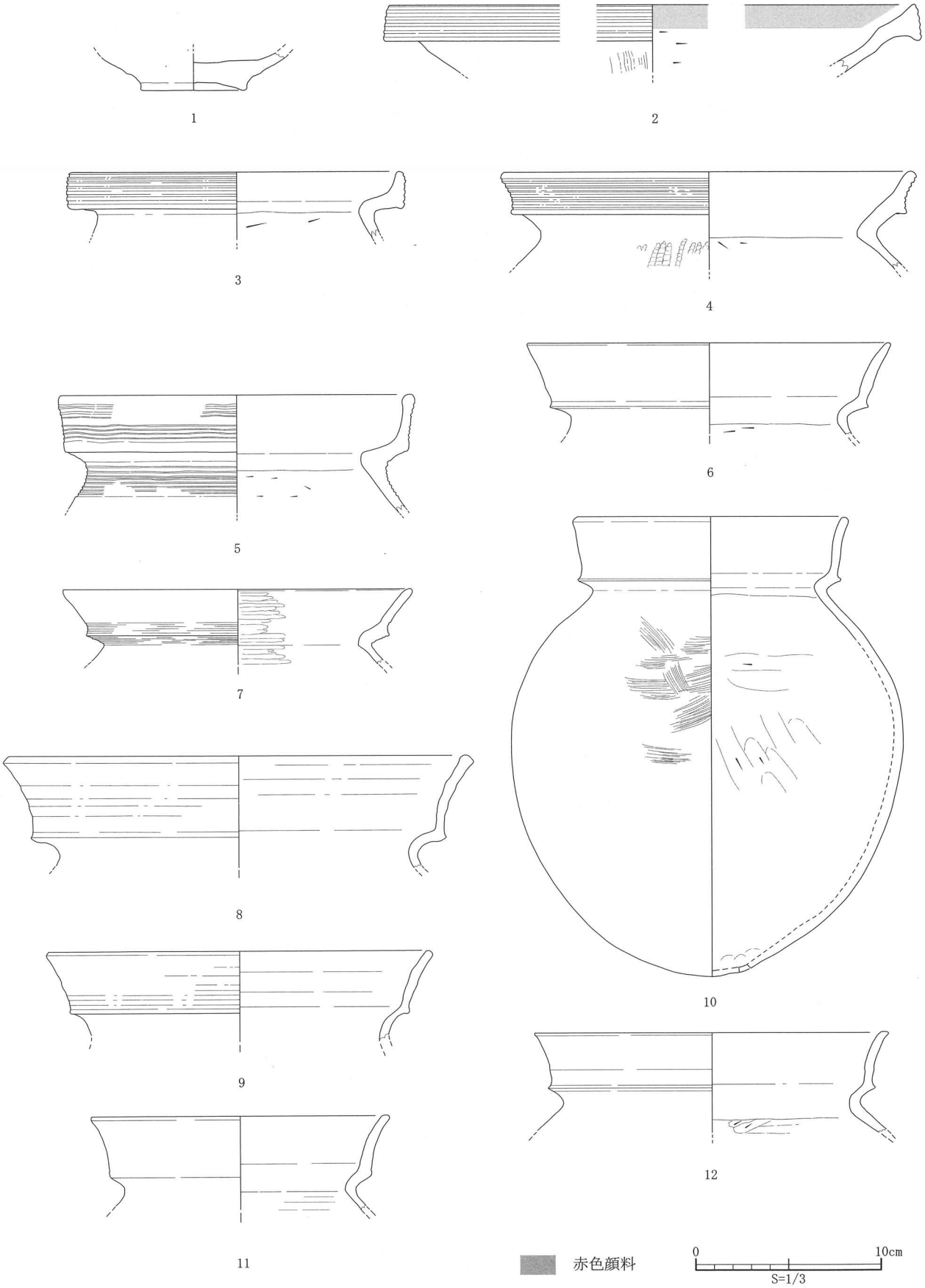
第46図 SD02遺物出土状況　遺構 S=1/60　遺物 S=1/6



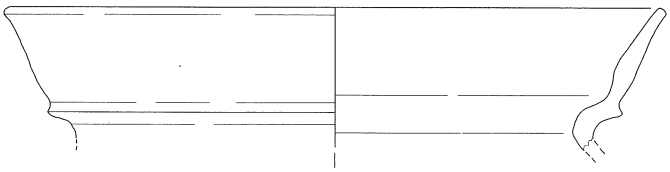
第47図 SD06実測図・遺物出土状況(1) S=1/50



第48図 SD06遺物出土状況(2) S=1/10



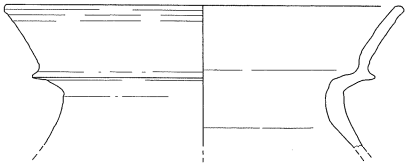
第49図 SD01出土遺物実測図(1)　S=1/3



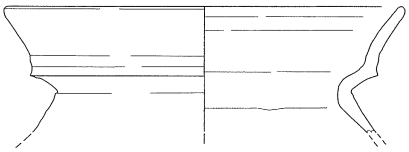
13

14

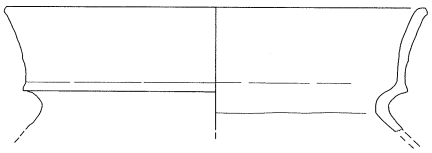
15



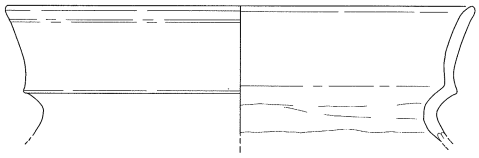
16



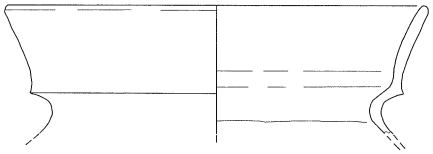
17



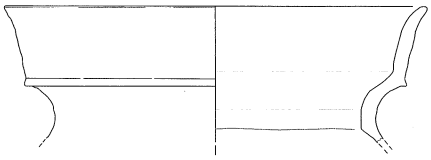
18



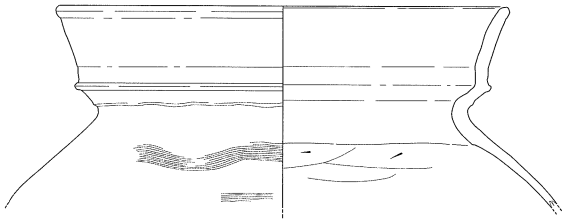
19



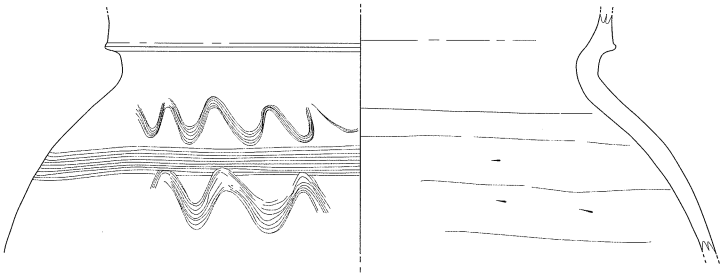
20



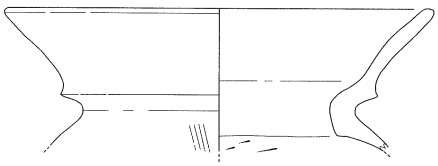
21



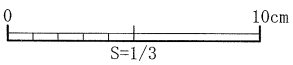
22



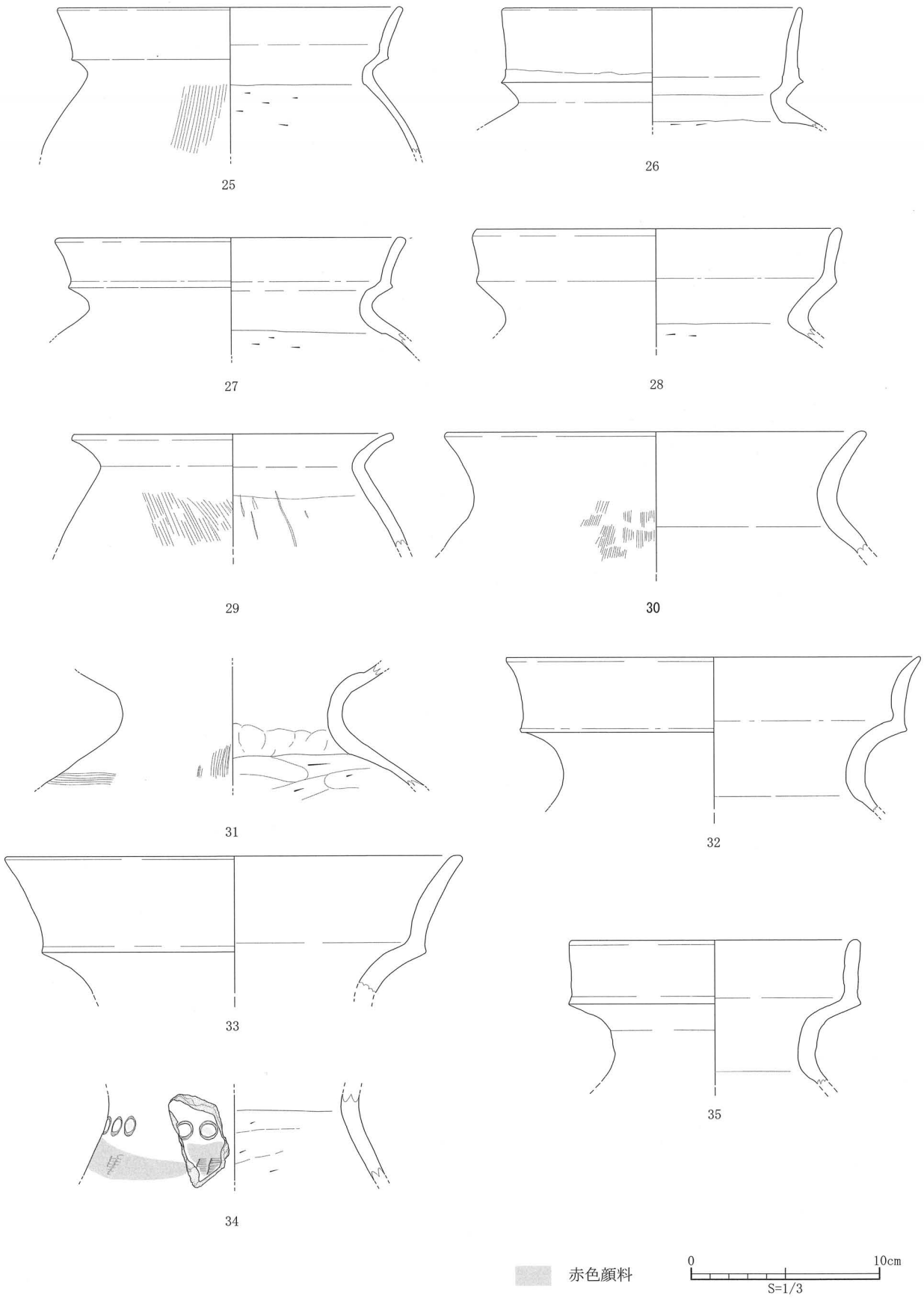
23



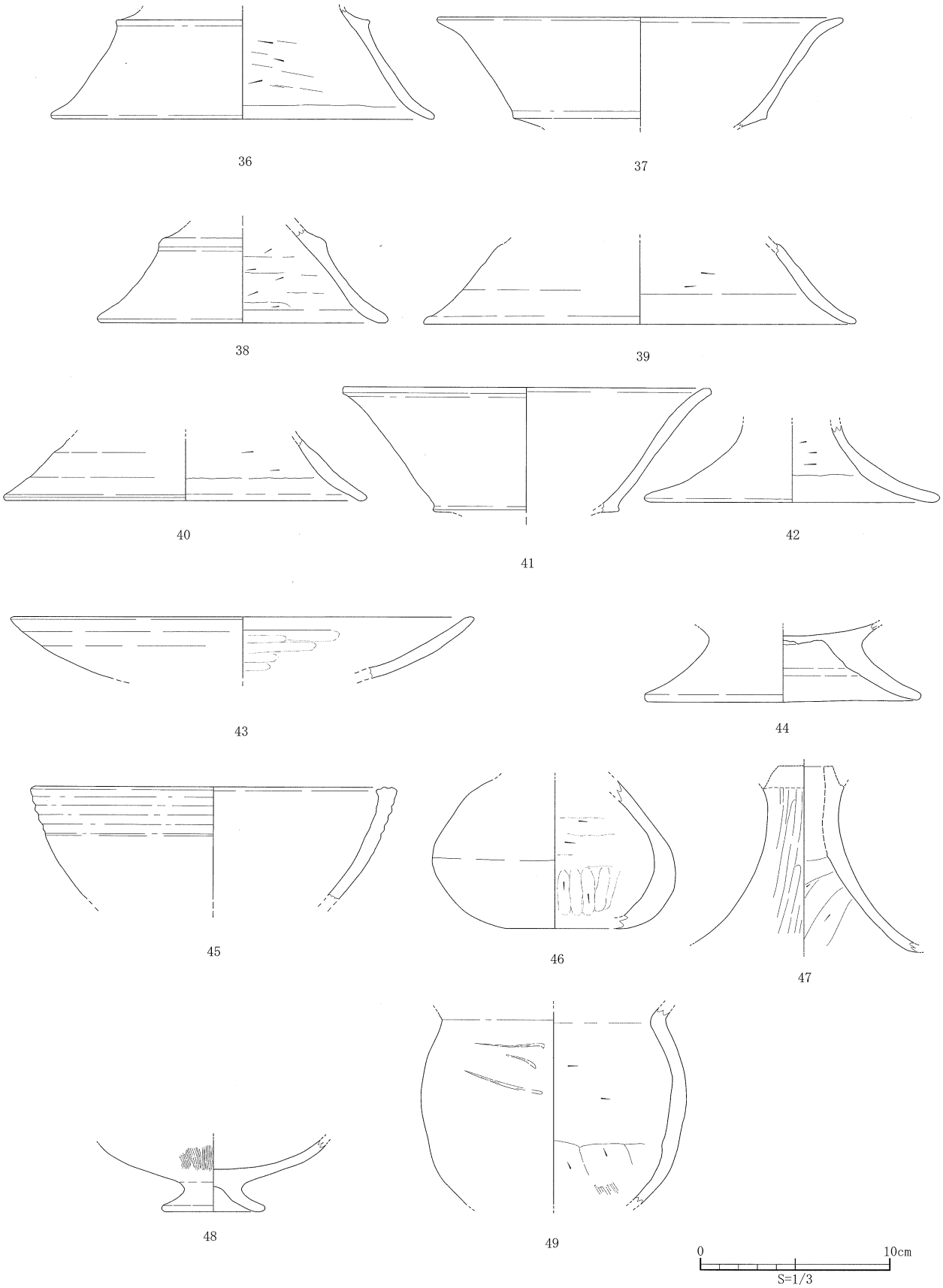
24



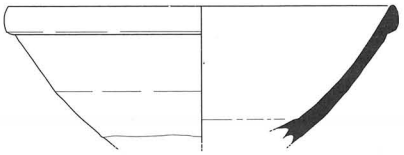
第50図 SD01出土遺物実測図(2)　S=1/3



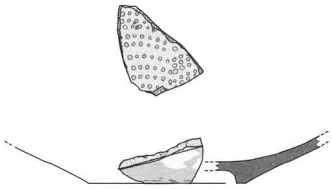
第51図 SD01出土遺物実測図(3)　S=1/3



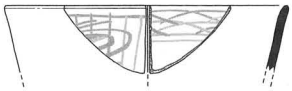
第52図 SD01出土遺物実測図(4)　S=1/3



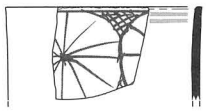
50



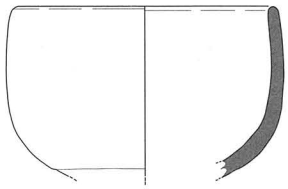
51



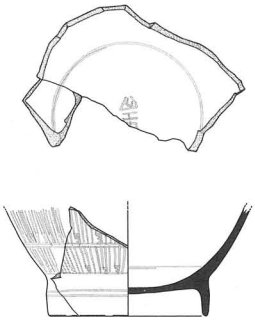
52



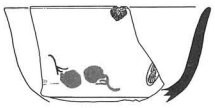
53



54



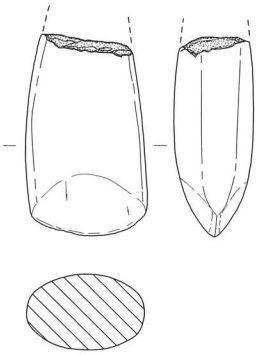
55



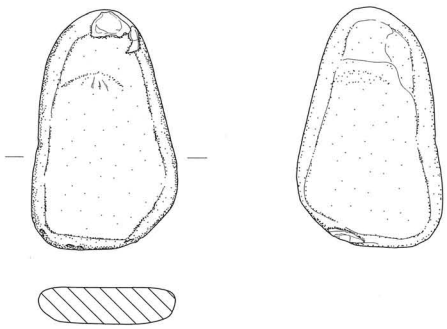
56

57

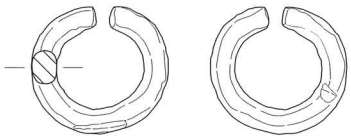
58



59



60



61

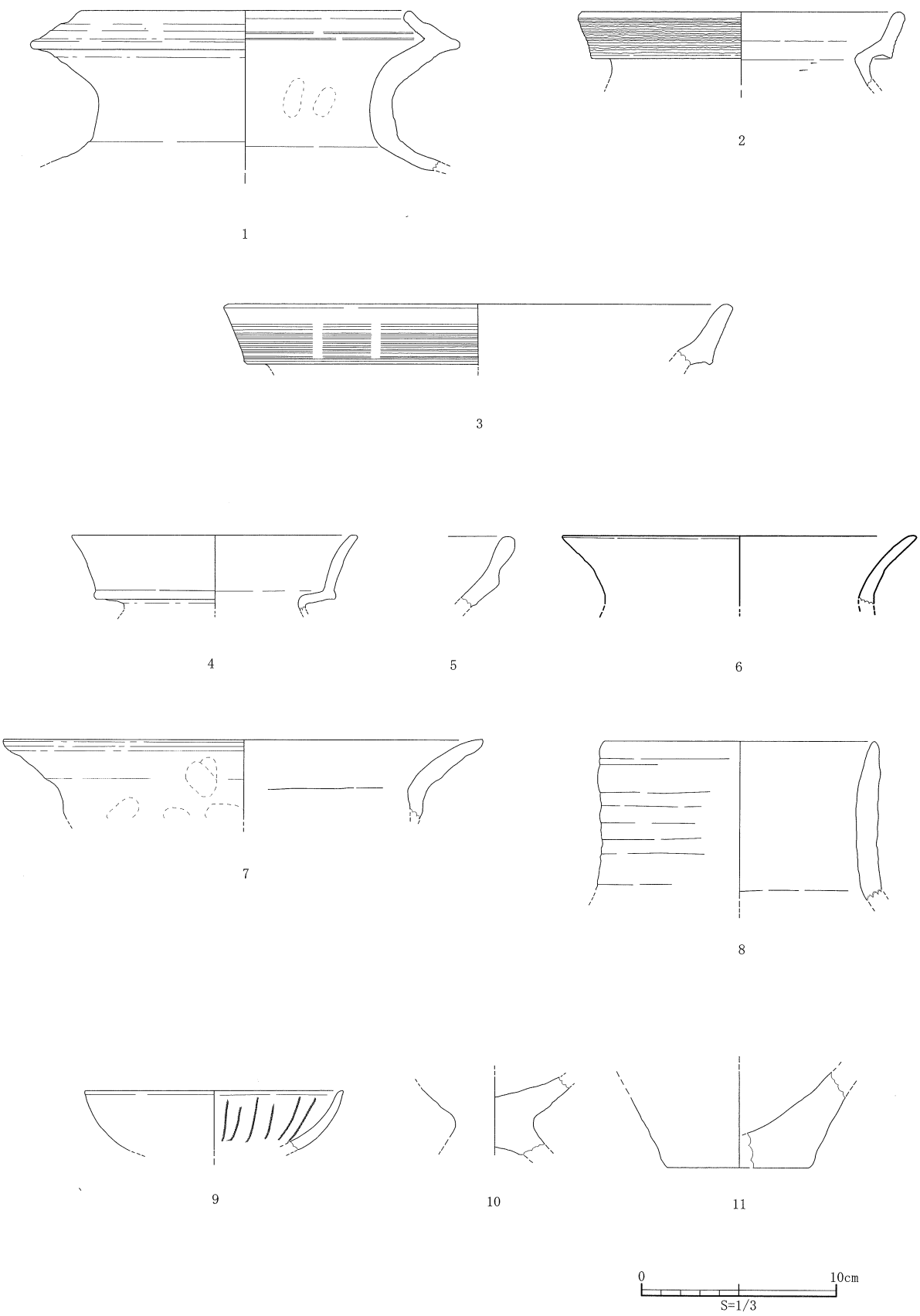
0 3cm

S=1/1

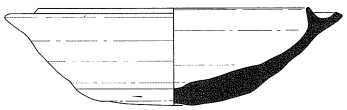
0 10cm

S=1/3

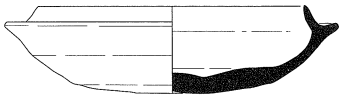
第53図　SD01出土遺物実測図(5)　S=1/3 S=1/1



第54図 SD02出土遺物実測図(1)　S=1/3

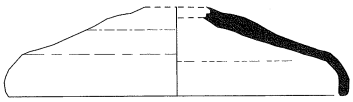


12

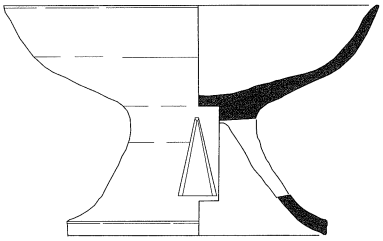


13

14

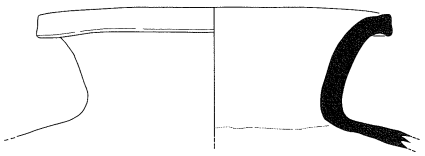


15

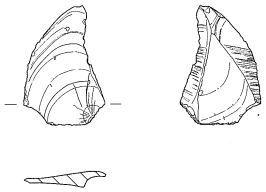


16

17



18

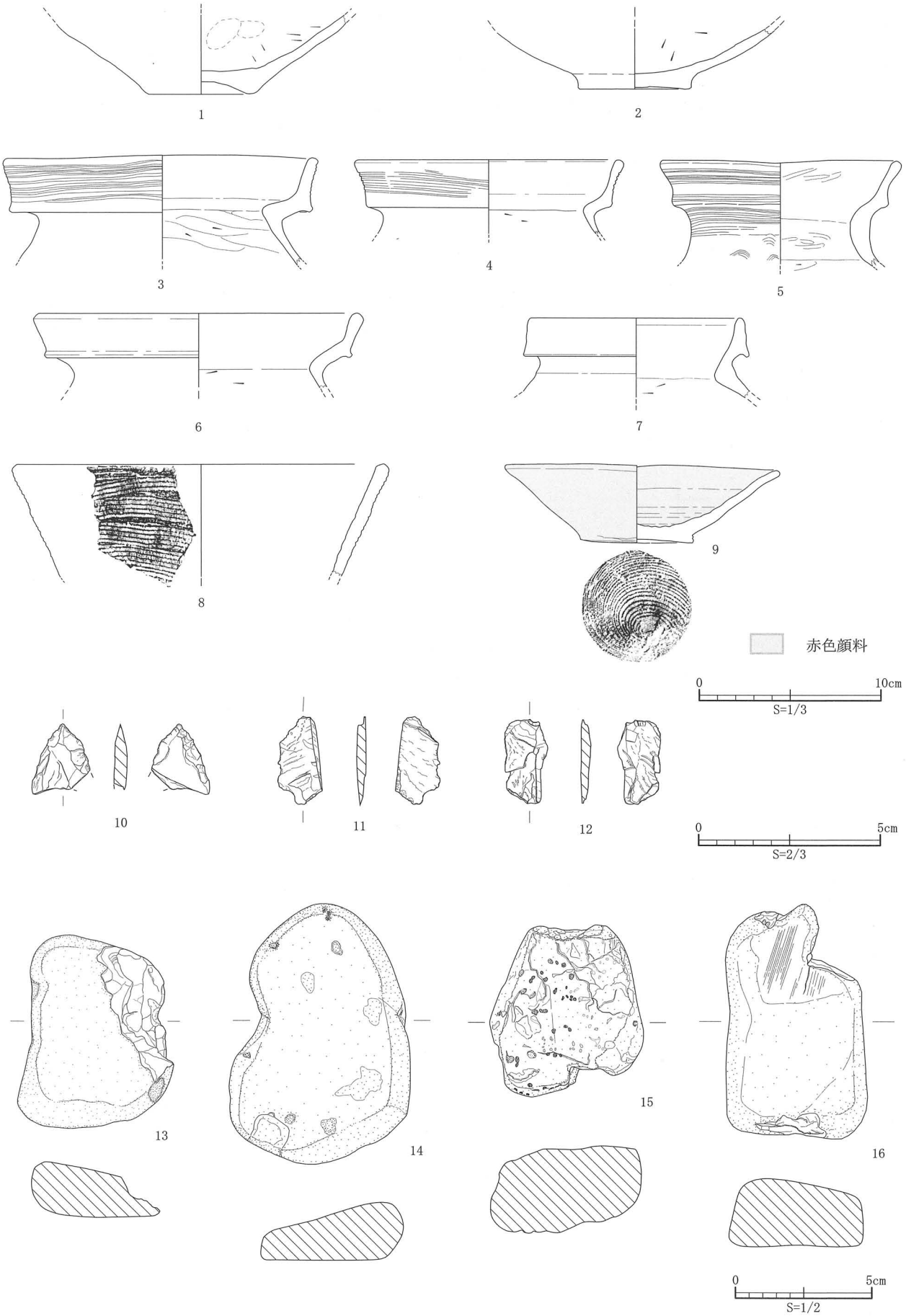


19

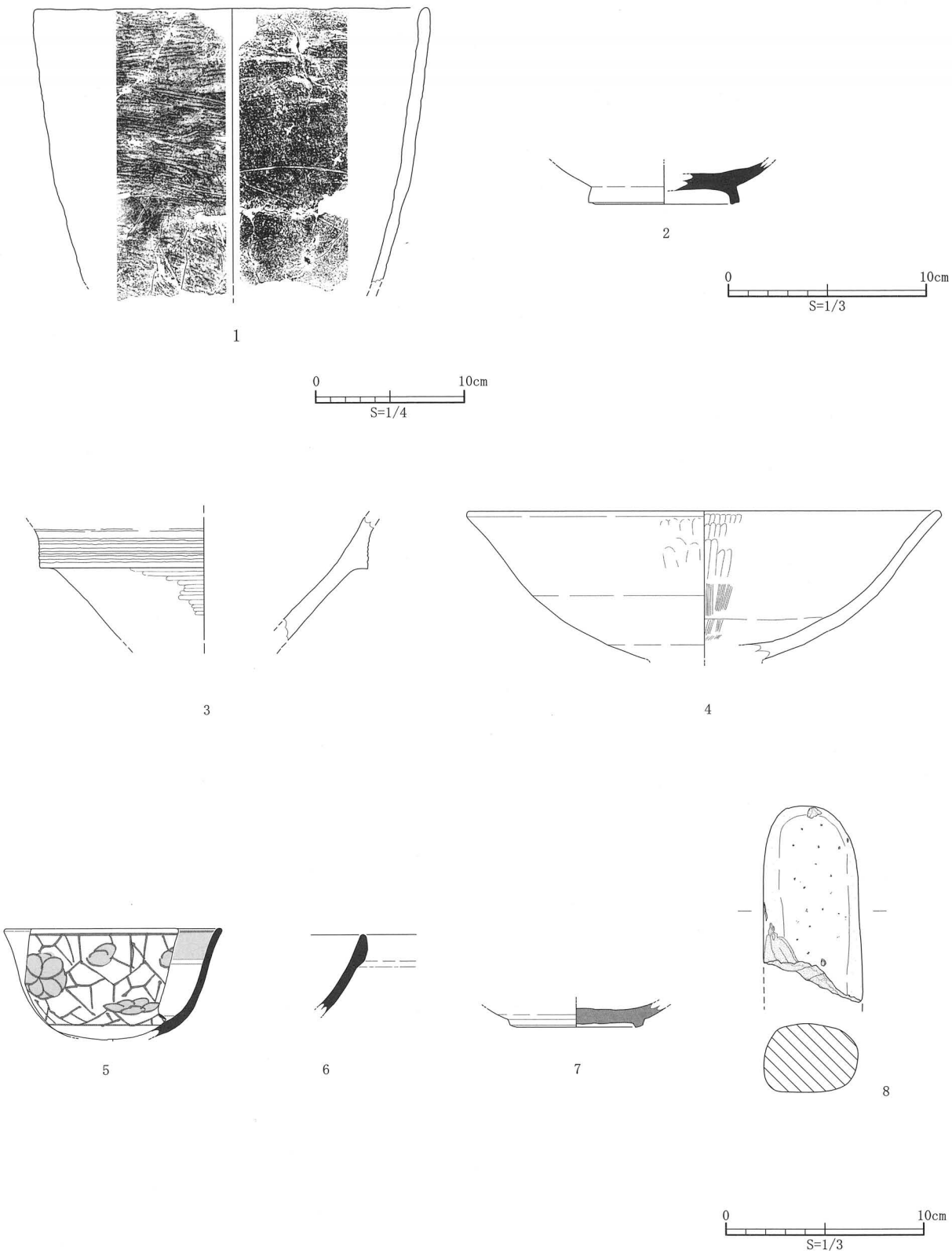
0 5cm
S=2/3

0 10cm
S=1/3

第55図 SD02出土遺物実測図(2)　S=1/3 S=2/3



第56図　SD06出土遺物実測図　S=1/3 S=2/3 S=1/2



第57図 ハイカ層・排土中出土遺物実測図　　S=1/3 S=1/6 ハイカ(1･2はハイカ層.他は排土中)

南壁に抜けるものであった。ただ、北側は底面の一部のみ残存していた。埋土は真砂砂粒を含むもので SD02 同様、川石を含み、遺物は縄文土器、弥生土器、石器、土師器であった。ただ、第47 図に示したように底面を検出しようと掘下げる過程で結果的に下の河床礫群にあたってしまった。検出面若しくは埋土の浅い部分で複合口縁甕のかなり復元できる破片が出土している。これらはあまり動いてない様子が窺えた。

SD06 出土遺物(第 56 図)

56-1・2 は縄文土器の底部。1 は上げ底、2 は平底である。

3～6 は複合口縁の甕、壷で、4 は擬凹線を一部ナデ消すものである。6・7 は口唇が肥厚し、擬凹線が見られない。これらは草田 2・3 期のもの。8 は鉢形の土器で、外面に条痕が横方向に施される。

9 は口径 15.0 cm、底径 6.2 cm、器高 4.2 cmを測る土師器坏で底部は回転糸切りである。内外面ともに赤色顔料が塗布されている。

10～16 は石器である。10 は安山岩製の石鏃で、長さ 1.9 cm、幅 1.6 cm、厚さ 3.6 mmで、片翼が折損している。11・12 は安山岩の剥片。13～16 は何れも石錘としているが、打欠き部分が片側のみ等不明瞭なものばかりであるが、自然のかかり部分を使用したとすると石錘と考えられるものである。

ハイカ層上面出土遺物(第 57 図 1・2)

57-1 は縄文粗製土器。やや外傾する器形で口唇はやや肥厚し丸く仕上げる。2 については取上げ次のエラーと考えられるが、底径 7.6 cmを測る高台坏で、高台の接地面は内側で、短くやや‘八’の字に踏ん張る。底部の回転糸切り痕はナデ消される。

排土中出土遺物(第 57 図 3～8)

57-3 は複合口縁の器台坏部で、V-2 様式か。4 は口径 23.8 cmの高坏坏部で、内面上方はミガキ、下方はハケメ調整である。V-4 様式。5～7 は陶磁器で 6 は白磁の口縁部分、瀬戸の皿であろう。8 は敲石、もしくは石斧の基部である。

第5章　Ⅱ区の調査

第1節　遺構(第58図)

Ⅱ区は川上側をⅡ-1区、川下側をⅡ-2区として調査を行った。Ⅱ-1・2区共通して調査中にカナケが山手方向から滲みてきていた。掘下げても鉄分の層状塊が至る所で確認され、またスラグもあることから製鉄関連遺構の存在が窺われた。結果的には、遺構自体は調査区内には認められず(排滓場跡の一部かと考えられる箇所あり)、調査区外北東に炉跡が存在する、またはした可能性がある。

Ⅱ区の大半の遺構は2層上面に集中していた。

以下、Ⅱ-1区からみていく。

SK21(第59図)

2dでSK22の北側に位置し、不整な五角形状をなす。規模は長径0.70m、短径0.63m、深さ0.24mを測る。埋土は暗褐色土で鍛冶滓等を含む。また上方に30㎝以下の川石・山石が6個あった。

SK21出土遺物(第60図)

60-1・2ともに椀形鍛冶滓である。

SK22(第65図)

2dでSK21の南側に位置し、平面形は不整形である。長径0.64m、短径0.43m、深さ0.20mを測る。断面形は北東側が僅かに浅く、南西側に最深部がある。最深部に立石が確認された。埋土は暗褐色砂質土であった。

SX53(第61図)

3c・2d・3dに位置する。SK21・22の西側から始り、川側の旧河岸石にぶつかる流路状遺構である。残存長5.40m、幅1.40m、深さ0.28mで南側の底では下の旧河岸石に当った。北側残存部分は後世の畑利用等で削平され非常に浅い。埋土、底面ともに鉄分の滲みた痕跡が確認された。埋土中にスラグを包含している。

SK20(第62図)

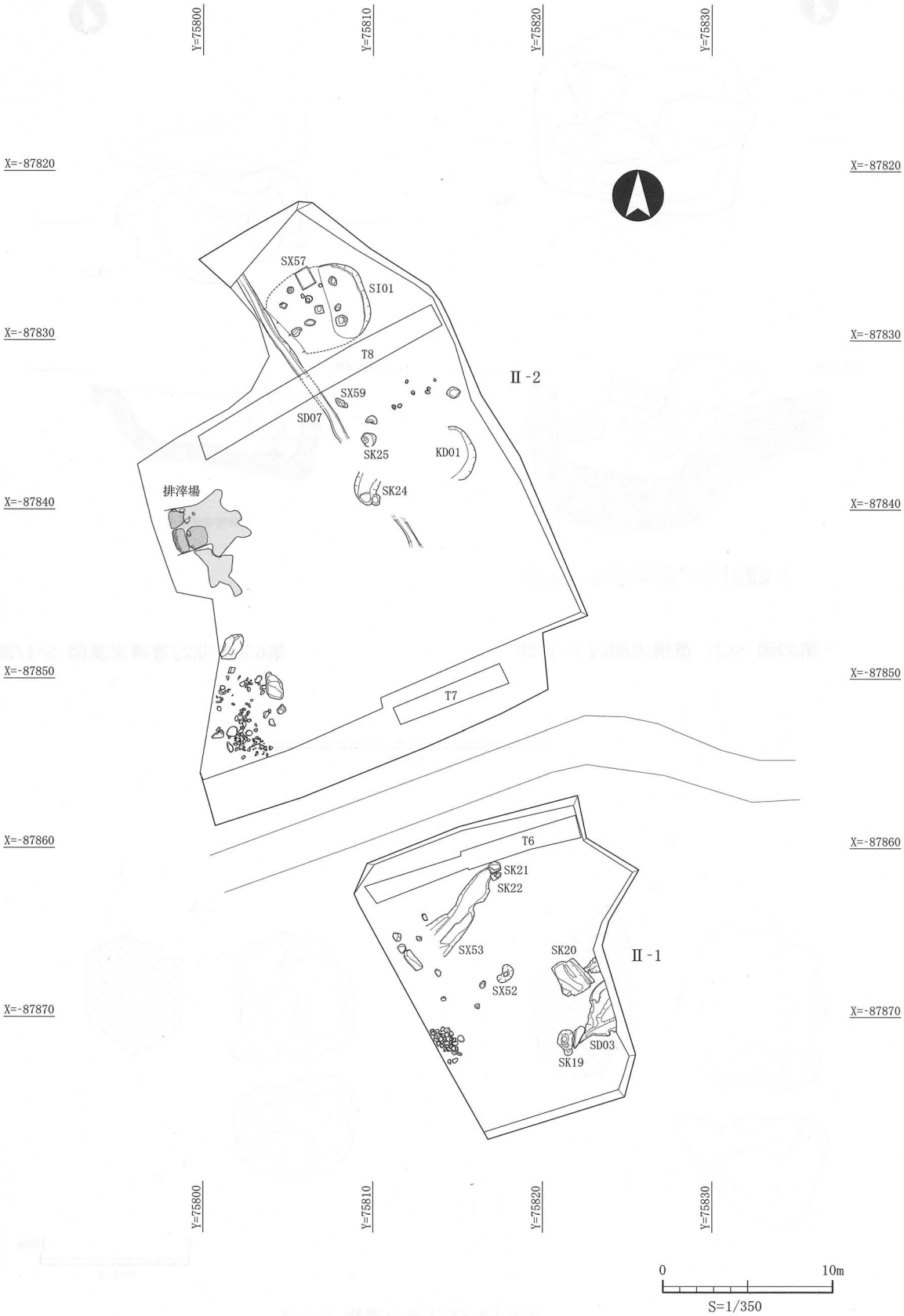
2b・2cに位置し、不整方形状をなす。長径2.54m、短径2.14m、深さ0.37m、断面形は整った形状であった。埋土はブロック状に明赤褐色砂質土が入り、撹乱されている。土坑内西側床面近くに平石が据えられていた。

SX52(第63図)

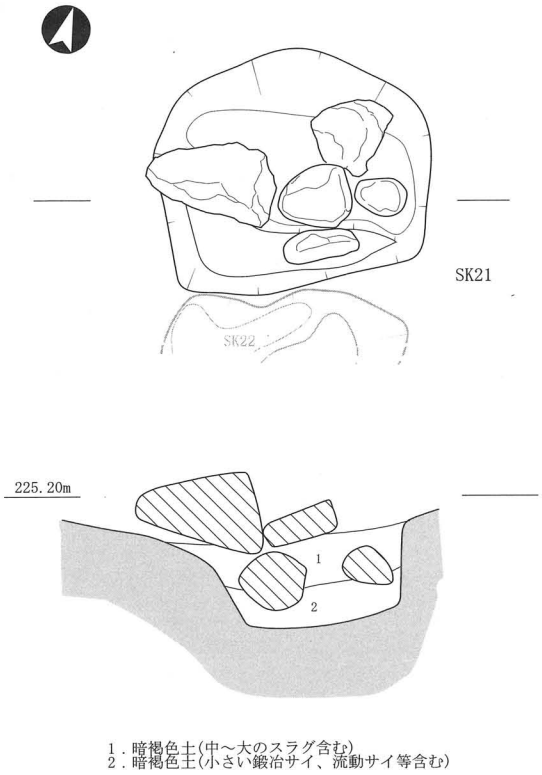
3cに位置し、平面形は不整形。長径1.12m、短径0.58m、深さ0.32mを測る。埋土は暗灰色土で僅かに炭を含む。底面西側に立った状態の山石が確認された。埋土中に流込みと想われる古式土師器片が含まれていた。

SK19(第64図)

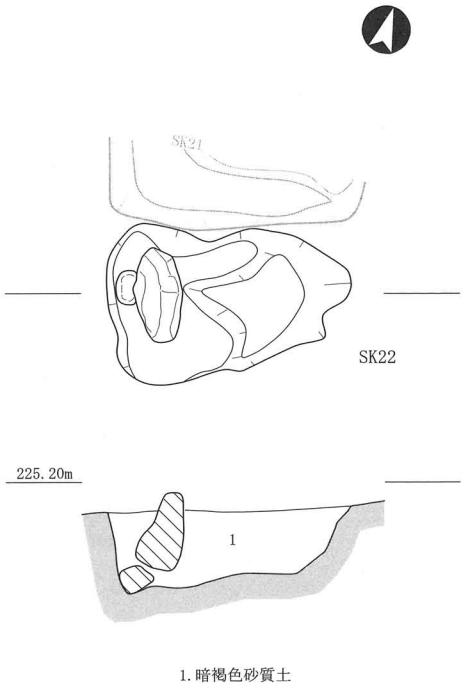
3bに位置し、平面形は不整形をなし、南側は別ピットを切っている用にみえるが、同時に扱う。



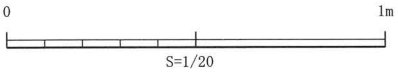
第58図 Ⅱ区2層遺構配置図 S=1/350

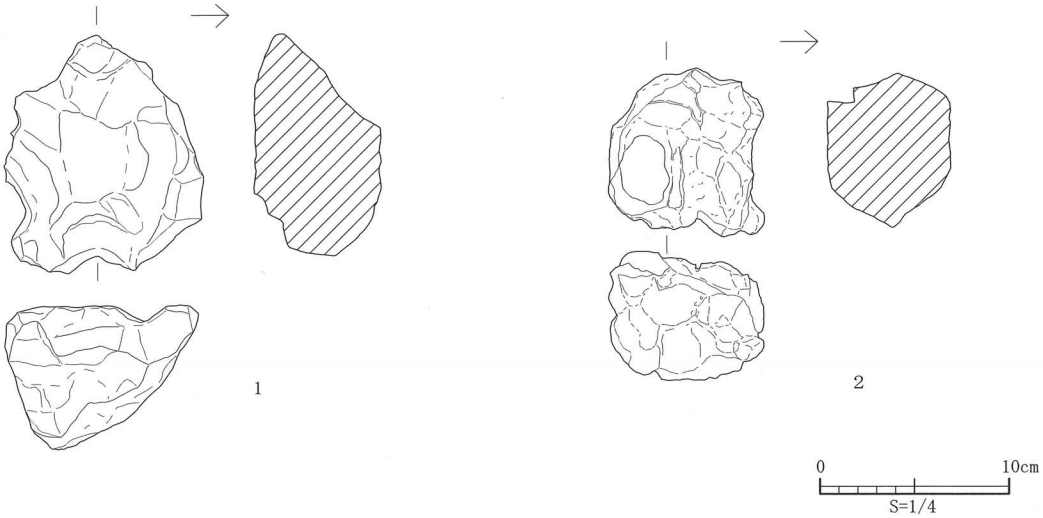


第59図 SK21 遺構実測図 S=1/20

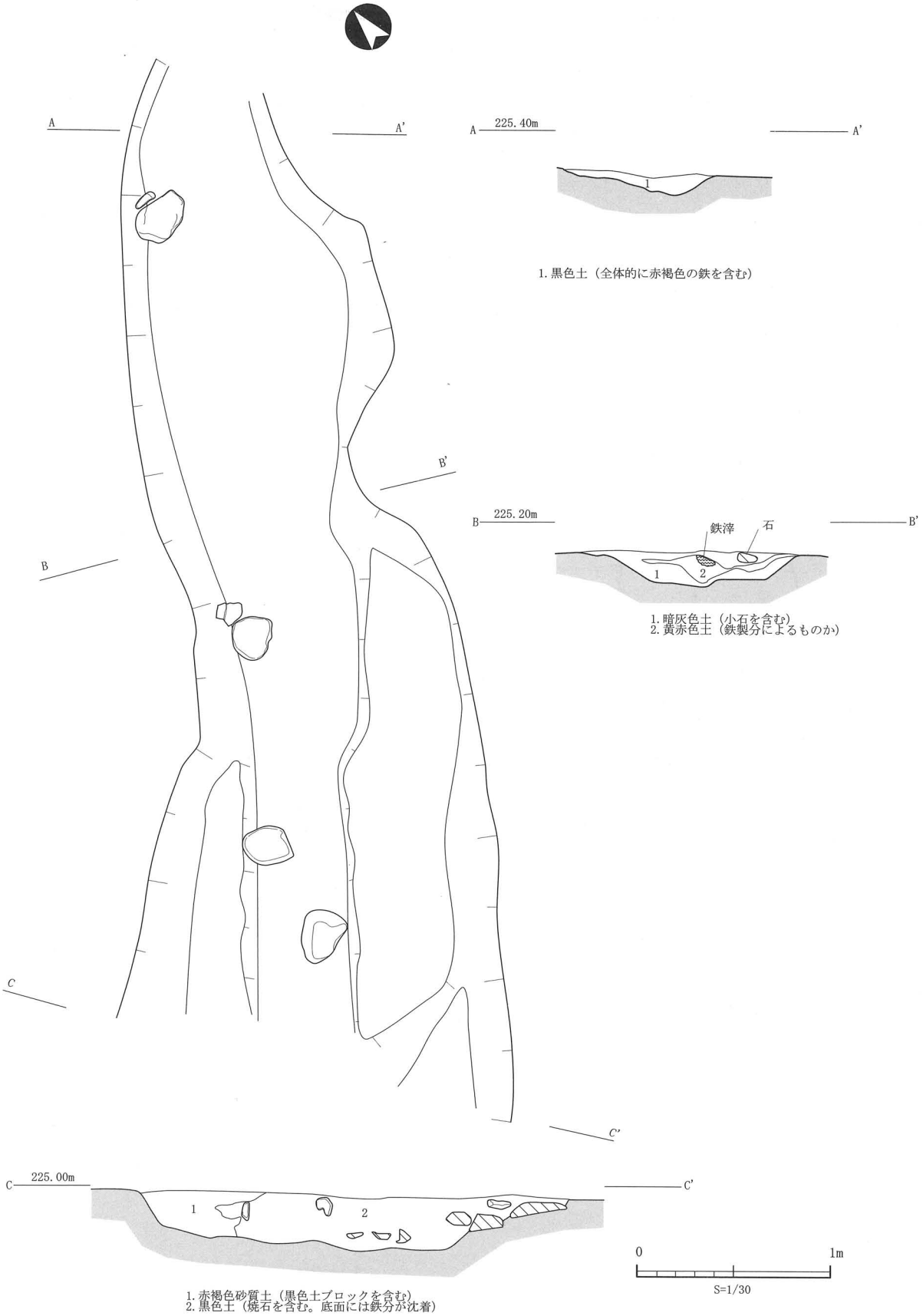


第65図 SK22遺構実測図 S=1/20

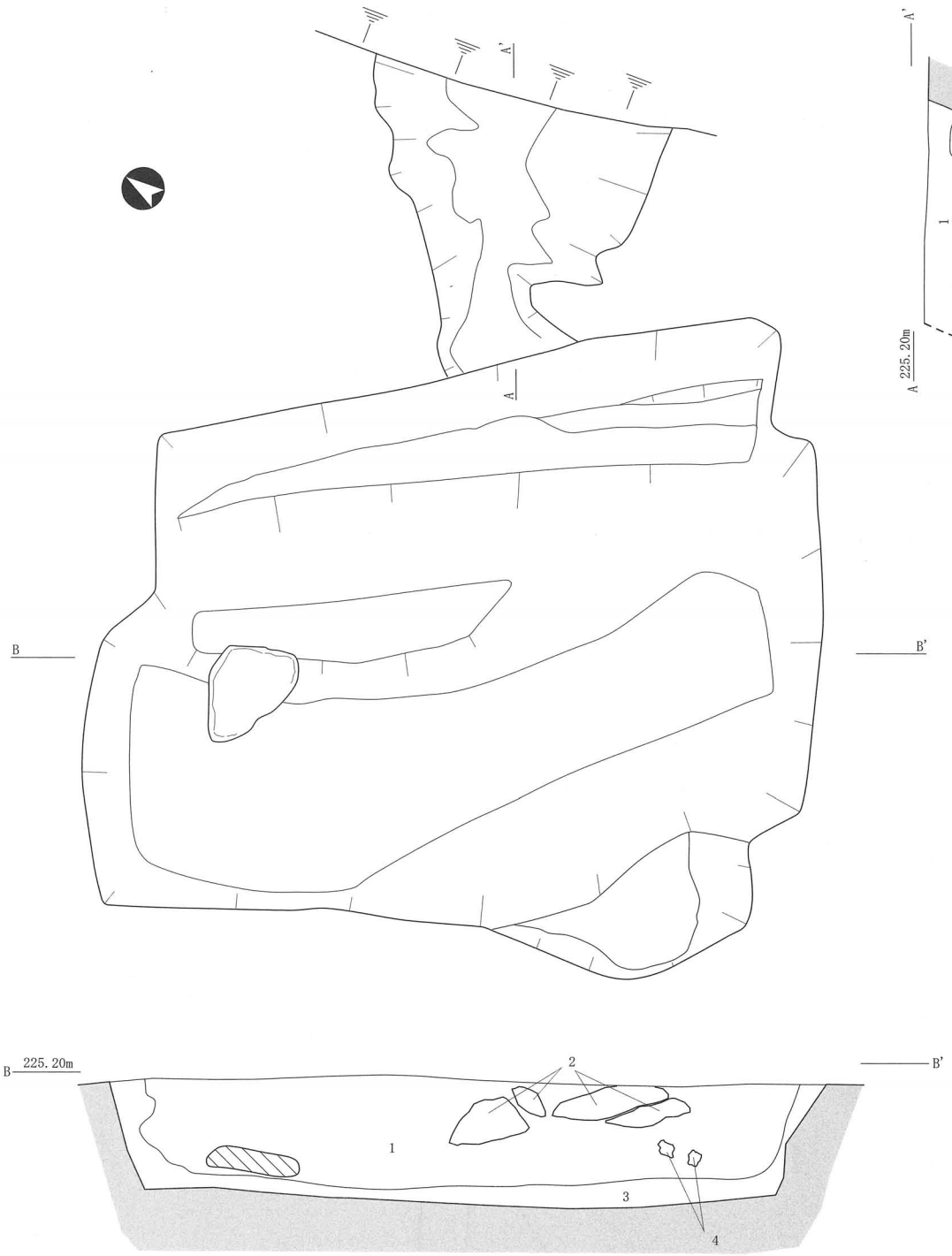




第60図 SK21出土遺物 S=1/4



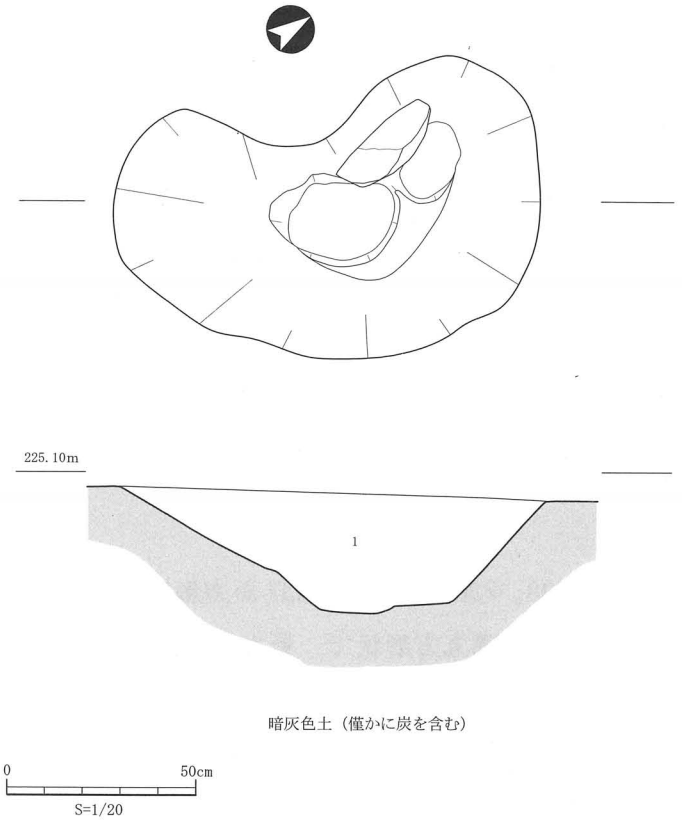
第61図 SX53実測図　S=1/30



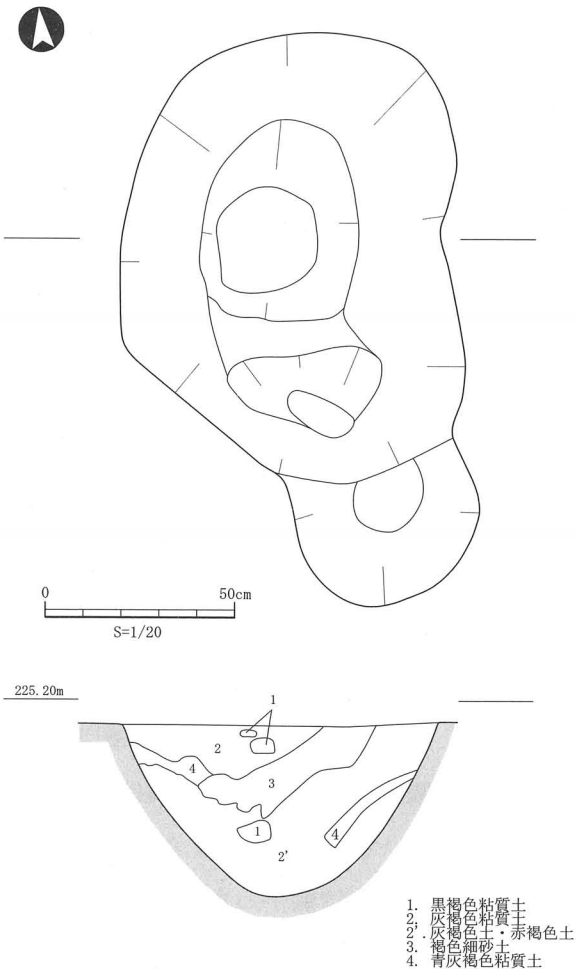
1. 暗赤褐色砂質土
2. 明赤褐色砂質土
3. 明赤褐色砂質土（2より明るい）
4. 黒褐色砂質土（鉄分の凝固したもの）

0　1m
S=1/20

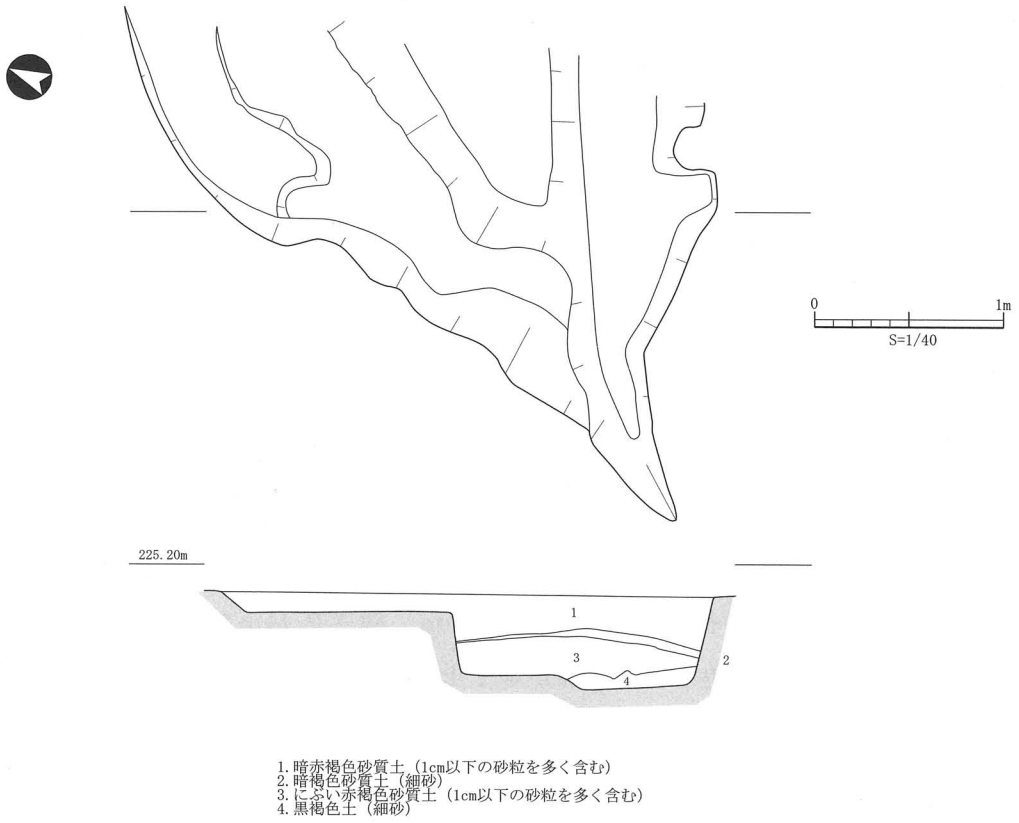
第62図 SK20実測図　S=1/20



第63図 SX52遺構実測図 S=1/20



第64図 SK19遺構実測図 S=1/20



第66図 SD03遺構実測図 S=1/40

長径 1.54m、短径 0.88m、深さ 0.44m を測り、埋土は粘質の土層が帯状をなしていた。性格不明の遺構である。遺物はなかった。

SD03(第 66 図)

2b に位置し、調査区外から始まる溝状遺構である。残存長は 3.20m、幅 2.5m(断面図作製部分で)、深さ 0.45mを測る。遺物は無かったが、近世以降のものであろう。

以上がⅡ-1 区の遺構である。表土を剥ぎ取るとすぐにこれらの遺構を検出している。性格不明のものが多いが、何れも近世以降のものと思われる。

次にⅡ-2 区の遺構をみてみる。

SI01(第 67 図)

調査区最北端の 2k に位置する竪穴建物跡で柱穴は P238、P260、SX58、P237 が方形に位置し、その中央に P236 が位置する 5 本柱のものである。平面形は隅丸方形状で、最大長 5.31m、最大幅 4.98m、深さ 0.26mを測る。面積は凡そ 23 ㎡。西側は既に壁部分が消失しており、東側壁帯溝は微かに確認できる程度で 3 cmほど窪む程度であった。P246、P244、P249 は平面形が少し小さく、断面も浅いものであるが、これらを結ぶと三角形となる。これらも SI01 に付随するものであろうか。出土遺物は無かったが、SI01 の覆土と同じ、周囲の土から草田 5～7 期の土器が確認されている。

KD01(第 68 図)

1i に位置する加工段で、地山を切って平坦面を作っている。残存長 3.12m、残存幅 1.50m、深さ 0.15mを測る。SI01 同様西側は残存せず詳細は不明であるが、竪穴建物跡であった可能性も否定できない。遺物は無かった。

SK25(第 69 図)

2i に位置し、平面形不整五角形状をなす。長径 0.88m、短径 0.80m、深さ 0.53mを測る。西側床面に更にピット状に深くなる部分があり、二段掘り状となる。遺物はなく時期不詳である。

SX57(第 70 図)

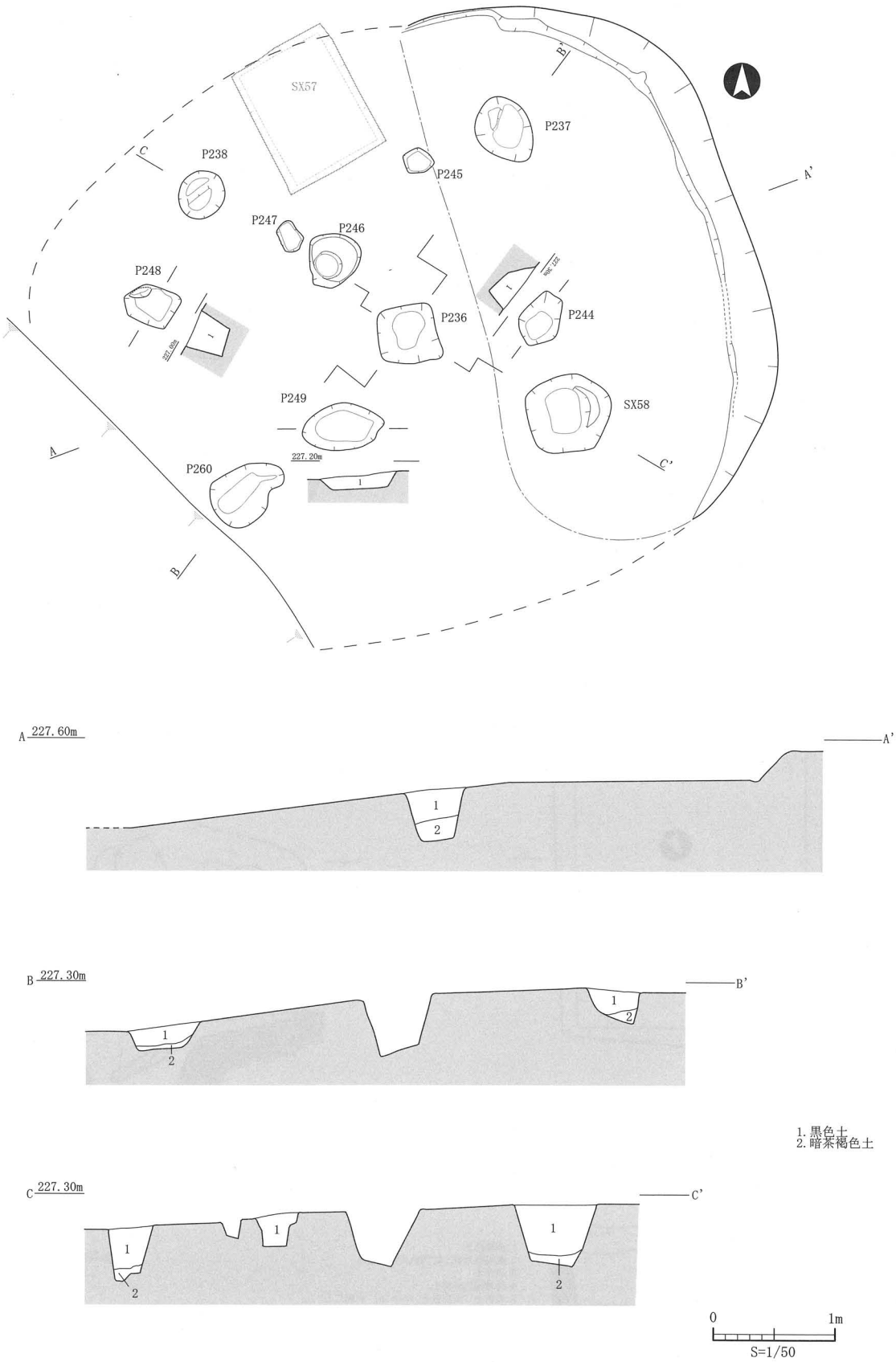
2K に位置し、前述の SI01 床面を切って作られている。平面方形で長径 1.12m、短径 0.86m、深さ 0.46mを測る。掘下げる過程でやや鼻をつく異臭がし、また 3 層中に 5 層灰白粉末が、埋土中から錆釘片が出土していることから近世墓であろう。他に遺物はなく詳細時期は不明である。

SX59(第 71 図)

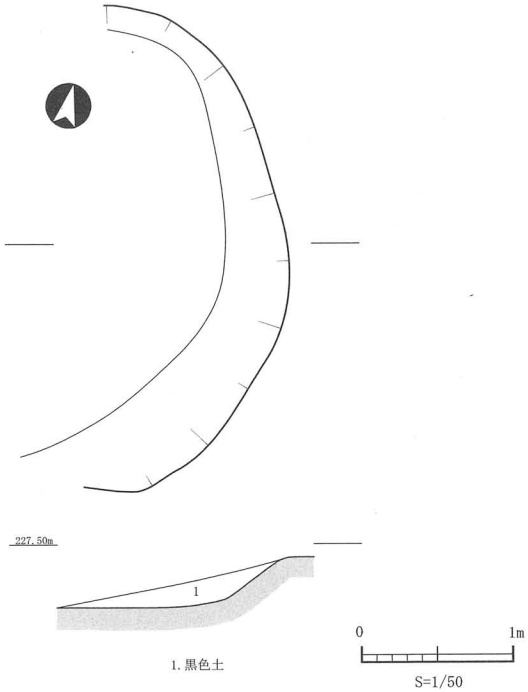
2j に位置し、平面楕円形状で長径 0.84m、短径 0.40m、深さ 0.44mを測り、断面は二段掘り状をなす。表面から落ち込んだとみられる平石が埋土上層から出土。遺物はなかった。

SK24(第 72 図)

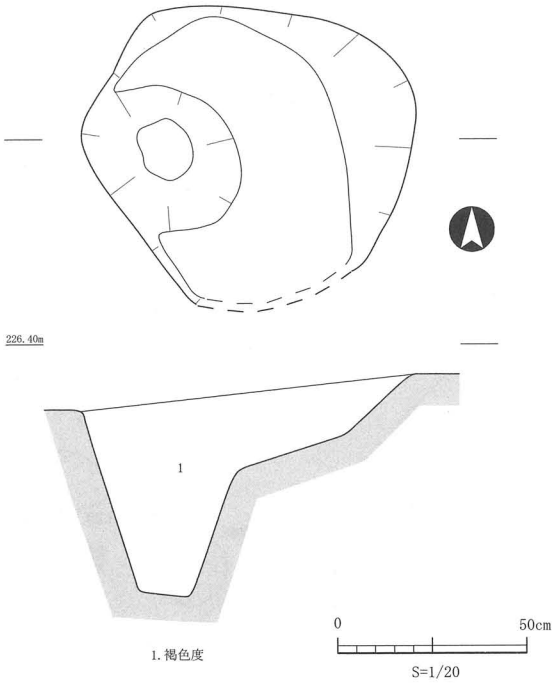
2i に位置し、後述する SR01 に北側が切られている。平面形は不整形で、長径 1.60m以上、短径 1.40m、深さ 0.96mを測る。埋土は黒色土が厚く溜っていた。埋土中から縄文後期後葉の凹線文系土器と同時期と見られる粗製土器が出土している。遺構の時期を示していると思われるが、



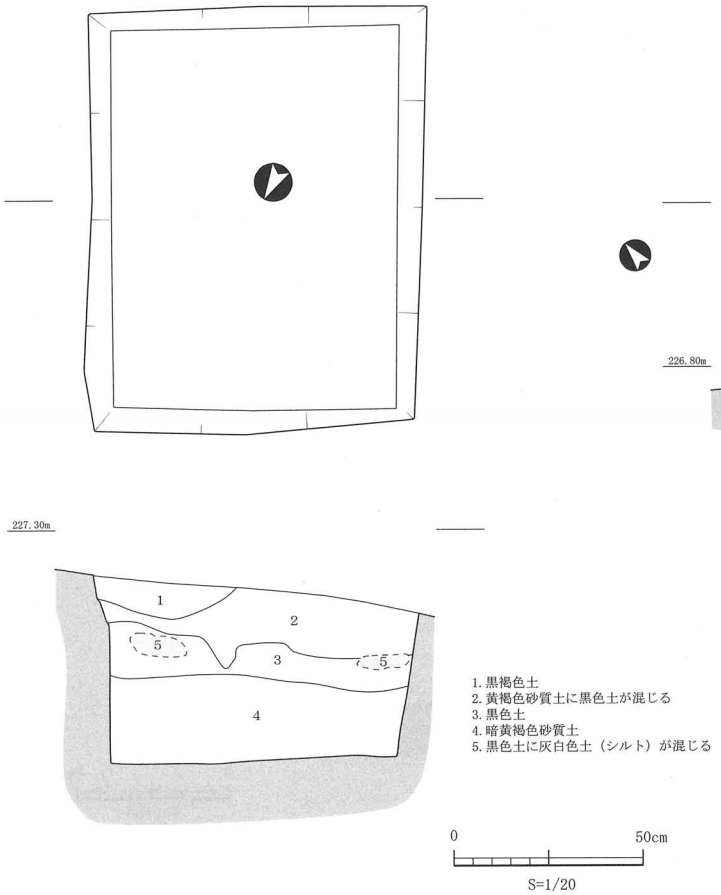
第67図 SI01実測図　S=1/50



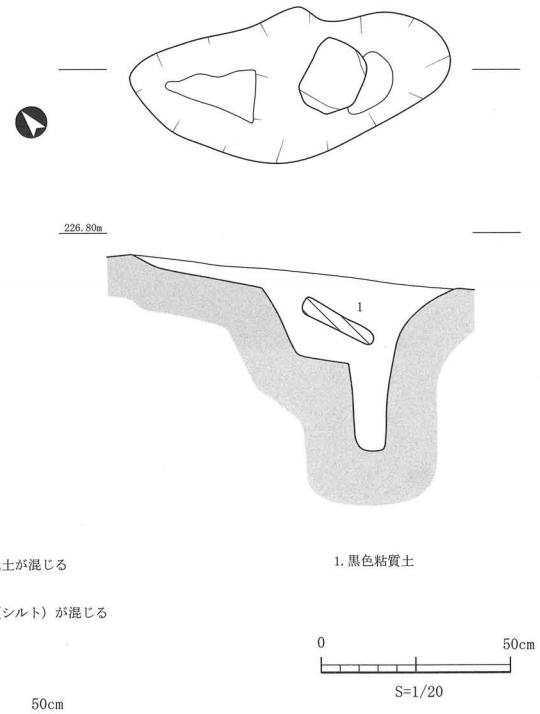
第68図 KD01実測図　S=1/50



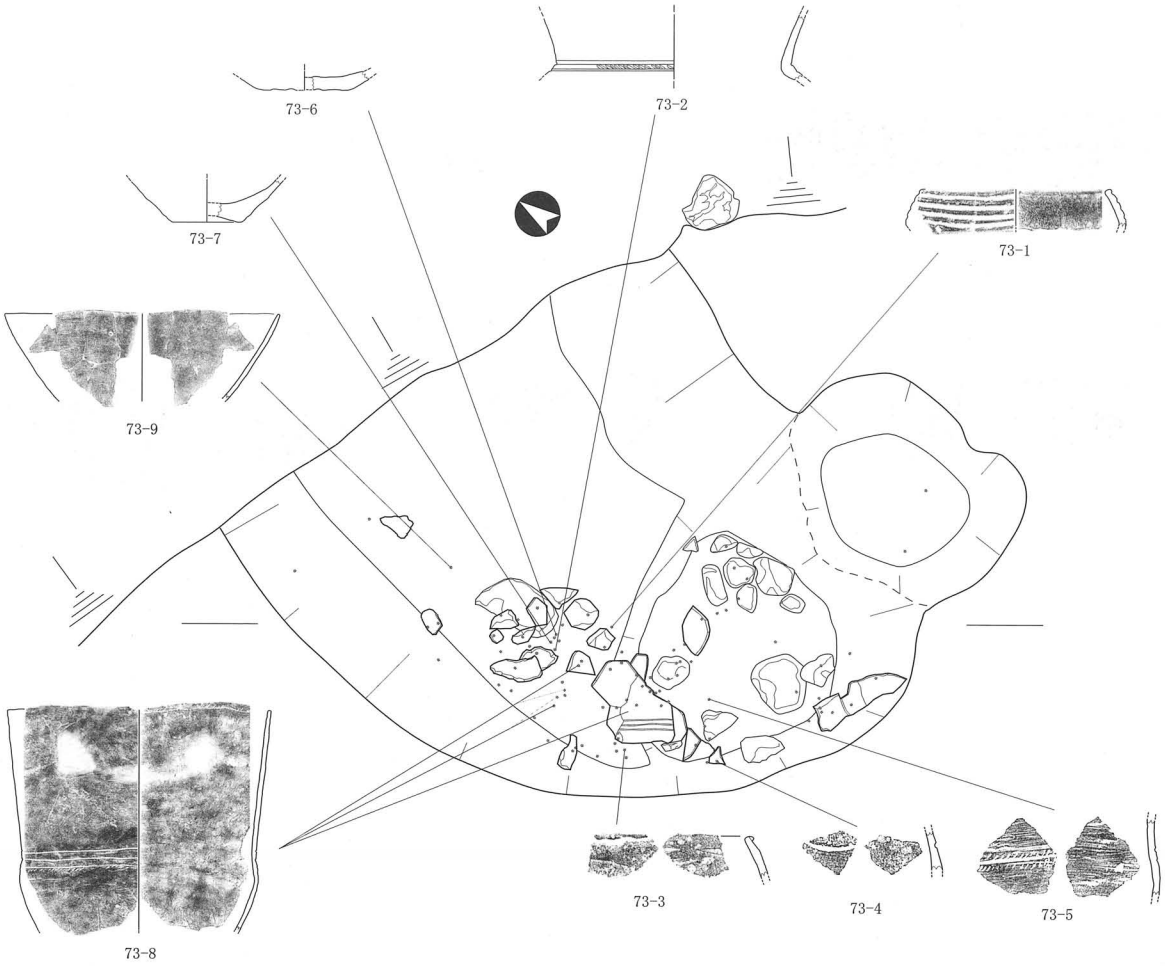
第69図 SK25実測図　S=1/20

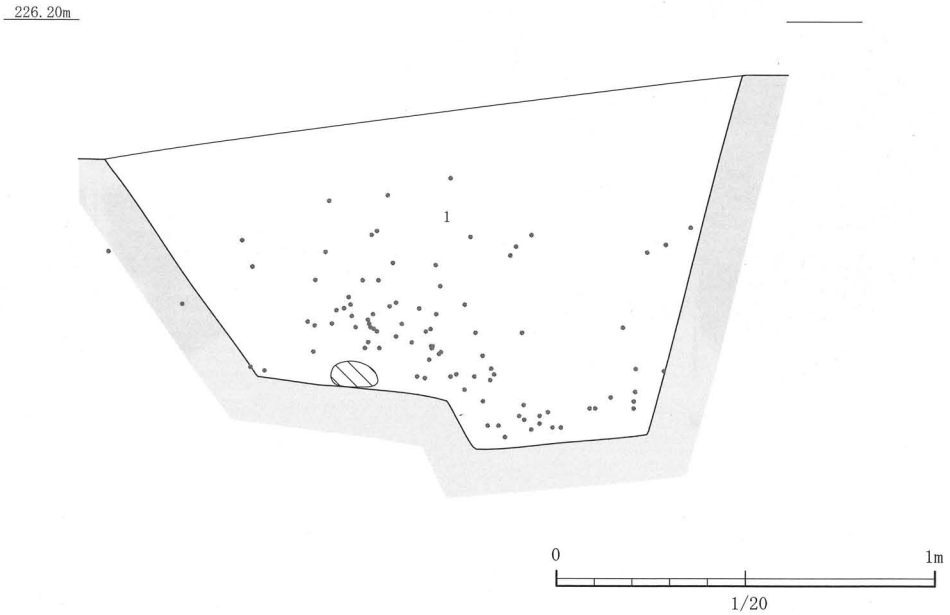


第70図 SX57実測図 S=1/20

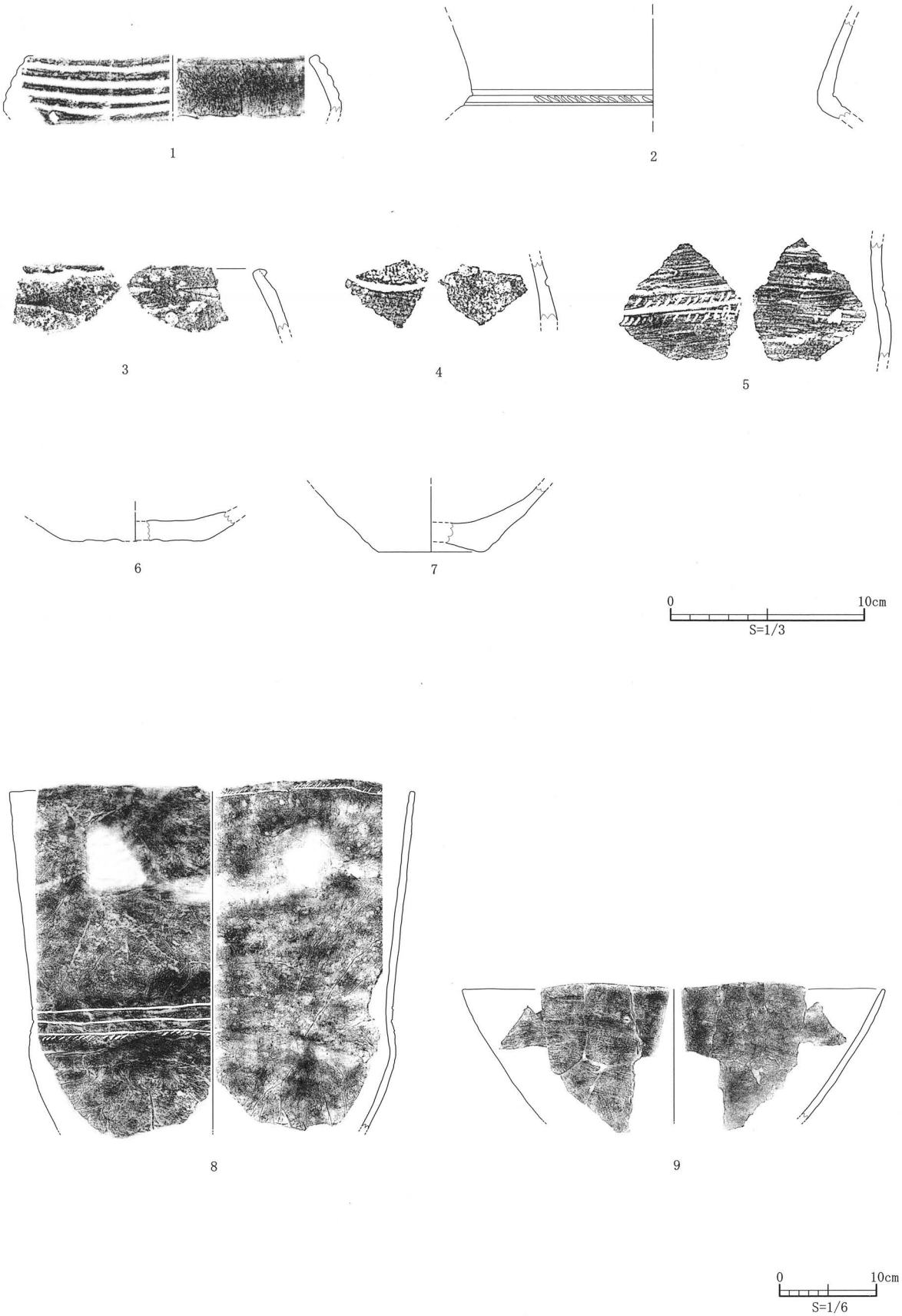


第71図 SX59実測図　S=1/20





第72図 SK24実測図　S=1/20



第73図 SK24出土遺物実測図　S=1/3 S=1/6

第73図8はかなりの破片が復元でき、その場で壊れたようであった。土器埋設遺構であった可能性もある。

SK24出土遺物(第73図)

73-1は口径14.8㎝で、口縁で緩く内傾する器形で、外面は3㎜ほどの凹線文が4条廻る鉢で、後期後葉の凹線文土器である。2は頸部で強く括れる甕で括れ部で2条の沈線をおこない、その間を刻むものである。3はやや口縁端部が外側に折曲げられた粗製深鉢。4は外面に擬似縄文を施し、器形は内傾する注口または壷型土器である。彦崎K2式併行である。5・8は胴部が張る僅か上部に沈線を行ないその間に刻みを施す粗製深鉢である。同一個体かと思われたが、器厚、胎土から別個体と判断した。6・7は縄文土器底部で浅鉢であろうか。9は朝顔状に開く浅鉢である。

SD07(第74図)

2h・2i・2j・2k・3k・3lを通る残存長19.1m(中程でSR01に切られる。図の点線部分)、幅0.47～0.63m、深さ0.46mを測る。

SD07出土遺物(第74図)

床面近くから出土したのが1で複合口縁甕で、口径17.8㎝である。口縁端部や突出部から草田5・6期のものであろう。2は土師器の手捏ね土器片。3は流れ込みにより表面近くに止まったものであろう。高坏の脚部で二方透かしを有する。一方は三角透かし、反対側は線刻のみとなっている。出雲5期前後である。

排滓場跡(第75図)

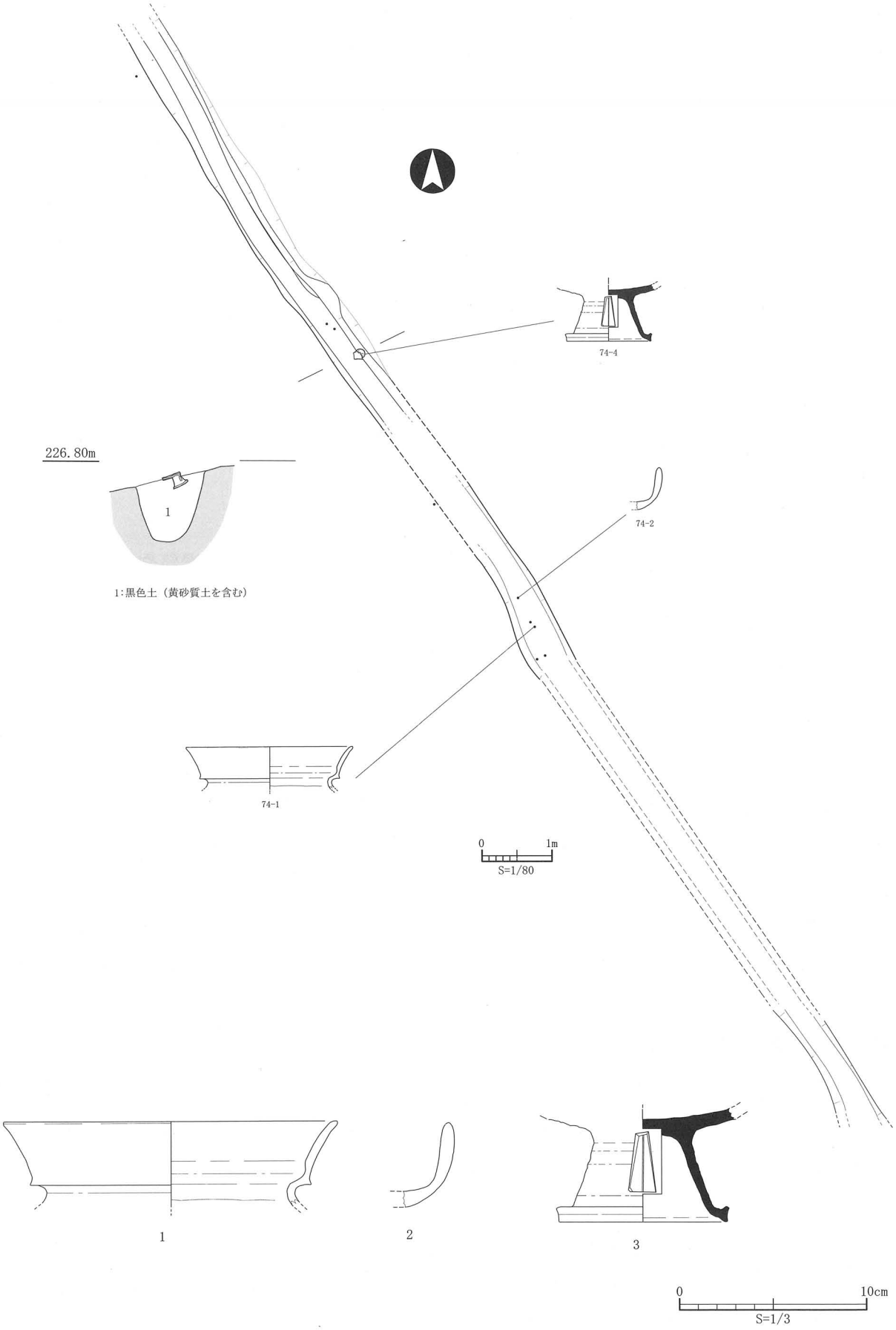
Ⅱ-2区に厚く堆積していた遺物包含層である3層黒色土を掘下げる過程で検出した遺構で、再結合滓、羽口、炭、粘土、焼石等が多くみられるようになり面的な拡がりをみせた。(第75図) 平面範囲は再結合している範囲が4.50m×6.00mであった。範囲の中央を断割り、断面を確認した。幾層にも滓が結合した様子が窺えた。またその再結合滓上面は平たくなっており、複数回作業場としての機能を果たしていたようである。[※4] 炉自体はすぐ東側のレベルの高い場所にあったと想定されるが、既に消失している。排滓場跡の炭で年代測定を行なった結果、11世紀中～後半の数値を得ている。

排滓場跡出土遺物(第76・77)

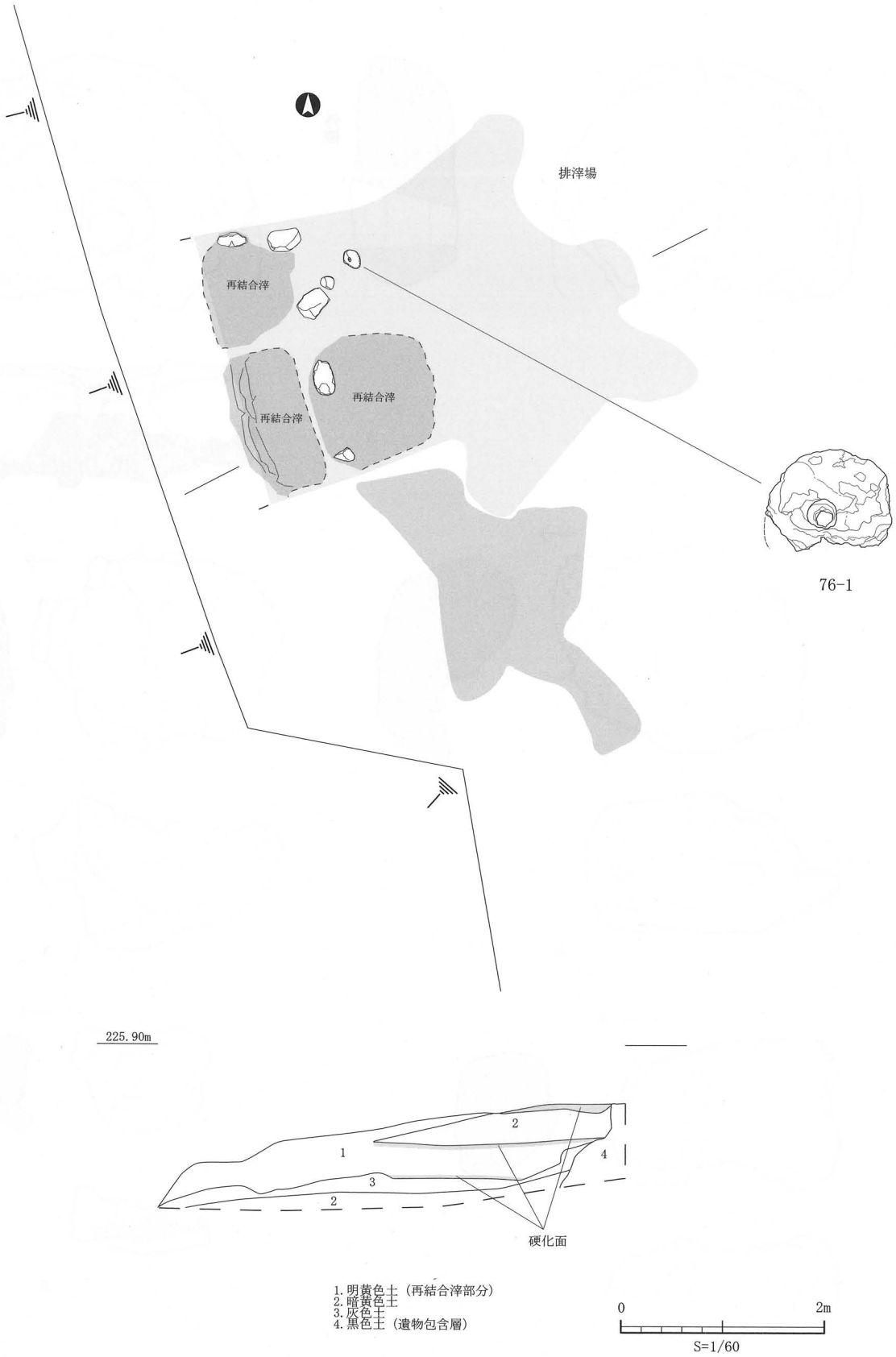
76-1～77-16は製鉄関連遺物である。1は板屋型羽口である。[※5] 簀巻痕は見られない。外径は20㎝弱である。2～5は大小があるが、湾型滓である。5には粘土部分が付着している。77-6～16は流出孔滓または溝滓である。6には粘土部の付着が見られる。

第2節　3層(包含層)出土遺物(第80～88図)

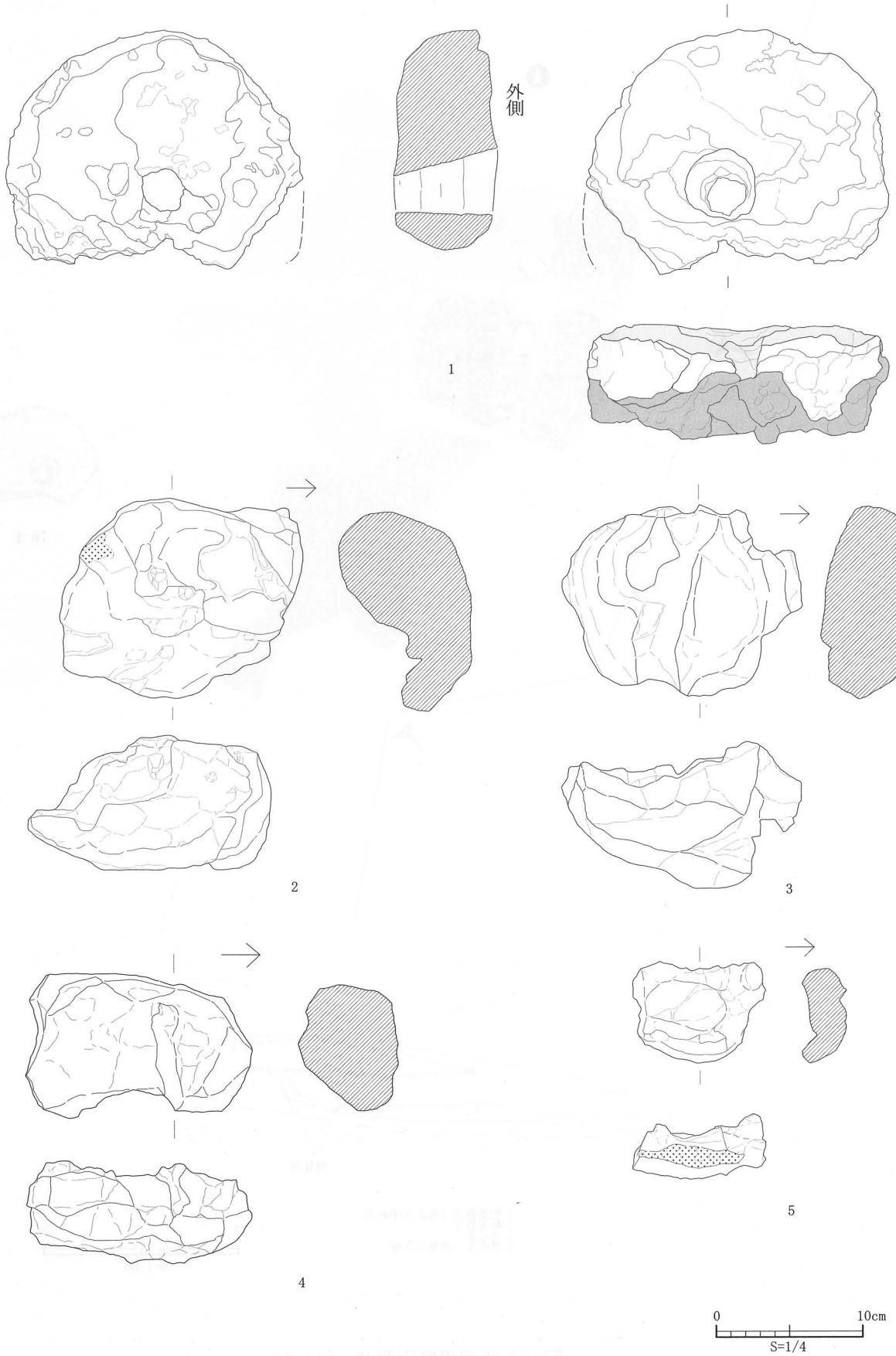
Ⅱ区の包含層出土遺物は、Ⅱ-2区の3層出土遺物のことである。調査区北隣の民家の方向から大量の遺物が流れ込み堆積していた。遺物は、縄文時代早期押型文土器から近世陶磁器まで時期幅があるが、流入堆積の為遺物が上下混在しており、また土層観察で分層不可能であった為、一



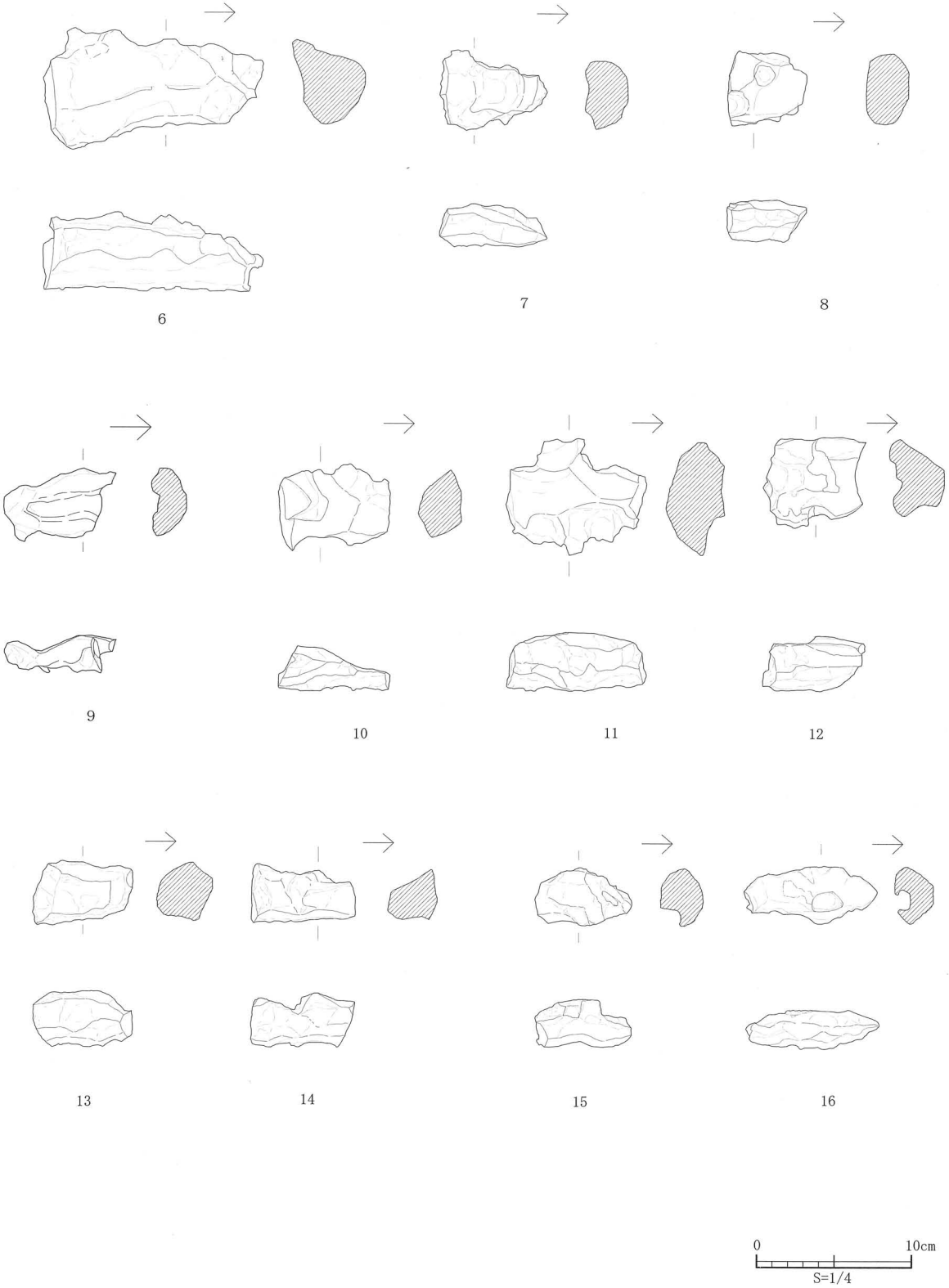
第74図　SD07遺構・遺物実測図　遺構：平面図 S=1/80 断面図 S=1/40
遺物：S=1/3



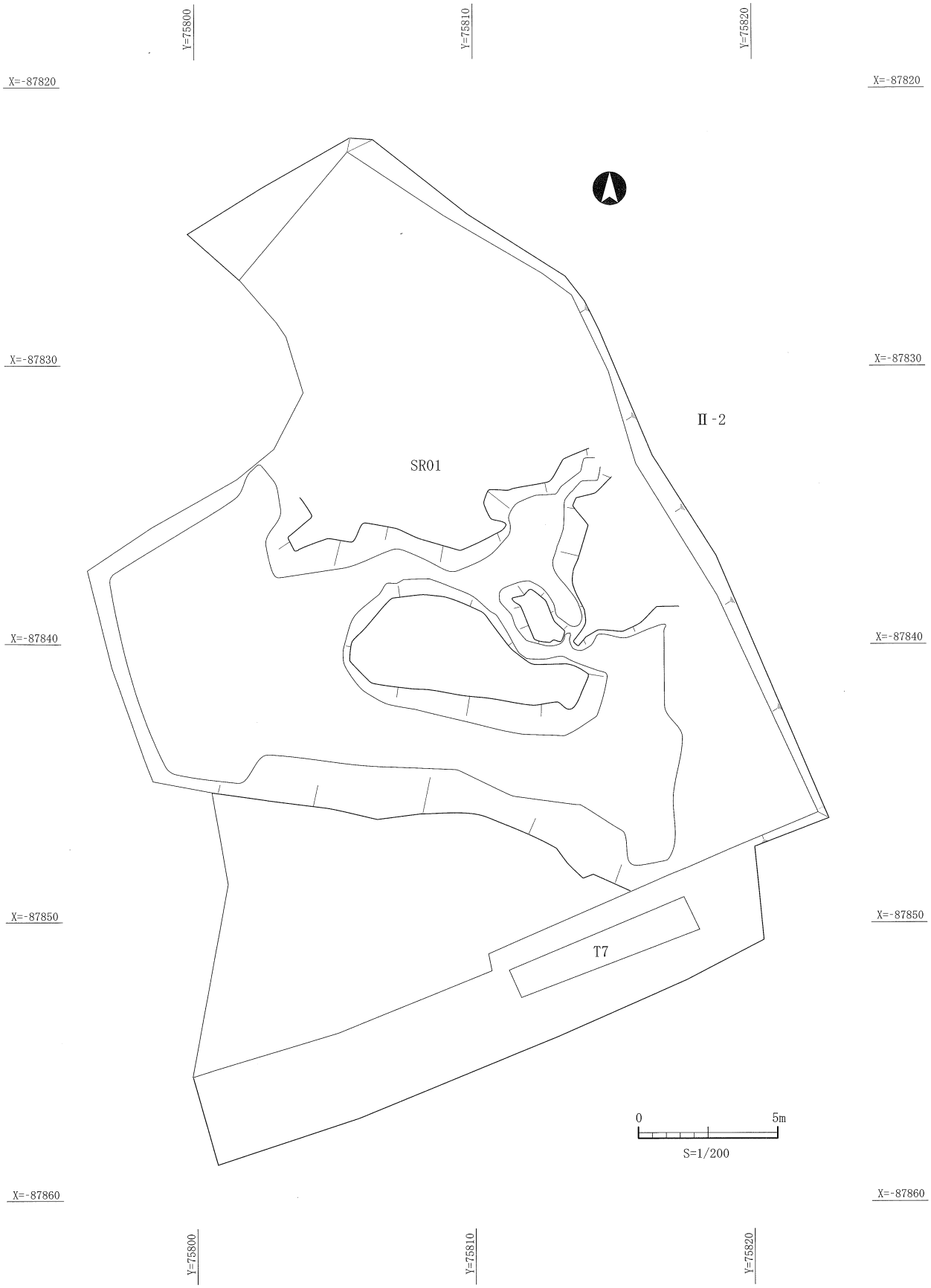
第75図 排滓場跡実測図　S=1/60



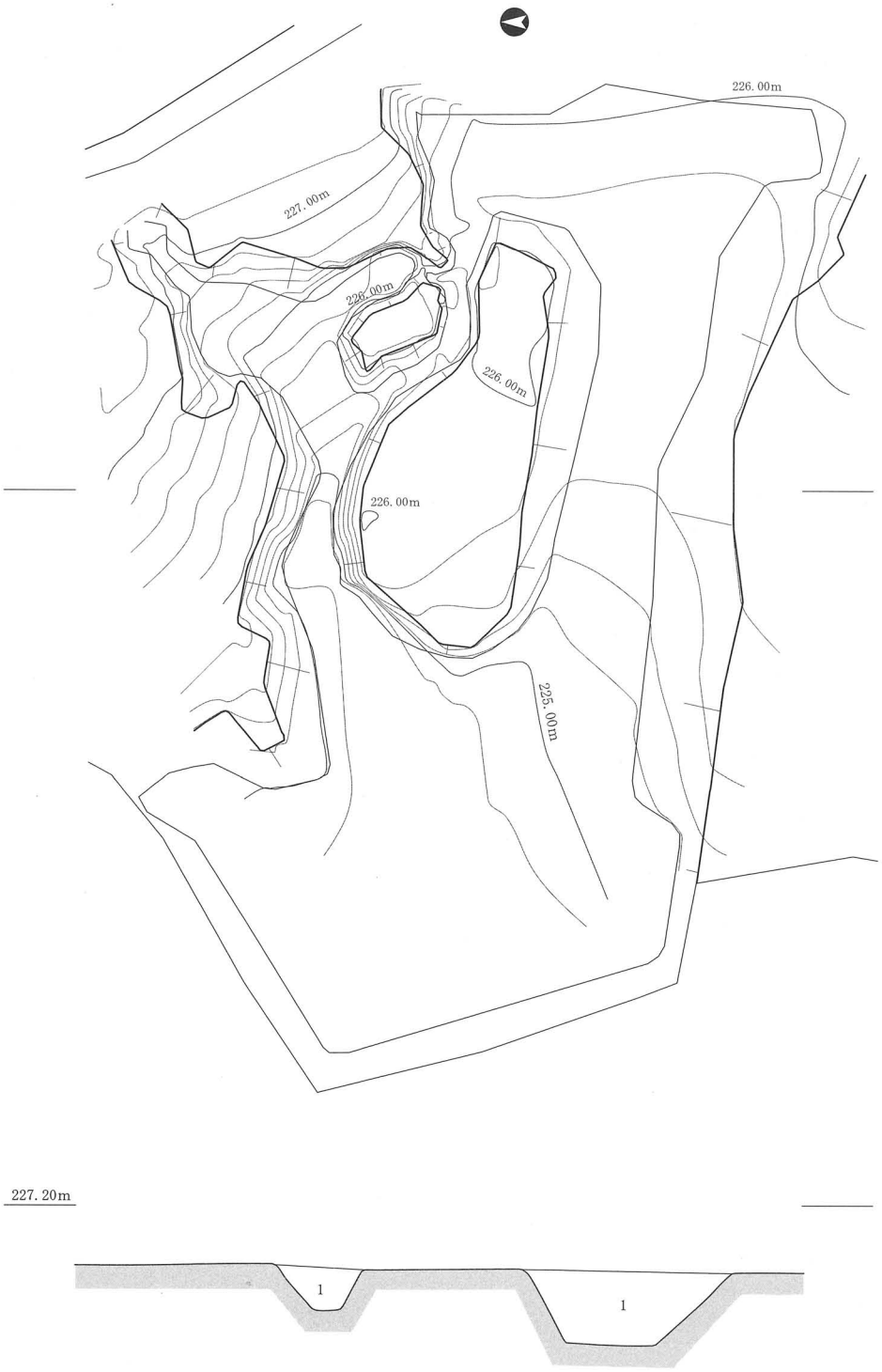
第76図　排滓場跡出土遺物実測図（1）　S=1/4



第77図 排滓場跡出土遺物実測図(2)　S=1/4



第78図　Ⅱ-2区3層下図遺構配置図　S=1/200



1.黒色土（遺物包含層）

0　5m
S=1/150

第79図 SR01実測図　S=1/150

第80図 Ⅱ 2区 3層出土遺物分布図・断面図 S=1/200

括で扱うこととした。結果的には二条の流路跡 SR01(第 78～80)を流れて溜った遺物がこの包含層出土遺物ということになる。

81-1～83-53 は縄文土器である。

1 はポジティブな楕円押型文土器である。楕円がさほど大きくない早期黄島式である。

2～22 は無文の粗製土器である。細片が多く傾きについては不安があるので、口唇部分の形状・調整について観察し、分類する。

口唇部をみると丸く仕上げるもの(2～5・9・13)、面を意識して平坦につくるもの(6～8・10・11・14～16・22)、先尖りのもの（12・17～21）がある。

丸く仕上げるものの調整は、すべて内外面ともナデ調整である。

平坦のものの調整をみると、7・8・10・11・15・16 は内外面ともナデ調整、6 は外面がミガキ、14 は内面に板状工具による擦痕がみられ、22 は内外面とも二枚貝条痕がみられる。

先尖りのものの調整は、12・17・18・20・21 はすべて内外面ともナデ、19 は内外面とも条痕調整であった。

82-23～47、83-52・53 は有文の縄文土器である。

23～25 は口縁内面に沈線と刻目を有する浅鉢である。26～33 は何れも凹線文系土器である。34・35 は口縁端部で強く屈曲する波状口縁をもつ。36・37 は注口または壷形土器の肩部である。36 は外面の巻貝による擬似縄文帯に赤色顔料痕が残る。38・39 は砲弾型粗製深鉢の括れ部分に沈線と刻目をもつもの。42・47 は外面に下弦弧線文を施す。43・44・46 は細めの沈線区画内に擬似縄文を施すもので、注口土器若しくは壷型土器である。83-52 は口縁外面に 3 条の凹線を廻らせ 2 段に刻目を施す。53 は表面の摩滅が著しいが、2 条の浅い弧線文とその内側に僅かに擬似縄文が観察できる。以上は、38・39 を除き何れも後期後半（彦崎 KⅡ式）を中心とする土器である。

48～51 は底部破片で 48・51 は上げ底、49・50 は平底である。51 は弥生土器の底部かもしれない。

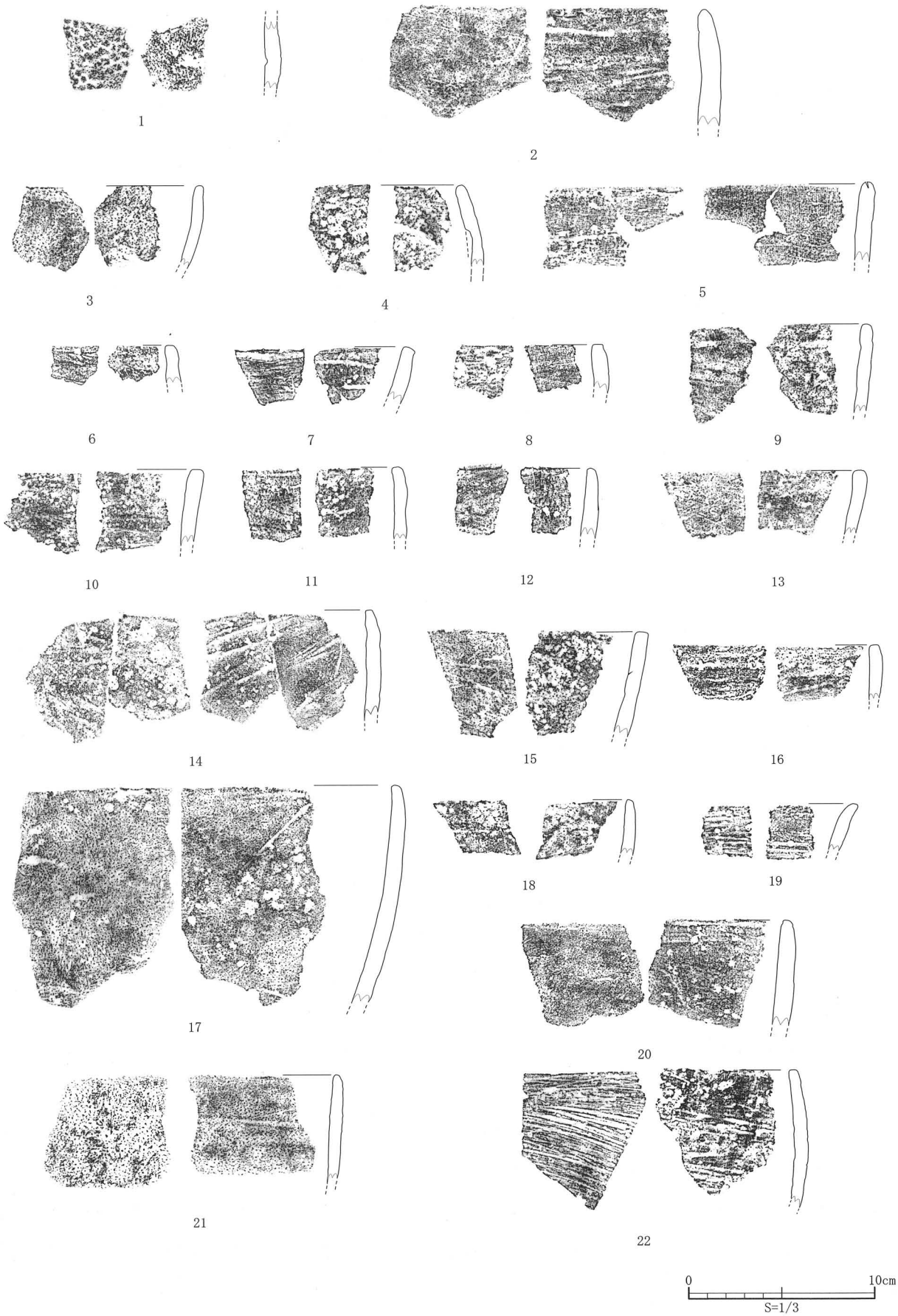
83-54～84-67 は弥生時代後期～古墳時代前半の土器である。

54～62 は何れも複合口縁甕である。54 は器壁が厚く、口縁がやや内傾するものでⅤ-1 様式。55～62 は複合口縁は無文化し総じて口縁端部が外方向へのび、または折曲気味のものもある。61 はやや器壁が厚い。以上は、草田 6・7 期である。

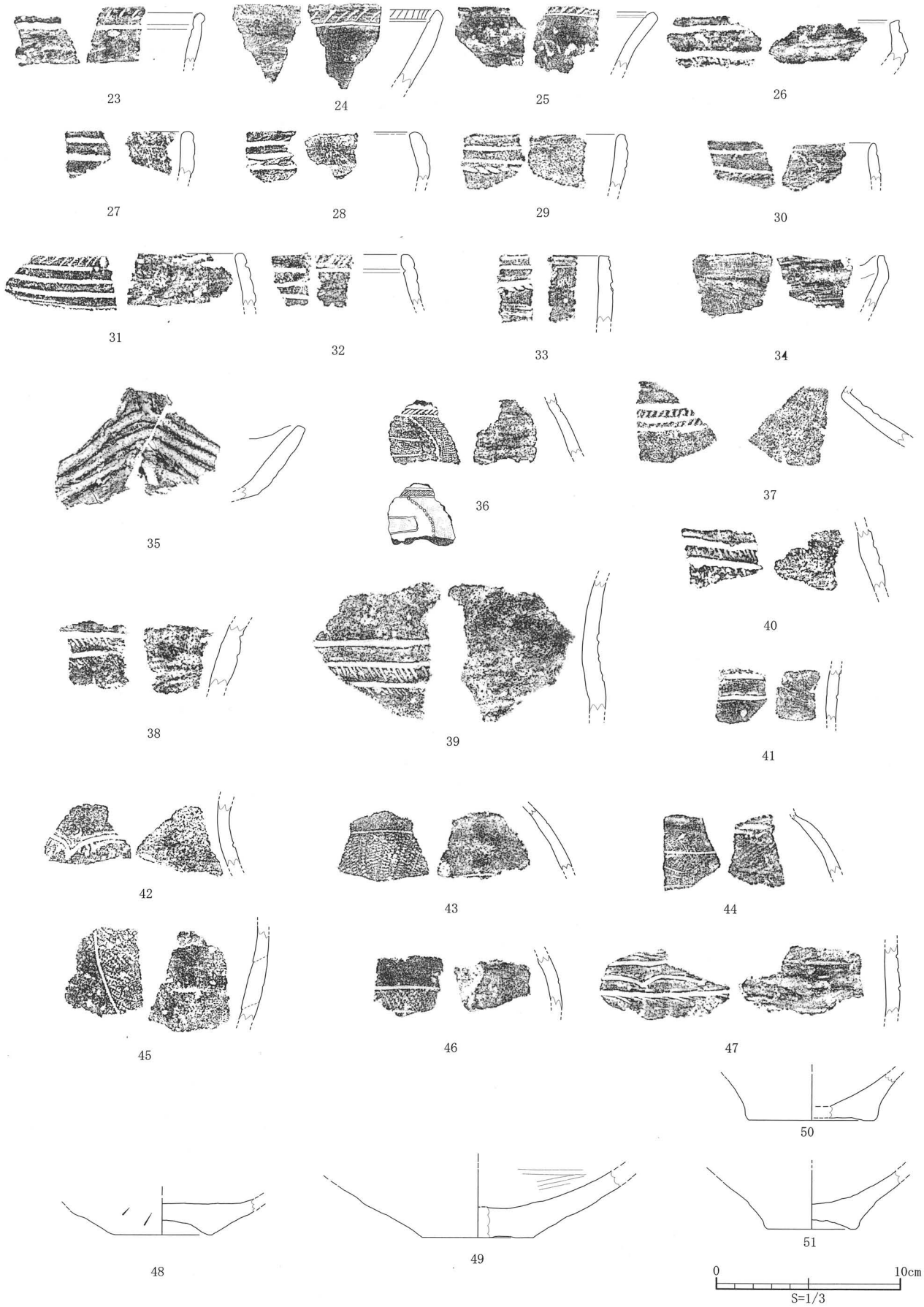
63・64・66・67 は高坏で 63・64・67 は坏部分、66 は接合部分である。65 は細かい擬凹線が廻る器台の脚部である。65・66 とも端部は外方向にのびる。

68 は手捏土器で内外面とも指頭圧痕が顕著に見られる。製塩土器であろうか。69 は甑の把手部分。70 は埦形の手捏土器で、時期不詳。71 は高坏の坏部、72 は外傾する器形で端部で肥厚する鉢である。

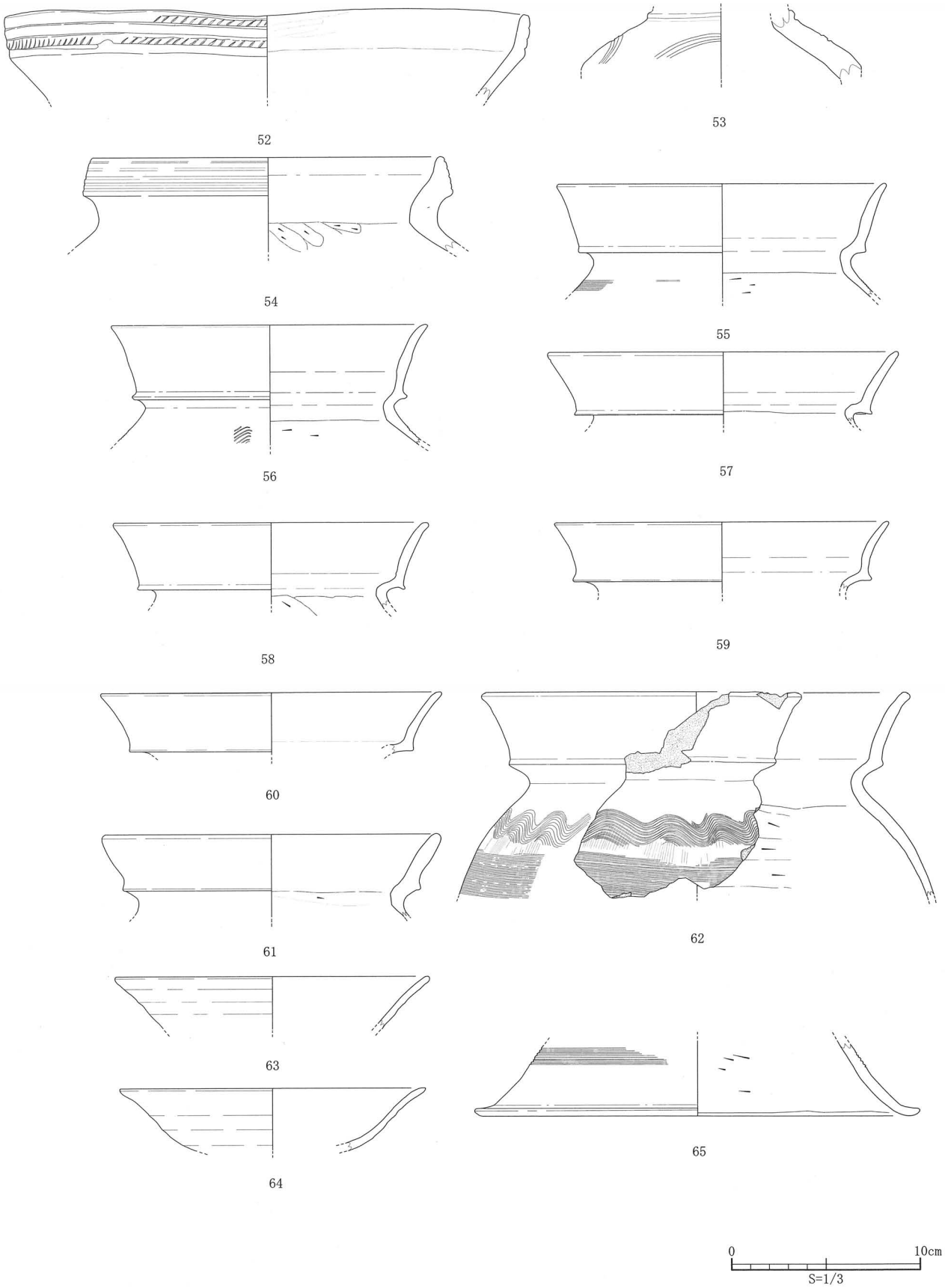
74・75 はずんぐりした印象の低脚坏の脚部で、74 は内面に赤色顔料を塗布する。76 は柱状高台で鎌倉期若しくは平安に遡るかもしれない。[※6]



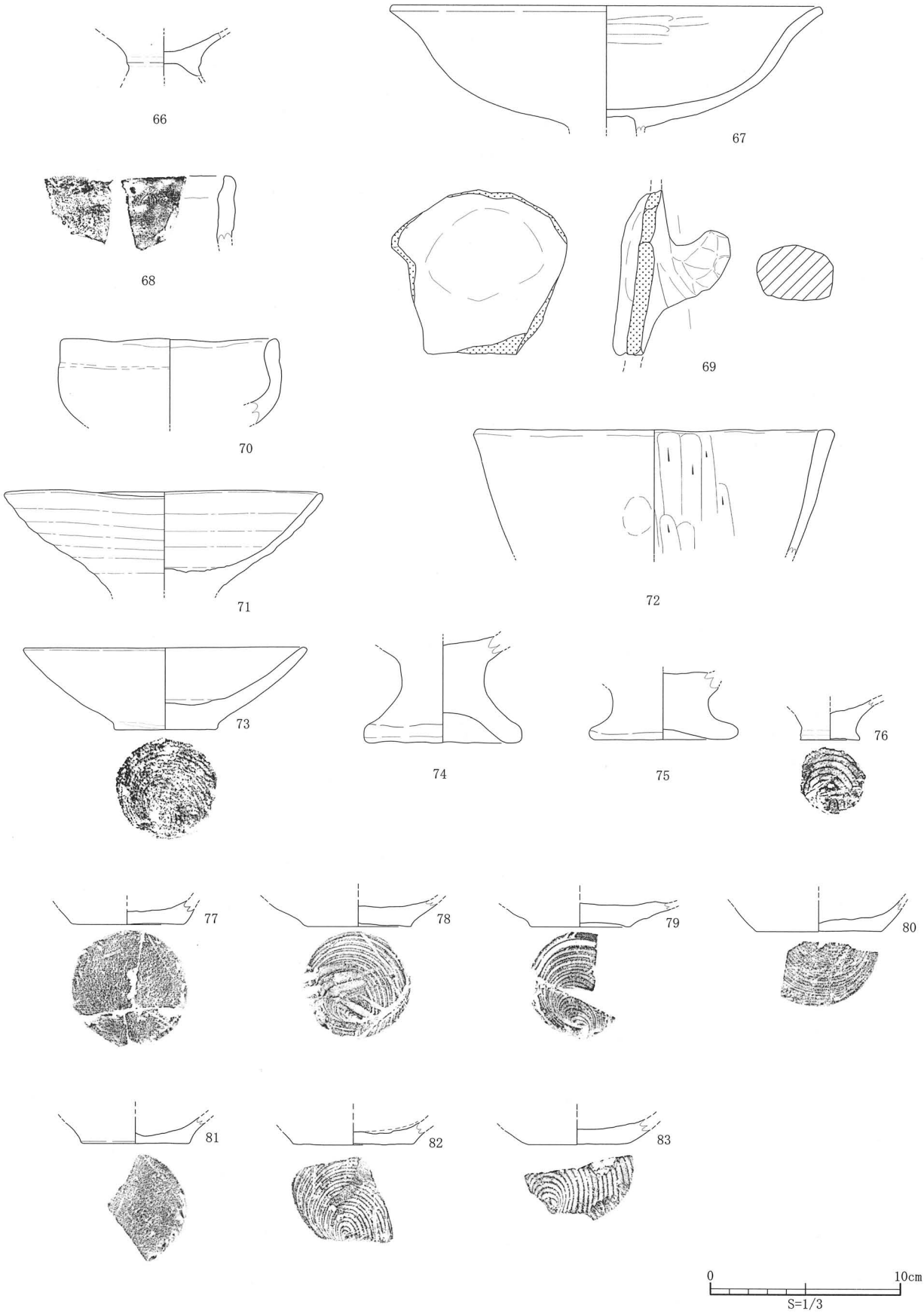
第81図 Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(1) S=1/3



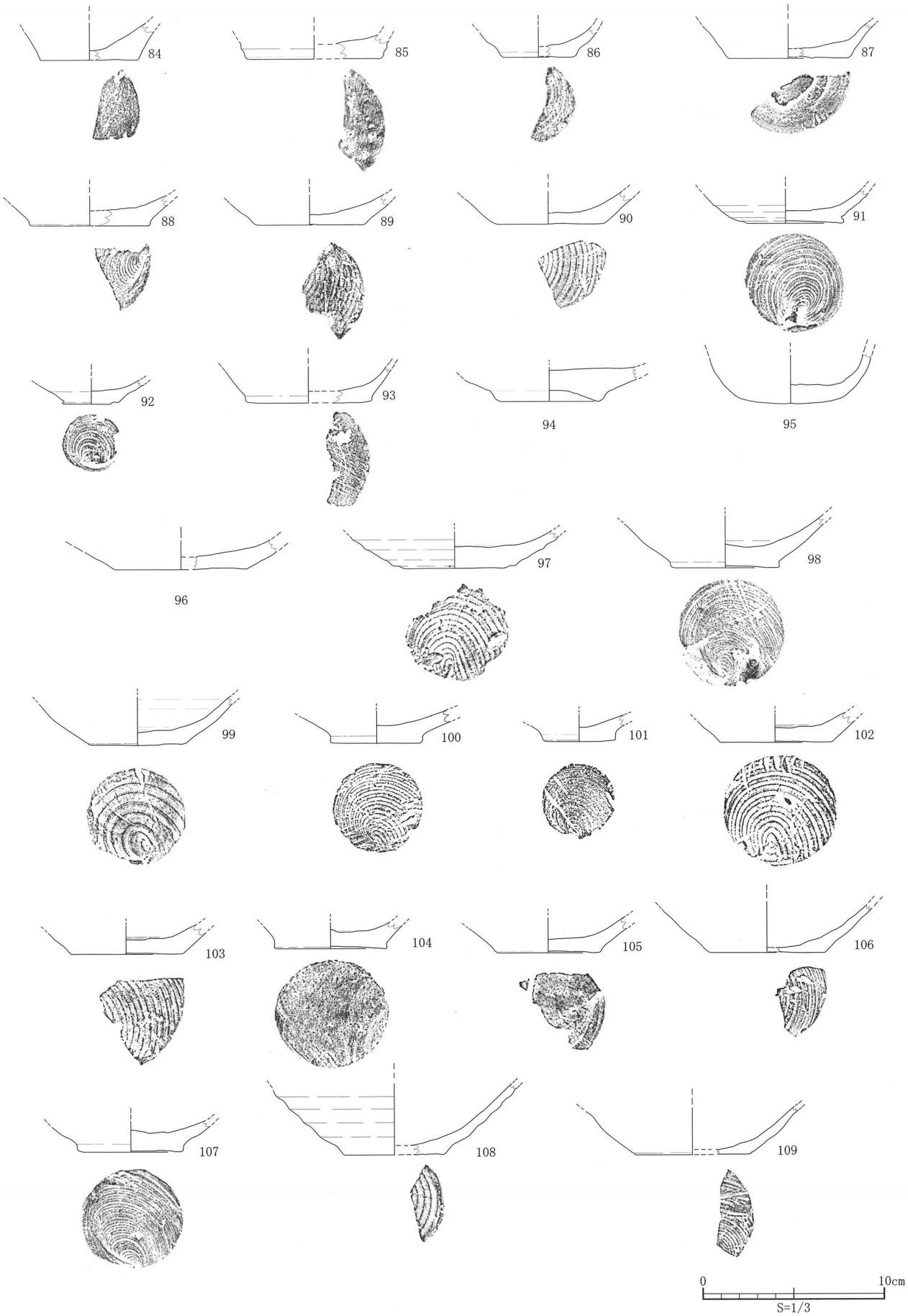
第82図 Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(2) S=1/3



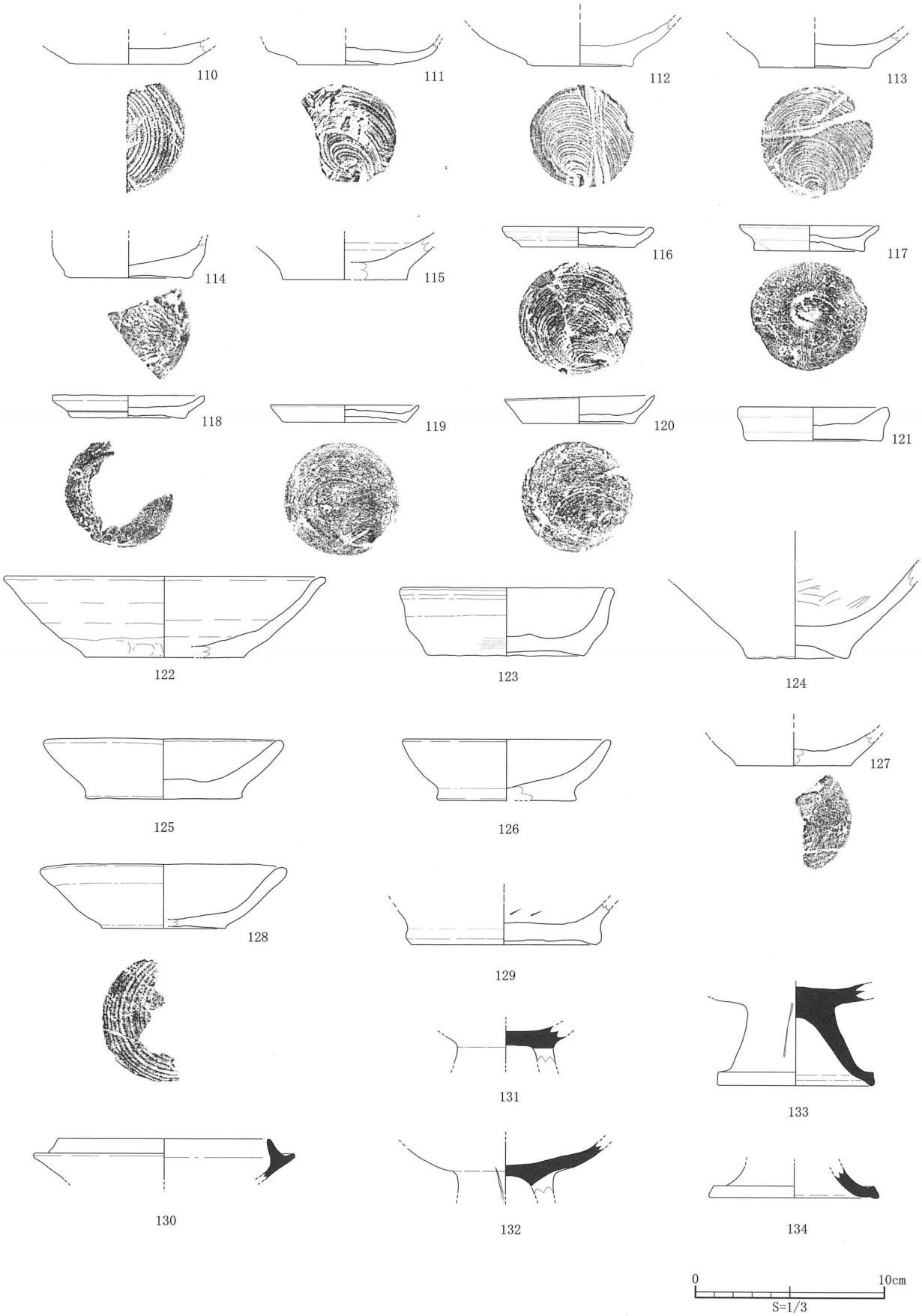
第83図 Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(3) S=1/3



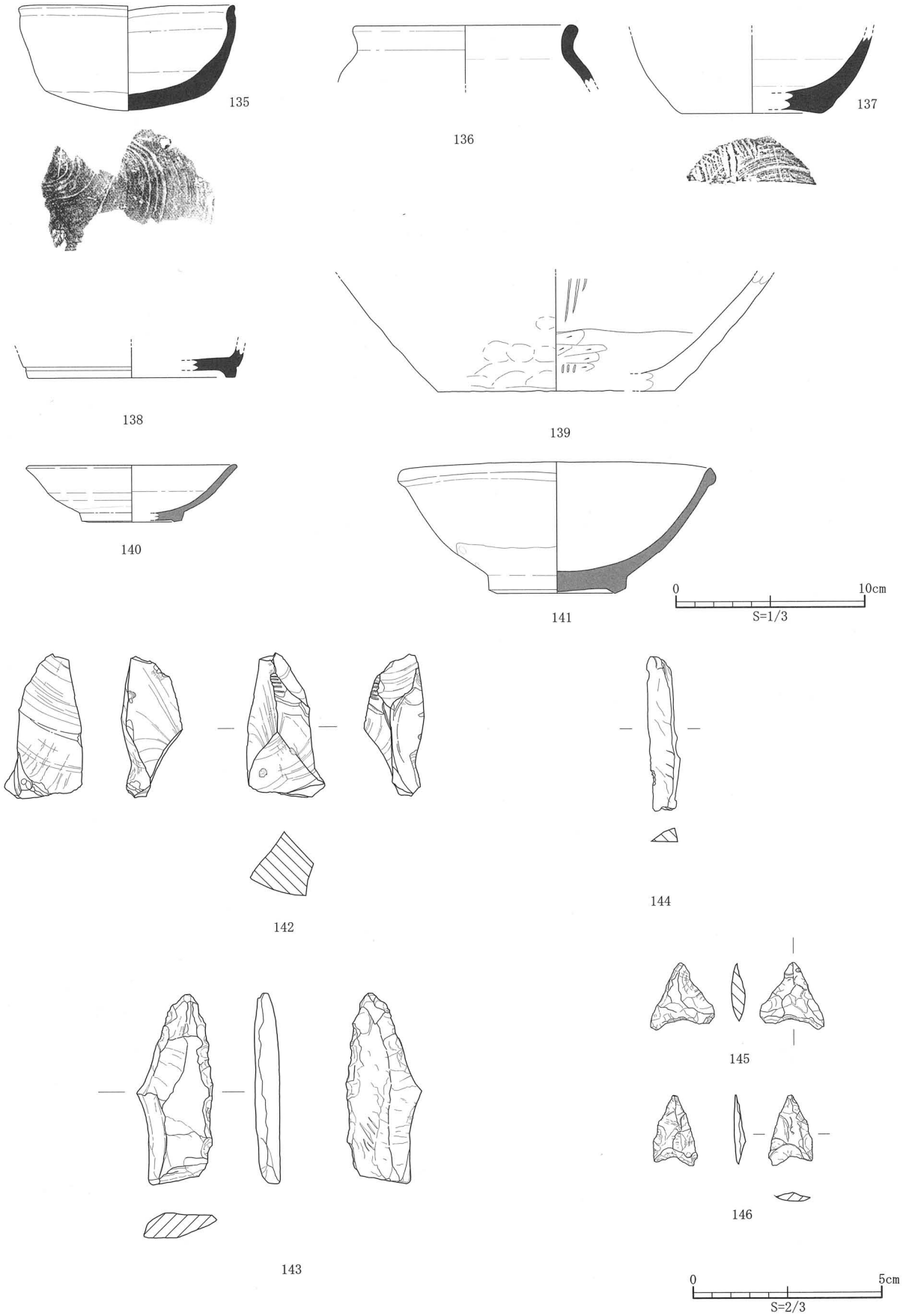
第84図 Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(4) S=1/3



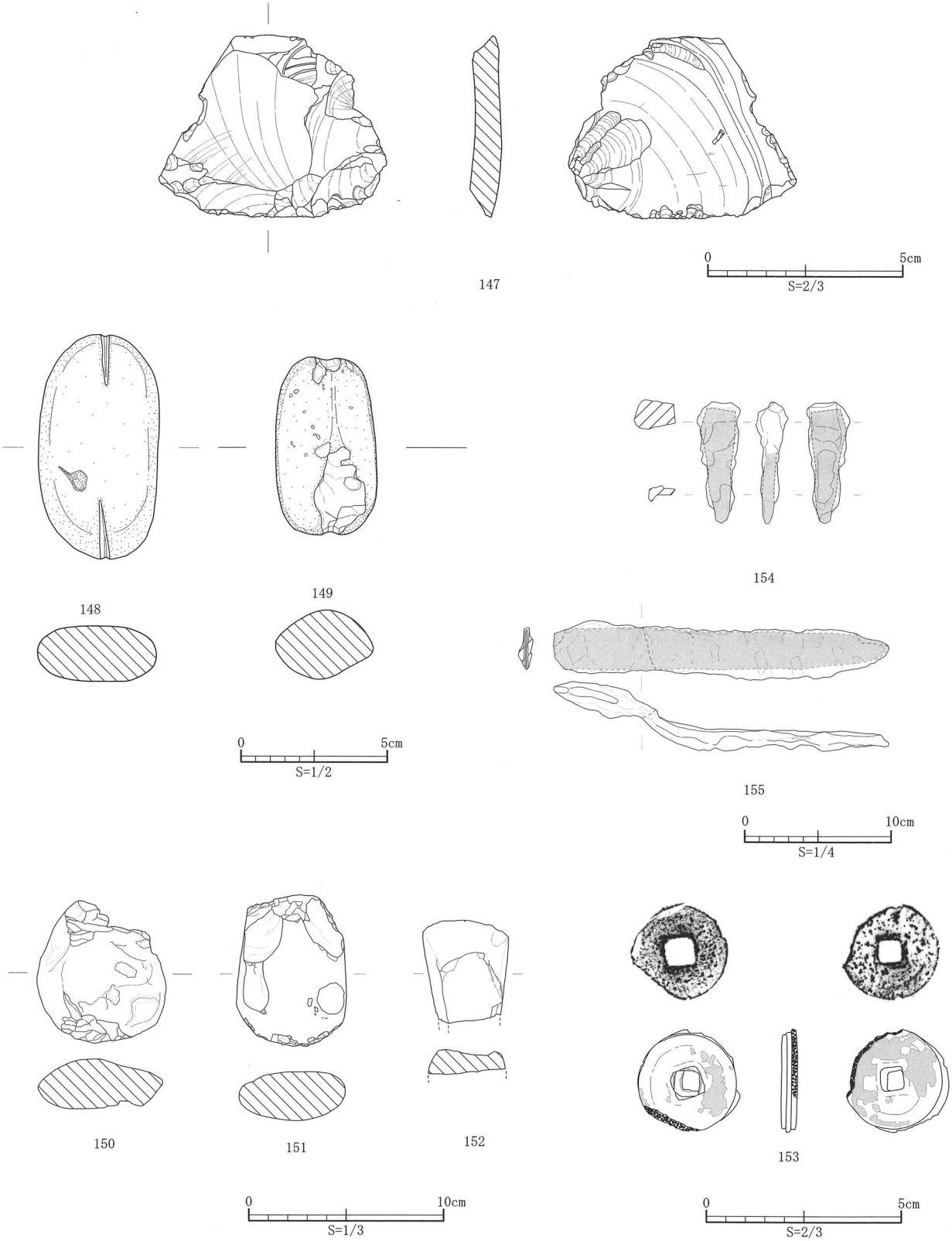
第85図 Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(5)　S=1/3



第86図 Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(6) S=1/3



第87図 Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(7)　S=1/3 S=2/3



第88図 Ⅱ-2区3層出土遺物実測図(8) S=2/3 S=1/2 S=1/3 S=1/4

73・77～86-129 は古代末～中世の土師質土器である。これら坏・皿等のほとんどが平底で、底部切離しが観察できるものについては拓本を掲載している。これらの詳細については観察表を見て頂きたい。

86-130～87-138 は須恵器である。130 は出雲 5 期の坏身、131～134 は高坏で 134 以外は何れも 2 方向透かしをもつ。131 は残存部分から一方は台形状、もう一方は線刻状のものであろう。132・133 は 2 方向とも線刻である。87-135 の坏は底が丸く尖るような形状をしており失敗作なのか全く実用的ではない印象を受ける。静止糸切り痕が顕著である。136・137 は壷の口縁と底部である。138 は高台がつく坏であろうか。底円周に近い部分に短くほぼ垂直気味に高台がつく。律令期のものである。139 は内面が灰褐色、外面が淡黄褐色に熱変色している擂鉢である。140・141 は磁器碗である。

87-142～88-152 は石器である。142 は黒曜石の石核。143 は石錐で先端部分は潰れている。144 は石錐の未製品であろうか。145・146 は石鏃で何れも弱い凹基式である。以上は安山岩製である。88-147 は黒曜石製のスクレーパーで両肩部に抉りを作るものである。148・149 は石錘で、148 は長軸両端に有溝、149 は打欠きを施す。150 は長軸端に人為的剥離が見られ、敲石か石錘と考えられる。151・152 は磨製石斧で、151 は基部が欠損し、152 は片面のみの残存で表面も剥離している。

153 は古銭で錆化・風化が著しく 3 固体が固結した状態で出土した。銭種は不明である。

154・155 は鉄製品で 154 は鏨、155 は幅広であることから刀・包丁の可能性が考えられる。検出時に土圧のためか既にくの字に折曲していたが、元々は曲っていなかったものと考えられる。

第6章　自然科学分析

第1節　御崎遺跡埋蔵文化財調査に伴う土壌分析結果報告書

島根大学生物資源科学部土壌圏生態工学研究室
増永二之・佐藤邦明

1、目的

平成20 年8 月、奥出雲町教育委員会埋蔵文化財調査室より依頼された土壌標本6 点について、遺構の性格を土壌の理化学分析により調べること。

2、方法

土色を観察しその後、一般理化学性分析を行なった。炭素（C）・窒素（N）はヤナコ CNCORDER で測定した。その他の無機元素は土壌を0.1 規定塩酸溶液（土壌：溶液＝5ｇ：30ｍｌ）で2 時間抽出を3 回反復後、100ｍｌとして、抽出液を島津製のICPS2000（高周波プラズマ発光分析装置）及びAAS-680（原子吸光分光光度計）で分析した。

3、結果と考察

サンプルの種類、土色、分析結果を表1～3 に示した。各元素の濃度は105℃乾燥土当たりで計算してある。

本遺跡は、調査前までは水田の下に位置し、山から川方向への扇状地状地形にあるとのことから、灌漑水や増水等による溶脱・集積や浸食作用を受けているものと推測された。

また、遺構外のレベルの高い場所において、近世の製鉄遺構の存在が示唆されており、遺構内には製品を作る時に出る、「かす」や「カナケ」が滲みだしている状況が見受けられたとのことである。

しかし、今回のMo、Zn、Cu の分析結果は、これまで同様な分析手法で行った他の遺跡土壌分析と比較して同じような結果であった。Mn においては、何点か高い値を示すところもあった。調査地が水田下とのことで、還元溶脱したMn が集積したとも推測された。そして、比較的高濃度のCa濃度が、全サンプルを通して検出された。

また、本調査地では、土色の肉眼的観察において黒ぼく土的性質が強く、炭素含量も比較的高い値を示していた。過去に行った、斐伊中山古墳群－西支群－（1994 年３月）の調査結果では、埋葬主体床面の屍体位置同定において、屍体のあったと思われる土壌面から多量の可溶性リン（Ｐ）が検出された。本調査地では、水田や増水による溶脱作用が推測されたが、黒ぼく土の特徴として、アルミニウム活性が高く、高いリン吸着能を示すことより、リンの値を墓坑用途の指標として、ある程度用いることができるのではないかと推察された。

以下に、各サンプルの詳細を示す。

比較用のサンプルであるNo.6 の土壌で非常に高いCa が検出された。Ca は比較的動きやすい元

素でもあり、施肥由来等によって移動集積したものや、農業等による人為的要因が考えられた。また、No.6 では炭素や他の元素も含め比較的高い値を示し、位置的に物質が蓄積しやすい場所であったのではないかと推測された。

No.1（SK18）では、やや方形を呈するプランで、墓坑の可能性が調査時の所見で示唆されていた。分析結果からもCa やP の値が高く、遺体埋設用土坑としての可能性が示唆された。しかし、全サンプル中このサンプルのみ、肉眼的観察より炭が見られ、炭由来のCa やP が検出された可能性も考えられた。本遺跡では、小炭焼きを行った小型の炉が存在しているとのことで、本土坑も炉であったのかもしれない。

No.2（SK24）では、縄文時代後期末ごろの土器が一個体分復元できそうなほど出土し、亡くなった小児等を収めた棺として使用されたのではないかと、所見で推察されていた。しかし、分析結果からは、Ca、P ともに低い値を示しており、遺体埋設用土坑の可能性は否定された。所見で水流れの吹きだまり状の流れのゆるい所に土器がたまったものと推察されており、強い溶脱作用を受けたことも考えられた。

No.3（SK15）では、No.1（SK18）と同様に、やや方形を呈するプランで、墓坑の可能性が調査時の所見で示唆されていた。分析結果からもCa やP の値が高く、遺体埋設用土坑としての可能性が示唆された。No.1（SK18）とは異なり、肉眼では炭は見られなかった。

No.4（SK23）は、No.1（SK18）、No.3（SK15）に比べ、やや小型であり楕円形プランである。分析結果としては、No.5（SK23・付近土）と比較しても大きな差がなく、Ca、P の値も低いことから、遺体埋設用土坑の可能性は低いと考えられた。

表1　土壌サンプル

No.	遺構名・ポイント		
1	SK18	サンプルNo15	071114
2	SK24		080714 泥サンプル　ミサキ2区
3	SK15	サンプルNo11	071114
4	SK23	サンプルNo1	080514 Ⅰ区3層
5	SK23	付近土	080514 Ⅰ区3層、サンプル2
6	周辺用	サンプルNo5	Ⅰ区

表2　標本土壌土色

No.	乾土		湿土	
1	黒褐	10YR3/1	黒	7.5YR1.7/1
2	黒褐	10YR3/2	黒	7.5YR1.7/1
3	灰黄褐	10YR4/2	黒	7.5YR1.7/1
4	黒褐	10YR3/1	黒	7.5YR1.7/1
5	黒褐	10YR3/2	黒	7.5YR1.7/1
6	黒褐	10YR3/1	黒	7.5YR1.7/1

表3　御崎遺跡土壌分析結果（水分含量、ＴＣ・ＴＮ、0.1規定塩酸抽出法）

No.	水分含量 (%)	TC (%)	TN (%)	C/N ratio	Ca	Mg	K	Na	S	Mn	Mo	Zn	Cu	P
						(cmol(+)/Kg)					(mg/kg)			
1	28.1	3.29	0.10	33.2	22.83	2.75	0.17	0.19	53.9	88.0	12.1	6.0	1.4	572.7
2	26.5	2.62	0.15	17.6	4.45	0.62	0.23	0.10	17.8	28.2	9.4	2.4	0.2	25.6
3	22.4	2.27	0.12	19.4	12.34	2.38	0.25	0.16	33.2	36.1	8.6	8.7	3.2	369.8
4	25.9	2.51	0.13	19.3	8.09	1.17	0.16	0.13	25.4	19.7	10.8	2.0	0.1	96.3
5	25.8	2.94	0.16	18.6	8.34	1.02	0.16	0.16	24.0	30.8	12.2	2.4	0.2	155.1
6	20.3	4.35	0.20	21.7	86.77	3.07	0.29	0.29	43.0	59.5	12.8	3.2	0.6	190.2

第2節　放射性炭素年代測定結果報告書

（株）地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

未補正14C年代 (y BP)　：（同位体分別未補正）14C 年代　"measured radiocarbon age"
試料の 14C／12C 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前（BP）かを計算した年代。

14C年代 (y BP)　：（同位体分別補正）14C 年代　"conventional radiocarbon age"
試料の炭素安定同位体比（13C／12C）を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
14C／12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料のδ13 C値を−25（‰）に基準化することによって得られる年代値である。
（Stuiver,M. and Polach,H.A.(1977) Discussion:Reporting of 14C data. Radiocarbon, 19 を参照のこと）
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

δ 13C (permil)　：この安定同位体比は、下式のように標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表現する。

$$\delta\ ^{13}C\ (‰) = \frac{(^{13}C/^{12}C)[試料] - (^{13}C/^{12}C)[標準]}{(^{13}C/^{12}C)[標準]} \times 1000$$

ここで、13C／12C [標準] ＝ 0.0112372である。

暦 年 代　：過去の宇宙線強度の変動による大気中14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。　具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴのU-Th年代と14 C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。

使用したデータセット　：　Intcal04
Intcal04: Calibration Issue of Radiocarbon 46(3), 2004)
（海洋性の試料に対しては、Marine04を使用）

較正曲線のスムース化に用いた理論
A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A.S., Vogel,J.C.,1993,Radiocarbon 35(2), 317-322

測定方法などに関するデータ

測定方法　AMS　：　加速器質量分析
Radiometric　：　液体シンチレーションカウンタによるβ−線計数法

処理・調製・その他　：　試料の前処理、調製などの情報

前処理　acid-alkali-acid：　酸 − アルカリ − 酸洗浄
acid washes：　酸洗浄
acid etch：　酸によるエッチング
none：未処理

調製、その他
Bulk-Low Carbon Material：　低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction：　骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction：　木材のセルローズ抽出

Extended Counting：　Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関　BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, Fl, U.S.A 33155

C14年代測定結果

奥出雲町教育委員会 **様** No.2896

試料データ	未補正14C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	δ 13C(permil)	14C年代(y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta- 248318	900 ± 40	-26.0	880 ± 40
試料名 (33483) 排サイ1			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 248319	2990 ± 40	-20.9	3060 ± 40
試料名 (33484) P-90			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など organic sediment		acid washes	
Beta- 248320	660 ± 40	-26.7	630 ± 40
試料名 (33485) SG01			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 248321	430 ± 40	-24.8	430 ± 40
試料名 (33486) SK06			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 248322	440 ± 40	-25.4	430 ± 40
試料名 (33487) SK 07			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-26:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-248318**

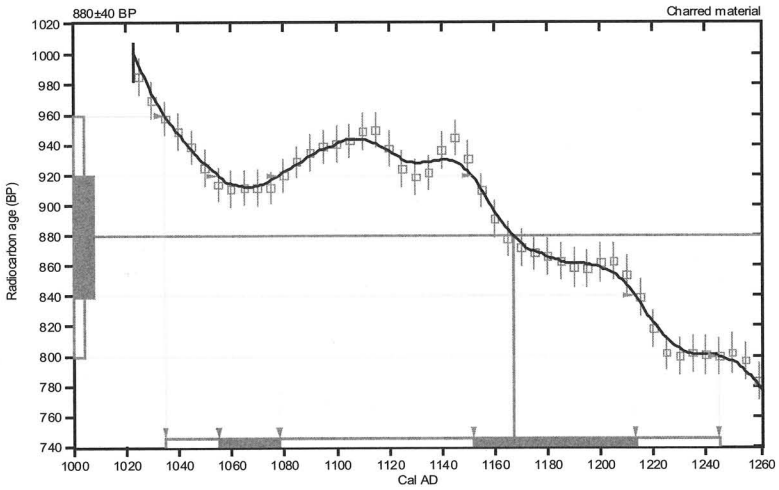
Conventional radiocarbon age: **880±40 BP**

2 Sigma calibrated result: (95% probability) **Cal AD 1040 to 1240 (Cal BP 920 to 700)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 1170 (Cal BP 780)

1 Sigma calibrated results: (68% probability) Cal AD 1060 to 1080 (Cal BP 900 to 870) and Cal AD 1150 to 1210 (Cal BP 800 to 740)



References:

Database used

INTCAL04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-20.9:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-248319**

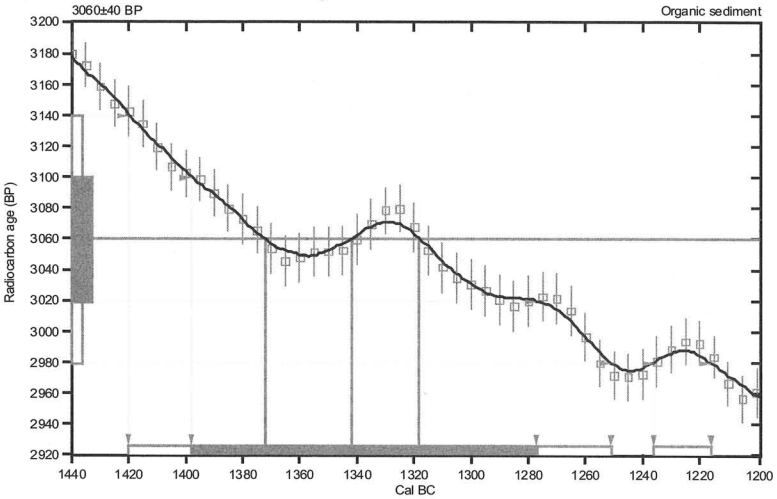
Conventional radiocarbon age: **3060±40 BP**

2 Sigma calibrated results: **Cal BC 1420 to 1250 (Cal BP 3370 to 3200) and**
(95% probability) **Cal BC 1240 to 1220 (Cal BP 3190 to 3170)**

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 1370 (Cal BP 3320) and
Cal BC 1340 (Cal BP 3290) and
Cal BC 1320 (Cal BP 3270)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal BC 1400 to 1280 (Cal BP 3350 to 3230)



(Variables: C13/C12=-26.7:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-248320**

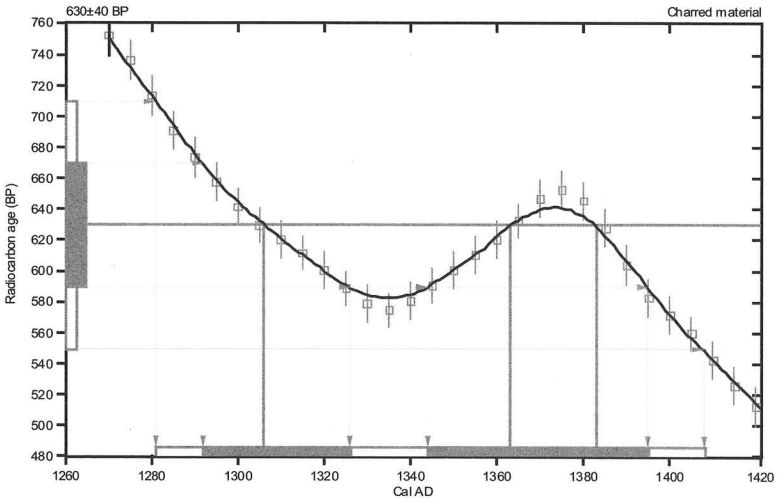
Conventional radiocarbon age: **630±40 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal AD 1280 to 1410 (Cal BP 670 to 540)**
(95% probability)

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 1310 (Cal BP 640) and
Cal AD 1360 (Cal BP 590) and
Cal AD 1380 (Cal BP 570)

1 Sigma calibrated results: (68% probability) Cal AD 1290 to 1330 (Cal BP 660 to 620) and
Cal AD 1340 to 1400 (Cal BP 610 to 560)



References:

Database used

INTCAL04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-24.8:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-248321**

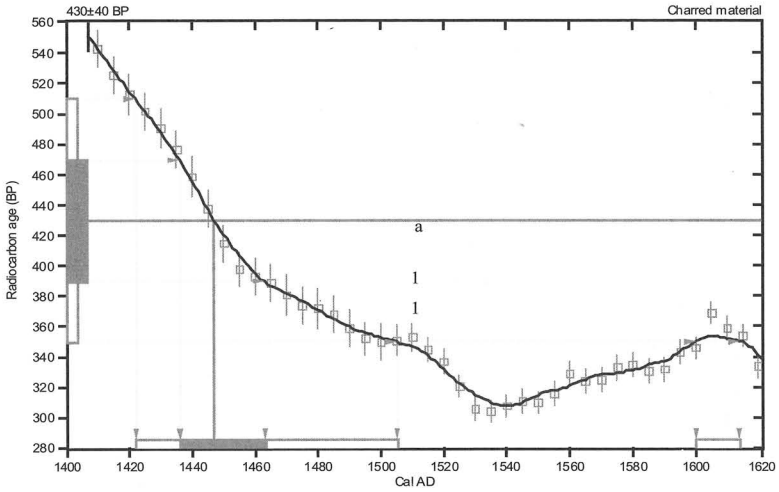
Conventional radiocarbon age: **430±40 BP**

2 Sigma calibrated results: **Cal AD 1420 to 1500 (Cal BP 530 to 440) and**
(95% probability) **Cal AD 1600 to 1610 (Cal BP 350 to 340)**

Intercept d ta

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 450 (Cal BP 500)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal AD 440 to 1460 (Cal BP 510 to 490)



(Variables: C13/C12=-25.4:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-248322**

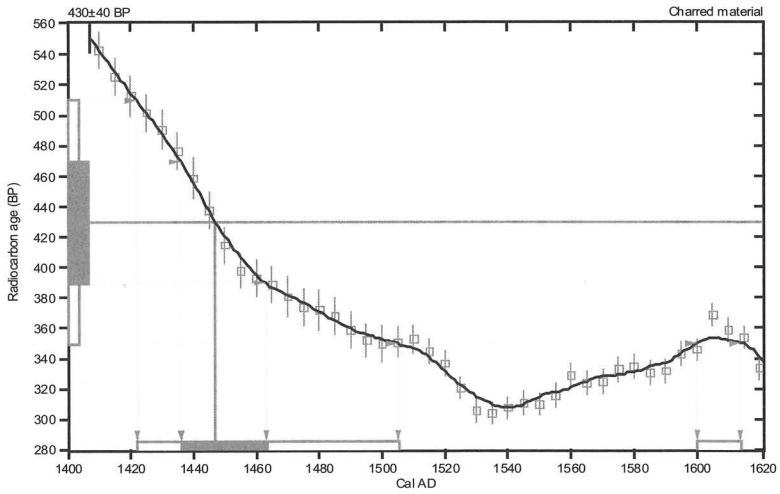
Conventional radiocarbon age: **430±40 BP**

2 Sigma calibrated results: **Cal AD 1420 to 1500 (Cal BP 530 to 440) and**
(95% probability) **Cal AD 1600 to 1610 (Cal BP 350 to 340)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 1450 (Cal BP 500)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal AD 1440 to 1460 (Cal BP 510 to 490)



References:

Database used

INTCAL04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

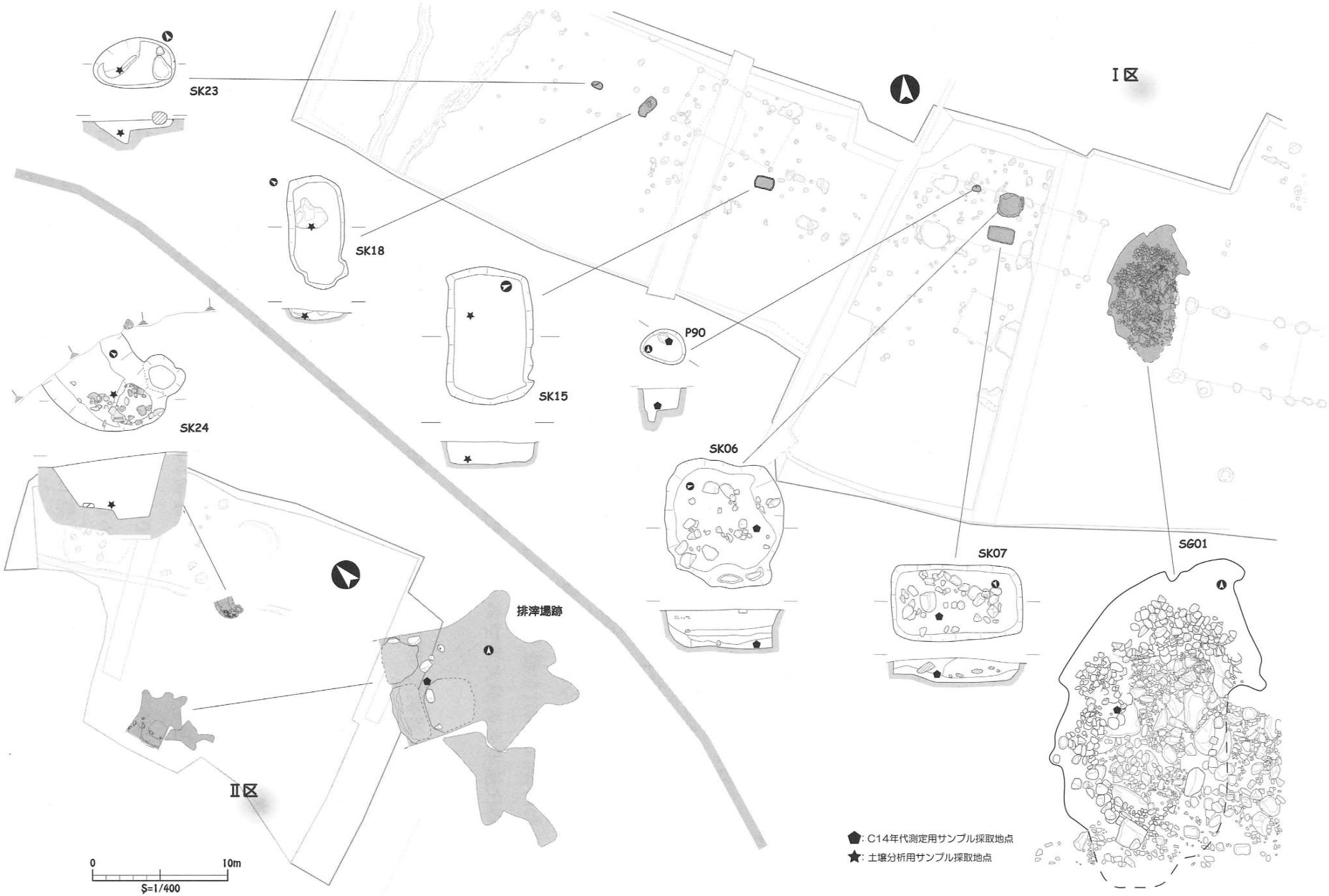
Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com



第**89**図 自然科学分析サンプル採取遺構図

第7章　まとめ

御崎遺跡の調査では縄文時代、弥生時代後半～古墳時代、中近世にわたる遺構・遺物が出土した。以下時代ごとに概要を記し、まとめとする。

【縄文時代】

本遺跡で最も古い遺物は早期の黄島式である。Ⅱ-2区3層(黒色土包含層)中からの出土であった。この時期の遺構は確認できなかったが、僅かながら遺跡の山手で人々の存在が想われる。前～中期の遺構・遺物とも認められず、後期中葉～晩期にかけて遺物量が増える。年代測定で、P90が晩期の数値を示しているが、建物を復元できなかった。また、SK24は土壌分析の結果、数値的には墓としての性格は否定されているが、遺構立地が、SR01で切られ幾度となく山手からの土砂を被る場所であることから、完全には土器埋設遺構の可能性を否定できない。

【弥生時代後半～古墳時代】

この時期の遺構としてⅡ区のSI01、SD07、Ⅰ区のSD01・SD02・SD06が挙げられる。SI01は弥生時代終末期の建物、SD01・SD02・SD06・SD07は埋土遺物から弥生時代～古墳時代の溝跡と考えられる。このうち、SD01はやや古相、SD07はやや新相を呈す。遺物は複合口縁の擬凹線がなくなる以降のもの(草田4期～7期)が多く見られた。KD01は竪穴建物の一部と思われ、この時期である可能性がある。また、量的には僅かであるが、特にⅠ区で古墳時代後期の遺物、須恵器蓋坏・高坏・耳環なども出土している。これらは調査区外からの流入であり、Ⅰ区北側の微高地に集落、横穴墓の存在を示唆している。土器群1も古墳時代後半の遺構である。Ⅱ区のSR01は自然河道であるが、形成された時期は、SR01を覆う3層黒色土(分層できなかった)下層からの出土遺物は弥生時代終末期～古墳時代前半ものが大半であったので、この時期があてられる。

【中近世】

Ⅰ区でSG01(池状遺構)、SB01～SB07(建物跡)、粘土貼土坑(SK01～03)、集石土坑(SK04・10～12・23・26、SX07・12・27・42)、埋土に炭を包含する土坑(SK16・18、SX29・43・49)、集石と炭を包含する土坑(SK05～08・17、SX36)が確認された。SG01は遅くとも14世紀後半から存在しており、池であるなら周辺に建物の存在を想定するところであるが、SB01～07は詳細な時期は不明であるが、出土遺物からSB02は戦国時代以前SB05は近世初頭以前と考えられる。SB01～07は地形(等高線)に沿うように、またほぼ同様な規格をもつことからさほど時期幅はないと考えられる。また、SG01を川辺の水溜施設とするなら、ごく近くに建物が存在しなくてもいいのかもしれない。SG01とSB群の同時期の存在は不明瞭である。Ⅰ区では多くの土坑がみつかっているが、大半は近世のものであろう。粘土貼土坑は水溜用の桶を埋めたものである。使用しなくなった土坑に石を詰め込んだと考えられるのが、SK04・SX12である。集石と炭を含む土坑でSX36等は自然の大石も利用し麻蒸しを行った跡と考えられる。SK06・07等は小炭焼き炉であろうか。以上のような土坑は詳細年代は不明であるが、このような性格の遺構が、ダム関連(尾原・志津見含めて)の調査で報告され

事例が増えてきている。川辺において不変的で日常的な遺構であるのだろう。

Ⅱ区では3層黒色土中に土師質土器を多量に包含していた。中世前半の遺構は調査区内には存在しないが、やはり調査区外の山手東北方向に生活の場があったのだろう。また、Ⅱ区では製鉄関連遺物が多く、炉本体は消失しており存在しなかったが、付随施設である排滓場跡を検出した。周辺には羽口、椀形滓、流出孔滓等が認められ、再結合滓には僅かに鍛造剥片が確認できた。これらは年代測定から11世紀中～後半の、精錬鍛冶に伴う遺構・遺物群と考えられる。[※7]

以上、御崎遺跡を時代を追い概観し不明な点も多いが、多少の消長はあるものの遺跡周辺での祖先の生活の様子の一端を垣間見ることができた点は貴重であった。

最後に調査員の力量不足で周辺の方々にご迷惑をかけ、また多くの方に協力していただいたことを、ここにお詫びし、感謝したい。

《註》

※1　～※3・※6をはじめ、陶磁器については西尾克己氏に御教示いただいた。

※4・※5・※7をはじめとする製鉄関連遺物については、東山信治氏に御教示いただいた。

《参考文献》

島根県教育委員会　『九景川遺跡　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』2008

小林達雄編　『縄文土器大観1～4』1988～1989

島根県教育委員会　『板屋Ⅲ遺跡　志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』1998

島根県教育委員会　『家の後Ⅰ遺跡・垣ノ内遺跡　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』2003

島根県教育委員会　『家ノ脇Ⅱ遺跡・原田遺跡1区・前田遺跡4区　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4』2004

島根県教育委員会　『北原本郷遺跡1　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7』2005

島根県教育委員会　『原田遺跡(3)　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12』2008

仁多町教育委員会　『暮地遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』2004

奥出雲町教育委員会　『円満寺遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』2006

奥出雲町教育委員会　『寺宇根遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』2008

大谷晃二　『出雲地域の須恵器の編年と地域色　島根考古学会誌第8集』1994

松山智弘　『小谷式再検討-出雲平野における新資料から-　島根考古学会誌第17集』2000

島根県教育委員会　『下山遺跡(2)－縄文時代遺構の調査－　志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』2002

松本岩雄　『出雲・隠岐地域　弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編　木耳社』1992

全景写真

御崎遺跡 調査終了時（真上から）

表2　遺構 計測表(SB・SI・SG・SD)

遺構名	構造	規模 柱間	規模 寸法(m)	柱間隔 妻側(m)	柱間隔 平側(m)	面積(㎡)	主軸方向	出土遺物	時期	備考
SB01	側柱建物	1間×3間	4.78×6.94	4.78	不均等	34.43	E−22° −S	弥生土器		
SB02	側柱建物	1間×6間	4.34×13.32	4.34	不均等	55.42	E−23° −S			
SB03	側柱建物	1間×5間	5.51×12.83	5.51	不均等	70.26	E−19° −S	古式土師器		
SB04	側柱建物	1間×1間	2.46×5.51	2.46	5.51	13.86	N−18° −E (E−16° −S)			
SB05	側柱建物	1間×3間	5.50×7.55	5.50	2.34	39.38	E−27° −S	古式土師器、陶器、スラグ		
SB06	側柱建物	(2間×2間)	3.00×3.45	1.50	不均等	10.05	E−33° −S	古式土師器		
SB07	側柱建物	2間×4間	4.12×8.11	2.05	不均等	32.96	E−36° −S			

遺構名	形態	最大長(m)	最大幅(m)	深さ(m)	柱数	面積(㎡)	平均柱間距離(m)	出土遺物	時期	備考
SI01	隅丸方形か	5.31	4.98	0.26	5	(23.2)	(2.58)	古式土師器		4つのPitの中央に5つ目のPit

遺構名	平面形	規模(m) 長径	規模(m) 短径	深さ(m)	面積(㎡)	出土遺物	時期	備考
SG01	不整長円形	7.45	6.37	1.40以上	38.6	弥生土器、土師器、陶磁器		掘り方は同一平面のものでない

遺構名	区	層位	幅(m)	深さ(m)	長さ(m)	主軸方向	出土遺物	時期	備考
SD01	Ⅰ	4	0.40〜1.62	0.10〜0.32	45+	N−46° −W	弥生土器、古式土師器他	弥生末〜古墳初	
SD02	Ⅰ	4	0.70〜1.43	0.45	16.5+	N−48° −E	弥生土器、古式土師器他	弥生末〜古墳初	
SD03	Ⅱ-1	2	0.50〜2.70	0.48	2.85+	N−57° −E			
SD04									消滅
SD05									消滅
SD06	Ⅰ	4	0.90〜1.20	0.70	17.5+	N−27° −E	弥生土器、古式土師器他	弥生末〜古墳初	
SD07	Ⅱ-2	3	0.47〜0.63	0.46	19.1+	N−33° −W	須恵器他	古墳後期か	

表3　遺構 計測表(SK)

遺構名	区	検出面	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	遺構の種類	遺構の時期	備考
SK01	Ⅰ	1層下面	円形	0.86	0.84	0.40	古式土師器、陶磁器	埋桶遺構か		縁に粘土張り　集石状態で検出
SK02	Ⅰ	1層下面	隅丸五角形	1.10	1.06	0.36		埋桶遺構か		縁に粘土張り
SK03	Ⅰ	1層下面	不整形	1.31	1.00	0.40		埋桶遺構か		縁に粘土張り
SK04	Ⅰ	1層下面	円形	(1.10)		0.30	古式土師器、陶器			集石状態で検出　SX12と切合い
SK05	Ⅰ	1層下面	不整形	2.24	1.60	0.74	古式土師器、須恵器、陶器			
SK06	Ⅰ	3層	隅丸方形	1.80	1.74	0.54	須恵器、磁器			床面に川石　SX30と切合う
SK07	Ⅰ	3層	隅丸長方形	1.97	1.16	0.37	古式土師器			覆土に川礫を含む
SK08	Ⅰ	3層	不整長方形	1.40	0.98	0.27				床面縁に川石　SK09と切合う
SK09	Ⅰ	3層	不整形	1.10以上	0.78	0.16	磁器、スラグ			SK08と切合う
SK10	Ⅰ	3層	不整形	1.80	1.40	0.31				覆土に小礫を含む
SK11	Ⅰ	3層	卵形	2.24	1.84	0.14	須恵器、陶磁器			検出表面に集石
SK12	Ⅰ	3層	方形か	2.60	1.60以上	0.42	土師質土器			川石・山石を含む
SK13	Ⅰ	3層	不整五角形	0.67	0.50	0.28				
SK14	Ⅰ	2層	不整形	1.20	0.68	0.40	古式土師器			二段掘状
SK15	Ⅰ	2層	略長方形	1.46	0.92	0.24	古式土師器、磁器			
SK16	Ⅰ	2層	長円形	1.64	0.88	0.15	古式土師器、磁器			
SK17	Ⅰ	2層	不整形	1.79	1.07	0.32	弥生土器、陶器			二段掘状　覆土に角礫、焼石、炭を含む
SK18	Ⅰ	2層	不整長方形	1.66	0.80	0.14	縄文土器			二段掘状　炭を多く含む
SK19	Ⅱ-1	2層	不整形	1.54	0.88	0.44				
SK20	Ⅱ-1	2層	不整形	2.54	2.14	0.37				床面に川石　鉄分の沈着多い
SK21	Ⅱ-1	2層	不整五角形	0.70	0.63	0.24	スラグ			表面に川石6個
SK22	Ⅱ-1	2層	不整形	0.64	0.43	0.20	須恵器			
SK23	Ⅰ	2層	楕円形	0.86	0.54	0.25	古式土師			
SK24	Ⅱ-2	2～3層	不整形	1.60以上	1.40	0.96	縄文土器	埋設土器か	縄文晩期	
SK25	Ⅱ-2	2層	不整五角形	0.88	0.80	0.53				二段掘状
SK26	Ⅰ	1層下面	不整三角形	0.84	0.79	0.22				縁、覆土中に川石

表4　遺構 計測表(SX)

遺構名	区	検出面	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	遺構の種類	遺構の時期	備考
SX01	I							消滅		
SX02	I	3層	達磨形	1.38	0.90	0.27	スラグ、古式土師器	小炭焼跡か		炭を多く含む
SX03	I	3層	不整円形	1.08	0.90	0.42	土師器			
SX04	I	3層	隅丸菱形	1.40	1.07	0.59	土師器			覆土に小礫12個含む
SX05	I	3層	不整五角形	1.42	0.64	0.40	古式土師器			粘土、炭、礫を含む
SX06	I							消滅		
SX07	I	3層	不整形	1.62	0.90	0.37	古式土師器、陶器			二つの土坑の切合いか
SX08	I	3層	不整形	0.56	0.30	0.13				
SX09	I							消滅		
SX10	I							消滅		
SX11	I							消滅		
SX12	I	1層下面	円形	1.48	1.26	0.30				SK04と切合い　集石状態で検出
SX13	I	3層	不整形	1.32	1.10	0.50				土坑縁に厚く粘土混り土
SX14	I	3層	不整長円形	1.27	0.73	0.52				覆土中に川礫
SX15	I	3層	不整五角形	0.82	0.51	0.32				二段堀状
SX16	I	3層	楕円形	0.76	0.60	0.37				
SX17	I	3層	不整五角形	0.82	0.68	0.17				床面に平石
SX18	I	3層	不整形	1.30	0.72	0.55	鉄器			
SX19	I	3層	楕円形	1. 20	0.92	0.62				
SX20	I	3層	不整形	0.44	0.39	0.32				二段堀状
SX21	I	3層	不整方形	0.62	0.51	0.31				角礫の集石
SX22	I	3層	不整形	0.76	0.46	0.28				
SX23	I	3層	長円形	0.94	0.58	0.36				小礫含む
SX24	I	3層	不整形	1.06	0.67	0.26				小礫含む
SX25	I	3層	不整形	0.64	0.60	0.20				小礫含む
SX26	I	3層	卵形	1.04	0.86	0.47	鉄器			小礫含む
SX27	I	3層	不整形	0.82	0.34	0.21				表面に小礫　覆土に炭を含む
SX28	I	3層	不整円形	0.63	0.39	0.20				
SX29	I	3層	楕円形	0.59	0.36	0.18				二段堀状

遺構名	区	検出面	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	遺構の種類	遺構の時期	備考
SX30	Ⅰ	3層	不整形	(0.96)		0.30				二段堀状　SB02のPit
SX31	Ⅰ	3層	楕円形	0.88	0.54	0.38	スラグ、古式土師器			粘土、炭を含む　SB02のPit
SX32	Ⅰ	3層	瓢箪形	0.98	0.31	0.26				
SX33	Ⅰ	3層	楕円形	0.68	0.33	0.50				
SX34	Ⅰ							消滅		
SX35	Ⅰ							消滅		
SX36	Ⅰ	3層	瓢箪形	(2.10)	1.20	0.31				炭を多く含む
SX37	Ⅰ							消滅		
SX38	Ⅰ	2層	落花生形	0.70	0.26	0.42				
SX39	Ⅰ	2層	不整形	0.98	0.62	0.14				
SX40	Ⅰ	2層	不整楕円形	0.84	0.42	0.42	土師器細片			平石を含む
SX41	Ⅰ	2層	不整形	0.80	0.54	0.30				
SX42	Ⅰ	2層	不整形	1.18	0.51	0.20				表面に礫3個
SX43	Ⅰ	2層	落花生形	0.52	0.28	0.14				
SX44	Ⅰ	2層	不整形	0.64	0.42	0.25				二段堀状
SX45	Ⅰ							消滅		
SX46	Ⅰ	2層	卵形	0.54	0.35	0.25	スラグ			
SX47	Ⅰ	2層	長円形	0.52	0.29	0.25				二段堀状
SX48	Ⅰ	2層	長円形	0.70	0.34	0.21				平石含む
SX49	Ⅰ	2層	不整落花生形	1.10	0.30	0.30				僅かに炭を含む
SX50	Ⅰ							消滅		
SX51	Ⅰ	2層	落花生形	0.80	0.55	0.35				
SX52	Ⅱ-1	2層	不整形	1.12	0.58	0.32	古式土師器			角礫を含む
SX53	Ⅱ-1	2層	溝状	5.40	1.40	0.28	スラグ			
SX54								消滅		
SX55	Ⅰ	2層	不整形	0.56	0.36	0.18	不明細片			
SX56								消滅		
SX57	Ⅱ-2	2層	長方形	1.12	0.86	0.46	釘	墓		灰白粉末
SX58	Ⅱ-2	2層	隅丸五角形	0.70	0.62	0.52	縄文土器			SI01のPit
SX59	Ⅱ-2	2層	不整楕円形	0.84	0.40	0.44				覆土中に平石

第５表　御崎遺跡遺物観察表

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高（cm）	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
5	1	Ⅰ区1層	弥生	高坏？				外：にぶい橙	やや密（1mm以下の砂粒少量含む）	良	塩町式の影響
5	2	Ⅰ区1層	土師器	甑把手				外：明黄褐	密（3mm位の砂粒含む）	良	黝斑有り
5	3	Ⅰ区1層	陶磁器	皿			4.6	外：釉、灰オリーブ	密	良	17世紀までの唐津
5	4	Ⅰ区1層	陶磁器	皿				外：緑灰	密	良	大朝（季期）朝鮮
5	5	Ⅰ区1層	陶磁器	碗	9.8			外：文様はコバルト色に発色	密	良	九州から
5	6	Ⅰ区1層	陶磁器	蓋	10.5	2.5	5.0	外：文様はコバルト色に発色	密	良	九州から
5	7	Ⅰ区1層	陶磁器（備前焼）	摺り鉢				外：明赤褐	密（1mm以下の砂粒僅かに含む）	良	備前 室町前～中期
5	8	Ⅰ区1層	陶磁器	青花碗	11.6			外：文様はややくすんだコバルト色に発色	密	良	
7	1	Ⅰ区SK01	土師器	甕			14.3	外：橙	やや粗（4mm大の砂粒含む）	良	
7	2	Ⅰ区SK01	陶磁器	碗or壺型			5.0	外：鈍い赤褐色、布釉部分極暗赤褐	密	良	地元産
7	3	Ⅰ区SK01	陶磁器	香炉？			6.4	外：暗赤褐	密	良	地元産
7	4	Ⅰ区SK05	陶磁器	皿			5.7	外：全体灰色、染付はコバルト色	密	良	地元産
7	5	Ⅰ区SK05	陶磁器	擂鉢			5.6	外：文様はコバルト色に発色	密	良	江戸以降の大衆品
7	6	Ⅰ区SK05	陶磁器	碗			4.8	外：緑釉、緑灰、にぶい赤褐	密	良	布志名 19ｃ　ぼてぼて茶碗
11	1	Ⅰ区SK15	陶磁器	皿	10.2	2.8	4.3	外：白釉、灰白	密	良	白磁
11	2	Ⅰ区SK18	縄文	深鉢				外：にぶい黄橙、にぶい褐	密（1mm以下の砂粒僅かに含む）	良	後期中葉か
11	3	Ⅰ区SK17	弥生	注口土器				外：黒褐	密（1mm程の砂粒含む）	良	
15	1	Ⅰ区2層	縄文	深鉢				外：にぶい黄橙	粗（2mm大の石英を含む）	良	外：爪形文
15	2	Ⅰ区2層	縄文	注口土器or壷形土器				外：にぶい橙	やや粗（2mm大の砂粒を含む）	良	外：磨消縄文
15	3	Ⅰ区2層	縄文	深鉢				外：暗褐	粗（3mm大の砂粒を含む）	良	外：刻み,沈線
15	4	Ⅰ区2層	縄文	注口土器or壷形土器				外：橙	やや密（2mm大の砂粒を含む）	良	外：疑似縄文
15	5	Ⅰ区2層	縄文	鉢	38.0			外：にぶい黄橙、にぶい黒褐	密（1mm以下の砂粒僅かに含む）	良	外：巻貝による刺突文
15	6	Ⅰ区2層	弥生	壺				外：橙	粗（2mm大の砂粒多く含む）	不良	外：沈線文（3本）
15	7	Ⅰ区2層	弥生	壺	14.4			外：明赤褐	密（1mm以下の砂粒含む）	良	外:凹線文
15	8	Ⅰ区2層	弥生	壺	11.3			外：橙	密（2mm大の砂粒含む）	良	口縁・頚部凹線文
15	9	Ⅰ区2層	弥生	壺	13.5			外：にぶい赤	密（1mm以下の砂粒少量含む）	良	
15	10	Ⅰ区2層	弥生	壺	13.0			外：にぶい黄橙	密（5mm以下の砂粒多く含む）	良	
15	11	Ⅰ区2層	古式土師器	壺	16.4			外：褐灰	粗（3mm～5mm位の砂粒含む）	不良	
15	12	Ⅰ区2層	古式土師器	甕	24.6			外：黒褐	密（1mm位の砂粒含む）	良	
15	13	Ⅰ区2層	古式土師器	壺	15.4			外：黄橙	粗（3mm～5mmの砂粒含む）	不良	

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高（cm）	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
15	14	Ⅰ区2層	古式土師器	甕	22.0			外：明赤褐	やや粗（1mm以下の砂粒若干含む）	良	
15	15	Ⅰ区2層	古式土師器	甕	23.2			外：橙	密（2mm以下の砂粒多く含む）	良	
15	16	Ⅰ区2層	古式土師器	甕	27.4			外：にぶい橙	密（2mm位の砂粒多く含む）	良	
16	17	Ⅰ区2層	古式土師器	甕	13.0			外：暗褐	密（3mm位の砂粒含む）	良	
16	18	Ⅰ区2層	弥生	甕				外：淡黄	密（2mm以下の砂粒多く含む）	良	
16	19	Ⅰ区2層	古式土師器	器台or壺	11.8			外：橙	やや粗（5.5mm大の砂粒含む）	良	
16	20	Ⅰ区2層	弥生or古式土師器	甕か			7.0	外：にぶい橙	粗（3mm～5mm位の砂粒含む）	良	
16	21	Ⅰ区2層	弥生or古式土師器	甕か			9.0	外：にぶい橙	粗（3mm～4mm位の砂粒多く含む）	良	
16	22	Ⅰ区2層	弥生or古式土師器	甕か			6.0	外：明黄褐	粗（4mm大の砂粒含む）	良	
16	23	Ⅰ区2層	弥生or古式土師器	甕か			9.2	外：明赤褐	密（2mm～3mm位の砂粒含む）	良	
16	24	Ⅰ区2層	土師器	竈				外：赤橙	粗（2mm～3mm位の砂粒多く含む）	良	
16	25	Ⅰ区2層	須恵器	坏蓋	12.3			外：暗青灰	密（2mm以下の砂粒含む）	良	
16	26	Ⅰ区2層	須恵器	坏身	11.4			外：灰	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
16	27	Ⅰ区2層	須恵器	坏身	12.4			外：暗青灰	密（砂粒ほとんど含まず）	良	
16	28	Ⅰ区2層	須恵器	高杯			8.8	外：青灰	密（1mm以下の砂粒少量含む）	良	2方透かし
16	29	Ⅰ区2層	須恵器	高杯				外：暗青灰	密（1mm以下の砂粒含む）	良	対角線2方向に切り込み　透かしあり
16	30	Ⅰ区2層	陶磁器	皿			4.8	外：釉、にぶい黄褐、赤褐	密	良	唐津
16	31	Ⅰ区2層	陶磁器	碗				外：橙	密	良	唐津
16	32	Ⅰ区2層	陶磁器	碗	13.6			外：緑釉、緑灰、灰黄	密	良	布志名？
16	33	Ⅰ区2層	陶磁器	皿	10.9	2.3	4.5	外：緑釉、緑灰、暗灰黄	密	良	布志名
16	34	Ⅰ区2層	陶磁器	皿			7.6	外：暗青灰	密	良	古伊万里
16	35	Ⅰ区2層	陶磁器	皿	10.0	3.7	3.8	外：緑釉、灰オリーブ、にぶい赤褐	密	良	唐津
16	36	Ⅰ区2層	陶磁器	皿			4.5	外：白釉、橙	密	良	唐津　内外面：白色釉、黒焼け部分あり
16	37	Ⅰ区2層	陶磁器	碗			3.1	外：文様はコバルト色に発色	密	良	
16	38	Ⅰ区2層	古銭	寛永通宝	たて 2.4	横 2.4	厚さ 0.1				
24	1	Ⅰ区SX07	弥生	甕	14.0			外：浅黄橙	密（3mm大の砂粒含む）	良	
24	2	Ⅰ区SX07	土師器	高坏			6.5	外：浅黄橙	粗（2mm大の砂粒含む）	良	
29	1	Ⅰ区SB05	陶磁器	皿	13.8	4.2	3.9	外：灰白	密（1mm以下の砂粒含む）	良	唐津 17ｃ半まで
29	2	Ⅰ区SB05	土師器	甕	17.7			外：橙	やや密（3mm大の砂粒含む）	良	
29	3	Ⅰ区SB05	陶磁器	皿	23.2			外：釉、灰黄	密（1mm以下の砂粒含む）	良	唐津 17ｃ半まで
29	4	Ⅰ区SB05	陶磁器	皿	13.2	4.2	4.4	外：釉、灰オリーブ	密（1mm以下の砂粒含む）	良	高台底にうすい墨書

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高（cm）	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
29	5	Ⅰ区SB05	土師器	甕				外：にぶい橙	やや密（1mm以下の砂粒含む）	良	
29	6	Ⅰ区SB01	弥生？	浅鉢			5.4	外：灰	粗（2mm大の砂粒含む）	良	
29	7	Ⅰ区SB01	柱根		たて 41.0	横 18.4	厚さ 20.0				
30	1	Ⅰ区3層	弥生	甕	21.2			外：褐灰、浅黄橙	密（1mm以下の砂粒含む）	不良	
30	2	Ⅰ区3層	弥生	甕	17.2			外：にぶい黄橙	密（2mm位の砂粒含む）	良	
30	3	Ⅰ区3層	弥生	高杯	16.2			外：暗赤褐	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
30	4	Ⅰ区3層	弥生	鉢	19.0			外：赤	密（4mm位の砂粒含む）	良	
30	5	Ⅰ区3層	弥生	甕	21.9			外：褐灰、にぶい黄褐	密（1mm以下の砂粒多く含む）	良	
30	6	Ⅰ区3層	弥生	甕	16.0			外：にぶい黄橙	粗（4mm位の砂粒含む）	良	
30	7	Ⅰ区3層	弥生	甕	23.1			外：にぶい橙、にぶい赤褐	粗（3mm～4mm位の砂粒含む）	不良	
30	8	Ⅰ区3層	弥生	甕	19.4			外：にぶい黄褐	粗（2mm前後の砂粒多く含む）	良	
30	9	Ⅰ区3層	弥生	甕	17.2			外：にぶい黄褐	密（1mm位の砂粒含む）	良	
30	10	Ⅰ区3層	弥生	甕	23.2			外：にぶい黄橙	密（3mm以下の砂粒多く含む）	良	
30	11	Ⅰ区3層	弥生	甕	17.0			外：橙	密（3mm～4mm位の砂粒有り）	良	
30	12	Ⅰ区3層	弥生	底部			10.0	外：淡赤褐、にぶい橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
30	13	Ⅰ区3層	弥生	壺	11.6			外：灰黄褐	粗（2mm位の砂粒含む）	良	
30	14	Ⅰ区3層	土師質土器	不明				外：橙	粗（2mm～3mmの砂粒多く含む）	不良	
31	15	Ⅰ区3層	弥生	甕	16.0			外：浅黄橙	密（1mm前後の砂粒含む）	良	
31	16	Ⅰ区3層	弥生	甕	15.8			外：にぶい黄橙	密（0.5mm位の砂粒含む）	良	外面：朱塗痕あり
31	17	Ⅰ区3層	弥生	甕	15.1			外：褐	密（1mm位の砂粒含む）	良	
31	18	Ⅰ区3層	弥生	甕	16.8			外：浅黄橙	密（3mm位の砂粒含む）	良	
31	19	Ⅰ区3層	弥生	甕	18.4			外：にぶい黄橙	密（2mm位の砂粒含む）	良	
31	20	Ⅰ区3層	弥生	甕	18.2			外：浅黄橙	粗（1mm位の砂粒含む）	不良	
31	21	Ⅰ区3層	弥生	甕	17.2			外：黒、にぶい黄橙	密（1mm以下の粒砂含む）	良	
31	22	Ⅰ区3層	弥生	小型壺				外：にぶい橙	密（1mm以下の粒砂含む）	良	
31	23	Ⅰ区3層	弥生	甕	19.8			外：橙	密（1mm前後の粒砂含む）	良	
31	24	Ⅰ区3層	弥生	甕	21.3			外：浅黄橙	密（2mm大の砂粒含む）	良	
31	25	Ⅰ区3層	弥生	甕				外：淡黄橙	やや密（1mm以下の砂粒多く含む）	良	
31	26	Ⅰ区3層	弥生	高坏				外：橙	粗（2mm大の砂粒含む）	良	
31	27	Ⅰ区3層	弥生	高杯				外：にぶい橙	粗（3mm位の砂粒多く含む）	良	
31	28	Ⅰ区3層	弥生	底部			4.8	外：橙	密（1mm位の砂粒含む）	良	

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高（cm）	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
31	29	Ⅰ区3層	弥生	底部			4.8	外：橙	密（1mm位の砂粒含む）	良	
31	30	Ⅰ区3層	弥生	底部			5.0	外：橙	密（0.5mm以下の砂粒含む）	良	
31	31	Ⅰ区3層	弥生	底部			6.0	外：浅黄橙	密（1mm位の砂粒含む）	良	
31	32	Ⅰ区3層	弥生	甕			6.0	外：灰黄褐	密（1mm位の砂粒含む）	良	
31	33	Ⅰ区3層	古式土師器	器台			19.2	外：にぶい黄橙	密（1mm～2mmの砂粒多く含む）	良	
32	34	Ⅰ区3層	須恵器	坏身	11.6			外：暗青灰	密（1mm～2mmの砂粒多く含む）	良	
32	35	Ⅰ区3層	須恵器	高杯			10.3	外：青灰	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
32	36	Ⅰ区3層	須恵器	壺				外：灰	密（2mm以下の砂粒含む）	良	
32	37	Ⅰ区3層	須恵器	壺			7.1	外：青灰	密（4mm以下の砂粒含む）	良	内外面の一部 うすく自然釉かがる
32	38	Ⅰ区3層	土師器	低脚坏	8.3	4.3	3.1	外：浅黄橙	粗（2mm大の砂粒含む）	良	
32	39	Ⅰ区3層	土師器	低脚坏			5.8	外：浅黄橙	粗（2mm大の砂粒含む）	良	
32	40	Ⅰ区3層	土師器	甑把手				外：黄橙	粗（2mm～4mmの砂粒含む）	普通	
32	41	Ⅰ区3層	土師器	甑把手				外：黄橙	やや粗（2mm位の砂粒含む）	良	
32	42	Ⅰ区3層	土師器	甑把手				外：明黄褐	やや粗（2mm位の砂粒多く含む）	良	
32	43	Ⅰ区3層	土師器	甑把手				外：にぶい橙	粗（3mm～4mmの砂粒含む）	良	
32	44	Ⅰ区3層	土師器	甑把手				外：にぶい橙	密（2mm位の砂粒含む）	良	
32	45	Ⅰ区3層	土師器	甑把手				外：にぶい黄橙	密（2mm位の砂粒含む）	良	
32	46	Ⅰ区3層	土師器	甑把手				外：にぶい橙	粗（2mm～3mm位の砂粒多く含む）	良	
32	47	Ⅰ区3層	土師器	甑把手				外：赤橙	密（3mm位の砂粒含む）	良	
32	48	Ⅰ区3層	土師器	甑把手				外：橙	密（2mm位の砂粒含む）	良	
32	49	Ⅰ区土器群1	土師器	甑			10.5	外：にぶい黄橙	密（5mm以下の白色砂粒多く含む）	良	
33	50	Ⅰ区3層	？	皿	15.3			外：にぶい黄橙	密	良	
33	51	Ⅰ区3層	陶磁器	皿？				外：ライン、褐、緑釉、灰オリーブ	密	良	18世紀肥前系
33	52	Ⅰ区3層	陶磁器	擂鉢				外：灰赤	密（1mm以下の砂粒僅かに含む）	良	備前中世
33	53	Ⅰ区3層	陶磁器	青花碗				外：文様はコバルト色に発色	密	良	18世紀肥前系 九州から
33	54	Ⅰ区3層	陶磁器	碗	16.2			外：緑釉、灰オリーブ黄、灰白	密	良	青磁 同安窯 鎌倉時代初期
33	55	Ⅰ区3層	装飾品	耳環	長さ 19.5	巾 2.4	厚さ 0.6×0.5の楕円形	重さ 3g			銅
33	56	Ⅰ区3層	石器	石鏃	長さ 8.55	巾 1.5	厚さ 0.25	重さ 2g			石材：安山岩
33	57	Ⅰ区3層	石器	剥片	長さ 1.65	巾 1.65	厚さ 0.4	重さ 2g			石鏃制作中途の未成品か？
33	58	Ⅰ区3層	古銭	洪武通宝	たて 2.15	横 2.20	厚さ 0.1				
37	1	Ⅰ区SG01	弥生 古式土師	甕				外：橙～灰白	やや密（1.5mm以下の砂粒僅かに含む）	良	

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高 (cm)	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
37	2	Ⅰ区SG01	土師器	甑把手				外：浅黄橙	やや粗（1mm大の砂粒含む）	良	
37	3	Ⅰ区SG01	陶磁器	青花碗			5.7	外：文様はコバルト色に発色	密（1mm以下の砂粒僅かに含む）	良	中国 16ｃ前半
37	4	Ⅰ区SG01	土師器	香炉or火鉢	5.0			外：にぶい黄橙、にぶい黒褐	密（1mm以下の砂粒僅かに含む）	良	
37	5	Ⅰ区SG01	陶磁器	香炉	11.6	5.5	6.4	外：緑釉、灰オリーブ、灰白	密（1mm以下の砂粒僅かに含む）	良	戦国時代
49	1	Ⅰ区SD01	縄文	底部			5.3	外：明黄褐	やや粗（3mm大の砂粒含む）	良	
49	2	Ⅰ区SD01	弥生	高坏				外：にぶい黄橙	密（3mm以下の砂粒若干含む）	良	
49	3	Ⅰ区SD01	弥生	甕	17.6			外：にぶい橙	やや密（3mm以下の砂粒含む）	良	
49	4	Ⅰ区SD01	土師器	甕	22.0			外：にぶい黄橙	やや粗（1mm以下の砂粒若干含む）	良	平行沈線文 連続指突文
49	5	Ⅰ区SD01	弥生	甕	18.8			外：にぶい黄橙	やや密（1mm以下の砂粒多く含む）	良	貝殻平行沈線文
49	6	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	19.6			外：にぶい橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
49	7	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	18.8			外：にぶい褐	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
49	8	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	25.4			外：淡橙	やや密（1mm大の砂粒含む）	良	
49	9	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	24.0			外：にぶい黄橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
49	10	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	14.8	24.9		外：橙	密（2mm以下の砂粒含む）	良	
49	11	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	16.1			外：浅黄橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
49	12	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	19.1			外：浅黄橙	やや密（1mm程度の砂粒含む）	良	
50	13	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	25.2			外：浅黄橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
50	14	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	18.6			外：オリーブ黒	密（1mm大の砂粒含む）	良	
50	15	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	12.4			外：浅黄橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
50	16	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	15.8			外：浅黄橙	やや粗（1mm以上の砂粒含む）	良	
50	17	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	15.8			外：淡橙	やや密（1mm以下の砂粒含む）	良	
50	18	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	16.6			外：浅黄橙	やや密（1mm以下の砂粒含む）	良	
50	19	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	18.4			外：にぶい黄橙	密（1mm前後の砂粒含む）	良	
50	20	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	16.6			外：浅黄橙	密（1mm大の砂粒含む）	良	
50	21	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	16.7			外：浅黄橙	やや密（2mm大の砂粒含む）	良	
50	22	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	18.0			外：浅黄橙	密（4mm以下の砂粒含む）	良	
50	23	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕				外：浅黄橙	密（4mm以下の砂粒含む）	良	
50	24	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	16.6			外：灰黄褐	やや粗（1mm以下の砂粒若干含む）	良	
51	25	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	18.0			外：にぶい黄橙	やや粗（1mm以下の砂粒若干含む）	良	
51	26	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	15.6			外：黒褐	やや粗（3mm以下の砂粒多く含む）	良	
51	27	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	17.8			外：にぶい橙	やや粗（3mm以下の砂粒若干含む）	良	

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高（cm）	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
51	28	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	18.4			外：にぶい褐	やや粗（3mm以下の砂粒多く含む）	良	
51	29	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	16.8			外：橙	やや粗（3mm以下の砂粒多く含む）	良	
51	30	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	甕	22.0			外：浅黄橙	やや粗（6mm大の砂粒含む）	良	
51	31	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	壷				外：にぶい橙	密（3mm以下の砂粒含む）	良	
51	32	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	壷	22.0			外：橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
51	33	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	壷	20.0			外：橙	やや密（1mm以下の砂粒含む）	良	
51	34	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	壷				外：にぶい黄褐、にぶい赤褐	密（1.5mm以下の砂粒僅かに含む）	良	
51	35	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	壷	15.2			外：橙	やや粗（2mm大の砂粒含む）	良	
52	36	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	鼓形器台			20.2	外：にぶい黄橙	やや粗（3mm以下の砂粒多く含む）	良	
52	37	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	鼓形器台	21.4			外：にぶい黄橙	やや粗（3mm以下の砂粒多く含む）	良	
52	38	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	鼓形器台			15.0	外：浅黄橙	やや粗（2mm大の砂粒含む）	良	
52	39	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	器台			22.8	外：橙	やや粗（3mm大の砂粒含む）	良	
52	40	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	器台			19.2	外：にぶい黄橙	やや密（1mm程度の砂粒含む）	良	
52	41	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	器台	19.3			外：橙	やや密（2mm大の砂粒含む）	良	
52	42	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	高坏（脚）			15.6	外：にぶい黄橙	やや粗（3mm以下の砂粒若干含む）	良	
52	43	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	高坏	24.3			外：浅黄橙	やや密（2mm大の砂粒含む）	良	
52	44	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	高坏	14.5			外：にぶい黄橙	密（4mm以下の砂粒含む）	良	
52	45	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	高坏？	18.0			外：黄橙	やや粗（2mm大の砂粒含む）	良	
52	46	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	壷				外：にぶい黄橙	金雲母と1mm以下の砂粒含む	良	
52	47	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	高坏				外：にぶい黄橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
52	48	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	低脚坏				外：にぶい橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
52	49	Ⅰ区SD01	弥生～古式土師器	壷				外：にぶい橙	やや粗（4mm以下の砂粒若干含む）	良	
53	50	Ⅰ区SD01	陶磁器	碗	15.6			外：灰白	密	良	白磁碗 中国 平安末
53	51	Ⅰ区SD01	陶磁器	擂鉢？			6.2	外：文様はコバルト色に発色	密	良	地元産 19c
53	52	Ⅰ区SD01	陶磁器	碗	11.2			外：施釉の上にくすんだコバルト	密	良	九州から
53	53	Ⅰ区SD01	陶磁器	碗	7.6			外：レモンの様な文様コバルト色に発色	密	良	九州から
53	54	Ⅰ区SD01	陶磁器	碗	10.5			外：緑釉、緑灰、灰黄	密	良	布志名　ぽてぽて茶碗 19ｃ
53	55	Ⅰ区SD01	陶磁器	碗			6.2	外：灰白、染付コバルト	密	良	広東碗 19ｃ前半
53	56	Ⅰ区SD01	陶磁器	現代もの	8.1			外：何かの実を描く	密	良	現代
53	57	Ⅰ区SD01	陶磁器	碗 (陶胎染付)				外：文様はやや暗色のコバルト色に発色	密	良	18ｃの所産
53	58	Ⅰ区SD01	陶磁器	碗				外：文様はコバルト色に発色	密	良	九州から

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高 (cm)	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
53	59	Ⅰ区SD01	石器	磨製石斧	長さ 7.8	巾 4.7	厚さ 3.1	重さ 183ｇ			石:砂岩 上半基部欠損
53	60	Ⅰ区SD01	石器	石錘	長さ 9.5	巾 5.5	厚さ 1.5	重さ 141ｇ			石材:砂岩 3方欠きか
53	61	Ⅰ区SD01	装飾品	耳環	長さ 1.7	巾 1.8	厚さ 0.4×0.3の 楕円形	重さ 1ｇ			銅 全面がうっすら錆化
54	1	Ⅰ区SD02	弥生	甕	18.4			外：黄橙	やや粗（2mm大の砂粒含む）	良	備後の影響か
54	2	Ⅰ区SD02	弥生	甕	17.2			外：にぶい黄橙	やや密（1mm程の砂粒含む）	良	
54	3	Ⅰ区SD02	弥生	甕	24.8			外：にぶい橙	やや密（1mm程の砂粒含む）	良	
54	4	Ⅰ区SD02	弥生	甕	14.7			外：にぶい橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
54	5	Ⅰ区SD02	弥生	甕				外：にぶい黄褐	やや密（2mm程の砂粒含む）	良	
54	6	Ⅰ区SD02	土師器	甕	18.2			外：橙	やや粗（1mm程度の砂粒含む）	良	
54	7	Ⅰ区SD02	土師器	甕	25.1			外：橙	やや粗（3mm程の砂粒含む）	良	
54	8	Ⅰ区SD02	土師器	壺	13.9			外：浅黄橙	やや粗（4mm大の砂粒含む）	良	
54	9	Ⅰ区SD02	土師器	坏	13.3			外：橙	やや密（2mm程の砂粒含む）	良	内面に暗文風ﾐｶﾞｷ
54	10	Ⅰ区SD02	土師器	低脚坏				外：橙	やや粗（3mm程の砂粒含む）	良	
54	11	Ⅰ区SD02	土師器	底部			8.0	外：橙	やや粗（4mm大の砂粒含む）	良	
55	12	Ⅰ区SD02	須恵器	坏身	13.4	3.9		外：青灰	密（1mm以下の砂粒少量含む）	良	
55	13	Ⅰ区SD02	須恵器	坏身	10.8	3.5		外：灰	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
55	14	Ⅰ区SD02	須恵器	坏身				外：灰白	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
55	15	Ⅰ区SD02	須恵器	坏蓋	13.6	3.5		外：灰白	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
55	16	Ⅰ区SD02	須恵器	高坏	15.0	9.2	10.3	外：灰白	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
55	17	Ⅰ区SD02	須恵器	坏身？	15.1			外：灰白	密（1mm以下の砂粒含む）	良	
55	18	Ⅰ区SD02	須恵器	甕	14.0			外：青灰	密（3mm以下の砂粒含む）	良	
55	19	Ⅰ区SD02	石器	剥片	長さ 3.55	巾 2.4	厚さ 0.45	重さ 6ｇ	密（3mm以下の砂粒含む）		石材：黒曜石
56	1	Ⅰ区SD06	縄文	浅鉢		4.0	6.0	外：にぶい黄橙	粗（2mm以下の砂粒を含む）	良	
56	2	Ⅰ区SD06	縄文	浅鉢			6.2	外：にぶい黄橙	やや粗（3mm以下の砂粒若干含む）	良	
56	3	Ⅰ区SD06	土師器	甕	17.2			外：にぶい赤褐	密（4mm以下の砂粒含む）	良	
56	4	Ⅰ区SD06	弥生	甕	14.3			外：明赤褐	やや粗（3mm以下の砂粒若干含む）	良	
56	5	Ⅰ区SD06	弥生	壺	12.8			外：橙	密（1mm以下の砂粒多く含む）	良	
56	6	Ⅰ区SD06	弥生	甕	18.4			外：にぶい黄橙	やや粗（1mm以下の砂粒少量含む）	良	
56	7	Ⅰ区SD06	弥生	甕	11.5			外：浅黄橙	やや粗（1mm以下の砂粒少量含む）	良	
56	8	Ⅰ区SD06	弥生	甕	22.0			外：橙	やや密（1mm以下の砂粒含む）	良	
56	9	Ⅰ区SD06	土師器	坏	15.0		6.2	外：にぶい黄橙	密（2mm以下の砂粒含む）	良	

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高（cm）	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
56	10	Ⅰ区SD06	石器	鏃	長さ 1.9	巾 1.6（現存）	厚さ 0.36	重さ 1.0ｇ			石材：安山岩 折損している
56	11	Ⅰ区SD06	石器	剥片	長さ 2.4	巾 1.2	厚さ 0.25	重さ 0.11ｇ			石材：安山岩
56	12	Ⅰ区SD06	石器	剥片	長さ 2.3	巾 1.2	厚さ 0.22	重さ 1.0ｇ			石材：安山岩
56	13	Ⅰ区SD06	石器	石錘	長径 7.1	短径 5.7	厚さ 1.8	重さ 83ｇ			石材：凝灰岩系
56	14	Ⅰ区SD06	石器	石錘	長径 9.5	短径 6.5	厚さ 2.1	重さ 167ｇ			石材：凝灰岩系砂岩か 括部3方とも4方とも考えられる
56	15	Ⅰ区SD06	石器	石錘	長径 6.3	短径 5.6	厚さ 3.2	重さ 118ｇ			石材：流紋岩
56	16	Ⅰ区SD06	石器	石錘	長径 8.6	短径 5.2	厚さ 2.5	重さ 178ｇ			石材：砂岩
57	1	Ⅰ区ハイカ層	縄文	深鉢	26.5			外：黒	粗（3mm大の砂粒含む）		
57	2	Ⅰ区ハイカ層	須恵器	高台坏			7.6	外：青灰	密（砂粒ほとんど含まない）	良	
57	3	排土中	弥生	鼓形器台				外：にぶい褐	密（2mm大の砂粒含む）	良	
57	4	排土中	土師器	高坏（坏部）	23.8			外：橙	密（1mm前後の砂粒含む）	良	
57	5	排土中	陶磁器	碗？	11.0			外：灰色、染付 暗青灰	密	良	
57	6	排土中	陶磁器	碗				外：釉、灰白	密	良	白磁
57	7	排土中	陶磁器	皿			6.7	外：灰白	密	良	瀬戸
57	8	排土中	石器	磨斧の柄頭が敲石	長さ 9.9	巾 4.8	厚さ 3.5	重さ 242ｇ			石材：砂岩 下半欠損
60	1	Ⅱ区-1 SK21	製鉄関連	碗型鍛冶滓							
60	2	Ⅱ区-1 SK21	製鉄関連	碗型鍛冶滓							
73	1	Ⅱ区-2 SK24	縄文	鉢	14.8			外：淡黄褐-褐	やや密（1mm以下の砂粒含む）	良	凹線文系土器 後期後葉
73	2	Ⅱ区-2 SK24	縄文	甕				外：暗褐	粗（1mm大の砂粒含む）	良	
73	3	Ⅱ区-2 SK24	縄文	粗製深鉢				外：にぶい橙	粗（2mm以下の砂粒多く含む）	良	
73	4	Ⅱ区-2 SK24	縄文	浅鉢？				外：にぶい黄橙	粗（1mm以下の砂粒少量含む）	良	沈線文 擬縄文
73	5	Ⅱ区-2 SK24	縄文	粗製深鉢				外：灰黄褐	粗（2mm以下の砂粒若干含む）	良	貝殻条痕 沈線文、刻み目文
73	6	Ⅱ区-2 SK24	縄文	浅鉢			7.4	外：橙	粗（3mm大の砂粒含む）	良	
73	7	Ⅱ区-2 SK24	縄文	皿			5.2	外：灰黄褐	粗（1mm大の砂粒含む）	良	
73	8	Ⅱ区-2 SK24	縄文	粗製深鉢				外：にぶい褐	密	良	
73	9	Ⅱ区-2 SK24	縄文	精製浅鉢				外：にぶい黄褐	密	良	
74	1	Ⅱ区-2 SD07	古式土師	甕	17.8			外：灰褐	やや粗（1mm以下の砂粒少量含む）	良	
74	2	Ⅱ区-2 SD07	土師器	小鉢				外：浅黄橙	やや粗（3mm大の砂粒含む）	良	
74	3	Ⅱ区-2 SD07	須恵器	高坏			9.0	外：灰	密	良	
76	1	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	羽口 （板屋型）	法量 1.620ｇ						
76	2	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	椀型鍛冶滓							

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高 (cm)	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
76	3	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	椀型鍛冶滓							
76	4	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	椀型鍛冶滓							
76	5	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	椀型鍛冶滓							炉壁付
77	6	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物								炉壁付
77	7	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	流出孔滓or溝滓							
77	8	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	流出孔滓or溝滓							
77	9	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	流出孔滓or溝滓							
77	10	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	流出孔滓or溝滓							
77	11	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	溝滓？皿状							下面出土
77	12	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	溝滓？皿状							下面出土
77	13	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	椀型鍛冶滓							炉壁付
77	14	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	溝滓？							
77	15	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	溝滓？							
77	16	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	溝滓？							
81	1	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	鉢				外：にぶい黄橙	粗（1mm程度の砂粒を含む）	良	押型文土器
81	2	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：灰黄褐	粗（3mm以下の砂粒を若干含む）	良	
81	3	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：灰黄褐	粗（1mm以下の砂粒を多く含む）	良	
81	4	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい黄橙	粗（2mm以下の砂粒を多く含む）	良	
81	5	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：灰黄褐	粗（2mm以下の砂粒を含む）	良	
81	6	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢？				外：黒褐	粗（1mm以下の砂粒を多く含む）	良	
81	7	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：灰黄褐	粗（2mm以下の砂粒若干含む）	良	
81	8	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい黄橙	粗（3mm以下の砂粒若干含む）	良	
81	9	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：暗黄褐	粗（2mm以下の砂粒若干含む）	良	
81	10	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい黄橙、褐灰	粗（3mm以下の砂粒若干含む）	良	
81	11	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：灰黄褐	粗（1mm以下の砂粒若干含む）	良	
81	12	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい黄橙	粗（4mm以下の砂粒を多く含む）	良	
81	13	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい黄橙	粗（2mm以下の砂粒を多く含む）	良	
81	14	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい橙	粗（3mm以下の砂粒を多く含む）	良	
81	15	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい黄橙褐灰	粗（3mm以下の砂粒多く含む）	良	
81	16	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい黄橙	粗（1mm以下の砂粒若干含む）	良	
81	17	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい黄橙	粗（4mm以下の砂粒を多く含む）	良	

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高 (cm)	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
81	18	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：灰黄褐	粗（1㎜以下の砂粒多く含む）	良	
81	19	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：灰黄褐	粗（2㎜以下の砂粒若干含む）	良	
81	20	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい橙	粗（2㎜以下の砂粒を多く含む）	良	
81	21	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい黄橙	粗（2㎜以下の砂粒多く含む）	良	
81	22	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：褐灰	粗（3㎜以下の砂粒多く含む）	良	
82	23	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	凹線文深鉢				外：にぶい黄橙	粗（1㎜以下の砂粒多く含む）	良	
82	24	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	浅鉢？				外：にぶい赤褐	粗（2㎜以下の砂粒若干含む）	良	
82	25	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	浅鉢？				外：灰黄褐	粗（2㎜以下の砂粒多く含む）	良	
82	26	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	凹線文粗製深鉢				外：にぶい褐	粗（3㎜以下の砂粒若干含む）	良	凹線文系
82	27	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	凹線文粗製深鉢				外：灰黄褐	粗（1㎜以下の砂粒多く含む）	良	凹線文系
82	28	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	凹線文粗製深鉢				外：黒褐	粗（1㎜以下の砂粒多く含む）	良	凹線文系
82	29	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	凹線文粗製深鉢				外：にぶい黄橙	粗（1㎜以下の砂粒を若干含む）	良	凹線文系
82	30	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	深鉢				外：にぶい黄橙	粗（2㎜以下の砂粒多く含む）	良	凹線文系
82	31	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	深鉢				外：にぶい黄橙	粗（1㎜以下の砂粒若干含む	良	凹線文系
82	32	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	凹線文深鉢				外：にぶい黄橙	粗（1㎜以下の砂粒若干含む）	良	凹線文系
82	33	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	凹線文深鉢				外：にぶい黄橙	粗（1㎜以下の砂粒多く含む）	良	凹線文系
82	34	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	深鉢				外：にぶい黄橙	粗（3㎜以下の砂粒若干含む）	良	
82	35	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	浅鉢				外：黒褐	粗（2㎜以下の砂粒若干含む）	良	
82	36	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	注口土器or壷				外：にぶい黄橙	粗（1㎜以下の砂粒多く含む）	良	彦崎K2
82	37	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	注口土器or壷				外：褐灰	粗（1㎜以下の砂粒多く含む）	良	
82	38	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢凹線文				外：にぶい黄橙	粗（2㎜以下の砂粒多く含む）	良	
82	39	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	深鉢				外：にぶい黄橙	粗（3㎜以下の砂粒多く含む）	良	
82	40	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	深鉢				外：灰褐	粗（5㎜以下の砂粒を多く含む）	良	
82	41	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：にぶい黄橙	粗（1㎜以下の砂粒若干含む）	良	
82	42	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	凹線文浅鉢？				外：褐灰	粗（1㎜以下の砂粒多く含む）	良	
82	43	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	注口土器or壷形土器				外：灰黄褐	粗（1㎜以下の砂粒若干含む）	良	彦崎K2
82	44	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	注口土器or壷形土器				外：暗褐	粗（1㎜以下の砂粒少量含む）	良	
82	45	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	浅鉢？				外：灰黄褐	粗（1㎜以下の砂粒若干含む）	良	
82	46	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	注口土器or壷形土器				外：にぶい黄橙	粗（1㎜以下の砂粒若干含む）	良	
82	47	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	粗製深鉢				外：浅黄	粗（3㎜以下の砂粒多く含む）	良	
82	48	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	底部			5.0	外：にぶい黄橙	粗（2㎜大の砂粒含む）	良	

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高 (cm)	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
82	49	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	底部			6.0	外：橙色	粗（2㎜大の砂粒含む）	良	No.1584
82	50	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	底部			8.8	外：にぶい橙	粗（2㎜大の砂粒含む）	良	
82	51	Ⅱ-Ⅱ区 3層	弥生？	底部			5.0	外：にぶい橙	やや粗（2㎜大の砂粒含む）	良	
83	52	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	深鉢	27.8				密（2㎜以下の砂粒を含む）	良	
83	53	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	壷				外：にぶい黄橙	密（3㎜以下の砂粒を含む）	良	
83	54	Ⅱ-Ⅱ区 3層	弥生	甕	18.4			外：にぶい黄橙	やや粗（3㎜以下の砂粒を含む）	良	
83	55	Ⅱ-Ⅱ区 3層	古式土師器	甕	17.2			外：にぶい橙	やや粗（1㎜以下の砂粒若干含む）	良	
83	56	Ⅱ-Ⅱ区 3層	古式土師器	甕	16.8			外：にぶい橙	粗（1㎜以下の砂粒若干含む）	良	
83	57	Ⅱ-Ⅱ区 3層	古式土師器	甕	18.4			外：橙	やや粗（1㎜以下の砂粒若干含む）	良	
83	58	Ⅱ-Ⅱ区 3層	古式土師器	甕	16.6			外：灰褐	やや粗（1㎜以下の砂粒少量含む）	良	煤痕あり
83	59	Ⅱ-Ⅱ区 3層	古式土師器	甕	17.6			外：橙	密（1㎜以下の砂粒多く含む）	良	
83	60	Ⅱ-Ⅱ区 3層	古式土師器	甕	18.0			外：にぶい橙	密（1㎜以下の砂粒ごく少量含む）	良	煤痕あり
83	61	Ⅱ-Ⅱ区 3層	古式土師器	甕	18.0			外：灰褐	密（5㎜以下の砂粒を含む）	良	外面一部黒煤付着
83	62	Ⅱ-Ⅱ区 3層	古式土師器	甕	22.2			外：にぶい黄橙	密（1㎜程の砂粒わずかに含む）	良	
83	63	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	高坏	16.5			外：にぶい黄橙	密（1㎜以下の砂粒ごく少量含む）	良	
83	64	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	高坏	16.2			外：にぶい黄橙	やや粗（4㎜以下の砂粒若干含む）	良	
83	65	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	器台			23.6	外：にぶい黄橙	やや粗（2㎜以下の砂粒多く含む）	良	
84	66	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	高坏				外：浅黄橙	密（1㎜大の砂粒を含む）	良	
84	67	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	高坏	22.8			外：橙	密（1㎜以下の砂粒少量含む）	良	
84	68	Ⅱ-Ⅱ区 3層		製塩土器？				外：明黄褐	密（1㎜以下の砂粒少量含む）	良	
84	69	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	甑把手				外：黄橙	粗（2㎜位の砂粒多く含む）	良	
84	70	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	手捏土器	11.5			外：にぶい橙	密（1㎜以下の砂粒少量含む）	良	
84	71	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	高坏	16.7			外：にぶい黄橙	密（1㎜以下の砂粒少量含む）	良	外．内 回転ナデ
84	72	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	鉢				外：橙	密（1㎜前後の砂粒含む）	良	
84	73	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏	14.9	4.3	5.4	外：にぶい黄橙	密（4㎜以下の砂粒多く含む）	良	外：ナデ 底部：回転糸切り
84	74	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏（底脚）			8.3	外：橙	粗（4㎜前後の砂粒多く含む）	良	
84	75	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	高杯				外：橙	密（5㎜以下の砂粒含む）	良	
84	76	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	柱状高台			3.8	外：橙	粗（3㎜大の砂粒含む）	良	底部：回転糸切り
84	77	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	椀？の底部			5.8		粗（2㎜以下の砂粒少量含む）	良	底部：ヘラおこし
84	78	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			5.6		粗（1㎜以下の砂粒少量含む）	良	底部：糸切り
84	79	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			5.2		粗（2㎜以下の砂粒少量含む）	良	外：回転ナデ 底部：糸切り

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高（cm）	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
84	80	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			6.6		粗（1mm以下の砂粒少量含む）	良	外：ナデ 底部：糸切り
84	81	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			5.6		粗（1mm以下の砂粒少量含む）	良	底部：ヘラおこし？
84	82	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			6.4		粗（1mm以下の砂粒若干含む）	良	底部：糸切り
84	83	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			5.4		粗（1mm以下の砂粒ごく少量含む）	良	底部：糸切り
85	84	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			5.4		やや粗（1mm以下の砂粒ごく少量含む）	良	底部：ヘラおこし？
85	85	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			7.4		やや粗（2mm以下の砂粒若干含む）	良	底部：ヘラおこし？
85	86	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			4.0		やや粗（1mm以下の砂粒少量含む）	良	底部：糸切り
85	87	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏			6.6		やや粗（1mm以下の砂粒少量含む）	良	底部：ヘラおこし？
85	88	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	浅鉢				外：黒褐	やや粗（2mm以下の砂粒若干含む）	良	
85	89	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			6.0		密（1mm以下の砂粒少量含む）	良	回転ナデ 底部：糸切り
85	90	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			6.0		密（1mm以下の砂粒ごく少量含む）	良	底部：糸切り
85	91	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			5.4		密（1mm以下の砂粒ごく少量含む）	良	回転ナデ 底部：糸切り
85	92	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			3.2		密（1mm以下の砂粒ごく少量含む）	良	回転ナデ 底部：糸切り
85	93	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			7.0		密（1mm以下の砂粒少量含む）	良	回転ナデ 底部：糸切り
85	94	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	皿			5.3	外：黄褐	粗（3mm大の砂粒含む）	良	
85	95	Ⅱ-Ⅱ区 3層	縄文	皿			6.5	外：にぶい黄橙	やや粗（1mm大の砂粒含む）	良	
85	96	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	かわらけ			7.2	外：にぶい橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	底部：回転糸切り
85	97	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	埦			5.7	外：にぶい橙	やや粗（1mm以下の砂粒ごく少量含む）	良	底部：回転糸切り
85	98	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	埦			5.9	外：にぶい黄橙	やや粗（5mm以下の砂粒ごく少量含む）	良	底部：回転糸切り
85	99	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	埦			5.4	外：にぶい黄橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	底部：回転糸切り
85	100	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	埦			5.0	外：にぶい橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	底部：回転糸切り
85	101	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	埦			4.0	外：橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	底部：回転糸切り
85	102	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	埦			6.2	外：にぶい橙	やや粗（1mm位の砂粒含む）	良	底部：回転糸切り
85	103	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	埦			8.6	外：にぶい橙	やや粗（1mm位の砂粒含む）	良	底部：糸切り
85	104	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	埦			6.2	外：にぶい黄橙	やや粗（2mm位の砂粒含む）	良	底部：糸切りのちナデ
85	105	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	埦			5.7	外：浅黄橙	やや粗（1mm位の砂粒含む）	良	底部：糸切りのちナデ
85	106	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			6.4	外：浅黄橙	やや粗（2mm位の砂粒含む）	良	底部：糸切り 回転ナデ
85	107	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			5.7	外：浅黄橙	やや粗（2mm位の砂粒含む）	良	底部：糸切り 回転ナデ
85	108	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏			5.5	外：にぶい橙	やや粗（2mm位の砂粒含む）	良	底部：糸切り 回転ナデ
85	109	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			6.4	外：にぶい橙	やや粗（2mm位の砂粒含む）	良	底部：糸切り
86	110	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			3.4	外：浅黄橙	やや粗（2mm位の砂粒含む）	良	底部：糸切り

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高 (cm)	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
86	111	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			5.2	外：浅黄橙	やや粗（2mm位の砂粒含む）	良	底部：回転ナデ 糸切り
86	112	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			5.6	外：灰白	やや粗（1mm位の砂粒含む）	良	底部：糸切り
86	113	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			5.8	外：灰白	やや粗（0mm位の砂粒含む）	良	底部：回転ナデ 糸切り
86	114	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			3.4	外：褐灰	やや粗（1mm位の砂粒含む）	良	底部：ヘラおこし
86	115	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器				7.0	外：浅黄橙	密（2mm位の砂粒多く含む）	良	底部：糸切り
86	116	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	皿	8.0	1.1	6.0	外：橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	よこナデ 底部：回転糸切り
86	117	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	皿	8.2	1.4	6.9	外：橙	密（1mm以下の砂粒含む）	良	よこナデ 底部：回転糸切り
86	118	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	皿	8.0	1.2	6.0	外：浅黄橙	やや粗（1mm位の砂粒含む）	良	
86	119	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	皿	7.9	0.9	6.5	外：浅黄橙	密（2mm大の砂粒含む）	良	よこナデ 底部：回転糸切り
86	120	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	皿	6.1	1.3	5.8	外：浅黄橙	粗（1mm以下の砂粒含む）	良	よこナデ 底部：回転糸切り
86	121	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	皿	7.8	1.8	7.4	外：浅黄橙	やや粗（1mm位の砂粒含む）	良	底部：糸切り
86	122	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	かわらけ（皿）	16.8	4.3	8.4	外：橙	密（2mm位の砂粒含む）	良	底部：糸切り
86	123	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏	11.4	3.6	8.0	外：灰黄	密（1mm位の砂粒含む）	良	はけめ ヘラ調整
86	124	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	壺			5.4	外：にぶい黄橙	密（2mm以下の砂粒多く含む）	良	
86	125	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏	12.6	3.2	8.3	外：灰	密（2mm以下の砂粒含む）	良	外:ヘラ調整
86	126	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏	10.8	3.3	7.4	外：赤褐	やや粗（2mm以下の砂粒少量含む）	良	底部：糸切り
86	127	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏底部			6.0		やや粗（1mm以下の砂粒少量含む）	良	
86	128	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	坏	13.0	3.4	6.5	外：にぶい橙	密（4mm以下の砂粒含む）	良	内外面に黒斑あり
86	129	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師器	皿			13.0	外：橙色	やや粗（2mm大の砂粒を含む）	良	炭付着
86	130	Ⅱ-Ⅱ区 3層	須恵器	坏身	11.2			外：灰	密（1mm以下の砂粒ごく少量含む）	良	
86	131	Ⅱ-Ⅱ区 3層	須恵器	高杯				外：灰	密（1mm以下の砂粒ごく少量含む）	良	透かしあり
86	132	Ⅱ-Ⅱ区 3層	須恵器	高杯				外：灰	密（1mm以下の砂粒ごく少量含む）	良	2方向透かしあり
86	133	Ⅱ-Ⅱ区 3層	須恵器	高杯			8.3	外：灰	密（2mm以下の砂粒含む）	良	回転ナデ
86	134	Ⅱ-Ⅱ区 3層	須恵器	坏脚部			8.8	外：灰	密（2mm以下の砂粒含む）	良	
87	135	Ⅱ-Ⅱ区 3層	須恵器	坏	11.4	5.6	8.5	外：青灰	密	良	回転ナデ
87	136	Ⅱ-Ⅱ区 3層	須恵器	壺	11.4			外：灰オリーブ	密	良	
87	137	Ⅱ-Ⅱ区 3層	須恵器	底部			7.2	外：褐灰	密	良	底部：糸切り
87	138	Ⅱ-Ⅱ区 3層	須恵器	高台坏			10.8	外：灰	密	良	
87	139	Ⅱ-Ⅱ区 3層	土師質土器	擂鉢			13.6	外：橙	粗（3mm～6mm位の砂粒含む）	良	ケズリ 指頭圧
87	140	Ⅱ-Ⅱ区 3層	陶磁器	碗	11.2	3.1	6.3	外：灰白	密	良	白磁 内・外　回転ナデ
87	141	Ⅱ-Ⅱ区 3層	陶磁器	碗	16.8	7.2	7.0	外：明オリーブ灰	密	良	

fig	番号	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高（cm）	底経(cm)	色調	胎土	焼成	備考
87	142	Ⅱ-Ⅱ区 3層	石器	刀器	長さ 3.8	巾（最大で） 2.0	厚さ 1.6	重さ 9ｇ			石材：黒曜石
87	143	Ⅱ-Ⅱ区 3層	石器		長さ 5.1	巾 1.9	厚さ 0.65				石材：安山岩
87	144	Ⅱ-Ⅱ区 3層	石器	キリ（未成品）	長さ 4.1	巾 0.7	厚さ 0.4	重さ 0.8ｇ			石材：安山岩
87	145	Ⅱ-Ⅱ区 3層	石器	石鏃	長さ 1.6	巾 1.6	厚さ 0.4	重さ 105ｇ			石材：安山岩
87	146	Ⅱ-Ⅱ区 3層	石器	鏃	長さ 1.88	巾 1.18	厚さ 0.3	重さ 66ｇ			石材：安山岩
88	147	Ⅱ-Ⅱ区 3層	石器	スクレーパー（石匙）	長さ 4.6	巾 5.8	厚さ 0.7	重さ 21ｇ			石材：黒曜石（未成品）
88	148	Ⅱ-Ⅱ区 3層	石器	石錘	長さ 7.7	巾 4.1	厚さ 2.1	重さ 105ｇ			石材：河原石
88	149	Ⅱ-Ⅱ区 3層	石器	石錘	長さ 6.1	巾 3.4	厚さ 2.35	重さ 66ｇ			石材：河原石
88	150	Ⅱ-Ⅱ区 3層	石器	石錘	長さ 7.35	巾 6.6	厚さ 2.55	重さ 40ｇ			石材：河原石
88	151	Ⅱ-Ⅱ区 3層	石器	石錘	長さ 7.8	巾 5.6	厚さ 2.5	重さ 151ｇ			石材：粘板岩
88	152	Ⅱ-Ⅱ区 3層	石器	（刃部片）磨製石斧	長さ 5.3	巾 4.4	厚さ 1.4	重さ 40ｇ			
88	153	Ⅱ-Ⅱ区 3層	古銭	銭種は不明	長さ 2.6	巾 2.6	厚さ 0.4（3枚で）	重さ 4ｇ			銭は3枚重なっている銭種は錆、風化のため不明
88	154	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	鉄塊、たがねorくさび							
88	155	Ⅱ-Ⅱ区 3層	製鉄関連遺物	刀の包丁							NO.181と同一個体

写　真　図　版

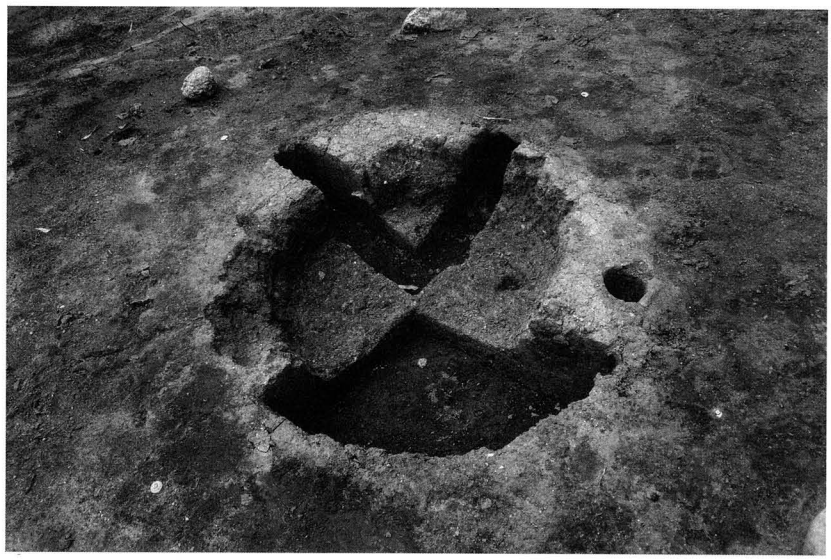
御崎遺跡 全景（北西から） 上：調査前 下：調査後

図版 2

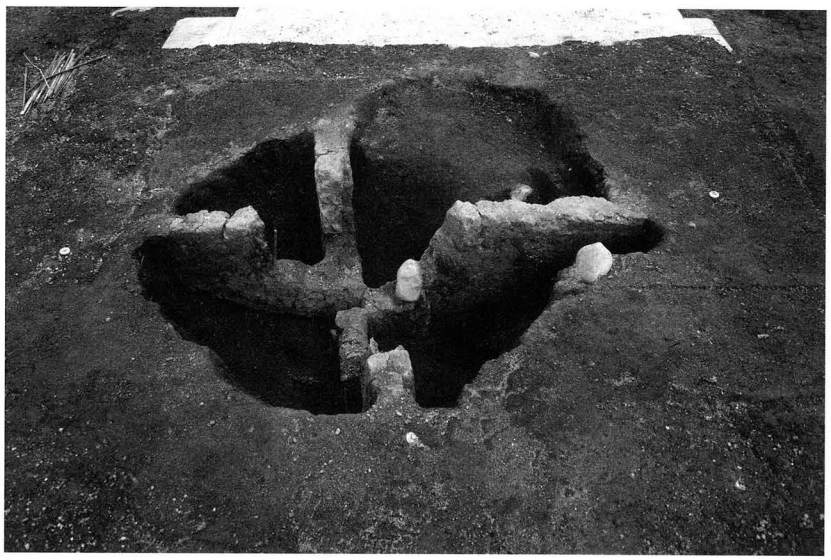
T2 断面写真

T8 断面写真

SK01



SK02



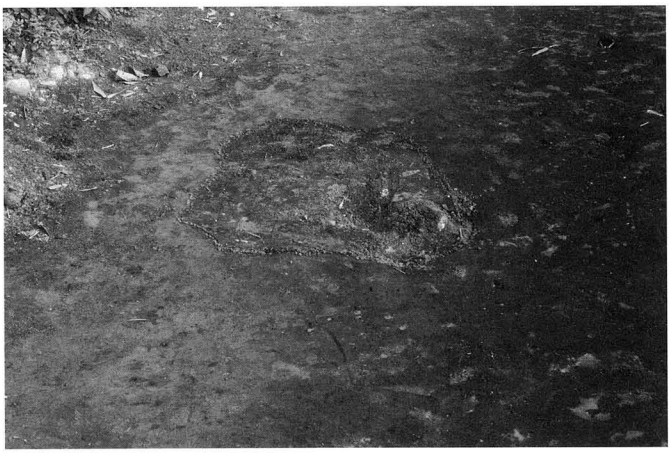
SK03

図版 4

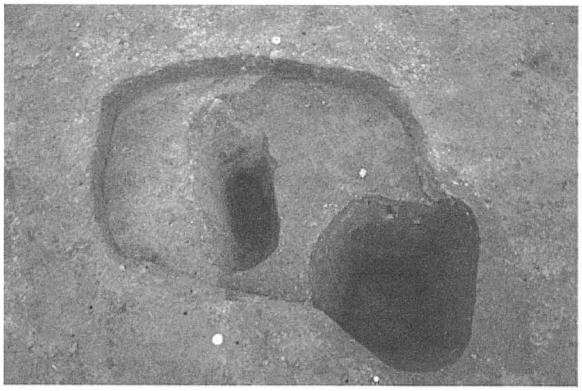
SK04・SX12 集石状況

SK04・SX12 完掘状況

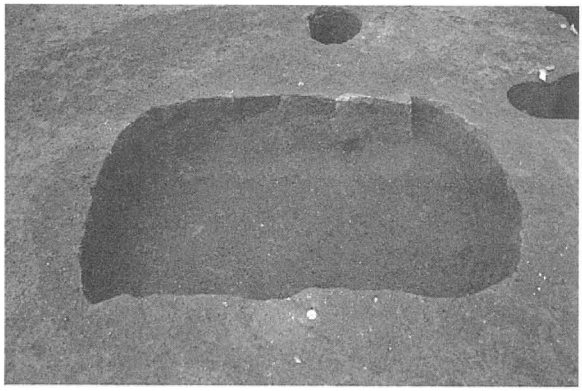
SK05 完掘状況



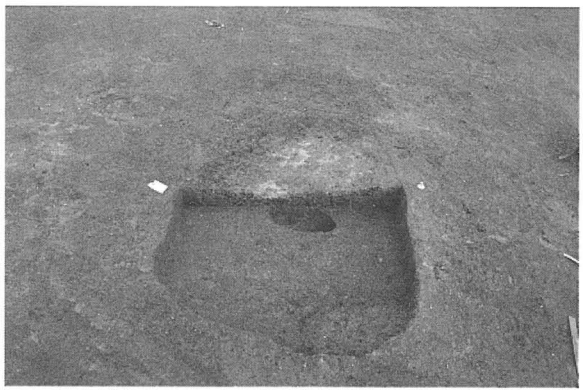
SK26 検出状況



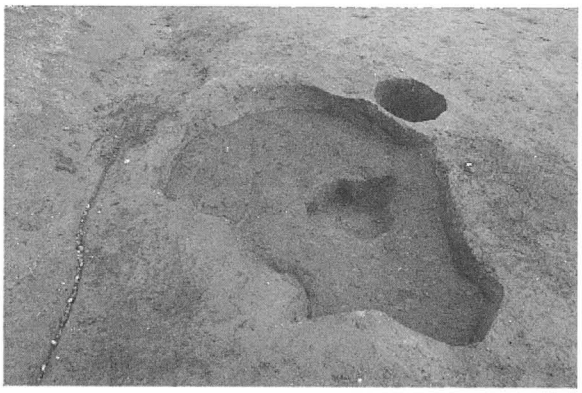
SK14 完掘状況



SK15 完掘状況



SK16 半裁状況

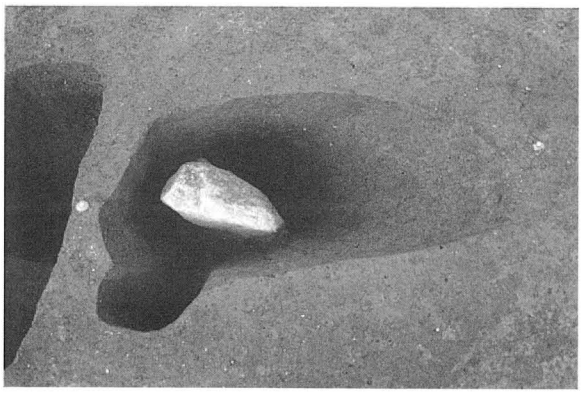


SK17 完掘状況

SK18 完掘状況

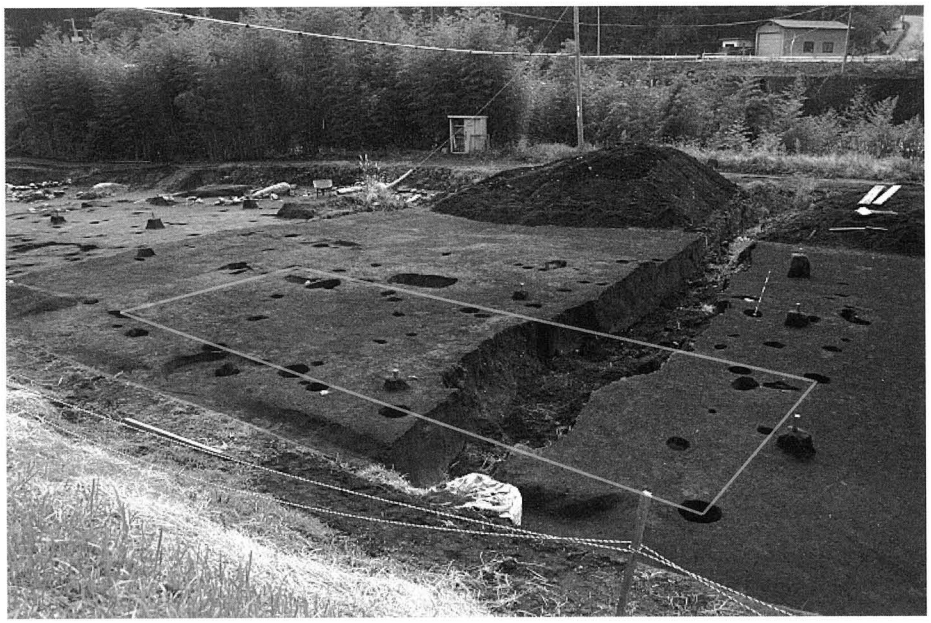
SX38 半裁状況

SX39 半裁状況

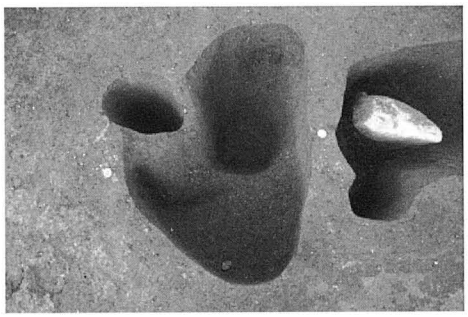


SX40 完掘状況

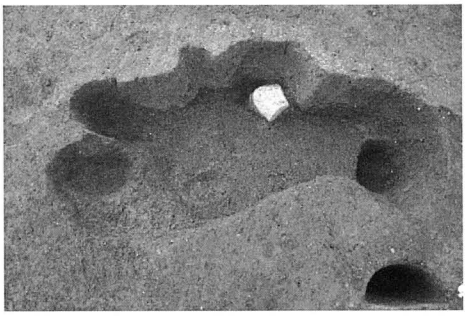
図版 6



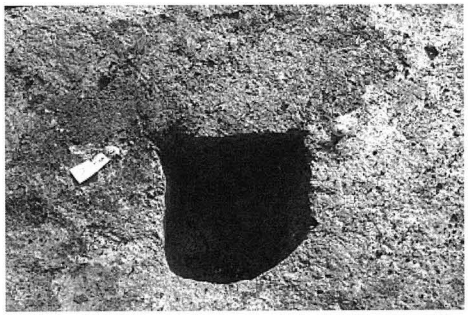
SB07 完掘状況



SX41 完掘状況



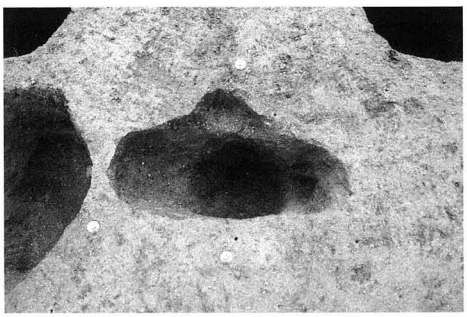
SX42 完掘状況



SX43 半裁状況

SX44 完掘状況

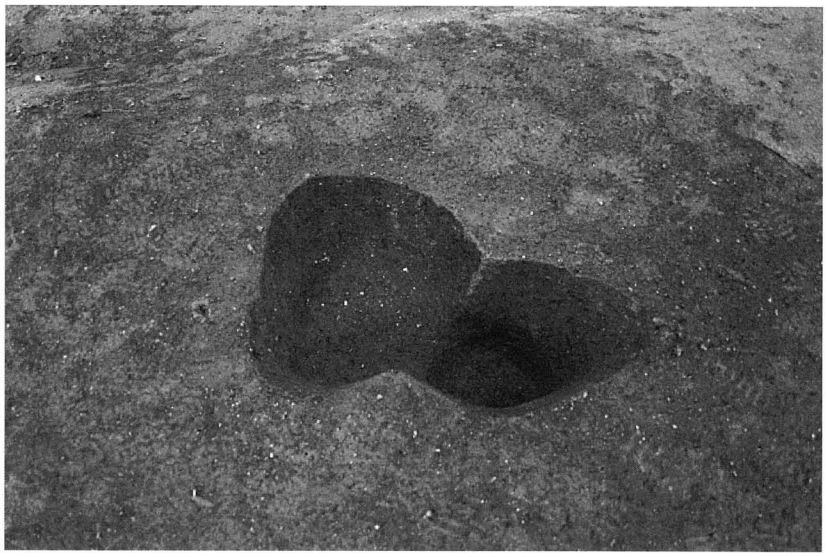
SX46 完掘状況



SX47 完掘状況

SX48 完掘状況

SX49 完掘状況

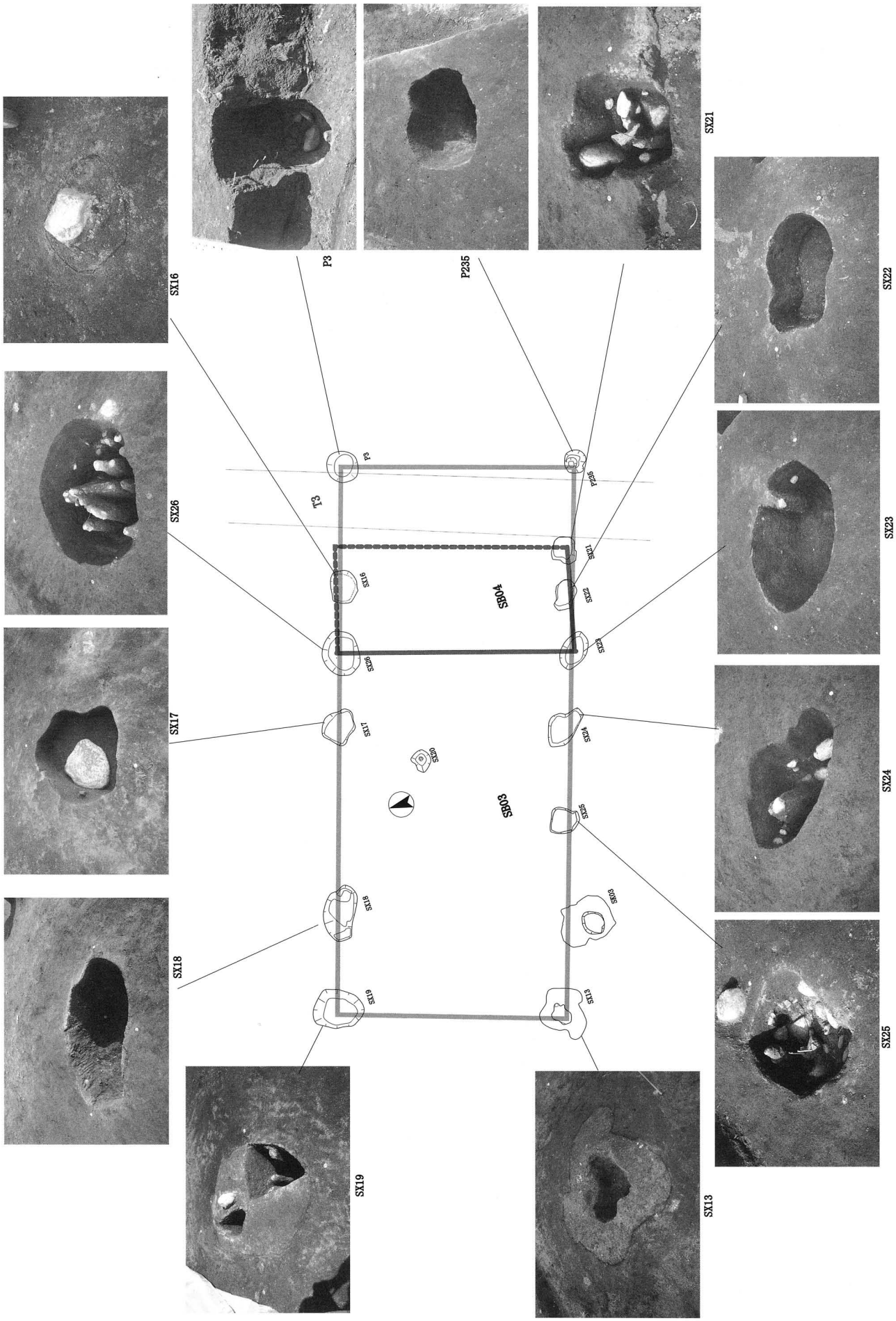


SX51 完掘状況

図版 8

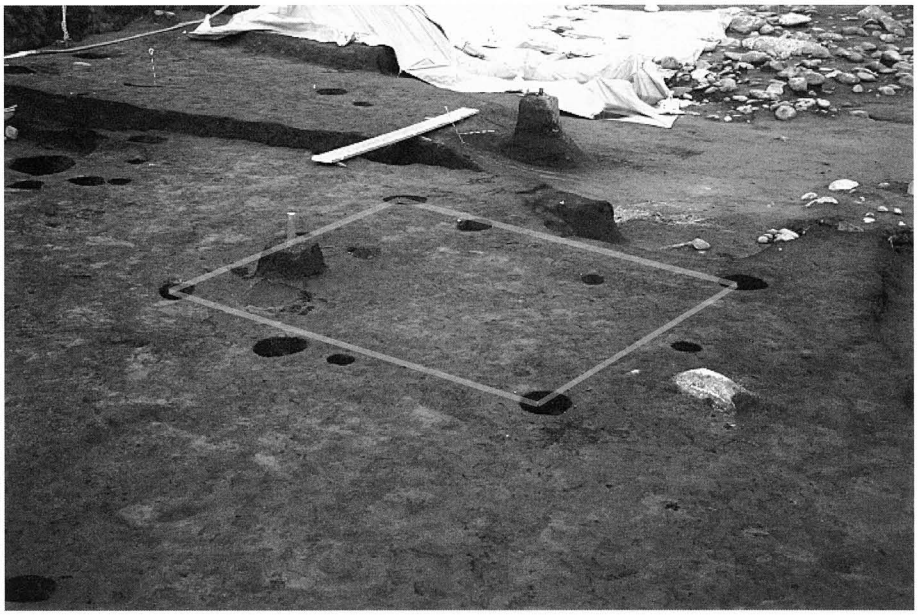
SB01 完掘状況

SB02 完掘状況



SB03　SB04 完掘状況

SB05 完掘状況



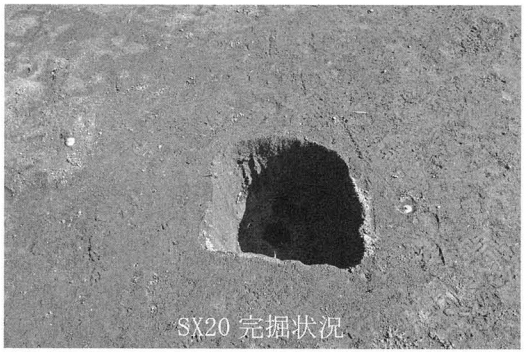
SB06 完掘状況

SX07 半裁状況

SX28 半裁状況

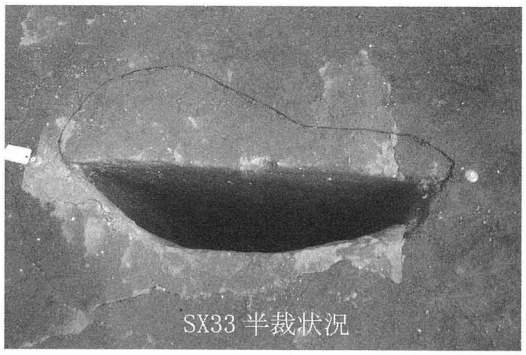
SX15 完掘状況

SX29 半裁状況


SX20 完掘状況

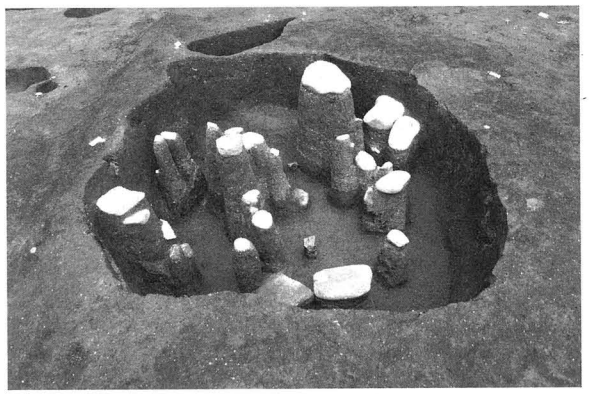
SX32 完掘状況

SX27 半裁状況


SX33 半裁状況

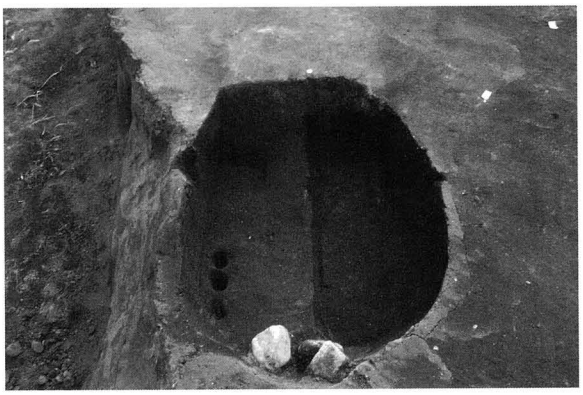
SX36 完掘状況

図版 12



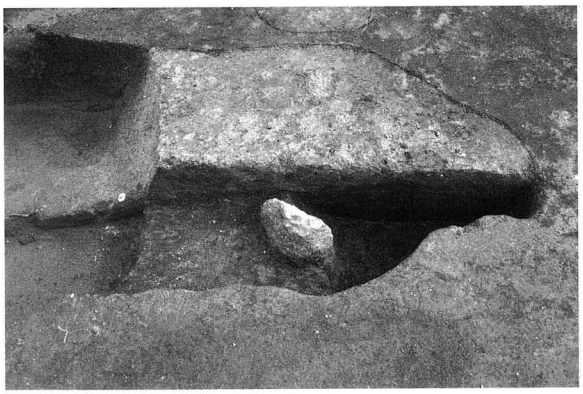
SK06 石出土状況

SK07 石出土状況

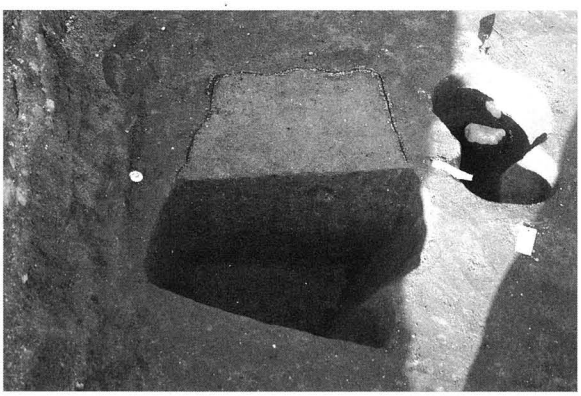


SK08 完掘状況

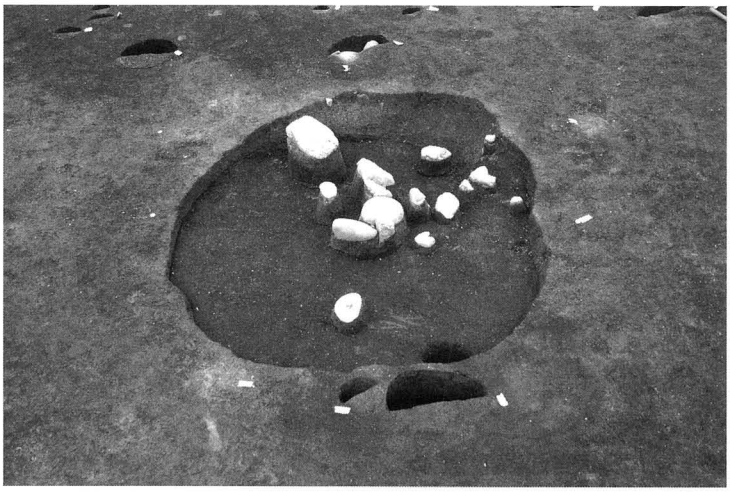
SK10 完掘状況



SK09 半裁状況



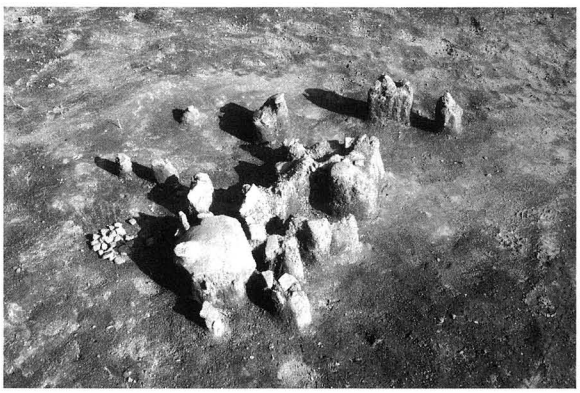
SK13 半裁状況



SK11 石出土状況

SK12 石出土状況

土器群 1 検出状況

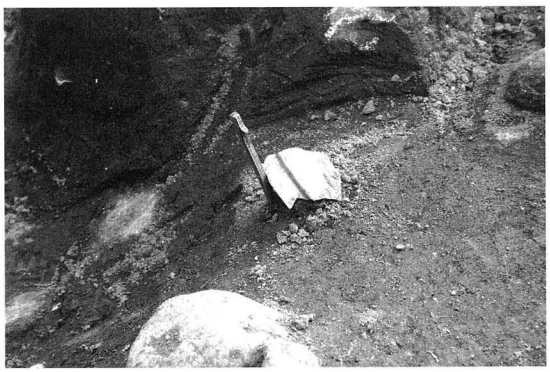


図版 14

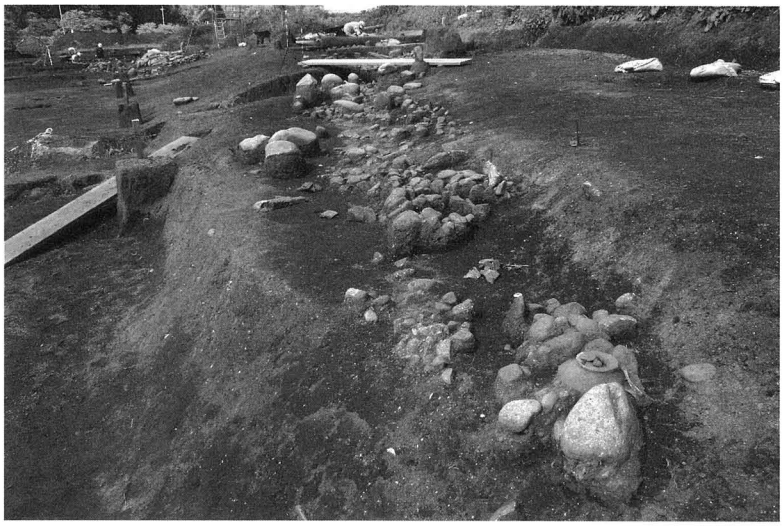
SG01 完掘状況（北側から）

SG01 出土遺物

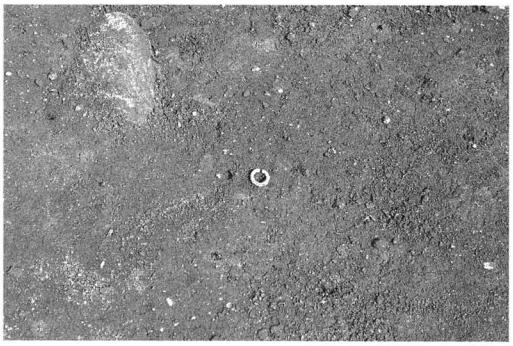
SG01 出土遺物



SG01 完掘状況（南東から）



SD01 検出状況



SD01 出土遺物

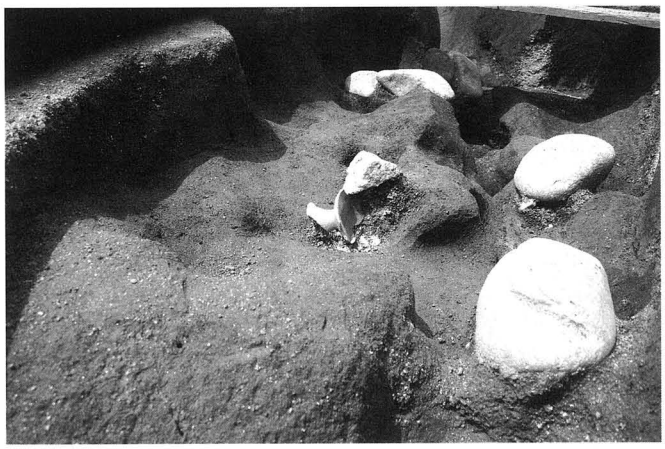
SD01 完掘状況

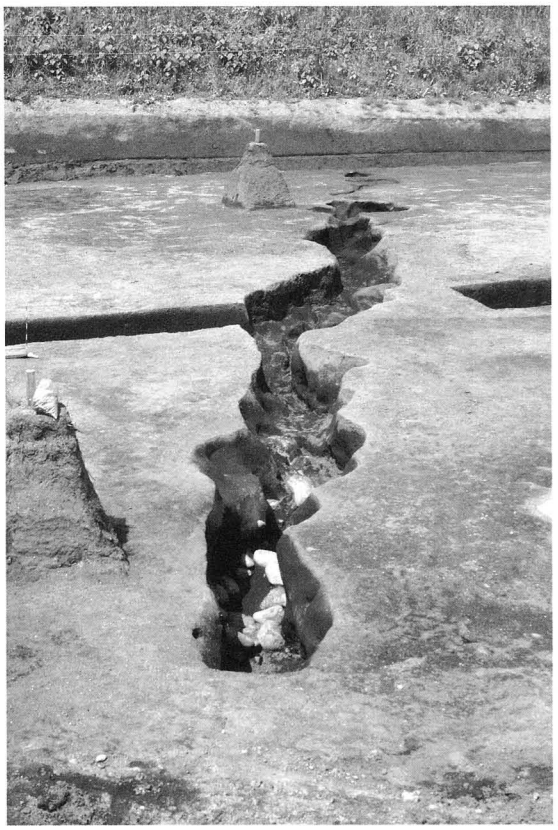
図版 16

SD02 検出状況

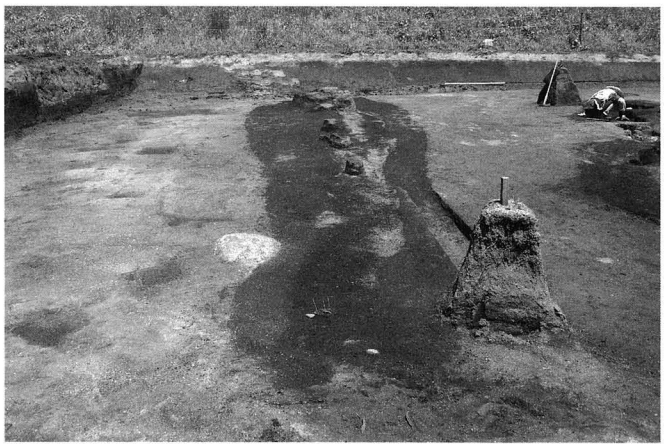
SD02 遺物出土状況

SD02 遺物出土状況

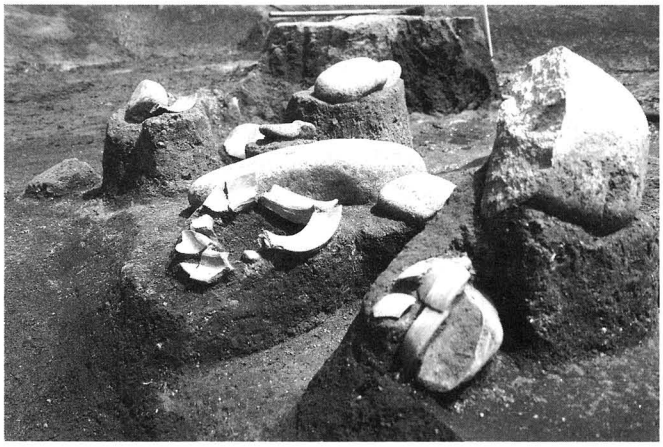




SD02 完掘状況

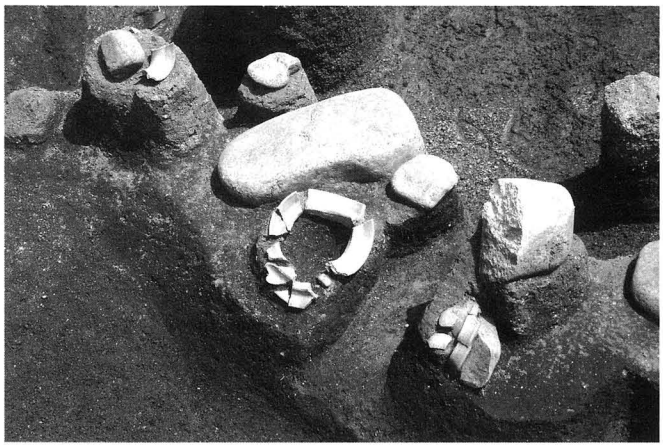


SD06 検出状況



SD06 遺物出土状況

SD06 完掘状況



SD06 遺物出土状況

SK21・SK22

SX53

SK20

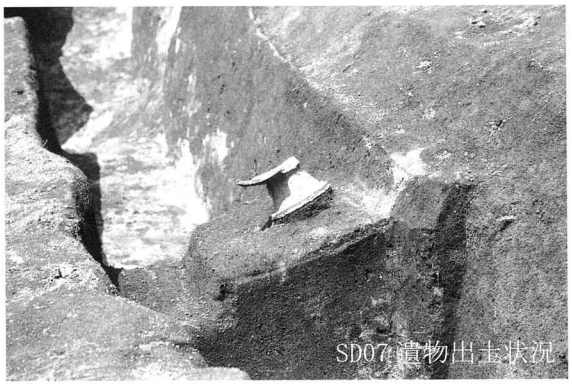
SK19 半裁状況

SD03 検出状況

SX52 完掘状況

SI01 完掘状況

KD01 完掘状況



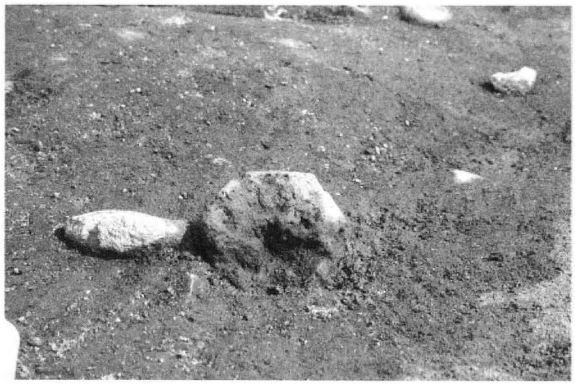
SD07 遺物出土状況

SD07 完掘状況

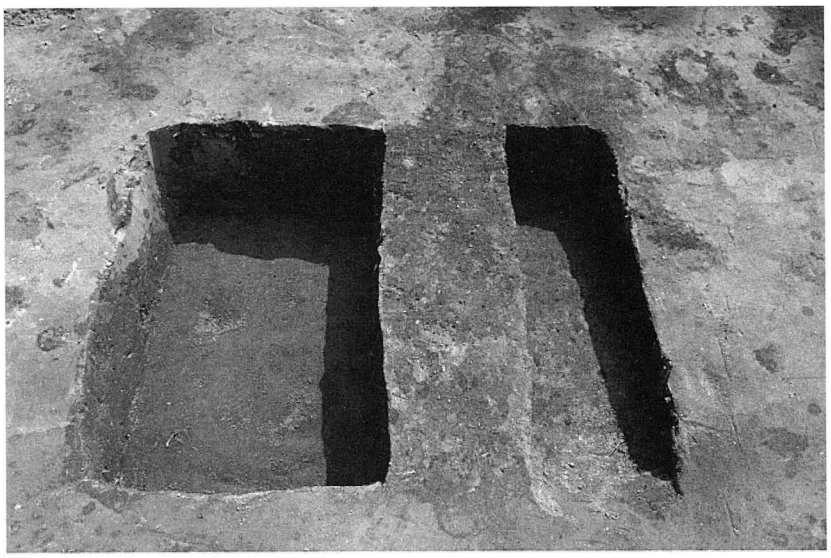
SK24 遺物出土状況

SK24 遺物出土状況

排滓場跡検出状況



羽口出土状況

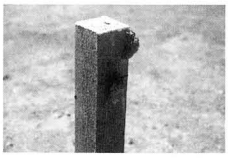


SX57 半裁状況

SX58(SI01 柱穴) 完掘状況

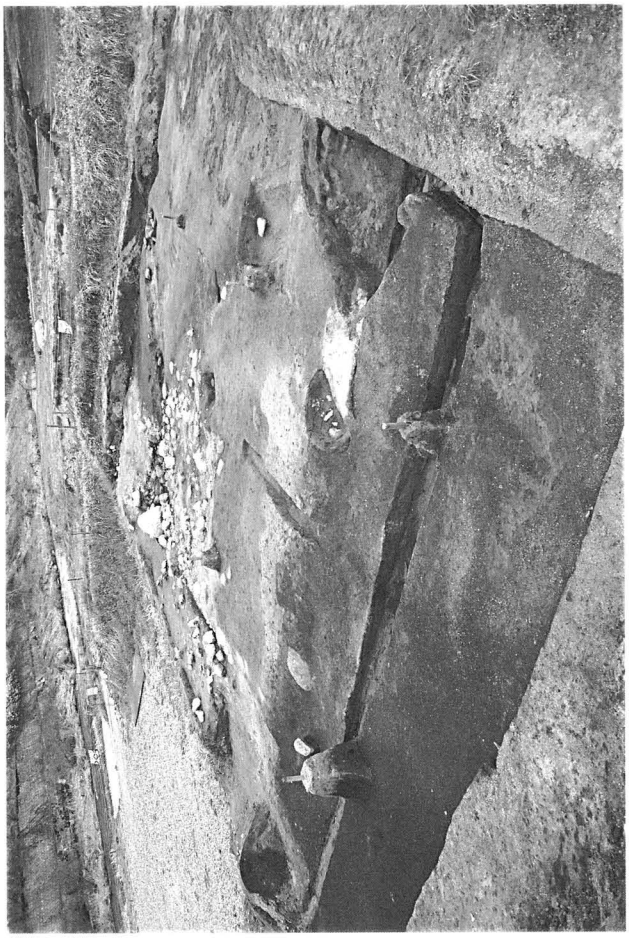
SX59 完掘状況

調査指導



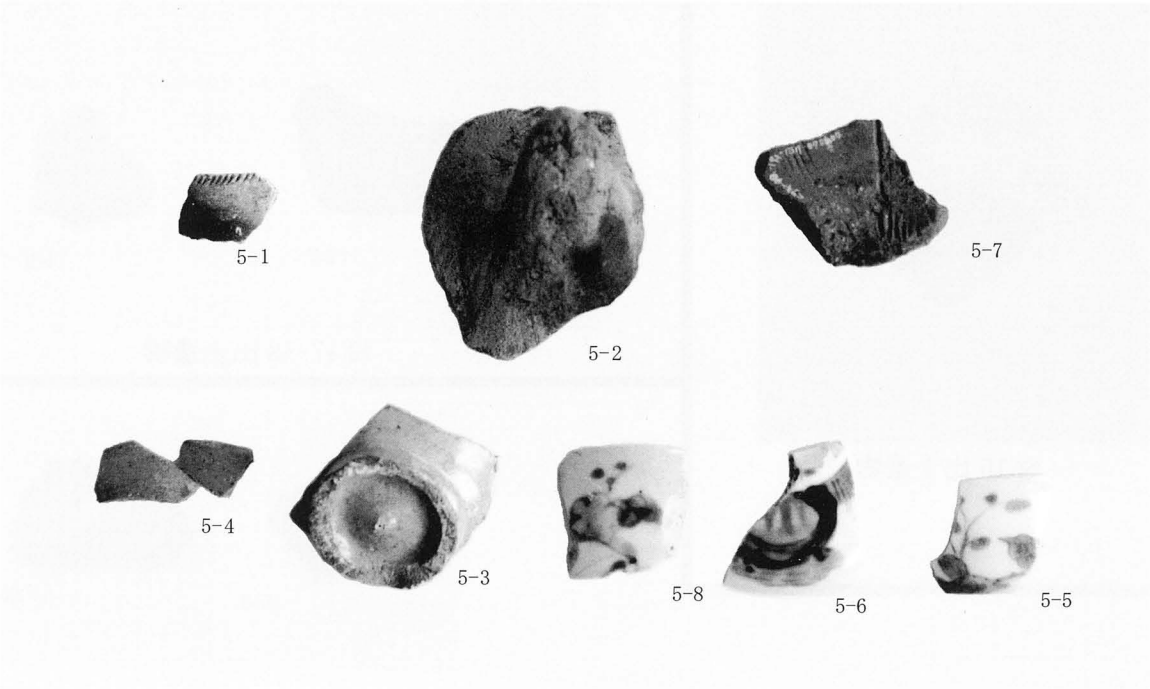
体験学習

作業風景

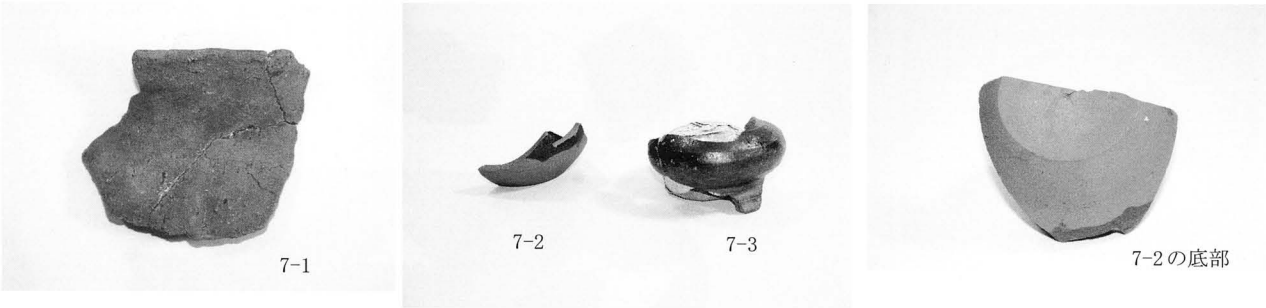


Ⅱ-1 区完掘状況

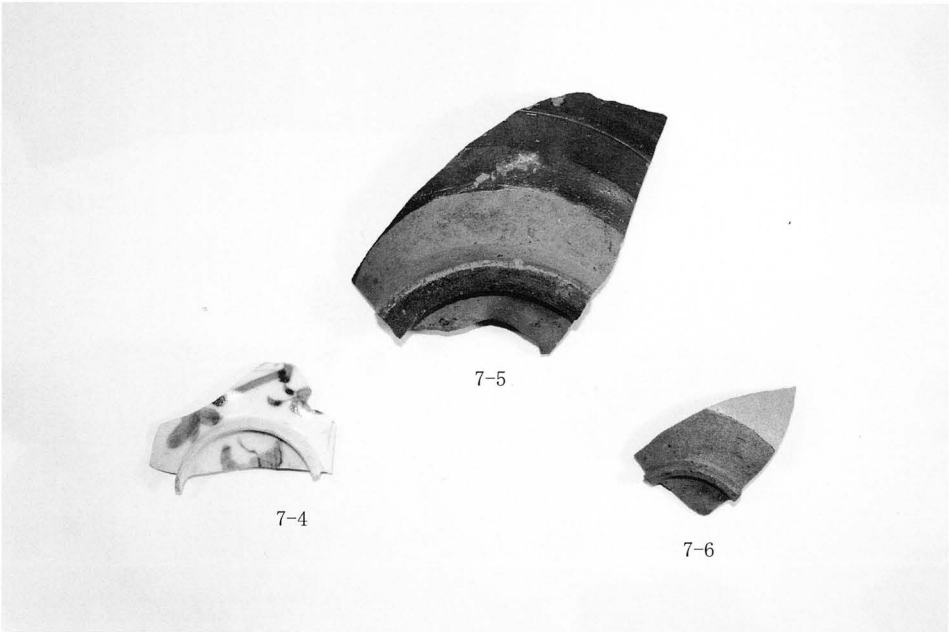
Ⅱ-2 区完掘状況



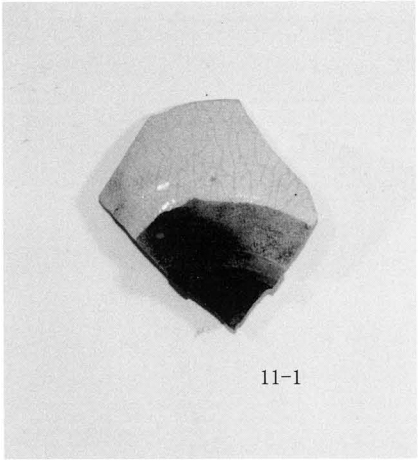
1 層出土遺物



SK01 出土遺物

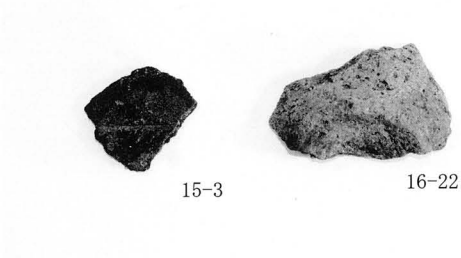


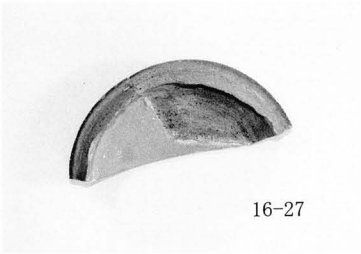
SK05 出土遺物

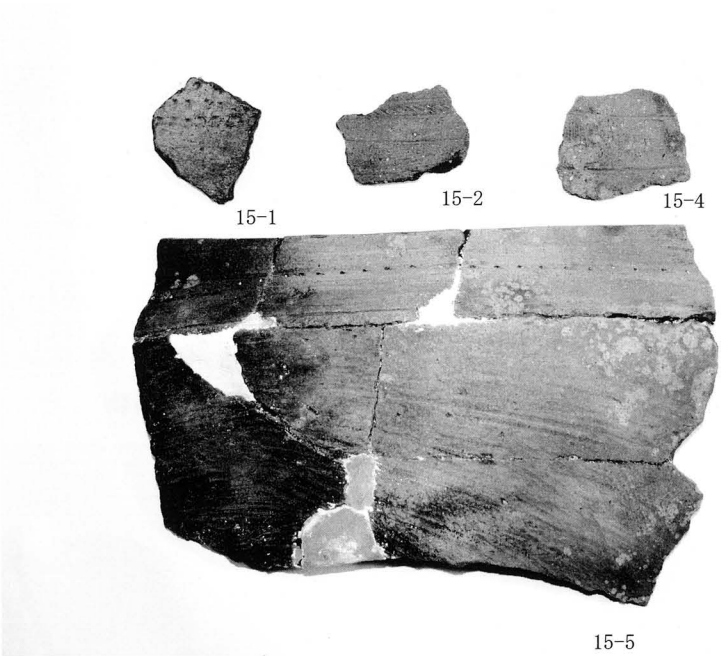


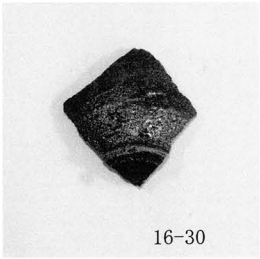
SK15 出土遺物

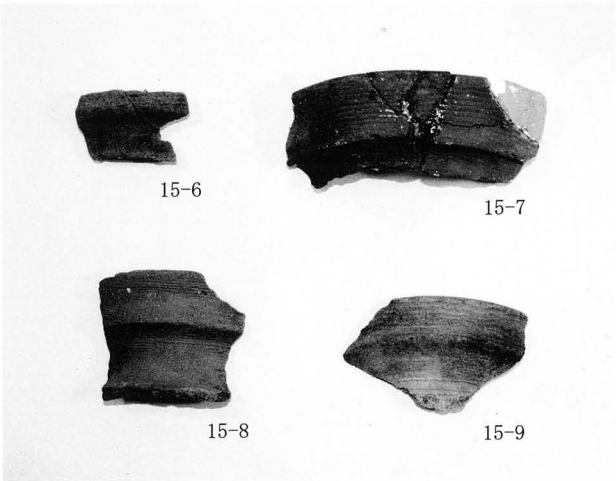
SK17・18 出土遺物



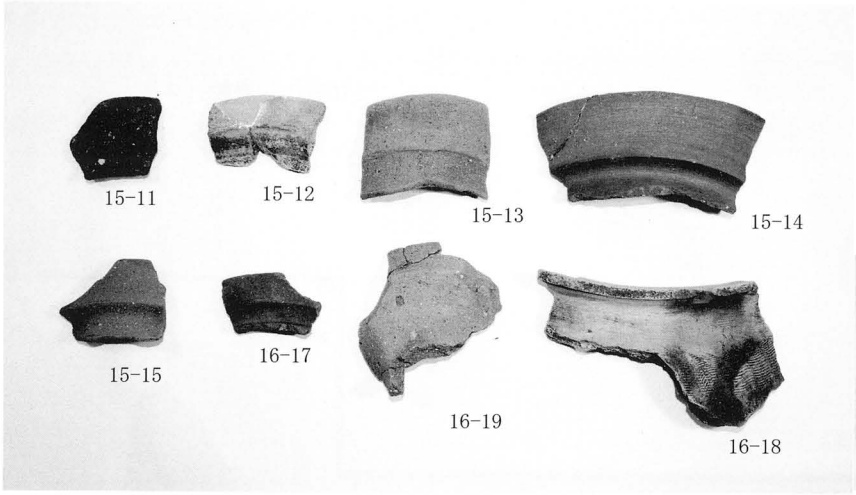


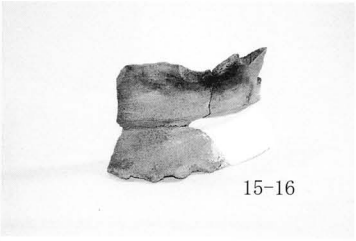


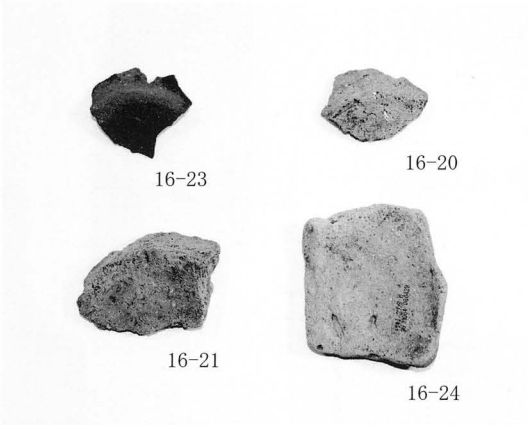


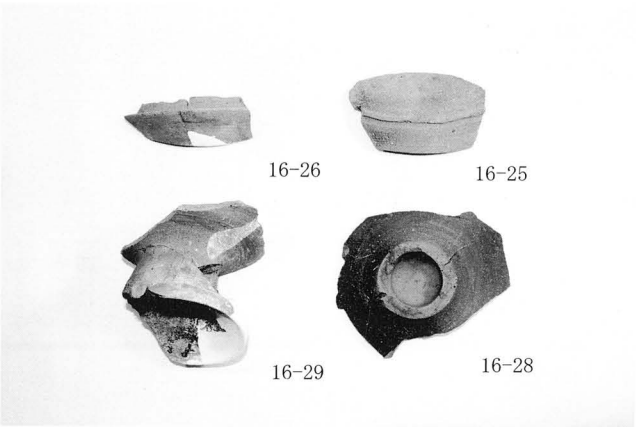


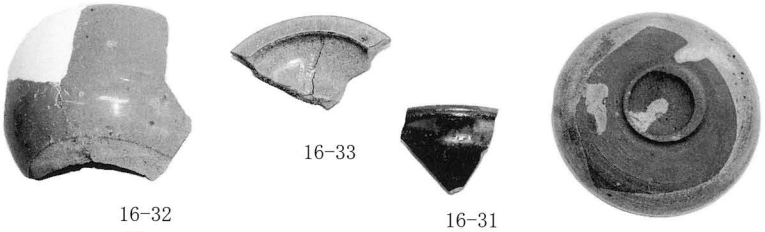
I 区 2 層出土遺物 (1)

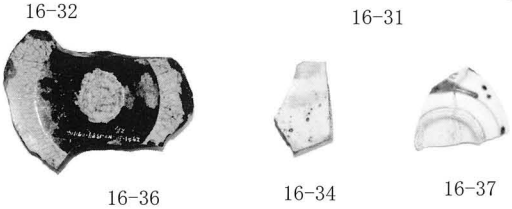


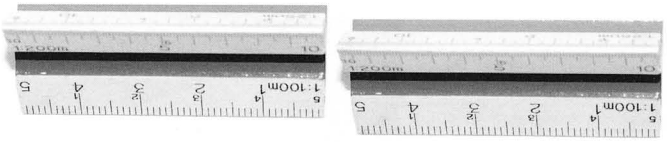












16-38

I区2層出土遺物（2）

SX07出土遺物

24-2

24-1

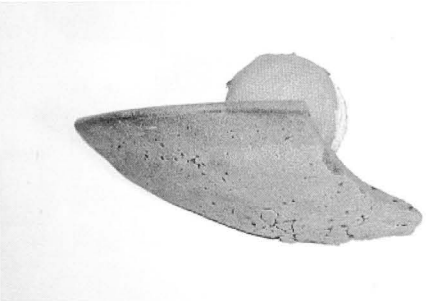
29-7

29-6

SB01 出土遺物

29-1

29-2

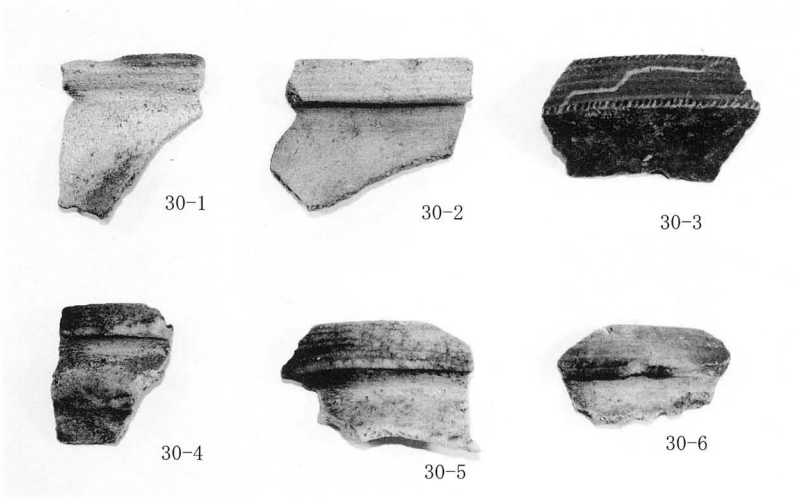


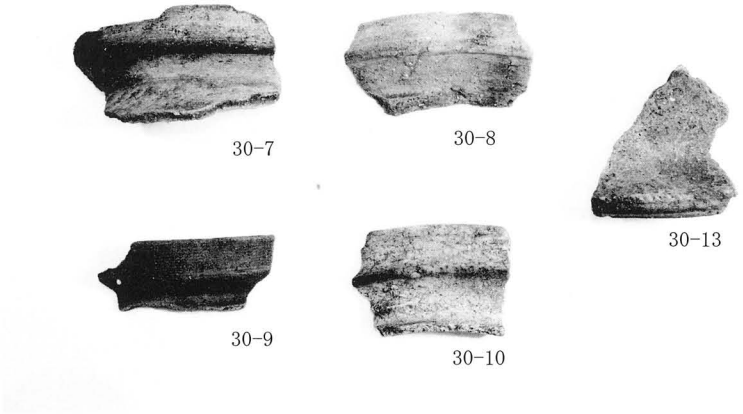
29-3

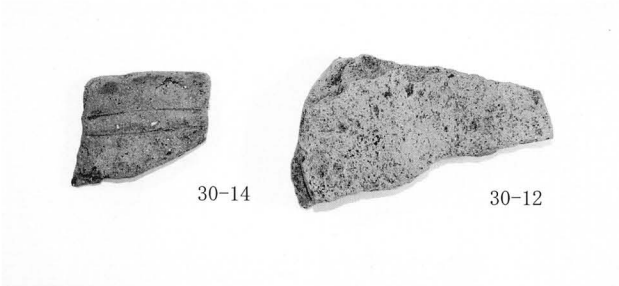
29-4

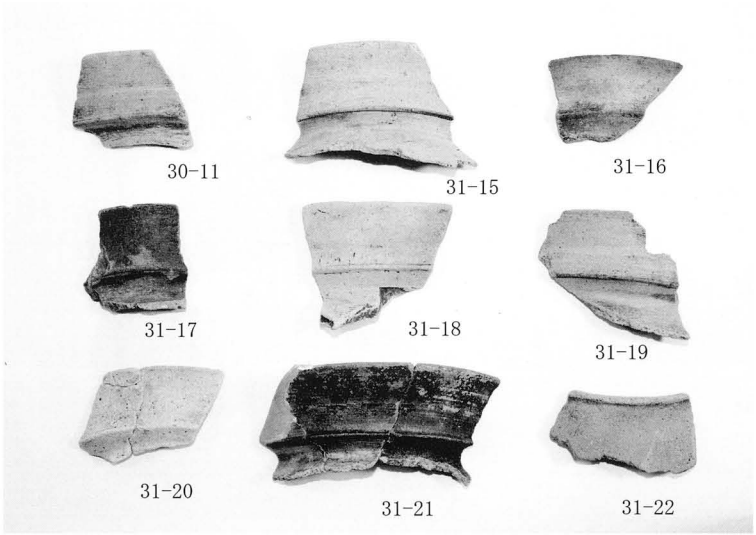
SB05出土遺物

29-5


30-1
30-2
30-3
30-4
30-5
30-6

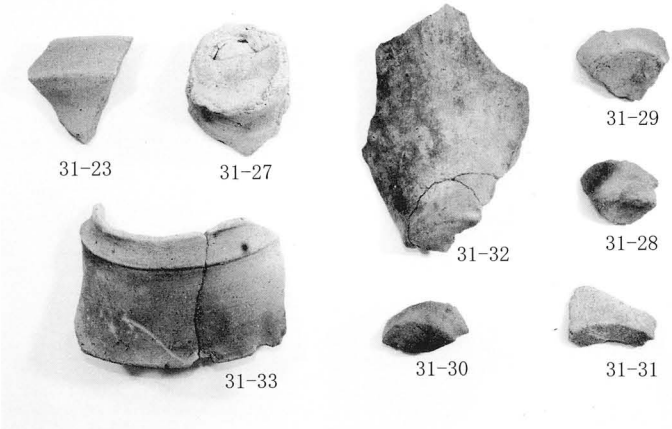

30-7
30-8
30-13
30-9
30-10

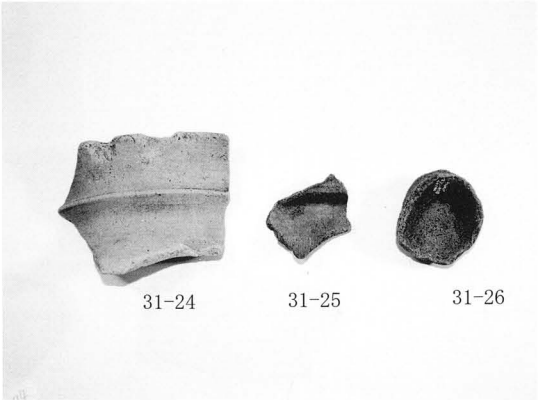

30-14
30-12

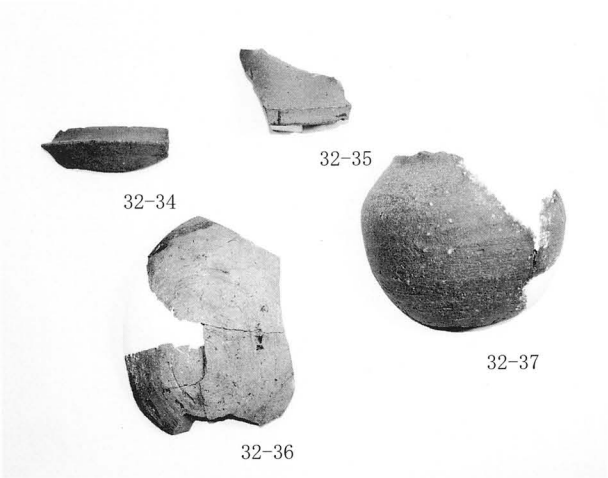

30-11
31-15
31-16
31-17
31-18
31-19
31-20
31-21
31-22

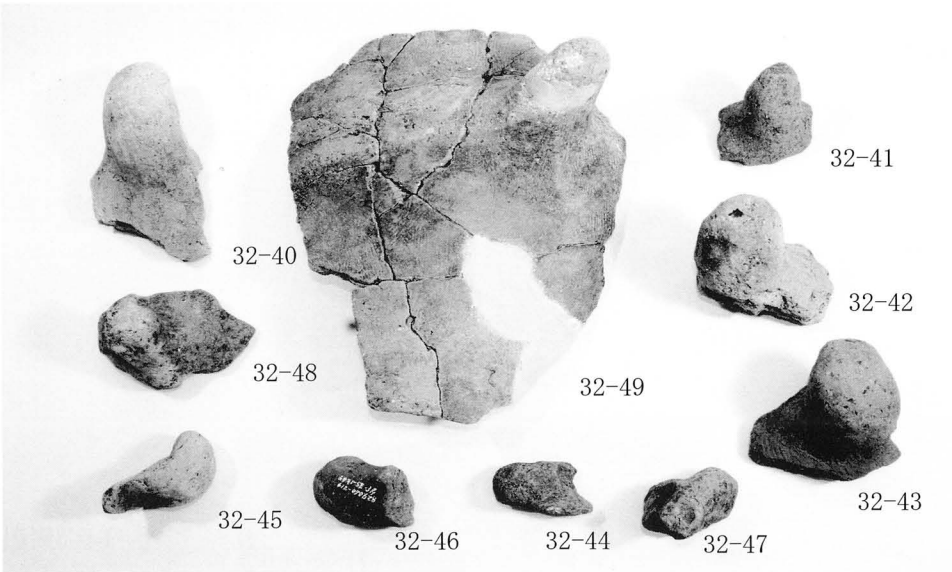
Ⅰ区3層出土遺物(1)

図版 30

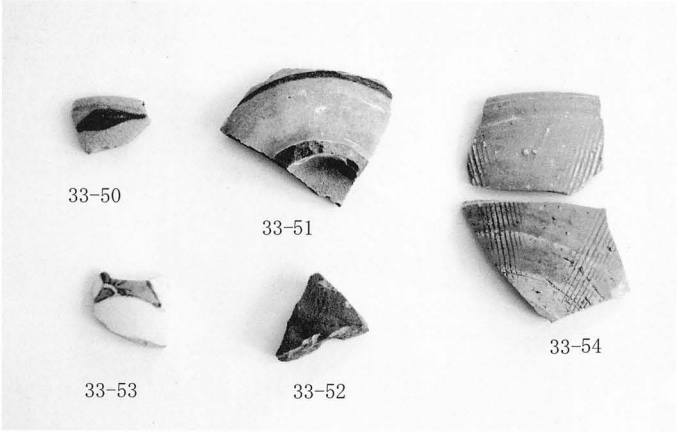


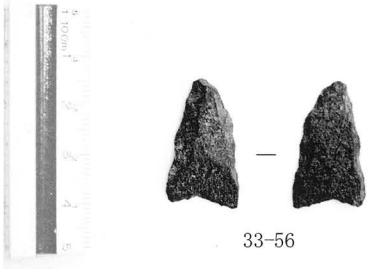


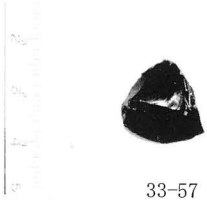




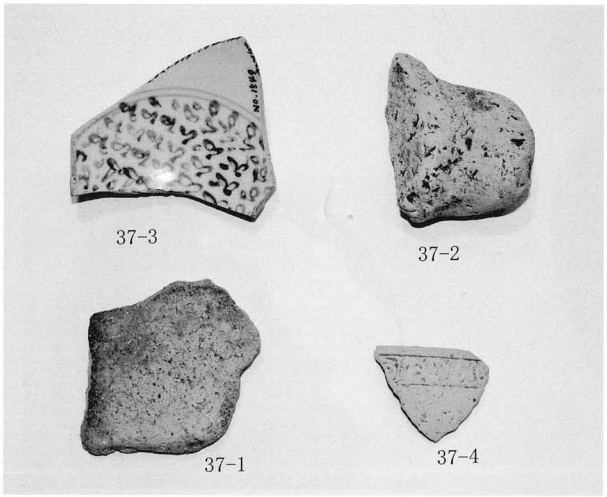
Ⅰ区3層(2)・土器群1出土遺物



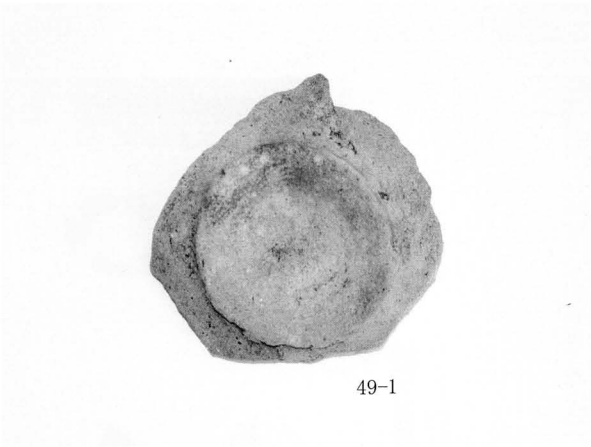




Ⅰ区３層出土遺物（3）

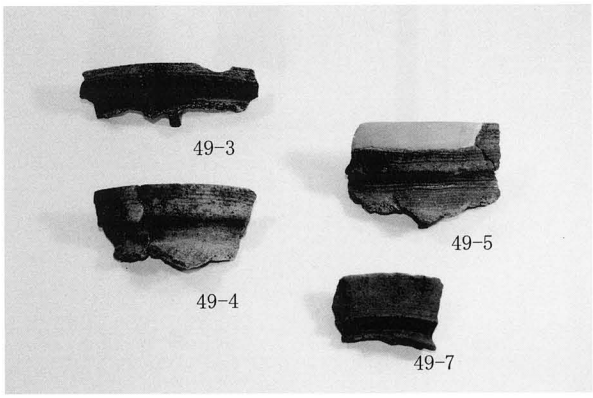


SG01 出土遺物



49-1

49-2

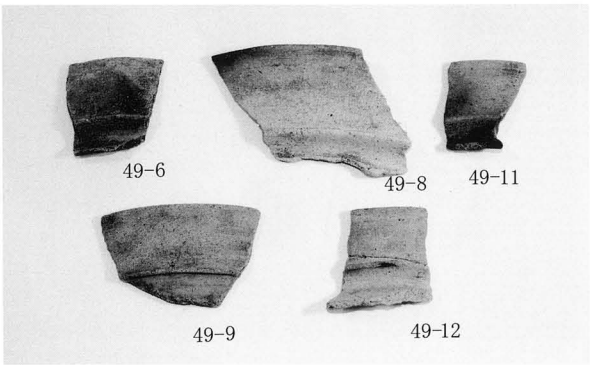


49-3

49-4

49-5

49-7



49-6

49-8

49-11

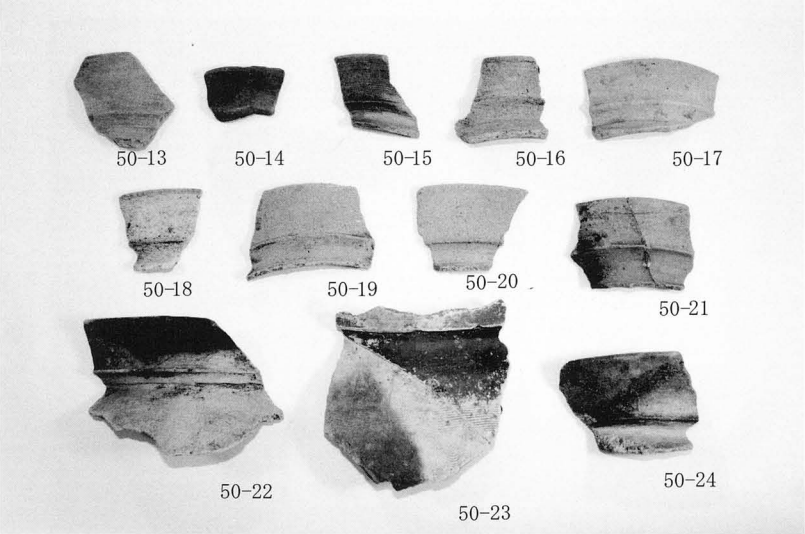
49-9

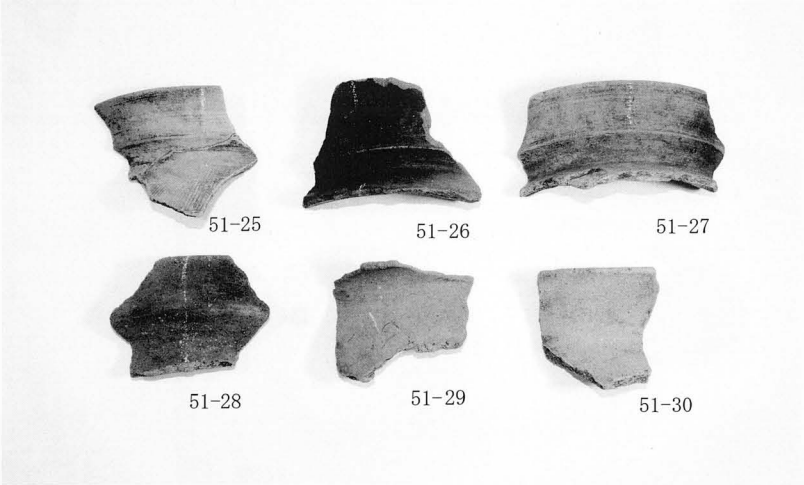
49-12

49-10

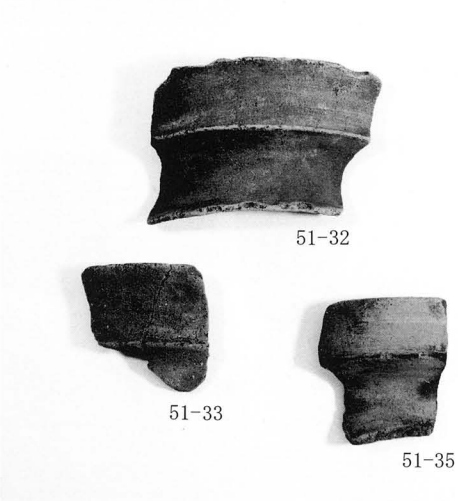
49-10　底部

SD01 出土遺物 (1)


50-13
50-14
50-15
50-16
50-17
50-18
50-19
50-20
50-21
50-22
50-23
50-24

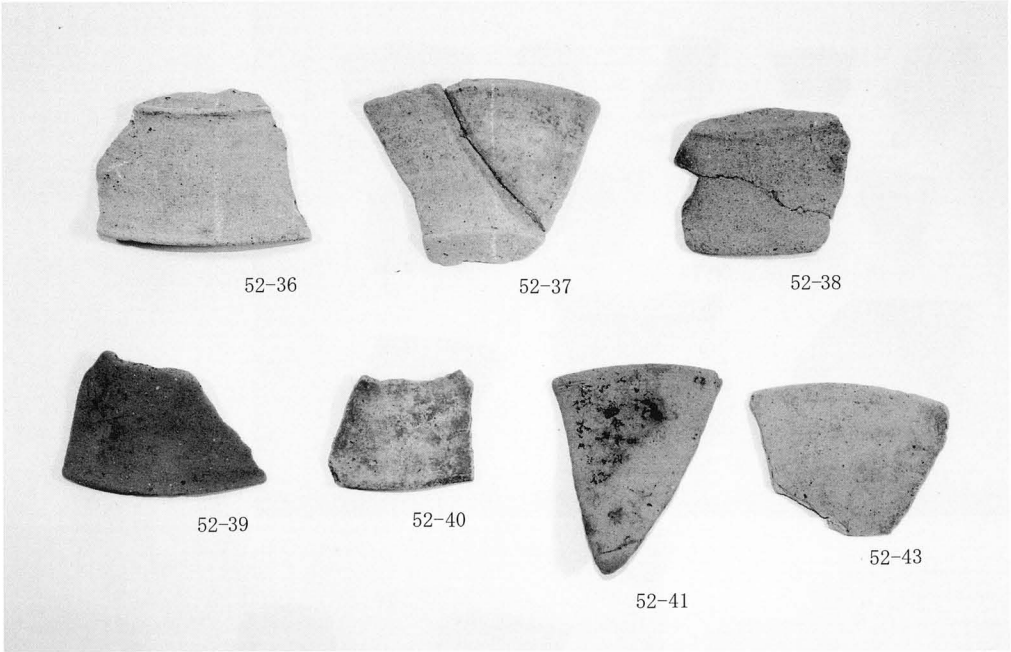

51-25
51-26
51-27
51-28
51-29
51-30

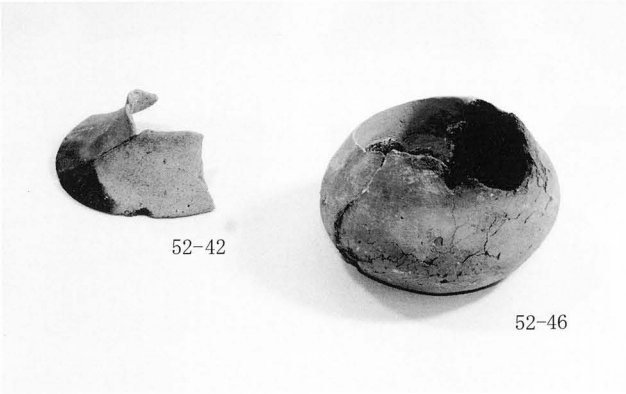
51-31


51-32
51-33
51-35

51-34

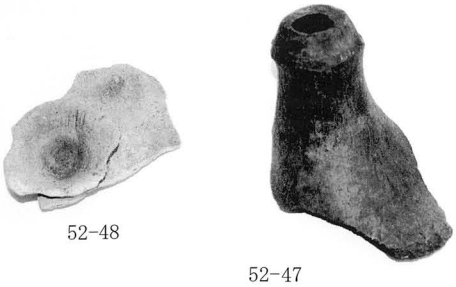
SD01 出土遺物 (2)


52-36
52-37
52-38
52-39
52-40
52-41
52-43

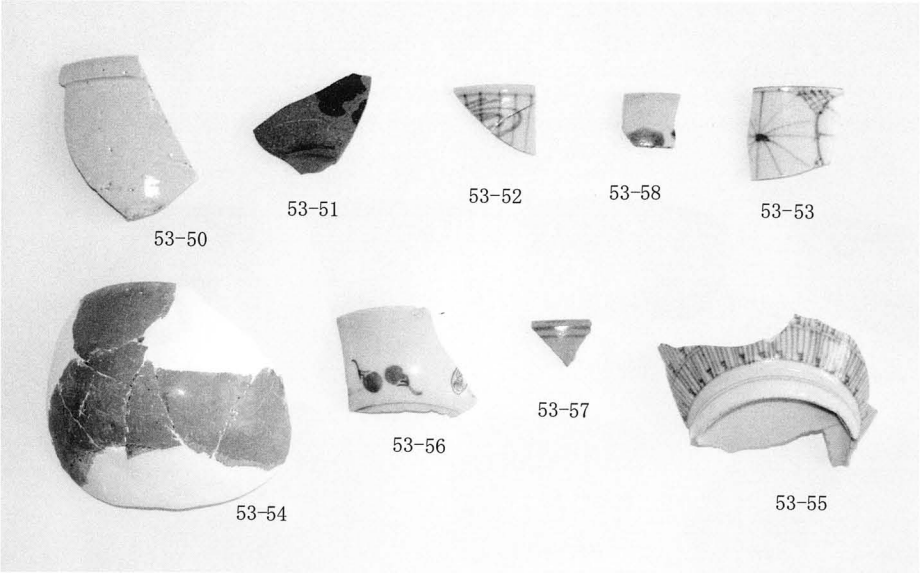

52-42
52-46

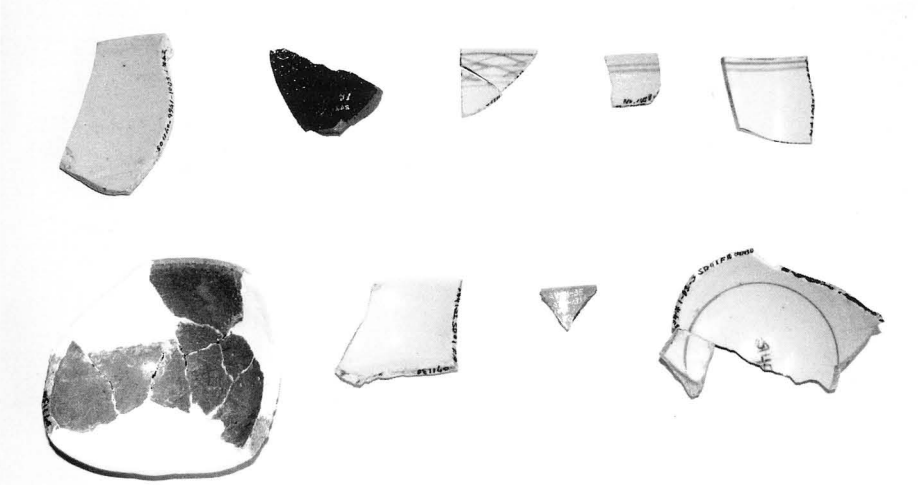
52-49
52-45

52-44


52-48
52-47

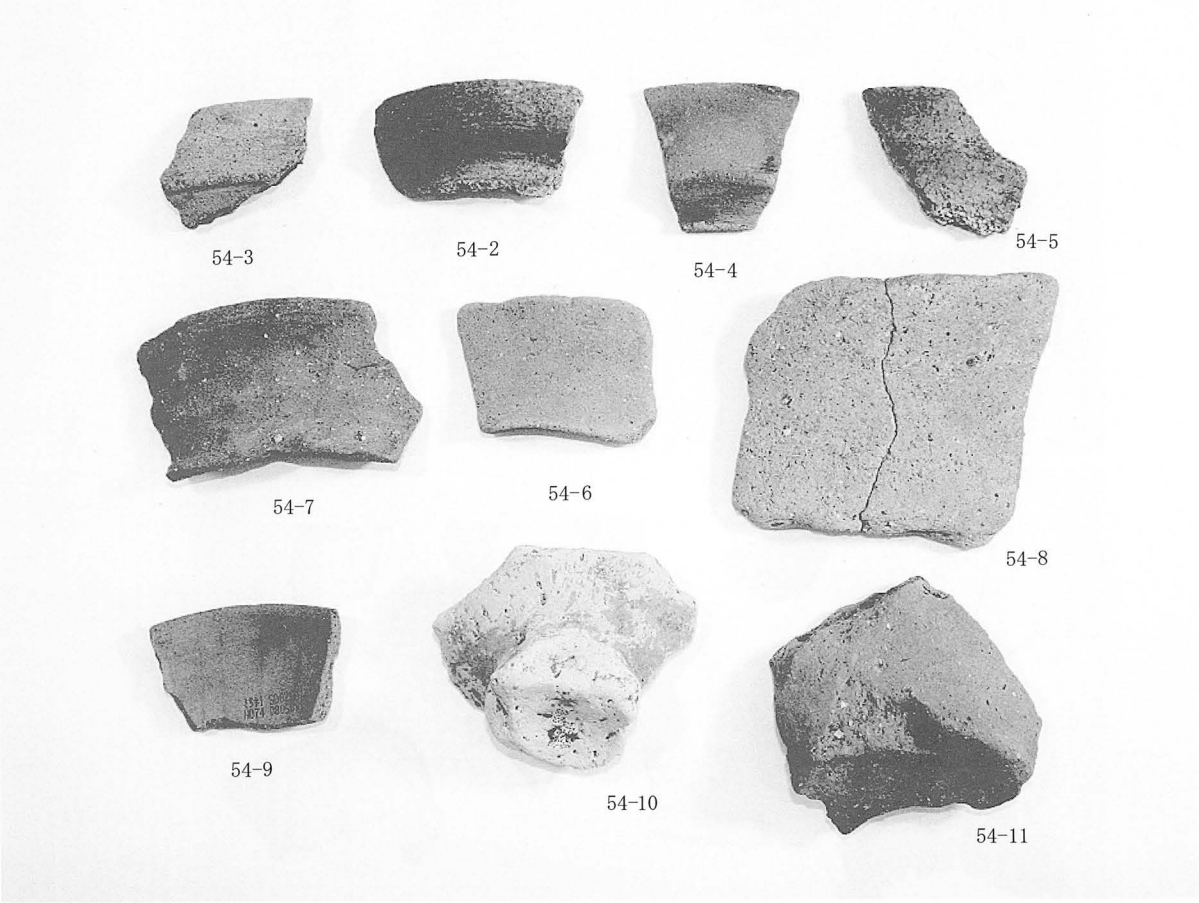
SD01 出土遺物 (3)

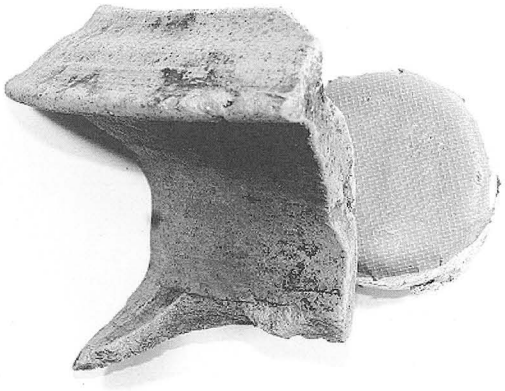




同上

SD01 出土遺物 (4)





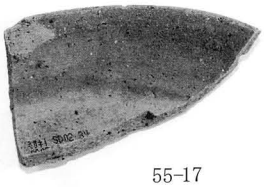
54-1

SD02 出土遺物 (1)

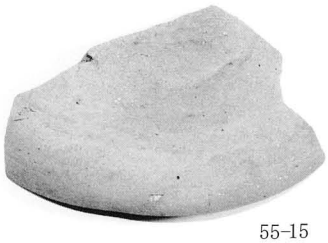
55-12

55-13

55-14



55-17



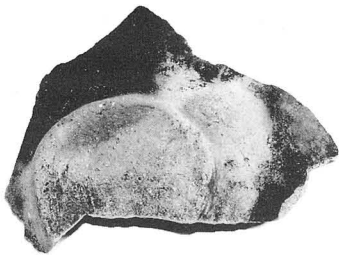
55-15

55-16

55-18

SD02出土遺物 (2)

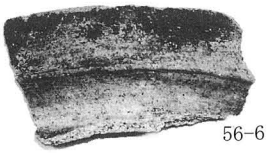
56-1



56-2

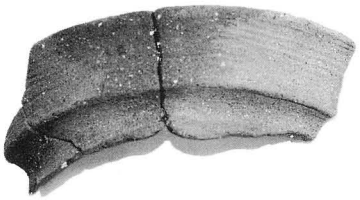
56-8

56-7



56-6

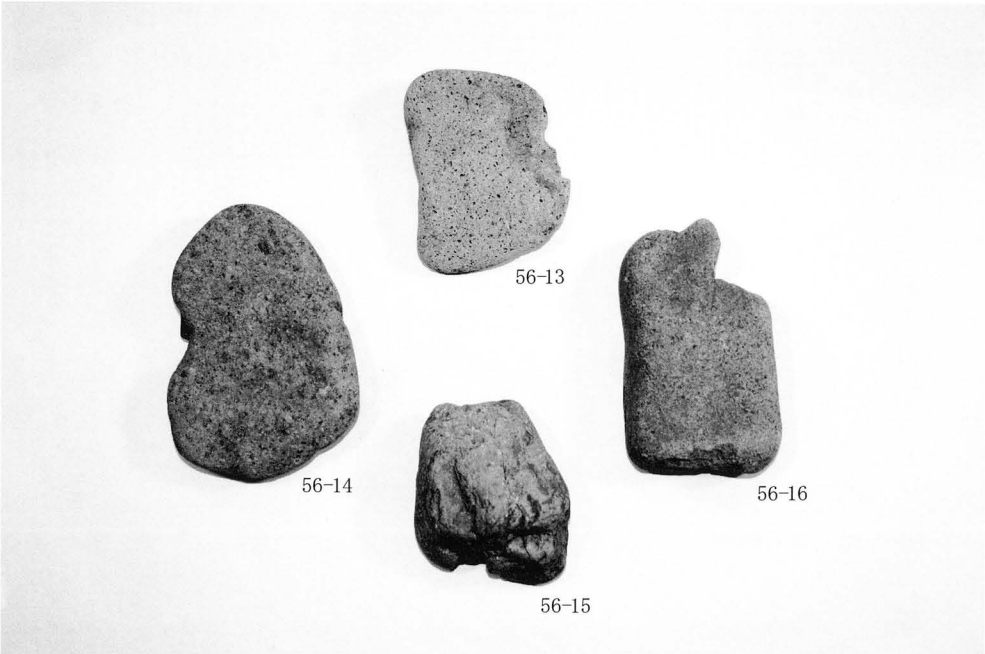
56-3



56-4

56-5

SD06 出土遺物 (1)

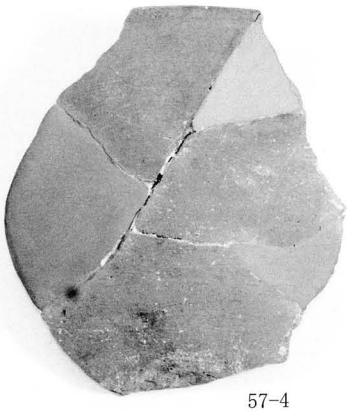


SD06 出土遺物 (2)

57-1

57-2

ハイカ層出土遺物

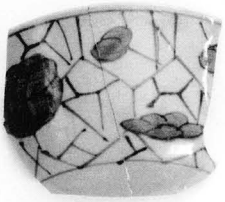


57-4

57-6

57-8

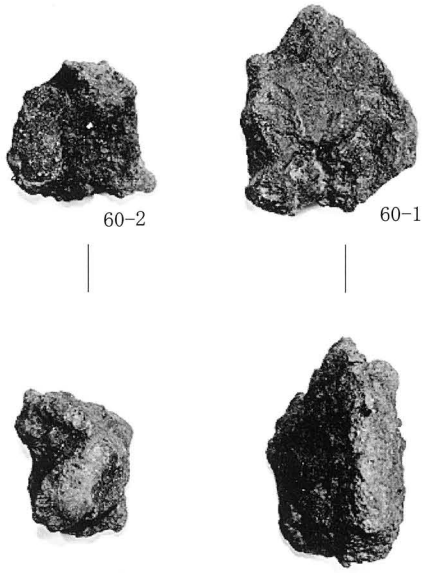
57-3



57-5

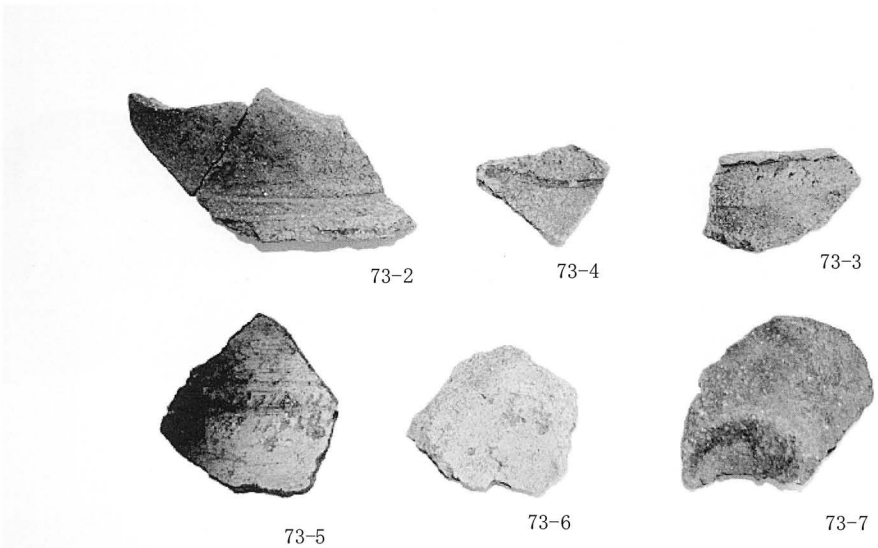
57-7

排土中出土遺物

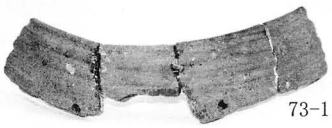


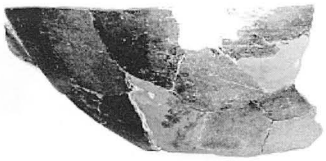
SK21 出土遺物

8



SK24 出土遺物



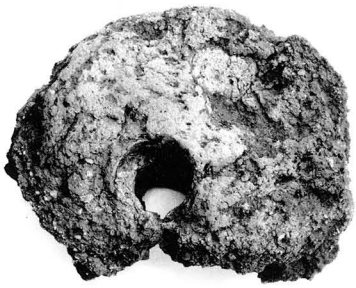


74-1

74-2

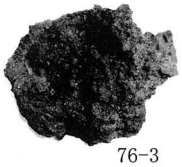
74-3

SD07 出土遺物



76-1

76-2



76-3

76-4

76-5

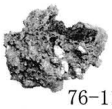
76-6

76-7

76-8

76-9

76-10



76-11

76-12

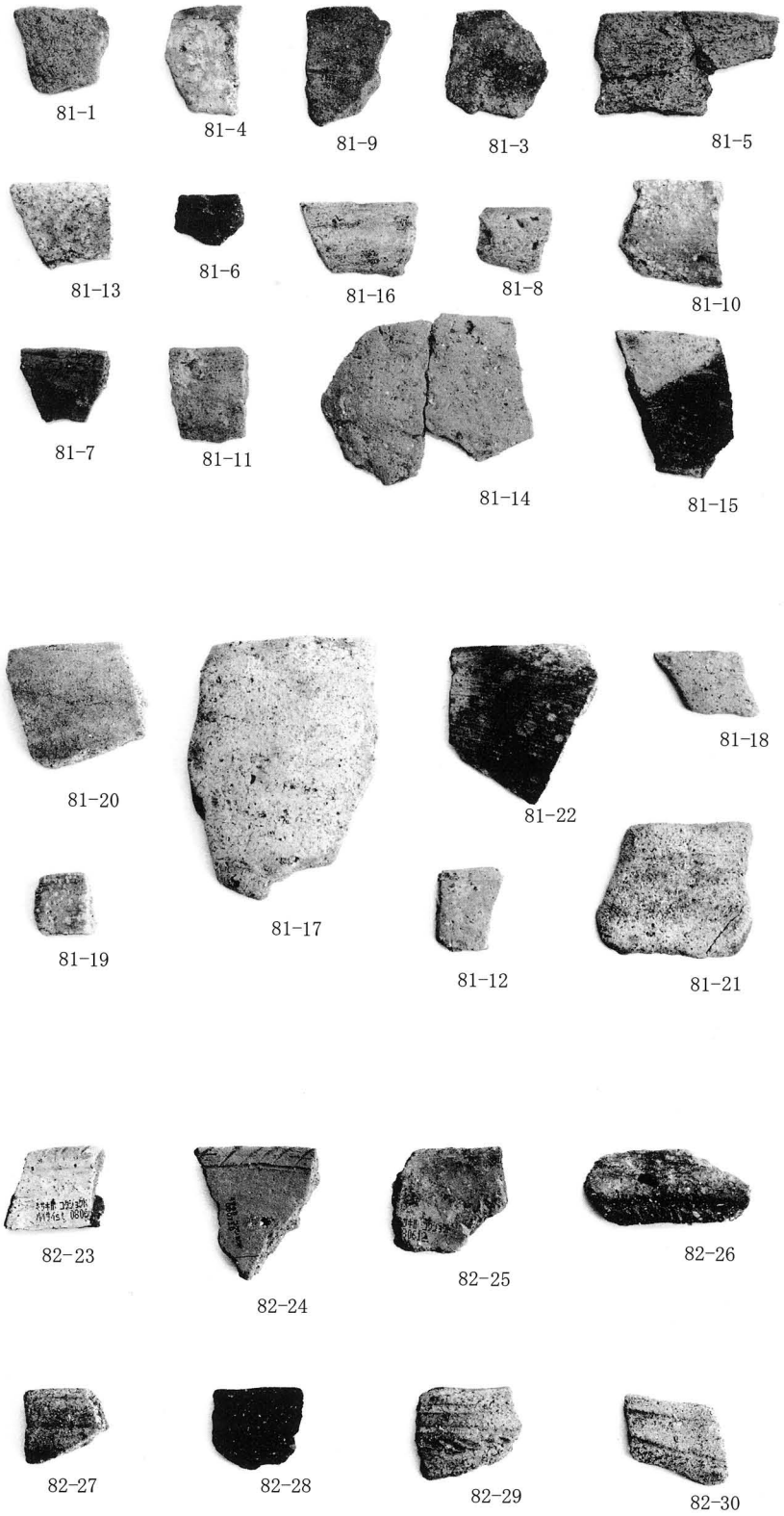
76-13

76-14

76-15

76-16

排滓場跡出土遺物



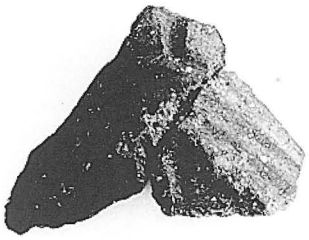
Ⅱ-2区3層土出土遺物（1）

82-31

82-32

82-33

82-34


82-35

82-38

82-40

82-36

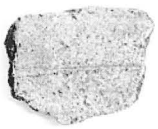
82-37

82-39

82-43

82-41

82-44


82-46

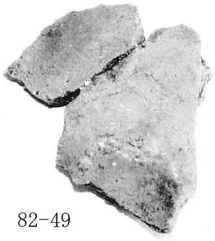
82-47

82-45

82-42

Ⅱ-2区3層土出土遺物(2)

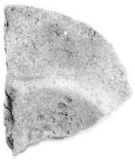
82-50


82-49

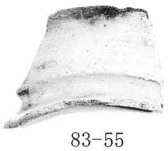
83-52

83-53

82-48


82-51

83-54


83-55

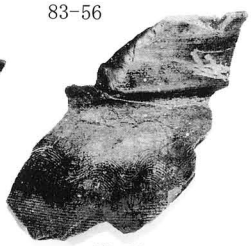
83-56

83-57

83-58

83-59

83-60


83-62

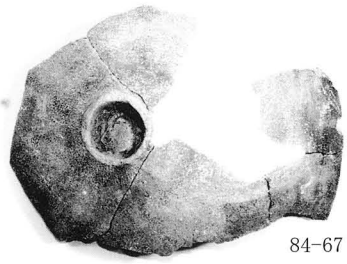
83-61

83-65

83-63

83-64

84-66


84-67

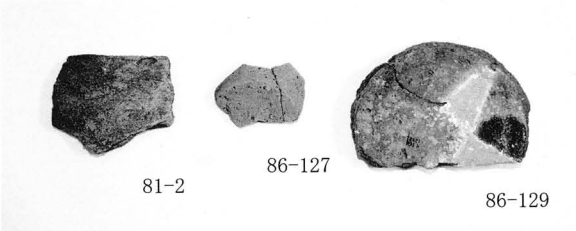
84-68

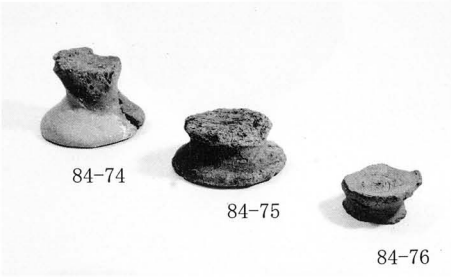
84-69

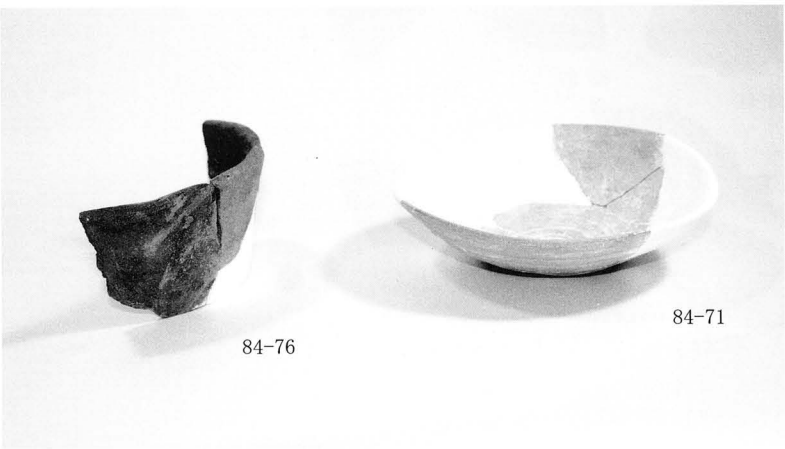
84-70

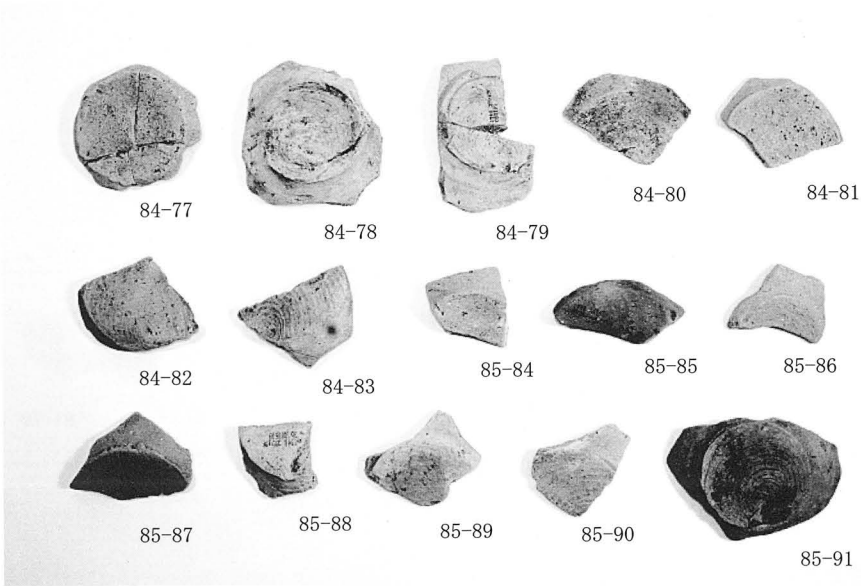
Ⅱ-2区3層土出土遺物（3）

図版 46

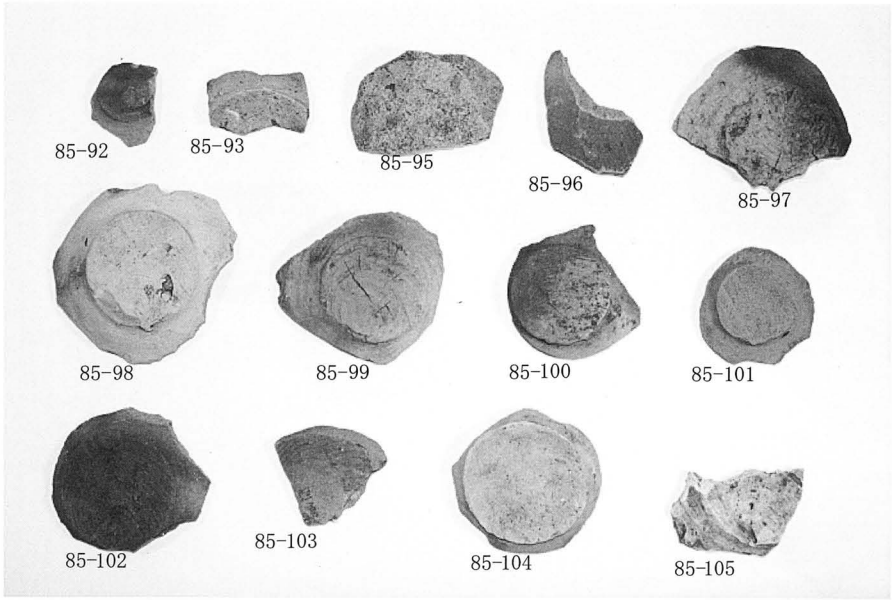


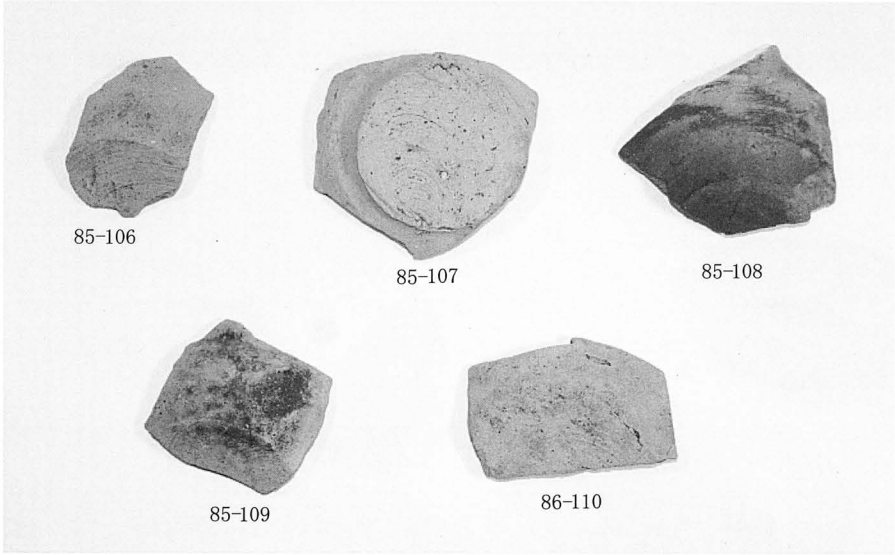


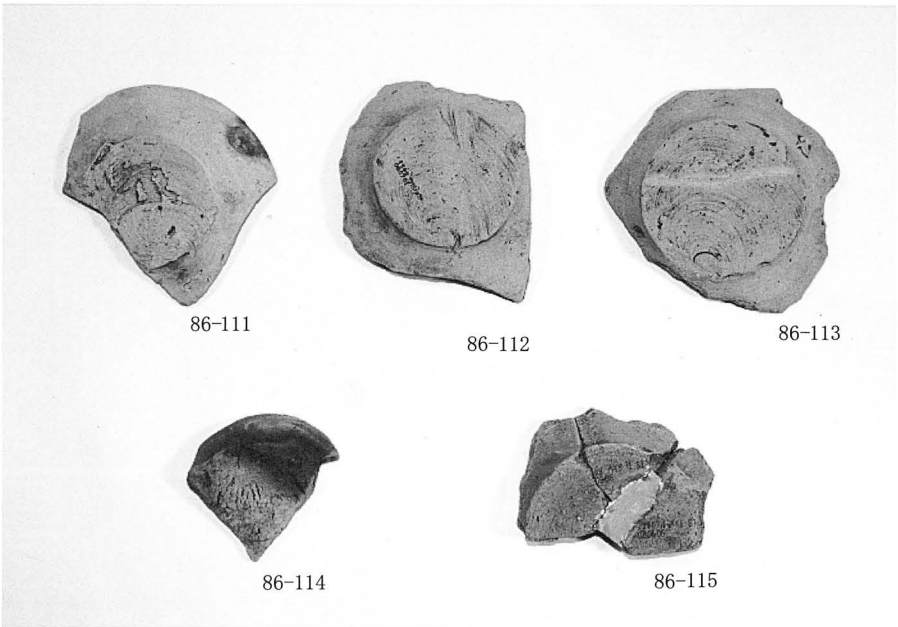




Ⅱ-2区3層土出土遺物（4）


85-92
85-93
85-95
85-96
85-97
85-98
85-99
85-100
85-101
85-102
85-103
85-104
85-105


85-106
85-107
85-108
85-109
86-110

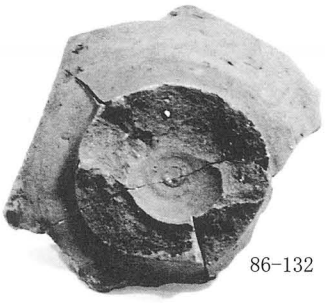

86-111
86-112
86-113
86-114
86-115

Ⅱ-2区3層出土遺物 (5)

同上 裏面

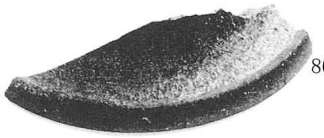
Ⅱ-2区3層出土遺物 (6)

86-133



86-132

86-131



86-134

87-135

87-136

87-137

87-138

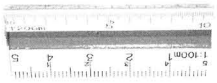
86-130

87-139

87-140

87-141

Ⅱ-2区3層出土遺物（7）



87-145

87-144

87-143

87-146

88-147

87-142

88-149

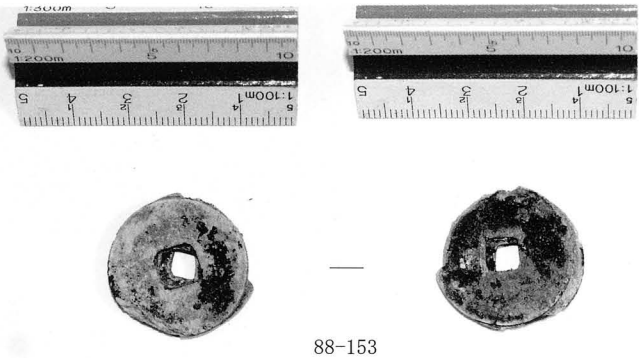
88-148

88-150

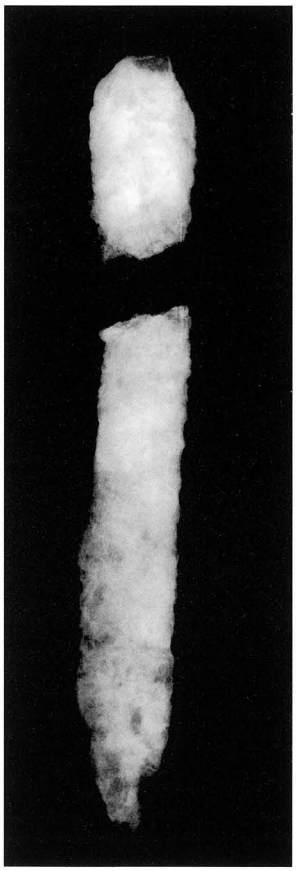
88-151

88-152

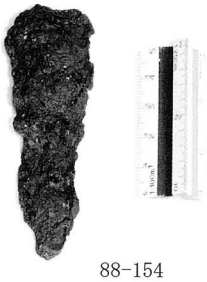
Ⅱ-2区3層出土遺物(8)



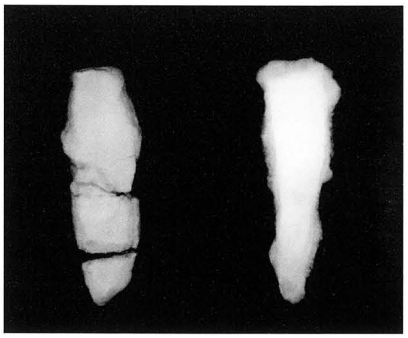
88-153



88-155



88-154



Ⅱ-2区3層出土遺物 (9)

報告書抄録

フリガナ	ミサキ イセキ
書　　名	御　崎　遺　跡
シリーズ名	尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	Ⅶ
編　集　者	野津　旭　　福田市子　　舟木千晴
編集機関	奥出雲町教育委員会（埋蔵文化財調査室）
所　在　地	〒　699-1832　　島根県仁多郡奥出雲町横田1037番地　　TEL　0854-52-2680
発行年月日	西暦　2009年3月

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査原因	調査面積
ミサキイセキ 御崎遺跡	シマネケンニタグン 島根県仁多郡 オクイズモチョウ 奥出雲町 ミナリ　ホカ 三成777-1他	32341	N149	35°12′04″	133°00′10″	20070514 ～ 20080717	ダム建設	3300㎡

	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御崎遺跡	散布地 住居跡 生産遺構 集落付随施設	縄文時代 弥生時代～ 古墳時代 中近世	自然河道 竪穴建物跡 溝状遺構 排滓場跡 掘立柱建物跡 池状遺構 土坑	縄文粗製土器 弥生後半～古墳前半の土器 古墳後半の須恵器、耳環 板屋型羽口、椀形鍛冶滓 中世土師器 陶磁器	炉本体は存在しなかったが、精錬鍛冶炉が想定される

要　　約	本書は、H19・20年度に実施した御崎遺跡の調査成果を報告したものである。遺跡は斐伊川右岸、矢谷集落南端の水田と畑地、標高221～228mに位置し、縄文時代～中近世にわたり営まれた複合遺跡である。縄文時代では早期押型文土器を、弥生時代後半～古墳時代前半では竪穴建物跡、溝状遺構を検出した。中世では精錬鍛冶炉に伴うと考えられる排滓場跡、羽口、椀形滓等見つかっている。また中世末の池状遺構も検出している。池状遺構周辺で、中近世と考えられる掘立柱建物跡、粘土貼土坑、集石土坑等が見つかっている。

御崎遺跡

尾原ダム建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

発　行　2009(平成21)年3月
発行者　国土交通省中国地方整備局
　　奥出雲町教育委員会
編　集　奥出雲町教育委員会
　　〒699-1832　島根県仁多郡奥出雲町横田1037
電　話　0854-52-2680
印　刷　(有)植田軽印刷所

MISAKI SITE

Excavation Report

March, 2009

Okuizumo Town Board of Education